



Informatica® PowerExchange
10.5.2

コマンドリファレンス

本ソフトウェアおよびマニュアルは、使用および開示の制限を定めた個別の使用許諾契約のもとでのみ提供されています。本マニュアルのいかなる部分も、いかなる手段（電子的複製、写真複製、録音など）によっても、Informatica LLC の事前の承諾なしに複製または転載することは禁じられています。

米政府の権利プログラム、ソフトウェア、データベース、および関連文書や技術データは、米国政府の顧客に配信され、「商用コンピュータソフトウェア」または「商業技術データ」は、該当する連邦政府の取得規制と代理店固有の補足規定に基づきます。このように、使用、複製、開示、変更、および適応は、適用される政府の契約に規定されている制限およびライセンス条項に従うものとし、政府契約の条項によって適当な範囲において、FAR 52.227-19、商用コンピュータソフトウェアライセンスの追加権利を規定します。

Informatica、Informatica ロゴ、PowerCenter、および PowerExchange は、米国およびその他の国における Informatica LLC の商標または登録商標です。Informatica の商標の最新のリストは、次の Web サイトにあります <https://www.informatica.com/trademarks.html>。その他の企業名および製品名は、それぞれの企業の商標または登録商標です。

オプトアウトの権利の制限の下、本ソフトウェアによって、本ソフトウェアがデプロイされているコンピューティングおよびネットワーク環境に関する情報、デプロイメントのデータ使用状況およびシステム統計情報が米国の Informatica に自動的に送信されます。この送信は Informatica のプライバシーポリシーの下にサービスの一部と見なされ、Informatica は、<https://www.informatica.com/in/privacy-policy.html> のプライバシーポリシーに従って、この情報を使用または処理します。使用状況の収集は、Administrator ツールで無効にすることができます。

本ソフトウェアまたはドキュメンテーション（あるいはその両方）の一部は、第三者が保有する著作権の対象となります。必要な第三者の通知は、製品に含まれています。

特許については、<https://www.informatica.com/legal/patents.html> を参照してください。

本マニュアルの情報は、予告なしに変更されることがあります。このドキュメントで問題が見つかった場合は、infa_documentation@informatica.com までご報告ください。

Informatica 製品は、それらが提供される契約の条件に従って保証されます。Informatica は、商品性、特定目的への適合性、非侵害性の保証等を含めて、明示的または黙示的ないかなる種類の保証をせず、本マニュアルの情報を「現状のまま」提供するものとします。

発行日: 2022-07-07

目次

序文	9
Informatica のリソース.....	9
Informatica Network.....	9
Informatica ナレッジベース.....	9
Informatica マニュアル.....	10
Informatica 製品可用性マトリックス.....	10
Informatica Velocity.....	10
Informatica Marketplace.....	10
Informatica グローバルカスタマサポート.....	10
 第 1 章 : PowerExchange のコマンドの概要	11
PowerExchange のコマンドの概要.....	11
PowerExchange コマンドの構文規則.....	12
PowerExchange のコマンドの実行.....	12
PowerExchange と PowerCenter との環境変数の非互換性.....	13
 第 2 章 : Adabas ログベース ECCR のコマンド	14
Adabas ログベース ECCR のコマンドの概要.....	14
Adabas ログベース ECCR の起動.....	15
CLOSE コマンド.....	15
DISPLAY TRACE コマンド.....	16
READ コマンド.....	16
REFRESH コマンド.....	17
STATISTICS コマンド.....	17
STATUS コマンド.....	19
TRACEOFF コマンド.....	19
TRACEON コマンド.....	20
 第 3 章 : バッチ VSAM ECCR のコマンド	21
バッチ VSAM ECCR のコマンドの概要.....	21
DISPLAY コマンド.....	21
START コマンド.....	22
STOP コマンド.....	22
 第 4 章 : CICS/VSAM ECCR のコマンド	23
CICS/VSAM ECCR のコマンドの概要.....	23
DISPLAY コマンド.....	24
EXITPGMS コマンド.....	24
HELP コマンド.....	25
INITIALIZE コマンド.....	26

OPTIONS コマンド	27
REFRESH コマンド	28
RESTART コマンド	29
TERMINATE コマンド	29

第 5 章 : Datacom テーブルベース ECCR のコマンド..... 31

Datacom テーブルベース ECCR のコマンドの概要	31
Datacom テーブルベース ECCR の起動	32
CLOSE コマンド	32
DISPLAY TRACE コマンド	32
READ コマンド	33
REFRESH コマンド	33
STATISTICS コマンド	34
STATUS コマンド	36
TRACEOFF コマンド	36
TRACEON コマンド	37

第 6 章 : DB2 for z/OS ECCR のコマンド..... 38

DB2 for z/OS ECCR のコマンドの概要	38
DB2 for z/OS ECCR の起動	39
DB2 for z/OS ECCR の停止	39
DISPLAY コマンド	40
QUIESCE コマンド	43
REFRESH コマンド	44
TERM コマンド	45
TRACT コマンド	45
TR INACT コマンド	46
URID コマンド	46

第 7 章 : IDMS ログベース ECCR のコマンド..... 48

IDMS ログベース ECCR のコマンドの概要	48
IDMS ログベース ECCR の起動	49
CLOSE コマンド	49
DISPLAY TRACE コマンド	49
READ コマンド	50
REFRESH コマンド	50
STATISTICS コマンド	51
STATUS コマンド	53
TRACEOFF コマンド	54
TRACEON コマンド	54

第 8 章 : IMS 同期 ECCR のコマンド..... 56

IMS 同期 ECCR のコマンドの概要	56
----------------------	----

IMS 外部サブシステムコマンド.....	56
xEDP-ABORT コマンド.....	57
xEDP-CONTINUE コマンド.....	57
xEDP-STAT コマンド.....	58
xEDP-STATWTO コマンド.....	58
IMS コンソールコマンド.....	59
DISPLAY SUBSYS コマンド.....	59

第 9 章 : IMS ログベース ECCR のコマンド..... 60

IMS ログベース ECCR のコマンドの概要.....	60
IMS ログベース ECCR の起動.....	61
CLOSE コマンド.....	61
DISPLAY TRACE コマンド.....	61
LIST MPART コマンド.....	62
READ コマンド.....	63
REFRESH コマンド.....	63
STATISTICS コマンド.....	64
STATUS コマンド.....	67
TRACEOFF コマンド.....	67
TRACEON コマンド.....	68

第 10 章 : PowerExchange エージェントのコマンド..... 69

PowerExchange エージェントのコマンドの概要.....	69
PowerExchange エージェントの起動.....	70
DISPLAY コマンド.....	70
DRAIN コマンド.....	71
LOGCLOSE コマンド.....	72
LOGOPEN コマンド.....	72
LOGSPIN コマンド.....	73
REPCLOSE コマンド.....	73
REPOPEN コマンド.....	74
REPOSITORYDSN コマンド.....	74
REPSTATUS コマンド.....	75
RESUME コマンド.....	75
SHUTDOWN コマンド.....	76
START コマンド.....	77
STOP コマンド.....	77

第 11 章 : PowerExchange Condense のコマンド..... 79

PowerExchange Condense のコマンドの概要.....	79
PowerExchange Condense の起動.....	80
PowerExchange Condense のコマンドの発行.....	81
PowerExchange Condense 処理の停止.....	81

CONDENSE コマンド.	82
DISPLAY STATUS コマンド.	82
FILESWITCH コマンド.	84
SHUTCOND コマンド.	85
SHUTDOWN コマンド.	86

第 12 章 : PowerExchange Listener のコマンド. 88

PowerExchange リスナのコマンドの概要.	88
PowerExchange リスナの起動.	89
Windows での PowerExchange Listener サービス.	92
Windows での PowerExchange Listener サービスの起動.	92
Windows での PowerExchange Listener サービスのテスト.	93
Windows での PowerExchange Listener サービスの停止.	93
CLOSE および CLOSE FORCE コマンド.	93
DISPLAY ACTIVE および LISTTASK コマンド.	95
DISPLAYSTATS コマンド.	97
DTLLSTSI コマンド.	104
STOPTASK コマンド.	106

第 13 章 : PowerExchange ロgger (z/OS 用) コマンド. 108

PowerExchange ロgger (z/OS 用) コマンドの概要.	108
PowerExchange ロggerのコマンドの発行方法.	109
PowerExchange ロggerのコマンドの構文ルールとガイドライン.	109
PowerExchange ロgger (z/OS 用) の開始.	110
DEFINE_LOG コマンド.	110
DELETE_LOG コマンド.	113
DISPLAY OBJECT=CONNECTION コマンド.	114
DISPLAY OBJECT=LOG コマンド.	116
PRINT コマンド.	117
RESOLVE_INDOUBT コマンド.	118
STOP コマンド.	119
ログ作成後の結合のコマンド.	120
DISPLAY および STATUS コマンド.	120
QUIT および STOP コマンド.	121
TRACEE、TRACEL、および TRACES コマンド.	121

第 14 章 : PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) の コマンド. 122

PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) のコマンドの概要.	122
PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) の起動.	123
CONDENSE コマンド.	128
DG コマンド.	129
DISPLAY ALL コマンド.	130

DISPLAY CPU コマンド.	132
DISPLAY EVENTS コマンド.	132
DISPLAY MEMORY コマンド.	133
DISPLAY RECORDS コマンド.	134
DISPLAY STATUS コマンド.	135
DL コマンド.	135
FILESWITCH コマンド.	137
SHUTCOND コマンド.	138
SHUTDOWN コマンド.	139
 第 15 章 : pwxcmd コマンド.	 142
pwxcmd コマンドの概要.	142
pwxcmd コマンドの一般的な構文.	143
pwxcmd コマンドのコマンド処理.	144
pwxcmd コマンドを受信するための PowerExchange プロセスの設定.	145
例 1: pwxcmd コマンドを受信するための PowerExchange Listener の設定.	146
例 2: pwxcmd コマンドを受信するための PowerExchange Condense プロセスの設定.	147
例 3: pwxcmd コマンドを受信するための PowerExchange ロッガープロセスの設定.	148
例 4: pwxcmd コマンドを受信するための PowerExchange ログベース ECCR または Datacom ECCR の設定.	150
ユーザーに対する pwxcmd コマンドの発行の許可.	151
コマンドラインからの pwxcmd コマンドの実行.	151
pwxcmd コマンドのスクリプト作成.	152
PowerExchange Listener 用の pwxcmd コマンド.	153
pwxcmd close コマンド.	153
pwxcmd closeforce コマンド.	155
pwxcmd displaystats コマンド.	156
pwxcmd listtask コマンド.	160
pwxcmd stoptask コマンド.	162
PowerExchange Condense 用の pwxcmd コマンド.	164
pwxcmd condense コマンド.	164
pwxcmd displaystatus コマンド.	166
pwxcmd fileswitch コマンド.	168
pwxcmd shutcond コマンド.	170
pwxcmd shutdown コマンド.	172
PowerExchange ロッガー (Linux、UNIX、Windows 用) 用の pwxcmd コマンド.	174
pwxcmd condense コマンド.	174
pwxcmd displayall コマンド.	175
pwxcmd displaycpu コマンド.	175
pwxcmd displayevents コマンド.	176
pwxcmd displaymemory コマンド.	177
pwxcmd displayrecords コマンド.	178
pwxcmd displaystats コマンド.	179

pwxcmd fileswitch コマンド	181
pwxcmd shutcond コマンド	182
pwxcmd shutdown コマンド	183
PowerExchange ログベース ECCR および Datacom ECCR の pwxcmd コマンド	184
pwxcmd close コマンド	185
pwxcmd displaystats コマンド	187
pwxcmd displaytrace コマンド	190
pwxcmd traceoff コマンド	192
pwxcmd traceon コマンド	193
その他の pwxcmd コマンド	195
pwxcmd help コマンド	195
pwxcmd バージョンコマンド	195
索引	196

序文

『Informatica® PowerExchange® コマンドリファレンス』を使用して、コマンド構文や使用法などの PowerExchange コマンドに関するリファレンス情報を調べることができます。このリファレンスには、すべての ECCR タイプ、PowerExchange エージェント、PowerExchange リスナ、PowerExchange Condense、PowerExchange ロgger（z/OS 用）、および PowerExchange ロgger（Linux、UNIX、Windows 用）のコマンドが含まれています。また、pwxcmd プログラムで Linux、UNIX、または Windows システムからリモート PowerExchange プロセスに対して発行できるコマンドも含まれています。

Informatica のリソース

Informatica は、Informatica Network やその他のオンラインポータルを通じてさまざまな製品リソースを提供しています。リソースを使用して Informatica 製品とソリューションを最大限に活用し、その他の Informatica ユーザーや各分野の専門家から知見を得ることができます。

Informatica Network

Informatica Network は、Informatica ナレッジベースや Informatica グローバルカスタマサポートなど、多くのリソースへの入口です。Informatica Network を利用するには、<https://network.informatica.com> にアクセスしてください。

Informatica Network メンバーは、次のオプションを利用できます。

- ナレッジベースで製品リソースを検索できます。
- 製品の提供情報を表示できます。
- サポートケースを作成して確認できます。
- 最寄りの Informatica ユーザーグループネットワークを検索して、他のユーザーと共同作業を行えます。

Informatica ナレッジベース

Informatica ナレッジベースを使用して、ハウツー記事、ベストプラクティス、よくある質問に対する回答など、製品リソースを見つけることができます。

ナレッジベースを検索するには、<https://search.informatica.com> にアクセスしてください。ナレッジベースに関する質問、コメント、ご意見の連絡先は、Informatica ナレッジベースチーム (KB_Feedback@informatica.com) です。

Informatica マニュアル

Informatica マニュアルポータルでは、最新および最近の製品リリースに関するドキュメントの膨大なライブラリを参照できます。マニュアルポータルを利用するには、<https://docs.informatica.com> にアクセスしてください。

製品マニュアルに関する質問、コメント、ご意見については、Informatica マニュアルチーム (infa_documentation@informatica.com) までご連絡ください。

Informatica 製品可用性マトリックス

製品可用性マトリックス (PAM) には、製品リリースでサポートされるオペレーティングシステム、データベースなどのデータソースおよびターゲットが示されています。Informatica PAM は、<https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices> で参照できます。

Informatica Velocity

Informatica Velocity は、Informatica プロフェッショナルサービスが開発したヒントとベストプラクティスのコレクションで、多数のデータ管理プロジェクトから得た実体験に基づいています。Informatica Velocity には、世界中の組織と連携してデータ管理ソリューションを計画、開発、デプロイ、管理する Informatica コンサルタントによる集合知を表しています。

Informatica Velocity リソースには、<http://velocity.informatica.com> からアクセスしてください。Informatica Velocity についての質問、コメント、またはアイデアがある場合は、ips@informatica.com から Informatica プロフェッショナルサービスにお問い合わせください。

Informatica Marketplace

Informatica Marketplace は、お使いの Informatica 製品を拡張したり強化したりするソリューションを検索できるフォーラムです。Marketplace で、Informatica デベロッパーやパートナーからの多数のソリューションを活用すれば、生産性を向上したり、プロジェクトでの実装時間を短縮したりできます。Informatica Marketplace は、<https://marketplace.informatica.com> からアクセスしてください。

Informatica グローバルカスタマサポート

電話または Informatica Network を介してグローバルカスタマサポートに連絡できます。

各地域の Informatica グローバルカスタマサポートの電話番号は、Informatica Web サイト (<https://www.informatica.com/services-and-training/customer-success-services/contact-us.html>) を参照してください。

Informatica Network のオンラインサポートリソースを見つけるには、<https://network.informatica.com> にアクセスして eSupport オプションを選択します。

第 1 章

PowerExchange のコマンドの概要

この章では、以下の項目について説明します。

- [PowerExchange のコマンドの概要, 11 ページ](#)
- [PowerExchange コマンドの構文規則, 12 ページ](#)
- [PowerExchange のコマンドの実行, 12 ページ](#)
- [PowerExchange と PowerCenter との環境変数の非互換性, 13 ページ](#)

PowerExchange のコマンドの概要

本書では、PowerExchange のコンポーネントおよびプロセスを定義するためのコマンドの適切な構文、用途、および制限について説明します。

以下の共有コンポーネントのコマンドについて説明します。

- PowerExchange エージェント
- PowerExchange Condense
- PowerExchange リスナ
- PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用)
- PowerExchange ロgger (z/OS 用) およびログ作成後の統合のジョブ

また、以下のソース固有のコマンドについても説明します。

- Adabas ログベース環境変更キャプチャー rutin (environmental change capture routine : ECCR)
- バッチ/VSAM ECCR
- CIC/VSAM ECCR
- Datacom テーブルベース ECCR
- DB2 for z/OS ECCR
- IDMS ログベース ECCR
- IMS ログベース ECCR
- IMS 同期 ECCR

注: 本書では、読者の便宜のため、PowerExchange 固有のものではない一部のコマンド（たとえば、PowerExchange タスクまたはジョブの開始または停止に使用する z/OS コマンド）についても説明しています。

以下のトピックは扱いません。

- 設定パラメータおよび文（DBMOVER 設定ファイルのパラメータや文など）。これらのパラメータの設定の詳細については、『*PowerExchange リファレンスマニュアル*』および使用しているプラットフォーム用の CDC ガイドを参照します。
- PowerExchange ユーティリティ用のパラメータおよび制御文。
- MVS PowerExchange のインストールの一部として、*hlq*.SAMPLIB ライブラリに提供されているサンプル JCL。 *hlq* は、インストール時に指定した上位レベル修飾子です。

本書は、コマンドをすばやく参照できるように構成されています。各章では、PowerExchange のソース固有の変更データキャプチャコンポーネントまたは共通コンポーネントについて説明します。ソース固有のコンポーネントの章は、共通コンポーネントの章より先に記述されています。各章の中で、コマンドは名前のアルファベット順に並べられています。コマンド名がプラットフォームによって異なる場合は、*起動コマンド*のように、総称名が使用されています。

PowerExchange コマンドの構文規則

次のテーブルでは、コマンドの正しい構文を示すためにこのマニュアルで使用している形式について説明します。

表記	説明	例
等幅フォント	一般的な構文またはコマンドの例の一部である行を示します。	F <i>job_name</i> ,FILESWITCH
斜体	特定の値を入力する変数を示します。	DSName= <i>data_set_name</i>
角括弧 ([])	オプションのパラメータまたはサブパラメータを示します。	F <i>job_name</i> ,CLOSE [FORCE]
項目間の縦棒 () (パイプとも呼ばれる)	項目の 1 つのみを入力することを示します。	DEBUG=ON OFF
項目間のカンマ (,)	複数の項目を入力できることを示します。	{STARBA='rba', ENDRBA=x' rba'}
複数の項目を囲む中括弧 ({ }) (ブレイスとも呼ばれる)	括弧内の項目を少なくとも 1 つ入力する必要があることを示します。	COPY={PRILOG SECLOG}

PowerExchange のコマンドの実行

コマンドを入力するときの具体的な表記および方法は、プラットフォームによって異なります。例えば、MVS MODIFY (F) コマンドは、*job_name* の値の後にカンマ (,) が必要になることがあり、MVS オペレータコンソール、または SDSF などのインタフェースから入力できます。コマンドの入力の詳細については、目的のコマンドの節を参照してください。

PowerExchange と PowerCenter との環境変数の非互換性

PowerCenter[®]と PowerExchange が同じ Linux、UNIX、または Windows マシンにインストールされている場合、場合によっては、PATH や LD_LIBRARY_PATH 環境変数の要件が競合することがあります。これらの場合に正しく実行するには、PowerExchange と PowerCenter は別々の環境で実行する必要があります。

この要件は、PowerCenter 統合サービスまたは PowerCenter リポジトリサービスが、以下の PowerExchange コンポーネントのいずれかと同じマシンで実行されている場合に適用されます。

- PowerExchange リスナ
- PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用)
- PowerExchange Navigator
- createdatamaps ユーティリティ以外の任意の PowerExchange ユーティリティ

以下の表に、PowerExchange 環境および PowerCenter 環境において PATH 変数および LD_LIBRARY_PATH 変数に適用される制限を示します。

環境	PATH	LD_LIBRARY_PATH
PowerExchange	\$INFA_HOME が \$PWX_HOME より先行してはいけません。それ以外の場合は、PowerExchange リスナまたはロggerをコマンドラインから開始することはできません。	LD_LIBRARY_PATH に PowerCenter のエントリが含まれてはいけません。この要件は、PowerExchange ユーティリティはライブラリを必ず \$PWX_HOME からのみピックアップすることを保証します。
PowerCenter	\$PWX_HOME エントリが \$INFA_HOME エントリより先行してはいけません。	\$LD_LIBRARY_PATH 変数定義は必ず \$INFA_HOME と \$PWX_HOME の両方を含み、\$INFA_HOME が \$PWX_HOME より先行である必要があります。以下に例を示します。 \$INFA_HOME/server/bin:\$PWX_HOME:\$LD_LIBRARY_PATH

PowerExchange インスタンスまたは PowerCenter インスタンスの正しい環境を同じマシンに設定するには、以下のいずれかのストラテジを使用します。

- PowerExchange と PowerCenter は常に別のアカウントで起動し、各アカウントに適切な環境変数を設定します。
- PowerExchange コンポーネントを開始するたびに、pwxsettask.sh または pwxsettask.bat スクリプトを実行します。

第 2 章

Adabas ログベース ECCR のコマンド

この章では、以下の項目について説明します。

- [Adabas ログベース ECCR のコマンドの概要, 14 ページ](#)
- [Adabas ログベース ECCR の起動, 15 ページ](#)
- [CLOSE コマンド, 15 ページ](#)
- [DISPLAY TRACE コマンド, 16 ページ](#)
- [READ コマンド, 16 ページ](#)
- [REFRESH コマンド, 17 ページ](#)
- [STATISTICS コマンド, 17 ページ](#)
- [STATUS コマンド, 19 ページ](#)
- [TRACEOFF コマンド, 19 ページ](#)
- [TRACEON コマンド, 20 ページ](#)

Adabas ログベース ECCR のコマンドの概要

Adabas ログベース ECCR の開始または停止、PLOG における変更キャプチャ処理のステータスの表示、種類別のキャプチャされた変更に関する統計メッセージの出力、またはトレースの制御を行うには、Adabas ログベース ECCR のコマンドを使用します。

トレースコマンドは、Informatica グローバルカスタマサポートから指示があった場合にのみ使用します。

コマンドは、MVS オペレータコンソール、または SDSF などのインタフェースから発行します。このコマンドを発行するには、MVS MODIFY (F) コマンドを使用します。各コマンドには、ECCR の開始済みタスク名またはジョブ名を含める必要があります。

また、`pwxcmd displaystats` コマンドを使用して監視統計を生成することもできます。詳細については、[「pwxcmd displaystats コマンド」 \(ページ 187\)](#)を参照してください。

Adabas ログベース ECCR の起動

Adabas ログベース ECCR は、開始タスクまたはバッチジョブとして実行できます。通常、Adabas ECCR は、開始タスクとして実行されます。ECCR PROC のサンプルの JCL が、RUNLIB ライブラリの ECCRADA メンバに用意されています。インストール中に XIZZZ998 ジョブを実行した場合、そのジョブによって ECCRADA メンバのコンテンツが PROCLIB ライブラリの xxxAD1EC メンバにコピーされます。xxx は、PowerExchange エージェントのプレフィックスです。

ECCR 開始タスクを開始する前に、以下の作業を実行します。

- Adabas 変更データソースのキャプチャ登録を作成します。
- RUNLIB ライブラリの ADAECRP1 メンバに指定された PowerExchange ECCR DBID パラメータ値が、Adabas キャプチャ登録のコレクション識別子と一致することを確認します。圧縮処理を使用する場合、この同じ DBID の値が、RUNLIB ライブラリの CAPTADA1 メンバに指定されていることも確認します。
- 指定された Adabas DBID がアクティブであることを確認します。

構文

Adabas ECCR を開始タスクとして起動するには、MVS START (S) コマンドを使用します。

```
S xxxAD1EC
```

xxx 変数は、MVS インストールアシスタントを実行したときに、**PowerExchange エージェント/ロッガーのプレフィックス**値に指定した 3 文字の値です。デフォルトは、PWX です。xxxAD1EC は、ECCR 開始タスク JCL を含む PROCLIB メンバの名前です。

使用上の注意

以下の使用上の注意を参照します。

- PowerExchange が変更データキャプチャのためにアクセスする必要がある Adabas DBID または Nucleus ごとに 1 つの ECCR を開始する必要があります。
- ログ作成後の結合処理を使用する Sysplex 環境を除き、ECCR、PowerExchange ロgger、および PowerExchange エージェントは、すべて同じ MVS システム上で実行する必要があります。
- ECCR が開始すると、PCAT データセットが評価されて、キャプチャ処理の対象となる新しくアーカイブされた PLOG エントリが検出されます。その後は、ADAECRP1 メンバの NO_DATA_WAIT パラメータまたは NO_DATA_WAIT2 パラメータに定義された待機時間が経過するごとに、新しい PLOG エントリがチェックされます。
- Adabas キャプチャ登録が存在しない場合は、PowerExchange ECCR はリターンコード 8 で終了します。
- 最初に ECCR を開始するときは、コールドスタートを実行する必要があります。詳細については、『*PowerExchange CDC ガイド (z/OS 用)*』を参照します。
- PowerExchange ECCR が PowerExchange ロggerに接続されていることを確認するには、EDMMMSG データセットのメッセージを確認します。

CLOSE コマンド

Adabas ログベース ECCR を停止します。ECCR を再起動すると、停止したときの位置からログの読み込みが再開されます。そのため、変更内容が失われることはありません。

または、MVS STOP (P) コマンドを発行できます。

構文

CLOSE コマンドでは、以下の構文を使用します。

```
F eccr_task_name,{CLOSE|CLOS}
```

MVS STOP (P) コマンドでは、以下の構文を使用します。

```
P eccr_task_name
```

どちらのコマンドでも、*eccr_task_name* 変数は、Adabas ログベース ECCR の開始済みタスクまたはジョブの名前です。

DISPLAY TRACE コマンド

Adabas ログベース ECCR に対してアクティブなトレース件数、およびそのトレースレベルとフィルタ条件を表示します。このコマンドは、Informatica グローバルカスタマサポートの指示の下でのみ使用してください。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
F eccr_task_name,{DISPLAY TRACE|DISP TRAC}
```

eccr_task_name 変数は、Adabas ログベース ECCR の開始済みタスクまたはジョブの名前です。

出力例

以下の出力例は、2 つのトレースがアクティブであり、そのトレースレベルが-1 でフィルタ条件が指定されている場合に、DISPLAY TRACE コマンドから出力された結果です。

```
PWX-07994 Tracing is on
PWX-07996 Number of traces is 2
PWX-07997 Trace level=-1 filter=IMTCOLL,0,99
PWX-07997 Trace level=-1 filter=IMTCOLX,0,99
```

関連項目：

- [「TRACEOFF コマンド」 \(ページ 19\)](#)
- [「TRACEON コマンド」 \(ページ 20\)](#)

READ コマンド

変更を読み取る、別の Adabas ECCR サイクルを開始します。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
F eccr_task_name,READ
```

eccr_task_name 変数は、Adabas ログベース ECCR の開始済みタスクまたはジョブの名前です。

REFRESH コマンド

Adabas ファイルのリストを、Adabas ログベース ECCR が変更データのキャプチャに使用するアクティブなキャプチャ登録で更新します。

以下の状況でこのコマンドを発行し、ECCR をシャットダウンせずに登録ソースのリストを更新します。

- キャプチャ登録を追加した後。
- キャプチャ登録を削除した後。
- 登録状況を変更する PWXUCREG ユーティリティコマンドを発行した後、例えば SUSPEND_REGISTRATION や ACTIVATE_REGISTRATION コマンドです。詳細については、『PowerExchange ユーティリティガイド』を参照してください。

このコマンドを使用するには、ECCR JCL の DTLCACFG DD 文が参照する RUNLIB(ADAECRP1)メンバで REFRESH_ALLOWED=Y を指定する必要があります。

このコマンドを発行すると、ECCR がシャットダウン処理を開始しますが、終了しません。ECCR は登録済みソースのリストを再構築し、特殊なウォームスタートを開始します。コマンドが発行されると、ECCR は、開かれているすべての UOW を、最初に開かれた UOW から再処理します。ECCR は、開いているすべての UOW を現在の ECCR ログ読み取り位置まで再処理した後、通常の処理を再開します。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
F eccr_task_name,REFRESH
```

eccr_task_name 変数は、Adabas ログベース ECCR のジョブまたは開始済みタスクの名前です。

使用上の注意

- REFRESH 操作で、ECCR は、追加された登録のデータをキャプチャしたり、削除された登録のデータがキャプチャされないようにしたりすることができるよう、開いている UOW をすべて再処理します。
- 追加する登録ごとに、新しいソースに対して変更キャプチャが開始されるポイントを制御できます。REFRESH コマンドを発行する前に、ソースの変更アクティビティを停止し、登録を追加して、ソースとターゲットを同期します。その後、REFRESH コマンドを発行し、ソースの変更アクティビティを再開します。
- REFRESH コマンドを発行する前に、削除する登録ごとに、実行中の変更がすべてキャプチャされていることと、抽出処理が PLOG の現在の ECCR の位置まで完了していることを確認します。

STATISTICS コマンド

Adabas ログベース ECCR によってキャプチャされた変更に関する統計メッセージを出力します。このメッセージは、DTLLOG および DTLOUT データセットに出力されます。

このコマンドは、指定したコマンドパラメータに応じて、ECCR の開始以降の特定の間隔の終了時に、STATISTICS コマンドの最後の実行以降に、または ECCR が PLOG の処理を終了したときに、キャプチャ統計を出力できます。ECCR では、その実行が終了するたびにキャプチャ統計が出力されます。

重要: ECCR が PLOG ごとに統計を出力する場合は、RUNLIB(ADAECRP1)メンバで CAPT_STATS=Y パラメータを指定するか、ECCR の開始後に STATISTICS ON コマンドを指定する必要があります。

構文

ECCR の実行開始以降にキャプチャされた変更の合計数をレポートする、メッセージ PWX-06182 を出力するには、以下のコマンド構文を使用します。

```
F eccr_task_name,STATISTICS
```

キャプチャされた変更の合計数を指定された間隔でレポートする、メッセージ PWX-06181 を出力する間隔を指定するには、以下のコマンド構文を使用します。

```
F eccr_task_name,STATISTICS minutes
```

STATISTICS コマンド最後の実行以降に、登録済みソースごとに PWX-06153 の統計メッセージを出力するには、以下のコマンド構文を使用します。

```
F eccr_task_name,STATISTICS SINCE [TERSE]
```

ECCR が PLOG の処理を終了するたびに PWX-06153 の統計メッセージが出力されるかどうかを制御するには、以下のコマンド構文を使用します。

```
F eccr_task_name,STATISTICS {OFF|ON}
```

これらのすべてのコマンドで、*eccr_task_name* が必要です。この変数は、Adabas ログベース ECCR の開始済みタスクまたはバッチジョブの名前を表します。

同じコマンドで、*minutes* と SINCE など、複数のパラメータを指定しないでください。

パラメータの説明

以下のパラメータは、STATISTICS コマンドのオプションです。

minutes

ECCR が統計を収集し、メッセージ PWX-06181 を出力する間隔を定義します。このメッセージでは、その間に PLOG からキャプチャされた挿入、削除、更新、およびコミットの数にレポートされます。このメッセージでは、変更がキャプチャされた PLOG の位置もレポートされます。60 分ごとなど、特定の頻度で統計を出力するには、この位置パラメータを使用します。この分数により、ECCR の実行期間に対する CAPT_STATS_INTVL パラメータ値が上書きされます。有効な値は 1~1440 です。デフォルトは指定されていません。

OFF

PLOG が閉じられているときに、メッセージ PWX-06153 を出力しません。ただし、ECCR の実行終了時にはメッセージ PWX-06153 は引き続き出力され、後続の STATISTICS *minutes* または STATISTICS SINCE コマンドでは出力されます。STATISTICS OFF コマンドは、ECCR コンフィギュレーションメンバの CAPT_STATS=N パラメータに似ています。このコマンドが発行されると、ECCR はメッセージ PWX-07804 を出力し、統計レポートがオフになっていることを示します。

ON

ECCR が PLOG の処理を終了して PLOG を閉じるたびに、メッセージ PWX-06153 を出力します。メッセージ PWX-06153 では、PLOG によってグループ化された登録済みソースごとに、処理された挿入、削除、および更新の数にレポートされます。STATISTICS ON コマンドは、ECCR コンフィギュレーションメンバの CAPT_STATS=Y パラメータに似ています。このパラメータを使用すると、ECCR はメッセージ PWX-07803 を出力して、統計レポートがオンになっていることを示します。

SINCE

STATISTICS コマンドの最後の実行以降に、メッセージ PWX-06153 を出力します。メッセージ PWX-06153 では、登録済みソースごとに、SINCE 期間中に処理された挿入、削除、更新、およびコミットの数にレポートされます。メッセージ PWX-06183 および PWX-06184 では、このブロックのメッセージの境界が特定されます。メッセージ PWX-06184 では、この期間のすべてのソースの合計数が示されます。このパラメータを指定してコマンドをスケジュール設定すると、日次や週次など、定期的に統計を出力できます。

SINCE TERSE

STATISTICS コマンドの最後の実行以降に ECCR によってキャプチャされた変更の登録済みソースに対してのみ、メッセージ PWX-06153 を出力します。メッセージ PWX-06183 では、挿入、更新、または削除がコミットされた登録済みソースの数のみが示されます。

使用上の注意

- STATISTICS *minutes* コマンドを指定して統計がレポートされる間隔を変更する前に、RUNLIB(ADAECRP1)メンバで CAPT_STATS=Y を指定するか、STATISTICS ON コマンドを発行する必要があります。
- STATISTICS *minutes* コマンドで指定した間隔により、CAPT_STATS_INTVL パラメータで指定したすべての間隔が上書きされます。メッセージ PWX-07809 の出力で、STATISTICS コマンドによって設定された新しい間隔がレポートされます。
- 間隔の値に 0 を指定することはできません。コマンド STATISTICS 0 を入力すると、エラーメッセージ PWX-07808 が発行されます。RUNLIB(ADAECRP1)メンバで CAPT_STATS_INTVL パラメータを 0 に設定すると、エラーメッセージ PWX-00967 が発行されます。
- RUNLIB(ADAECRP1)メンバで CAPT_STATS_TERSE パラメータを N に設定し、STATISTICS SINCE TERSE を実行すると、TERSE オプションによって SINCE 期間の CAPT_STATS_TERSE 設定が上書きされます。

STATUS コマンド

メッセージ PWX-07905 を SYSPRINT 出力ファイルに出力します。このメッセージは、PLOG ファイルでの Adabas ECCR の処理のステータスを示します。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
F eccr_task_name,STATUS
```

eccr_task_name 変数は、Adabas ログベース ECCR のジョブまたは開始済みタスクの名前です。

出力例

コマンドは以下のメッセージを出力します。

```
PWX-07905 DTL07905 Current PLOG copy is plog_file latest time processed timestamp (ADABAS Capture)
```

TRACEOFF コマンド

Adabas ログベース ECCR のトレースを無効にします。このコマンドは、Informatica グローバルカスタマサポートの指示の下でのみ使用してください。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
F eccr_task_name,TRACEOFF [trace_id]
```

eccr_task_name 変数は、Adabas ログベース ECCR の開始済みタスクまたはジョブの名前です。

オプションの *trace_id* パラメータは、特定のトレースの識別子です。特定のトレースを無効にするには、このパラメータを使用します。このパラメータを使用しなかった場合、コマンドはアクティブなトレースをすべて無効にします。

出力例

以下のいずれかのメッセージが DTLLOG ファイルに書き込まれます。

PWX-07800 Tracing turned off

PWX-07801 Trace *trace_id* has been turned off

関連項目：

- [「DISPLAY TRACE コマンド」 \(ページ 16\)](#)
- [「TRACEON コマンド」 \(ページ 20\)](#)

TRACEON コマンド

Adabas ログベース ECCR に対して、特定のフィルタ条件および特定のトレースレベルのトレースを有効にします。トレース情報は、Adabas ECCR イベントの履歴を示し、問題の診断に役立ちます。

このコマンドは、Informatica グローバルカスタマサポートの指示の下でのみ使用してください。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

F eccr_task_name,TRACEON trace_filter level_number

説明:

- *eccr_task_name* は、Adabas ログベース ECCR の開始済みタスクまたはジョブの名前です。
- *trace_filter* および *level_number* は、Informatica グローバルカスタマサポートが提供する値です。

出力例

コマンドの実行に成功すると、以下のメッセージが DTLLOG ファイルに書き込まれます。

PWX-07998 Trace *trace_id* level *trace_level* turned on

有効なトレースフィルタ条件も有効なトレースレベルも指定せずにこのコマンドを発行すると、以下のメッセージが発行されます。

PWX-07282 The TRACEON command is missing the trace filter and trace level arguments

トレーススロットを使用できない場合には、以下のメッセージが発行されます。

PWX-07999 No space for an additional trace

関連項目：

- [「DISPLAY TRACE コマンド」 \(ページ 16\)](#)
- [「TRACEOFF コマンド」 \(ページ 19\)](#)

第 3 章

バッチ VSAM ECCR のコマンド

この章では、以下の項目について説明します。

- [バッチ VSAM ECCR のコマンドの概要, 21 ページ](#)
- [DISPLAY コマンド, 21 ページ](#)
- [START コマンド, 22 ページ](#)
- [STOP コマンド, 22 ページ](#)

バッチ VSAM ECCR のコマンドの概要

バッチ VSAM ECCR コマンドを使用して、MVS システムで以下の ECCR 管理作業を実行します。

- MVS システム上の、アクティブおよび非アクティブなバッチ VSAM ECCR インタフェースの数の表示
- バッチ VSAM ECCR インタフェースの開始
- バッチ VSAM ECCR インタフェースを停止します。
- バッチ VSAM ECCR インタフェースの再ロード

MVS オペレータコンソール、または SDSF などのインタフェースからコマンドを発行します。バッチ VSAM ECCR のインタフェースコマンドは PowerExchange エージェントによって処理されるため、各コマンドの先頭には、PowerExchange エージェント用の MVS コマンドプレフィックスを付ける必要があります。RUNLIB ライブラリの AGENTCTL メンバの CmdPrefix パラメータに指定したコマンドプレフィックスを使用します。CmdPrefix パラメータを定義していない場合は、AGENTCTL メンバの AGENTID パラメータ値であるデフォルトのコマンドプレフィックスを使用します。構文では、コマンドプレフィックスは *cmd_prefix* 変数で表されています。

DISPLAY コマンド

MVS システムにロードされた、アクティブおよび非アクティブなバッチ VSAM ECCR インタフェースモジュールの数を表示します。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
cmd_prefix DISPLAY VSAMECCR
```

START コマンド

RUNLIB ライブラリの AGENTCTL メンバの PowerExchange エージェント CCVACTIVE パラメータに指定された値にかかわらず、バッチ VSAM ECCR インタフェースを手動でアクティブ化します。

CCVACTIVE パラメータにより、PowerExchange エージェントの起動時に自動的に VSAM バッチ ECCR がアクティブ化されるかどうかを制御します。

拡張共通ストレージ領域（ECSA）に新しいバッチ VSAM ECCR インタフェースモジュールをロードする場合、または変更された既存のインタフェースを再ロードする場合は、コマンドで VSAMECCR ではなく、VSAMECCR/RELOAD を指定します。このコマンドによって、LPA キューの開始時に、モジュールの状態がアクティブに設定されます。

注: 1 つの PowerExchange エージェントでバッチ VSAM ECCR をアクティブ化すると、MVS イメージ上のすべての PowerExchange エージェントでグローバルに ECCR がアクティブになります。そのため、MVS イメージ上で複数の PowerExchange エージェントを実行している場合は、1 つの PowerExchange エージェントコマンドプレフィクスのみを使用して、1 回のみバッチ VSAM ECCR をアクティブ化できます。

構文

バッチ VSAM ECCR インタフェースを開始するには、以下のコマンド構文を使用します。

```
cmd_prefix START VSAMECCR
```

新しいバッチ VSAM ECCR インタフェースモジュールを ECSA にロードするには、以下のコマンド構文を使用します。

```
cmd_prefix START VSAMECCR/RELOAD
```

STOP コマンド

バッチ VSAM ECCR を停止します。このアクションによって、MVS システム全体の ECCR が無効化されます。既に開始されている変更データキャプチャアクティビティは、データセットが閉じられるまで継続します。その後は、VSAM データセットへの変更が行われても、キャプチャされません。

特定の VSAM データセットに対する変更キャプチャを停止する場合は、PowerExchange Navigator から、関連するキャプチャ登録のステータスを *非アクティブ* に設定します。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
cmd_prefix STOP VSAMECCR
```

バッチ VSAM ECCR の停止の詳細については、『*PowerExchange CDC ガイド (z/OS 用)*』を参照します。

第 4 章

CICS/VSAM ECCR のコマンド

この章では、以下の項目について説明します。

- [CICS/VSAM ECCR のコマンドの概要, 23 ページ](#)
- [DISPLAY コマンド, 24 ページ](#)
- [EXITPGMS コマンド, 24 ページ](#)
- [HELP コマンド, 25 ページ](#)
- [INITIALIZE コマンド, 26 ページ](#)
- [OPTIONS コマンド, 27 ページ](#)
- [REFRESH コマンド, 28 ページ](#)
- [RESTART コマンド, 29 ページ](#)
- [TERMINATE コマンド, 29 ページ](#)

CICS/VSAM ECCR のコマンドの概要

CICS/VSAM ECCR のコマンドを使用して、z/OS システムで次の ECCR 管理タスクを実行します。

- CICS/VSAM ECCR を開始します。
- 変更データキャプチャに登録された、すべての開いている VSAM データセットを表示します。
- CICS/VSAM ECCR のコマンドを説明する [ヘルプ] パネルを表示します。
- CICS/VSAM CDC のオーバーライドオプションを表示、またはその表示を更新します。このオプションは、現在 CICS 領域のスタートアップ JCL の//EDMKOVRD DD 文に指定されているものです。
- //EDMKOVRD DD 文に指定されている CDC のオーバーライドオプションの変更後、CICS 領域の CICS/VSAM ECCR を再初期化します。
- CICS/VSAM ECCR を停止します。
- PowerExchange が CICS/VSAM CDC で使用する CICS グローバルユーザーイグジットポイントとタスク関連のユーザーイグジットポイントで定義されている、すべてのイグジットプログラムを一覧表示します。

CICS 端末から、CICS コマンドとしてコマンドを発行します。CICS/VSAM ECCR のデフォルトの CICS トランザクションコードである"EDMC"を付けて、コマンドを入力します。以下の構文を使用します。

EDMC *command*

注: コマンドリファレンスのトピックでは、この構文を使用します。

または、MVS MODIFY (F) コマンドを使用して、CICS 領域にコマンドを発行することもできます。以下の構文を使用します。

F cics_region,EDMC command

DISPLAY コマンド

変更データキャプチャに登録されており、CICS/VSAM ECCR の初期化時以降開かれている VSAM データセットの名前を表示します。

このキーワードで EDMC トランザクションを発行できるのは、CICS 端末からのみです。この情報はその後端末で表示されます。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

EDMC DISPLAY

短い形式:

EDMC DISP

出力例

次のサンプル出力は、変更キャプチャに参加している 6 つの VSAM データセットを示していますが、3 つのデータセットには EDMKOV RD DD データセットで *DSN=dataset_name*,NOCAPTURE または *CAPTURE_vsam_dataset_type=OFF* オーバーライドオプションが指定され、これらのデータセットは参加していません。

EDMC DISP ID: CT52	PWXEDM CICS/VSAM Change Capture Participating Files Display	Init Date: 02/22/17 Time: 23:27:53
File Name	Data set Name	Type Warn/Error
DFHCSD	<<EDM File Open currently in progress>>	
EDMFIL01	PWX.VSAM.EDMVES01	ESDS
EDMFIL02	PWX.VSAM.EDMVES02	KSDS NoCapture
EDMFIL03	PWX.VSAM.EDMVES03	ESDS
EDMFIL05	PWX.VSAM.EDMVES05	KSDS NoCapture
EDMFIL06	PWX.VSAM.EDMVES06	KSDS NoCapture
EDMFIL07	PWX.VSAM.EDMVES07	ESDS
EDMFIL08	PWX.VSAM.EDMVES08	ESDS
EDMFIL09	PWX.VSAM.EDMVES09	ESDS
EDMFIL10	PWX.VSAM.EDMVES10	ESDS Rcv(None)

EXITPGMS コマンド

PowerExchange が CICS/VSAM CDC で使用する、CICS タスク関連のイグジットポイント (TRUE) とグローバルユーザーイグジットポイント (GLUE) で定義されている、すべてのイグジットプログラムを一覧表示します。

構文

EDMC EXITPGMS

短い形式:

EDMC XPGM

出力例

次の出力例は、CICS/VSAM CDC が使用する CICS TRUE および GLUE イグジットポイントの一覧を示しています。

```
EDMC XPGM          PWXEDM CICS/VSAM Change Capture      Init Date: 10/23/15
ID: CT52           Exit Points Program Display          Time: 22:45:06

Exit   Entry   Program  Entry Pt Program Exit Prog Global Work Area (GWA)
Point  Name       Name     Address Status Attributes Name      Address  Size
<TRUE> DLI        DFHEDP   9B7A4918 Started Threadsaf 00000000
<TRUE> DFHQSTRU DFHLETRU 9B6FD928 Started Threadsaf 00000000
<TRUE> EDMKTRUE EDMKTRUE 9BAE4E28 Started Quasirent EDMKTRUE 00056150 00064
XFCSREQ EDMKCT52 EDMKCT52 800AF028 Started Quasirent EDMKTRUE 00056150 00064
XFCSREQ EDMKCT52 EDMKCT52 800AF028 Started Quasirent EDMKTRUE 00056150 00064
XFCFRIN EDMKIR69 EDMKIR69 9A8C5200 Started Quasirent EDMKTRUE 00056150 00064
XFCFROUT EDMKIR69 EDMKIR69 9A8C5200 Started Quasirent EDMKTRUE 00056150 00064
XFCBOUT EDMKB069 EDMKB069 9BAF9E28 Started Threadsaf EDMKTRUE 00056150 00064
XFCLDEL USERFCLD USERFCLD 9A5F9E28 Started Quasirent EDMKFCLD 1BD3E000 00004
XFCLDEL EDMKLD69 EDMKLD69 9BAE5E28 Started Threadsaf EDMKTRUE 00056150 00064
```

それぞれのイグジットポイントについて、エントリ名とアドレス、イグジットプログラムの名前とステータス、グローバル作業領域（GWA）の名前、アドレス、サイズが表示されます。

使用上の注意

- CICS/VSAM ECCR が ESDS データセットから変更データをキャプチャする場合、コマンド出力を使用して、XFCLDEL イグジットポイントが最後に表示されることを確認します。複数のプログラムが XFCLDEL イグジットポイントで定義されている場合は、CDC で要求されるように、EDMKLD *nn* イグジットプログラムが最後であることも確認します。このプログラムでは、バックアウトのために論理削除をサポートしています。
- PowerExchange イグジットプログラムと、ファイル制御ドメインイグジットポイント（XFCRIN および XFCROUT）にあるサードパーティソフトウェア製品のプログラムとの間で競合が発生した場合、トラブルシューティングのために、このプログラムの出力を Informatica グローバルカスタマサポートに送付してください。

HELP コマンド

CICS/VSAM ECCR コマンドとその名前および機能を一覧表示する、[ヘルプ] パネルを表示します。

HELP キーワードで EDMC トランザクションを発行できるのは、CICS 端末からのみです。ヘルプ情報はその後 CICS 端末で表示されます。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

EDMC HELP

出力例

次の出力例は、各 CICS/VSAM ECCR コマンドの簡単な説明を示しています。

```
EDMC HELP          PWXEDM CICS/VSAM Change Capture
                   List of Valid EDMC Command Operands
```

EDMC DISP - DISPlay CICS/VSAM Change Capture participating Files

EDMC HELP - Produces this helpful display of valid commands

EDMC INIT - INITialize CICS/VSAM Change Capture for the CICS region

EDMC XPGM - Displays the CICS Exits used by CICS/VSAM Change Capture

26 第4章: CICS/VSAM ECCR のコマンド

使用上の注意

- PowerExchange エージェントを有効にする前に CICS/VSAM ECCR を有効にして VSAM データセットを開いた場合は、変更のキャプチャを開始する前にデータセットを閉じてから再度開く必要があります。
- EDMSDIR オプションモジュールに CCERR=ABEND を指定して、CICS/VSAM ECCR の初期化時に重大なエラーまたは異常終了が発生した場合、CICS 領域は ECCR によって直ちに終了されて、データの消失が防止されます。この処理で現行タスクは中断され、実行中のトランザクションは取り消されます。ECCR は、ユーザが CICS コマンド CEMT PERFORM SHUTDOWN IMMEDIATE を発行したかのように動作します。このアクションにより、変更データの整合性が保証されます。

EDMSDIR オプションモジュールで CCERR=ABEND を指定しなかった場合は、初期化時に ECCR が異常終了した後に、EDMC RESTART コマンドを発行できます。このコマンドでは、TERMINATE コマンドの後に INITIALIZE コマンドが発行されます。ただし、ビジー状態のシステムでは、ECCR の終了から再初期化までの間、データがキャプチャされないため、変更データが失われる可能性があります。

- ECCR の実行後に、追加の VSAM ファイルに対して変更のキャプチャを開始する必要がある場合は、キャプチャ登録がアクティブであることを確認してから、CICS で VSAM ファイルを閉じてから再度開きます。
- CICS/VSAM CDC は、複数の CICS グローバルイグジットポイントで定義されたイグジットプログラムを使用して、VSAM データセットへの変更をキャプチャします。INIT コマンドを使用すると、イグジットプログラムが動的に追加され、TERM コマンドを使用すると、イグジットプログラムが動的に削除されます。CICS/VSAM ECCR が実行されているシステム上の同じグローバルイグジットポイントで、他のイグジットプログラムがアクティブになっている場合、CICS/VSAM CDC イグジットプログラムが不適切な順序で制御を取得すると、変更データキャプチャの問題が発生する可能性があります。詳細については、『PowerExchange CDC ガイド (z/OS 版)』を参照してください。

OPTIONS コマンド

CICS/VSAM CDC のオーバーライドオプションを表示します。このオプションは、現在 CICS 領域のスタートアップ JCL の EDMKOV RD DD 文か、この DD 文がポイントするデータセット内に指定されているものです。

VSAM データセットのタイプに基づいて変更データキャプチャを有効または無効にするグローバルオーバーライドと、リカバリ可能 ESDS データセットに対する一部の処理 (XFCLDEL イグジットポイントの他のアクティブなイグジットプログラムからの戻りコードをオーバーライドする、トランザクションの異常終了や同期ポイントのロールバック後に、バックアウトエラーを許可するなど) を制御するグローバルオーバーライドを指定できます。特定の VSAM データセットに、同じタイプのオーバーライドを指定することもできます。

コマンド出力は、z/OS オペレータコンソールまたは CICS 端末に表示され、CICS CSMT 接続先に記録されません。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

EDMC OPTIONS

短い形式:

EDMC OPTS

出力例

次の出力例は、グローバルオーバーライドと、特定の VSAM データセットにのみ適用されるオーバーライドを示します。

```
EDMC OPTS          PWXEDM CICS/VSAM Change Capture      Init Date: 10/23/15
ID: CT52           Override Options Display             Time: 22:45:06
                  Press ENTER for more...
.....1.....2.....3.....4.....5.....6.....7.....8
```

```

-----0-----0-----0-----0-----0-----0-----0-----0
* EDM Override Options were last refreshed at: 22:45:06 on 10/23/15 from:
*   INFAABC1.EDMKOVRD.SYSIN(INFAAB52)
* comment line
*   This is line # 1
* -----
*
* EDM Global Region Overrides:
*
*   CAPTURE_ESDS=OFF      <-- Default value
*   CAPTURE_ESDS=ON
*
*   CAPTURE_KSDS=OFF     <-- Default value
*   CAPTURE_KSDS=ON
*
*   CAPTURE_RRDS=OFF     <-- Default value
*   CAPTURE_RRDS=ON
*
*   CAPTURE_CMDT=OFF     <-- Default value
*   CAPTURE_CMDT=ON
*
*   BACKOUTRC=OVERRIDE   <-- Default value
*   BACKOUTRC=NOOVERRIDE
*
*   ESDSFAIL=NO          <-- Default value
*   ESDSFAIL=YES
* -----
*
* EDM Dataset Specific Overrides:
*
*   DSN=INFAABC1.VSAM.EDMVKSXX CAPTURE
*   DSN=INFAABC1.VSAM.EDMVKS04 CAPTURE
*
*   DSN=INFAABC1.VSAM.EDMVES01 CAPTURE.XX OUTOVERRIDE BACKOUTFAIL
*   DSN=INFAABC1.VSAM.EDMVES01 CAPTURE BACKOUTOVERRIDE BACKOUTFAIL

```

CICS/VSAM CDC のオーバーライドオプションの詳細については、『*PowerExchange CDC ガイド (z/OS 版)*』を参照してください。

REFRESH コマンド

CICS/VSAM CDC のオーバーライドオプションの表示を更新します。このオプションは、現在 CICS 領域のスタートアップ JCL の EDMKOVRD DD 文か、この DD 文がポイントするデータセット内に指定されているものです。さらにこれらのオプションを検証し構文エラーを検出します。オーバーライドオプションを変更した後に、このコマンドを使用して構文エラーを検出します。

コマンド出力は、CICS CSMT 定義に記録されます。出力には、情報タイプが OPTIONS コマンドとして表示されます。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

EDMC REFRESH

短い形式:

EDMC REFR

RESTART コマンド

EDMC TERMINATE コマンドを発行し、続いて EDMC INITIALIZE コマンドを発行することで、CICS 領域で CICS/VSAM ECCR を再初期化します。

CICS 領域のスタートアップ JCL の//EDMKOVRD DD 文、またはこの DD 文がポイントするデータセット内で、CDC のオーバーライドオプションを変更した後に、RESTART コマンドを発行して、変更を有効にすることができます。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

EDMC RESTART

短い形式:

EDMC REST

使用上の注意

Informatica では、テストシステム、または継続的な変更キャプチャに不可欠なファイル I/O アクティビティのないシステムで ECCR が実行されている場合に限り、RESTART コマンドを使用することを推奨しています。ECCR は、TERMINATE コマンドの起動から INITIALIZE コマンドの起動までの間はデータをキャプチャできないため、変更データが失われる可能性があります。

TERMINATE コマンド

CICS 領域で実行されている CICS/VSAM ECCR を終了します。ECCR は、すべての VSAM ソースデータセットからの変更データのキャプチャを直ちに停止し、PowerExchange ロgger（z/OS 用）から切断します。データセットが最後に開かれてからキャプチャされた変更の数とタイプを示すメッセージが、EDMMSG データセットに書き込まれます。

さらに PowerExchange イグジットプログラムを動的に削除します。このプログラムは PowerExchange が CICS/VSAM CDC に使用する CICS のタスク関連ユーザーイグジットポイントおよびグローバルユーザーイグジットポイントで実行されるものです。

重要: EDMC TERM コマンドは、Informatica グローバルカスタマサポートの指示でのみ使用してください。このコマンドを使用して PowerExchange 変更データキャプチャを終了すると、PowerExchange の CICS/VSAM ECCR で使用される CICS 領域内のイグジットポイントが他のイグジットプログラムからも使用されている場合、データ消失などの予期しない結果が発生する可能性があります。代わりに、CICS 領域をシャットダウンした時に、CICS からの要求によって ECCR の終了が開始されるようにします。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

EDMC TERMINATE

短い形式:

EDMC TERM

出力例

次に、TERMINATE コマンドの出力例を示します。

```
PWXEDM172809I Change Capture counts for EDM.ABC.EDMVES04: Insert=0, Update=20, Delete=0
PWXEDM172809I Change Capture counts for EDM.ABC.EDMVES03: Insert=10, Update=0, Delete=0
PWXEDM172809I Change Capture counts for EDM.ABC.EDMVES05: Insert=20, Update=0, Delete=0
```

```
PWXEDM172841I EDM ECCR ECCRCT41 disconnected from EDM Logger A10L, Log RBA=X'0000019EAA160000'  
PWXEDM172818I Left XCF group 'A10L' as member 'ECCRCT41'  
PWXEDM172829I EDM ECCR sent 50 records to Logger A10L (50 change records)
```

注: 挿入、更新、削除カウントがすべて 0 の場合、ソースデータセットの PWXEDM172809I メッセージは表示されません。

使用上の注意

- EDMC TERM コマンドを発行する前に、CICS 領域を静止します。
- 変更データキャプチャに登録されている VSAM データセットがデータソースのトランザクションによって更新されている間に CICS/VSAM ECCR を終了すると、変更データが失われる可能性があります。
- CICS/VSAM CDC は、複数の CICS グローバルイグジットポイントで定義されたイグジットプログラムを使用して、VSAM データセットへの変更をキャプチャします。INIT コマンドを使用すると、イグジットプログラムが動的に追加され、TERM コマンドを使用すると、イグジットプログラムが動的に削除されます。CICS/VSAM ECCR が実行されているシステム上の同じグローバルイグジットポイントで、他のイグジットプログラムがアクティブになっている場合、CICS/VSAM CDC イグジットプログラムが不適切な順序で制御を取得すると、変更データキャプチャの問題が発生する可能性があります。詳細については、『*PowerExchange CDC ガイド (z/OS 版)*』を参照してください。

第 5 章

Datacom テーブルベース ECCR の コマンド

この章では、以下の項目について説明します。

- [Datacom テーブルベース ECCR のコマンドの概要, 31 ページ](#)
- [Datacom テーブルベース ECCR の起動, 32 ページ](#)
- [CLOSE コマンド, 32 ページ](#)
- [DISPLAY TRACE コマンド, 32 ページ](#)
- [READ コマンド, 33 ページ](#)
- [REFRESH コマンド, 33 ページ](#)
- [STATISTICS コマンド, 34 ページ](#)
- [STATUS コマンド, 36 ページ](#)
- [TRACEOFF コマンド, 36 ページ](#)
- [TRACEON コマンド, 37 ページ](#)

Datacom テーブルベース ECCR のコマンドの概要

標準の MVS START および STOP コマンドを使用して、Datacom テーブルベース ECCR を起動または停止します。また、PowerExchange STATISTICS コマンドを使用して、キャプチャされた挿入、更新、削除、およびコミットに関する統計メッセージを出力することもできます。

MVS オペレータコンソール、または SDSF などのインタフェースからコマンドを発行します。コマンドには、ECCR 開始タスク名またはジョブ名を含める必要があります。

また、`pwxcmd displaystats` コマンドを使用して監視統計を生成することもできます。詳細については、[「pwxcmd displaystats コマンド」 \(ページ 187\)](#)を参照してください。

Datacom テーブルベース ECCR の起動

Datacom テーブルベース ECCR を開始済みタスクとして起動するには、MVS START (S) コマンドを使用します。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
S eccr_task_name
```

eccr_task_name 変数は、Datacom テーブルベース ECCR の開始済みタスク名またはジョブです。

使用上の注意

最初に ECCR を起動するときは、コールドスタートを実行します。

詳細については、『*PowerExchange CDC ガイド (z/OS 用)*』を参照します。

CLOSE コマンド

Datacom テーブルベース ECCR を停止します。ECCR を再起動すると、停止したときの位置からログレコードの読み込みが再開されます。そのため、変更内容が失われることはありません。

または、MVS STOP (P) コマンドを発行できます。

構文

CLOSE コマンドでは、以下の構文を使用します。

```
F eccr_task_name,{CLOSE|CLOS}
```

MVS STOP (P) コマンドでは、以下の構文を使用します。

```
P eccr_task_name
```

どちらのコマンドでも、*eccr_task_name* 変数は、Datacom テーブルベース ECCR の開始済みタスクまたはジョブの名前です。

DISPLAY TRACE コマンド

Datacom テーブルベース ECCR に対してアクティブなトレース件数、およびそのトレースレベルとフィルタ条件を表示します。このコマンドは、Informatica グローバルカスタマサポートの指示の下でのみ使用してください。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
F eccr_task_name,{DISPLAY TRACE|DISP TRAC}
```

eccr_task_name 変数は、Datacom テーブルベース ECCR のジョブまたは開始済みタスクの名前です。

出力例

以下の出力例は、2つのトレースがアクティブであり、そのトレースレベルが-1でフィルタ条件が指定されている場合に、DISPLAY TRACE コマンドから出力された結果です。

```
PWX-07994 Tracing is on
PWX-07996 Number of traces is 2
PWX-07997 Trace level=-1 filter=IMTCOLL,0,99
PWX-07997 Trace level=-1 filter=IMTCOLX,0,99
```

READ コマンド

変更を読み取る、別の Datacom テーブルベース ECCR サイクルを開始します。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
F eccr_task_name,READ
```

eccr_task_name 変数は、Datacom テーブルベース ECCR の開始済みタスクまたはジョブの名前です。

REFRESH コマンド

Datacom レコードのリストを、ADatacom テーブルベース ECCR が変更データのキャプチャに使用するアクティブなキャプチャ登録で更新します。

以下の状況でこのコマンドを発行し、ECCR をシャットダウンせずに登録ソースのリストを更新します。

- キャプチャ登録を追加した後。
- キャプチャ登録を削除した後。
- 登録状況を変更する PWXUCREG ユーティリティコマンドを発行した後、例えば SUSPEND_REGISTRATION や ACTIVATE_REGISTRATION コマンドです。詳細については、『PowerExchange ユーティリティガイド』を参照してください。

このコマンドを使用するには、ECCR JCL の DTLCACFG DD 文が参照する RUNLIB(ECCRD CMP)メンバで REFRESH_ALLOWED=Y を指定する必要があります。

このコマンドを発行すると、ECCR がシャットダウン処理を開始しますが、終了しません。ECCR は登録済みソースのリストを再構築し、特殊なウォームスタートを開始します。コマンドが発行されると、ECCR は、開かれているすべての UOW を、最初に開かれた UOW から再処理します。ECCR は、開いているすべての UOW を現在のログ読み取り位置まで再処理した後、通常の処理を再開します。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
F eccr_task_name,REFRESH
```

eccr_task_name 変数は、Datacom テーブルベース ECCR のジョブまたは開始済みタスクの名前です。

使用上の注意

- REFRESH 操作で、ECCR は、追加された登録のデータをキャプチャしたり、削除された登録のデータがキャプチャされないようにしたりすることができるよう、開いている UOW をすべて再処理します。

- 追加する登録ごとに、新しいソースに対して変更キャプチャが開始されるポイントを制御できます。REFRESH コマンドを発行する前に、ソースの変更アクティビティを停止し、登録を追加して、ソースとターゲットを同期します。その後、REFRESH コマンドを発行し、ソースの変更アクティビティを再開します。
- REFRESH コマンドを発行する前に、削除する登録ごとに、実行中の変更がすべてキャプチャされていることと、抽出処理が変更ストリームの現在の ECCR の位置まで完了していることを確認します。

STATISTICS コマンド

Datcom テーブルベース ECCR によってキャプチャされた変更に関する統計メッセージを出力します。このメッセージは、DTLLOG および DTLOUT データセットに出力されます。

このコマンドは、指定したコマンドパラメータに応じて、ECCR の開始以降の特定の間隔の終了時に、STATISTICS コマンドの最後の実行以降に、または ECCR が Datcom CDC テーブルの変更ストリームの最後に到達したときに、キャプチャ統計を出力できます。ECCR では、その実行が終了するたびにキャプチャ統計が出力されます。

重要: ECCR が変更ストリームの読み取りごとに統計をレポートする場合は、RUNLIB(ECCRDCMP)メンバで CAPT_STATS パラメータを Y に設定するか、ECCR の開始後に STATISTICS ON コマンドを指定する必要があります。

構文

ECCR の実行開始以降にキャプチャされた変更の合計数をレポートする、メッセージ PWX-06182 を出力するには、以下のコマンド構文を使用します。

```
F eccr_task_name,STATISTICS
```

キャプチャされた変更の合計数を指定された間隔でレポートする、メッセージ PWX-06181 を出力する間隔を指定するには、以下のコマンド構文を使用します。

```
F eccr_task_name,STATISTICS minutes
```

STATISTICS コマンド最後の実行以降に、登録済みソースごとに PWX-06153 の統計メッセージを出力するには、以下のコマンド構文を使用します。

```
F eccr_task_name,STATISTICS SINCE [TERSE]
```

ECCR が Datcom CDC テーブルの変更ストリームの最後に到達するたびに統計が出力されるかどうかを制御するには、以下のコマンド構文を使用します。

```
F eccr_task_name,STATISTICS {OFF|ON}
```

これらのすべてのコマンドで、*eccr_task_name* が必要です。この変数は、Datcom テーブルベース ECCR の開始済みタスクまたはバッチジョブの名前を表します。

同じコマンドで、*minutes* と SINCE など、複数のパラメータを指定しないでください。

パラメータの説明

以下のパラメータは、STATISTICS コマンドのオプションです。

minutes

ECCR が統計を収集し、メッセージ PWX-06181 を出力する間隔を定義します。このメッセージでは、その間にキャプチャされた挿入、削除、更新、およびコミットの数レポートされます。60 分ごとなど、特定の頻度で統計を出力するには、この位置パラメータを使用します。この分数により、ECCR の実行期間に対する CAPT_STATS_INTVL パラメータ値が上書きされます。有効な値は 1~1440 です。デフォルトは指定されていません。

OFF

ECCR が Datacom CDC テーブルの変更ストリームの最後に到達したときに、PWX-06153 メッセージを出力しません。ただし、ECCR の実行終了時にはメッセージ PWX-06153 は引き続き出力され、後続の STATISTICS *minutes* または STATISTICS SINCE コマンドでは出力されます。STATISTICS OFF コマンドは、ECCR コンフィギュレーションメンバの CAPT_STATS=N パラメータに似ています。このコマンドが発行されると、ECCR はメッセージ PWX-07804 を出力し、統計レポートがオフになっていることを示します。

ON

ECCR の実行の最後と変更ストリームの最後に、PWX-06153 メッセージを出力します。メッセージ PWX-06153 では、変更ストリームの読み取りによってグループ化された登録済みソースごとに、処理された挿入、削除、および更新の数がレポートされます。STATISTICS ON コマンドは、ECCR コンフィギュレーションメンバの CAPT_STATS=Y パラメータに似ています。このパラメータを使用すると、ECCR はメッセージ PWX-07803 を出力して、統計レポートがオンになっていることを示します。

SINCE

STATISTICS コマンドの最後の実行以降に、メッセージ PWX-06153 を出力します。メッセージ PWX-06153 では、登録済みソースごとに、この期間中に処理された挿入、削除、更新、およびコミットの数にレポートされます。メッセージ PWX-06183 および PWX-06184 では、このブロックのメッセージの境界が特定されます。メッセージ PWX-06184 では、この期間のすべてのソースの合計数が示されます。このパラメータを指定してコマンドをスケジュール設定すると、日次や週次など、定期的に統計を出力できます。

SINCE TERSE

STATISTICS コマンドの最後の実行以降に ECCR によってキャプチャされた変更の登録済みソースに対してのみ、メッセージ PWX-06153 を出力します。メッセージ PWX-06183 では、挿入、更新、または削除がコミットされた登録済みソースの数のみが示されます。

出力例

ECCR パラメータ CAPT_STATS_INTERVAL=10 を指定すると、STATISTICS コマンドの結果として、以下の統計メッセージが出力されます。

```
PWX-07702 DCOM TB CDC, ECCR, Thu May 17 14:02:45.934 2012, Registration read started.
PWX-06118 Registration loaded: DBName: MUF12345 RegName: td7crcol.1 Creator: ab_coll Table: AB_COLL_COL
PWX-06118 Registration loaded: DBName: MUF12345 RegName: td7crrs.1 Creator: ab_crse Table: AB_CRSE_CRS
PWX-07703 DCOM TB CDC, ECCR, Thu May 17 14:02:46.978 2012, Registration read completed.
PWX-07805 Statistics interval subtask started, collection interval 10 minute(s)
PWX-07701 DCOM TB CDC, ECCR, Thu May 17 14:03:22.578 2012, Initialisation completed.
PWX-06181 Interval 12/05/17 14:13:22 I=0000000000003 D=0000000000001 U=0000000000004 C=0000000000007 Log=00/01/01
00:00:00.00
PWX-06181 Interval 12/05/17 14:23:22 I=0000000000005 D=0000000000000 U=0000000000004 C=0000000000008 Log=00/01/01
00:00:00.00
PWX-07812 Latest time processed 00/01/01 00:00:00.000000 Records processed 40 (Datacom capture)
PWX-07813 Datacom RTTB CDC, Reader Task Latest----->
        captured data 00/01/01 00:00:00.000000.
PWX-07814 Datacom RTTB CDC, Reader Task Latest----->
        records processed 0000000040.
PWX-06153 td7crrs.1      I=00000000000008 D=0000000000001 U=0000000000004
PWX-06153 td7crrs.1      I=00000000000000 D=0000000000000 U=0000000000004
PWX-06182 Totals 12/05/17 15:20:37 I=0000000000008 D=0000000000001 U=0000000000008 C=0000000000015 Log=00/01/01
00:00:00.00
```

この例で、メッセージ PWX-06153 では、リーダータスクの実行の登録ごとに、挿入、削除、および更新の数が示されます。メッセージ PWX-06181 では 10 分間隔で合計数が示され、メッセージ PWX-06182 では実行全体の合計数が示されます。メッセージ PWX-06181 および PWX-06182 では、ログ位置がゼロとしてレポートされます。ECCR が、データベースログファイルからではなく、Datacom CDC テーブルから変更を読み取るためです。

STATISTICS コマンドに *minutes* を追加した場合（例えば、F *eccr_task_name*,STATISTICS 2）、以下のメッセージが出力されます。

```
PWX-07809 Statistics interval. New interval command accepted
PWX-07810 Statistics interval subtask, collection interval updated to 2 minute(s)
PWX-06181 Interval 12/05/17 15:48:14 I=0000000000001 D=0000000000000 U=0000000000000 C=0000000000001 Log=00/01/01
00:00:00.00
PWX-06181 Interval 12/05/17 15:50:14 I=0000000000000 D=0000000000001 U=0000000000002 C=0000000000003 Log=00/01/01
00:00:00.00
```

使用上の注意

- STATISTICS *minutes* コマンドを指定して統計がレポートされる間隔を変更する前に、RUNLIB(ECCRD CMP)メンバで CAPT_STATS=Y を指定するか、STATISTICS ON コマンドを発行する必要があります。
- STATISTICS *minutes* コマンドで指定した間隔により、CAPT_STATS_INTVL パラメータで指定したすべての間隔が上書きされます。メッセージ PWX-07809 の出力で、STATISTICS コマンドによって設定された新しい間隔がレポートされます。
- 間隔の値に 0 を指定することはできません。コマンド STATISTICS 0 を入力すると、エラーメッセージ PWX-07808 が発行されます。RUNLIB(ECCRD CMP)メンバで CAPT_STATS_INTVL パラメータを 0 に設定すると、エラーメッセージ PWX-00967 が発行されます。
- RUNLIB(ECCRD CMP)メンバで CAPT_STATS_TERSE パラメータを N に設定し、STATISTICS SINCE TERSE を実行すると、TERSE オプションによって SINCE 期間の CAPT_STATS_TERSE 設定が上書きされます。

STATUS コマンド

変更ストリームでの Datacom テーブルベース ECCR の処理の現在のステータスを示すメッセージを SYSPRINT 出力ファイルに出力します。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
F eccr_task_name,STATUS
```

eccr_task_name 変数は、Datacom テーブルベース ECCR の開始済みタスクまたはジョブの名前です。

出力例

コマンドは以下のメッセージを出力します。

```
PWX-07812 Latest time processed timestamp Records processed number (eccr_type)
PWX-07813 eccr_type, Reader Task point_in_processing captured data timestamp
PWX-07814 eccr_type, Reader Task point_in_processing records processed number_of_records
```

TRACEOFF コマンド

Datacom テーブルベース ECCR に対して、特定のトレースまたはすべてのアクティブなトレースを無効にします。このコマンドは、Informatica グローバルカスタマサポートの指示の下でのみ使用してください。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
F eccr_task_name,TRACEOFF [trace_id]
```

eccr_task_name 変数は、Datacom テーブルベース ECCR の開始済みタスクまたはジョブの名前です。

オプションの *trace_id* パラメータは、特定のトレースの識別子です。特定のトレースを無効にするにはこのパラメータを含め、アクティブなトレースをすべて無効にするにはこのパラメータを省略します。

出力例

trace_id パラメータを含めるかどうかによって、以下のいずれかのメッセージが DTLLOG ファイルに書き込まれます。

PWX-07800 Tracing turned off

PWX-07801 Trace *trace_id* has been turned off

TRACEON コマンド

Datacom テーブルベース ECCR に対して、特定のフィルタ条件および特定のトレースレベルのトレースを有効にします。トレース情報は、Datacom ECCR イベントの履歴を示し、問題の診断に役立ちます。

このコマンドは、Informatica グローバルカスタマサポートの指示の下でのみ使用してください。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
F eccr_task_name,TRACEON trace_filter,trace_level
```

説明:

- *eccr_task_name* は、Datacom テーブルベース ECCR の開始済みタスクまたはジョブの名前です。
- *trace_filter* および *trace_level* は、Informatica グローバルカスタマサポートが提供する値です。

出力例

コマンドの実行に成功すると、以下のメッセージが DTLLOG ファイルに書き込まれます。

PWX-07998 Trace *trace_id* level *trace_level* turned on

有効なトレースフィルタ条件も有効なトレースレベルも指定せずにこのコマンドを発行すると、以下のメッセージが発行されます。

PWX-07282 TRACEON should have a trace filter and a level as arguments

トレーススロットを使用できない場合には、以下のメッセージが発行されます。

PWX-07999 No space for an additional trace

第 6 章

DB2 for z/OS ECCR のコマンド

この章では、以下の項目について説明します。

- [DB2 for z/OS ECCR のコマンドの概要, 38 ページ](#)
- [DB2 for z/OS ECCR の起動, 39 ページ](#)
- [DB2 for z/OS ECCR の停止, 39 ページ](#)
- [DISPLAY コマンド, 40 ページ](#)
- [QUIESCE コマンド, 43 ページ](#)
- [REFRESH コマンド, 44 ページ](#)
- [TERM コマンド, 45 ページ](#)
- [TRACT コマンド, 45 ページ](#)
- [TR INACT コマンド, 46 ページ](#)
- [URID コマンド, 46 ページ](#)

DB2 for z/OS ECCR のコマンドの概要

DB2 for z/OS ECCR のコマンドを使用して、MVS システムで以下のタスクを実行します。

- DB2 ECCR 処理アクティビティについての統計の表示
- すべての未処理 UOW の完了後の、DB2 ECCR の制御されたシャットダウンの実行
- RUNLIB ライブラリの REPDB2OP メンバ (ECCR JCL の REPL2OPT DD によって割り当てられます) のキャプチャ登録または ECCR 制御文の更新後の DB2 ECCR のリフレッシュ。
- DB2 ログ内の現在の処理位置に基づいて DB2 ECCR によって検出された、未処理の DB2 リカバリ単位 (UR) の表示
- 未処理の DB2 UR のコミット

DB2 for z/OS ECCR のコマンドを発行するには、MVS MODIFY (F) コマンドを使用します。各コマンドには、ECCR 開始タスク名またはジョブ名、およびその後にカンマ (,) を指定する必要があります。構文では、この名前は *task_name* で示されています。コマンドは、MVS オペレータコンソール、または SDSF などのインタフェースから発行できます。

ECCR を起動および停止するコマンドは、標準の MVS START および STOP コマンドです。

DB2 for z/OS ECCR の起動

通常、DB2 ECCR は、開始タスクとして実行されます。ただし、必要に応じて、DB2 ECCR をバッチジョブの一部として実行することもできます。DB2 ECCR PROC の JCL が、SAMPLIB ライブラリの ECCRDB2 メンバに用意されています。

標準の MVS START (S) コマンドを使用して、停止している DB2 ECCR 開始タスクをリスタートします。

構文

以下の構文を使用します。MVS START コマンドの場合:

```
{START|S} task_name
```

task_name 変数は、DB2 for z/OS ECCR 開始タスク名です。

使用上の注意

コマンドを使用する前に、以下の注意事項を確認してください。

- DB2 ECCR を開始するには、START コマンドを発行する MVS イメージ上で、DB2 サブシステムが実行されている必要があります。
- DB2 ECCR を実行するには、適切な権限が必要です。
詳細については、『*PowerExchange CDC ガイド (z/OS 用)*』を参照します。
- RUNLIB ライブラリの REPDB2OP メンバの START 文で、WARM スタート、COLD スタート、または特殊な STARTLOC スタートのいずれを実行するかが制御されます。最初に DB2 ECCR を開始するときは、COLD スタートを実行する必要があります。その後 DB2 ECCR をリスタートする場合は、通常、WARM スタートをお勧めします。
- DB2 for z/OS ECCR の停止

DB2 for z/OS ECCR の停止

実行中の UOW がまだ存在している場合でも DB2 for z/OS ECCR を直ちに停止するには、標準の MVS STOP (P) コマンドを使用します。不完全な UOW が PowerExchange ロガーのログに記録されている場合、PowerExchange では、DB2 ECCR をリスタートするまでこれらの記録を抽出できません。

ヒント: MVS STOP コマンドの代わりに QUIESCE コマンドを使用すると、変更データキャプチャのリスタートが速くなります。QUIESCE コマンドは、ECCR が DB2 休止ポイントに到達し、実行中の UOW が存在しなくなるまで待機してから、ECCR を停止します。長時間実行されているバッチジョブに関する変更を ECCR がキャプチャした場合など、何らかの理由によって QUIESCE コマンドで ECCR を停止できなかった場合は、MVS STOP コマンドを使用できます。

構文

以下の構文を使用します。

```
{STOP|P} task_name
```

task_name 変数は、DB2 for z/OS ECCR 開始タスク名またはジョブ名です。

関連項目：

- [「QUIESCE コマンド」 \(ページ 43\)](#)

DISPLAY コマンド

DB2 for z/OS ECCR アクティビティの統計を EDMMSG データセットに出力します。また、ECCR サマリ統計を JES ジョブログおよび MVS ハードコピーログに出力します。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
DISPLAY[,SQ][,ST][,ALL]
```

または、以下の短い構文を使用します。

```
DI[,SQ][,ST][,ALL]
```

パラメータはすべてオプションです。DISPLAY または DI コマンドでは、パラメータなし、1 つのパラメータ、複数のパラメータ、またはすべてのパラメータを指定できます。パラメータを指定せずに DISPLAY コマンドを指定すると、デフォルトでは、REPL2OPT DD データセットの STAT 文の LEV パラメータ設定が使用されます。LEV パラメータのデフォルトは ST です。

ECCR DISPLAY コマンドを発行するには、ECCR の開始済みタスクまたはジョブ名を指定した MVS MODIFY または F コマンドを使用します。

パラメータ説明

SQ

メッセージ PWXEDM177085I の SQ Display 統計レポートと、メッセージ PWXEDM177084I のサマリ統計を EDMMSG データセットに出力します。また、PWXEDM177084I のサマリ統計を JES ログおよび MVS ハードコピーログに、WTO メッセージとして出力します。

SQ Display レポートには、ECCR が開始されてから各ソーステーブルについて ECCR が PowerExchange ロガー（z/OS 用）に送信した変更レコードの数がテーブルとレコードタイプ別に表示されます。このカウントは、SQL INSERT、UPDATE、および DELETE 操作ではなく、ログアクティビティを示す低レベルタイプのデータベース操作を対象にしています。デフォルトでは、少なくとも 1 つのカウントの値がゼロ以外のテーブルに対してのみ SQ 統計が出力されます。ECCR が変更をキャプチャするすべてのテーブルのカウント（これらのカウントがすべてゼロまたは NULL 値であるテーブルを含む）を表示するには、DISPLAY,SQ,ALL コマンドを発行します。

ST

メッセージ PWXEDM177085I の ST Display 統計レポートと、メッセージ PWXEDM177084I のサマリ統計を EDMMSG データセットに出力します。また、PWXEDM177084I のサマリ統計を JES ログおよび MVS ハードコピーログに、WTO メッセージとして出力します。

ST Display レポートには、ECCR が開始されてからおよび現在の統計レポート間隔中に ECCR が DB2 ログから読み取った変更レコードの合計数が表示されます。また、現在の統計レポート間隔の期間中に ECCR がキャプチャした毎秒平均の変更数も含まれています。デフォルトでは、MSG_TOT フィールドの値がゼロ以外のテーブルに対してのみ ST 統計が出力されます。すべてのソーステーブル（MSG_TOT 値がゼロまたは NULL のソーステーブルを含む）についてこれらの統計を出力するには、DISPLAY,ST,ALL コマンドを発行します。

ALL

すべてのソーステーブル（すべての SQ カウントがゼロまたは NULL であるか、ST MSG_TOT フィールドがゼロまたは NULL のテーブルも含む）についてメッセージ PWXEDM177085I の SQ または ST 統計を出力します。ALL パラメータを省略すると、ECCR は、ECCR が DB2 ログから少なくとも 1 つの変更レコードを読み取った、または少なくとも 1 つのレコードを PowerExchange ロggerに送信したソーステーブルについてのみ、SQ または ST 統計を出力します。SQ または ST パラメータなしで ALL パラメータを指定すると、ALL パラメータは REPL2OPT 文にある STAT 文の LEV パラメータで指定された統計タイプ（デフォルトは ST）に適用されます。

出力例

ST Display レポート:

次の統計レポートの例は、STAT LEV=ST が使用されているときに、DISPLAY,ST コマンドまたは DISPLAY コマンドに応答して生成されています。

```
PWXEDM177084I ABCDSNB capture statistics at 2017-06-16 19.24.22
DB2 Log Location 00000000000A9B69565A.0000.0000
DB2 Log Timestamp 2017-06-16 19.22.47
Current Delay=      1.59 sec   Average Delay=      1.60 sec
                  REC_TOT    RECS/INTV RECS/SEC
DB2 log records      209        209      -
EDM records          8         8        -
PWXEDM177085I ST Display
      MSG_TOT    MSG/INTV MSG/PSEC  TABLE_NAME
          5         5      -  ABCNKL1.TSTP1
          1         1      -  ABCNKL1.P707951D
          2         2      -  ABCNKL1.P707951A
```

PWXEDM177085I の ST Display レポートには、ECCR が、MSG_TOT フィールドの値がゼロ以外の数値である各ソーステーブルについて DB2 ログから読み取った変更レコードの数が表示されます。すべてのソーステーブル（MSG_TOT 値が 0 または NULL のソーステーブルを含む）についてこれらの統計を表示する場合は、コマンドに ALL パラメータを含めます。

次の統計レポートの例は、DISPLAY,ST,ALL コマンドに応答して生成されています。

```
PWXEDM177084I ABCDSNB capture statistics at 2017-06-16 19.24.22
DB2 Log Location 00000000000A9B69565A.0000.0000
DB2 Log Timestamp 2017-06-16 19.22.47
Current Delay=      1.59 sec   Average Delay=      1.60 sec
                  REC_TOT    RECS/INTV RECS/SEC
DB2 log records      209        209      -
EDM records          8         8        -
PWXEDM177085I ST Display
      MSG_TOT    MSG/INTV MSG/PSEC  TABLE_NAME
          5         5      -  ABCNKL1.TSTP1
          -         -      -  ABCNKL1.TSTP2
          -         -      -  ABCNKL1.TSTP3
          1         1      -  ABCNKL1.P707951D
          2         2      -  ABCNKL1.P707951A
```

注: 整数のオーバーフロー条件を持つ数値は、*, ***, **, *** のようにアスタリスクで表示されます。0 または NULL 値は、ハイフン (-) で示されます。

次の表で、PWXEDM177084I サマリ統計と PWXEDM177085I ST Display 統計のフィールドについて説明します。

レポートフィールド	説明
DB2 Log Location	PWXEDM177084I 統計に、DB2 ログ内の ECCR 処理の現在の場所を示す RBA が表示されます。
DB2 Log Timestamp	PWXEDM177084I 統計に、ECCR が読み取った最後の DB2 ログレコードのタイムスタンプが表示されます。このタイムスタンプには、DB2 ログにレコードが書き込まれた日付と時刻が反映されます。
Current Delay	PWXEDM177084I 統計に、最後の変更レコードの遅延時間が秒単位で表示されます。この遅延は、変更レコードが DB2 ログに書き込まれてから ECCR がレコードを読み取るまでの時間です。
Average Delay	PWXEDM177084I 統計に、統計レポートの期間中に変更レコードを処理する際の平均遅延が秒単位で表示されます。この遅延は、変更レコードが DB2 ログに書き込まれてから ECCR がレコードを読み取るまでの時間です。
REC_TOT	PWXEDM177084I 統計に、ECCR が開始されてから ECCR が読み取った DB2 ログレコードの合計数と EDM レコードの合計数が表示されます。
REC/INTV	PWXEDM177084I 統計に、最後の統計レポート間隔後に ECCR が読み取った DB2 ログレコードの数と EDM レコードの数が表示されます。レポート間隔は、REPL2OPT データセットにある STAT 文の SEC パラメータで指定します。
REC/PSEC	PWXEDM177084I 統計に、現在の統計レポート間隔中に ECCR が読み取った 1 秒あたりの DB2 ログレコードの平均数と EDM レコードの平均数が表示されます。
MSG_TOT	PWXEDM177085I ST Display レポートに、ECCR が開始されてから各テーブルで DB2 ECCR がキャプチャした変更の合計数が表示されます。このカウントにはバックアウトレコードが含まれます。
MSG/INTV	PWXEDM177085I ST Display レポートに、最後の統計レポート間隔以降に DB2 ECCR が各テーブルでキャプチャした変更の合計数が表示されます。このカウントにはバックアウトレコードが含まれます。
MSG/PSEC	PWXEDM177085I ST Display レポートに、現在の統計レポート間隔中に ECCR が各テーブルで 1 秒あたりにキャプチャした変更の平均数が表示されます。この平均にはバックアウトレコードが含まれます。
TABLE_NAME	PWXEDM177085I ST Display レポートに、MSG_TOT、MSG_INTV、および MSG_PSEC 統計のレポート対象のソーステーブル名が表示されます。

ST タイプのアクティビティが発生していない場合は、PWXEDM177085I メッセージの代わりに、DISPLAY,ST コマンドに応答して次のメッセージが発行されます。

PWXEDM177086I No ST activity

SQ Display レポート:

次の統計レポート例は、REPL2OPT データセットで STAT LEV=SQ が指定されている場合に、DISPLAY,SQ コマンド、または DISPLAY コマンドに응答して生成されています。

```
PWXEDM177084I ABCDSNB capture statistics at 2017-06-16 19.24.22
DB2 Log Location 00000000000A9B69565A.0000.0000
DB2 Log Timestamp 2017-06-16 19.22.47
Current Delay=      1.59 sec      Average Delay=      1.60 sec
                REC_TOT      RECS/INTV RECS/SEC
```

DB2 log records	209	209	-
EDM records	8	8	-
PWXEDM177085I SQ Display			
INSERTs	UPDATES	DELETES	TABLE_NAME
3	-	2	ABCNKL1.TSTP1
1	-	-	ABCNKL1.P707951D
1	1	-	ABCNKL1.P707951A

PWXEDM177085I の SQ Display レポートには、ECCR が開始されてから PowerExchange ロgger（z/OS 用）に ECCR が送信したレコードの数が、テーブルとレコードタイプ別に表示されます。これらの数は、SQL INSERT、UPDATE、および DELETE 操作ではなく、ログアクティビティを示す低レベルタイプのデータベース操作に対する値です。

少なくとも 1 つのカウントの数値を含むテーブルのみが表示されます。ECCR が変更をキャプチャするすべてのテーブルのカウント（これらのカウントがすべてゼロ値であるテーブルを含む）を表示するには、DISPLAY,SQ,ALL コマンドを発行します。

注: 整数のオーバーフロー条件を持つ数値は、*,**,**,**のようアスタリスクで表示されます。ゼロはハイフン (-) で示されます。

次の表で、PWXEDM177085I の SQ Display レポートのフィールドについて説明します。

レポートフィールド	説明
INSERTs	ECCR が開始されてから、ソーステーブルについて ECCR が PowerExchange ロgger（z/OS 用）に送信した「挿入」タイプのレコードの数が表示されます。カウントは、SQL の挿入操作ではなく、低レベルの「挿入」タイプのデータベース操作が対象です。
UPDATES	ECCR が開始されてから、ソーステーブルについて ECCR が PowerExchange ロgger（z/OS 用）に送信した「更新」タイプのレコードの数が表示されます。カウントは、SQL の更新操作ではなく、低レベルの「更新」タイプのデータベース操作が対象です。
DELETES	ECCR が開始されてから、ソーステーブルについて ECCR が PowerExchange ロgger（z/OS 用）に送信した「削除」タイプのレコードの数が表示されます。カウントは、SQL の削除操作ではなく、低レベルの「削除」タイプのデータベース操作が対象です。
TABLE_NAME	INSERTs、UPDATES、および DELETES が報告されるソーステーブルの名前が表示されます。

SQ タイプのアクティビティが発生していない場合は、PWXEDM177085I メッセージの代わりに、DISPLAY,SQ コマンドに回答して次のメッセージが発行されます。

PWXEDM177086I No SQ activity

QUIESCE コマンド

ECCR が DB2 ログ内において、実行中の UOW が存在しないポイントに到達した後に、DB2 for z/OS ECCR を停止します。

QUIESCE コマンドは、新しい DB2 バージョンに移行する場合や、PowerExchange をアップグレードする場合など、必要なコールドスタートを実行する前に使用してください。ビジー状態の DB2 サブシステムでは、処理を休止するのに時間がかかることがあります。

ECCR を直ちに停止する必要がある場合は、MVS STOP コマンドを使用します。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

QUIESCE

または、以下の短い構文を使用します。

QU

ECCR QUIESCE コマンドを発行するには、ECCR の開始済みタスクまたはジョブを指定した MVS MODIFY または F コマンドを使用します。

関連項目：

- [「DB2 for z/OS ECCR の停止」 \(ページ 39\)](#)

REFRESH コマンド

RUNLIB ライブラリの REPDB2OP メンバの制御文を更新した後、または DB2 ソーステーブルのキャプチャ登録を追加、編集、削除した後に、DB2 for z/OS ECCR をリフレッシュします。

リフレッシュ操作によって、変更データキャプチャの新しい DB2 ECCR オプションおよび登録変更がアクティブ化されます。DB2 ECCR は、アクティブな間のみリフレッシュできます。

注: REPDB2OP メンバは、DB2 ECCR JCL の REPL2OPT DD によって割り当てられるメンバです。

このコマンドの機能は、DB2 ECCR を停止してから、START WARM 文でリスタートするのと同じです。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

REFRESH

または、以下の短い構文を使用します。

RE

ECCR REFRESH コマンドを発行するには、ECCR の開始済みタスクまたはジョブ名を指定した MVS MODIFY または F コマンドを使用します。

使用上の注意

コマンドを使用する前に、以下の注意事項を確認してください。

- キャプチャ登録を追加または変更した後、および RUNLIB ライブラリの REPDB2OP メンバの DB2、IFI306OPT、または START 以外の制御文を編集した後は、REFRESH コマンドを発行する必要があります。REFRESH コマンドを発行しないと、変更は無視されます。
- REFRESH コマンドでは、REPL2CTL ファイルの CA NAME 文への変更は無視されます。

TERM コマンド

DB2 データソースの未処理の DB2 リカバリ単位 (UR) をコミットします。このコマンドは、Informatica グローバルカスタマサポートの指示の下でのみ使用してください。

ヒント: コミットする UR のリカバリ単位識別子 (URID) を取得するには、最初に URID コマンドを実行します。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

TERM, *urid*

このコマンドでは、*urid* は、コミットする UR のリカバリ単位識別子です。

DB2 ECCR TERM コマンドを発行するには、ECCR の開始済みタスクまたはジョブ名を指定した MVS MODIFY または F コマンドを使用します。

関連項目：

- [「URID コマンド」 \(ページ 46\)](#)

TRACT コマンド

DB2 for z/OS ECCR の特定のトレースを有効にします。このコマンドは、Informatica グローバルカスタマサポートの指示の下でのみ使用してください。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

TRACT, *trace_id*[,1], *level_number*

このコマンドで、*trace_id* はトレースタイプ識別子です。*trace_id* の後にオプションで指定する数は、トレースレベルです。有効なレベル値は、1~9 です。デフォルト値は 1 です。Informatica グローバルカスタマサポートが *trace_id* および *trace_level* 値を提供します。

TRACT コマンドを発行するには、ECCR の開始済みタスクまたはジョブ名を指定した MVS MODIFY または F コマンドを使用します。たとえば、次のコマンドはどちらも、トレースレベル 1 を使用する CAPDIR トレースをアクティブ化します。

F *eccr_task_name*, TRACT, CAPDIR

F *eccr_task_name*, TRACT, CAPDIR, 1

次のコマンドは、トレースレベル 5 を使用する CAPDIR トレースをアクティブ化します。

F *eccr_task_name*, TRACT, CAPDIR, 5

TR INACT コマンド

DB2 for z/OS ECCR に対してアクティブ化したトレースを無効化します。このコマンドは、Informatica グローバルカスタマサポートの指示の下でのみ使用してください。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
TR INACT, trace_id
```

このコマンドでは、*trace_id* は、Informatica グローバルカスタマサポートによって提供されるトレースタイプ識別子です。

ECCR TR INACT コマンドを発行するには、ECCR の開始済みタスクまたはジョブ名を指定した MVS MODIFY または F コマンドを使用します。たとえば、次のコマンドは CAPDIR トレースを無効にします。

```
F eccr_task_name, TR INACT, CAPDIR
```

URID コマンド

DB2 for z/OS ECCR が実行している DB2 サブシステムまたはデータ共有グループの DB2 URID を一覧表示します。アクティブな UR の URID のみがレポートされます。

注: DB2 UR は、キャプチャされている場合は、PowerExchange ロggerの未処理の UOW である可能性もあります。

このコマンドを使用して、失敗した QUIESCE 操作や、終了しない永続的 UOW などの問題を診断します。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
URID
```

ECCR URID コマンドを発行するには、ECCR の開始済みタスクまたはジョブ名を指定した MVS MODIFY または F コマンドを使用します。

出力

このコマンドは以下のメッセージを生成します。

```
PWXEDM177438I urid status last activity at last_log_position is activity_type
```

メッセージの説明

- *urid* は、UR 用の DB2 のリカバリ単位 ID (URID) です。
- *status* は次のいずれかの値になります。
 - ABORT。UOW は強制終了され、キャプチャできる変更データがありません。
 - OPEN。キャプチャできる変更データがありますが、開始 UOW レコードは受け取っていません。
 - POTENTIAL。開始 UOW は受け取っていますが、キャプチャできる変更データはまだありません。
 - ROLLBACK。UOW はロールバックされましたが、キャプチャできる変更データがありません。
 - TRANSMIT。DB2 ECCR は、この UOW に対する変更データを PowerExchange ロgger (z/OS 用) に送信しています。

- UNRESOLVED。DB2 ECCR 実行中に *urid* 値がないことが検出されました。ECCR により、指定された UOW の PENDING の URID 値が記録されます。UOW が未処理の場合、PowerExchange でメッセージ PWXEDM177440W が発行されます。この状態が発生する可能性があるのは、DB2 ECCR の前の実行がシャットダウンされるときに実行中の作業単位が存在する場合です。通常は QUIESCE が使用されていません。
- *last_log_position* は、この UOW に対して処理された最後のレコードの RBA または LRSN です。
- *activity_type* は次のいずれかの値になります。
 - Begin UOW
 - End UOW
 - Data
 - Abort UOW
 - Begin Phase1
 - End Phase1
 - Begin Phase2
 - Phase 1/2 Tran
 - End Todo

関連項目：

- [「TERM コマンド」 \(ページ 45\)](#)

第 7 章

IDMS ログベース ECCR のコマンド

この章では、以下の項目について説明します。

- [IDMS ログベース ECCR のコマンドの概要, 48 ページ](#)
- [IDMS ログベース ECCR の起動, 49 ページ](#)
- [CLOSE コマンド, 49 ページ](#)
- [DISPLAY TRACE コマンド, 49 ページ](#)
- [READ コマンド, 50 ページ](#)
- [REFRESH コマンド, 50 ページ](#)
- [STATISTICS コマンド, 51 ページ](#)
- [STATUS コマンド, 53 ページ](#)
- [TRACEOFF コマンド, 54 ページ](#)
- [TRACEON コマンド, 54 ページ](#)

IDMS ログベース ECCR のコマンドの概要

IDMS ログベース ECCR の停止、ログにおける変更キャプチャ処理のステータスの表示、種類別のキャプチャされた変更に関する統計メッセージの出力、またはトレースの制御を行うには、IDMS ログベース ECCR のコマンドを使用します。

トレースコマンドは、Informatica グローバルカスタマサポートから指示があった場合にのみ使用します。

コマンドは、MVS オペレータコンソール、または SDSF などのインタフェースから発行します。PowerExchange ECCR のコマンドを発行するには、MVS MODIFY (F)コマンドを使用します。コマンドには、ECCR の開始済みタスク名またはジョブ名を含める必要があります。

また、`pwxcmd displaystats` コマンドを使用して監視統計を生成することもできます。詳細については、[「pwxcmd displaystats コマンド」 \(ページ 187\)](#)を参照してください。

IDMS ログベース ECCR の起動

IDMS ログベース ECCR は、開始済みタスクまたはバッチジョブとして実行できます。通常、ECCR は開始済みタスクとして実行します。IDMS キャプチャ登録を作成または変更するときは必ず、ECCR を再起動してこれらの登録を有効にする必要があります。

ECCR を初めて起動する前に、RUNLIB の ECCRIDLP メンバで IDMS ECCR オプションを設定します。

構文

IDMS ECCR を開始済みタスクとして起動するには、MVS START (S)コマンドを使用します。

```
S eccr_task_name
```

eccr_task_name 変数は、ECCR の開始済みタスク名です。

CLOSE コマンド

IDMS ログベース ECCR を停止します。ECCR を再起動すると、停止したときの位置からログの読み込みが再開されます。変更データが失われることはありません。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
F eccr_task_name,{CLOSE|CLOS}
```

eccr_task_name 変数は、IDMS ログベース ECCR の開始済みタスクまたはジョブの名前です。

DISPLAY TRACE コマンド

IDMS ログベース ECCR に対してアクティブなトレース件数、およびそのトレースレベルとフィルタ条件を表示します。このコマンドは、Informatica グローバルカスタマサポートの指示の下でのみ使用してください。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
F eccr_task_name,{DISPLAY TRACE|DISP TRAC}
```

eccr_task_name 変数は、IDMS ログベース ECCR のジョブまたは開始済みタスクの名前です。

出力例

以下の出力例は、2 つのトレースがアクティブであり、そのトレースレベルが-1 でフィルタ条件が指定されている場合に、DISPLAY TRACE コマンドから出力された結果です。

```
PWX-07994 Tracing is on
PWX-07996 Number of traces is 2
PWX-07997 Trace level=-1 filter=IMTCOLL,0,99
PWX-07997 Trace level=-1 filter=IMTCOLX,0,99
```

関連項目：

- [「TRACEOFF コマンド」 \(ページ 54\)](#)
- [「TRACEON コマンド」 \(ページ 54\)](#)

READ コマンド

変更を読み取る、別の IDMS ログベース ECCR サイクルを開始します。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
F eccr_task_name,READ
```

eccr_task_name 変数は、IDMS ログベース ECCR の開始済みタスクまたはジョブの名前です。

REFRESH コマンド

IDMS レコードのリストを、IDMS ログベース ECCR が変更データのキャプチャに使用するアクティブなキャプチャ登録で更新します。

以下の状況でこのコマンドを発行し、ECCR をシャットダウンせずに登録ソースのリストを更新します。

- キャプチャ登録を追加した後。
- キャプチャ登録を削除した後。
- 登録状況を変更する PWXUCREG ユーティリティコマンドを発行した後、例えば SUSPEND_REGISTRATION や ACTIVATE_REGISTRATION コマンドです。詳細については、『PowerExchange ユーティリティガイド』を参照してください。

このコマンドを使用するには、ECCR JCL の DTLCACFG DD 文が参照する RUNLIB(ECCRIDLP)メンバで REFRESH_ALLOWED=Y を指定する必要があります。

このコマンドを発行すると、ECCR がシャットダウン処理を開始しますが、終了しません。ECCR は登録済みソースのリストを再構築し、特殊なウォームスタートを開始します。コマンドが発行されると、ECCR は、開かれているすべての UOW を、最初に開かれた UOW から再処理します。ECCR は、開いているすべての UOW を現在のログ読み取り位置まで再処理した後、通常の処理を再開します。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
F eccr_task_name,REFRESH
```

eccr_task_name 変数は、IDMS ログベース ECCR のジョブまたは開始済みタスクの名前です。

使用上の注意

- REFRESH 操作で、ECCR は、追加された登録のデータをキャプチャしたり、削除された登録のデータがキャプチャされないようにしたりすることができるよう、開いている UOW をすべて再処理します。
- 追加する登録ごとに、新しいソースに対して変更キャプチャが開始されるポイントを制御できます。REFRESH コマンドを発行する前に、ソースの変更アクティビティを停止し、登録を追加して、ソースとターゲットを同期します。その後、REFRESH コマンドを発行し、ソースの変更アクティビティを再開します。
- 登録を削除する必要がある場合は、削除する前に ECCR で登録に対するすべての変更が処理されていることを確認し、REFRESH コマンドを発行します。
- REFRESH コマンドを発行する前に、削除する登録ごとに、実行中の変更がすべてキャプチャされていることと、抽出処理が IDMS ログの現在の ECCR の位置まで完了していることを確認します。

STATISTICS コマンド

IDMS ログベース ECCR によってキャプチャされた変更に関する統計メッセージを出力します。このメッセージは、DTLLOG および DTLOUT データセットに出力されます。

このコマンドは、指定したコマンドパラメータに応じて、ECCR の開始以降の特定の間隔の終了時に、STATISTICS コマンドの最後の実行以降に、または ECCR が IDMS ログの処理を終了したときに、キャプチャ統計を出力できます。ECCR では、その実行が終了するたびにキャプチャ統計が出力されます。

重要: ECCR が IDMS ログごとに統計をレポートする場合は、RUNLIB(ECCRIDLP)メンバに CAPT_STATS=Y パラメータを追加するか、ECCR の開始後に STATISTICS ON コマンドを指定する必要があります。

構文

ECCR の実行開始以降にキャプチャされた変更の合計数をレポートする、メッセージ PWX-06182 を出力するには、以下のコマンド構文を使用します。

```
F eccr_task_name,STATISTICS
```

キャプチャされた変更の合計数を指定された間隔でレポートする、メッセージ PWX-06181 を出力する間隔を指定するには、以下のコマンド構文を使用します。

```
F eccr_task_name,STATISTICS minutes
```

STATISTICS コマンド最後の実行以降に、登録済みソースごとに PWX-06153 の統計メッセージを出力するには、以下のコマンド構文を使用します。

```
F eccr_task_name,STATISTICS SINCE [TERSE]
```

ECCR が IDMS ログの処理を終了するたびに PWX-06153 の統計メッセージが出力されるかどうかを制御するには、以下のコマンド構文を使用します。

```
F eccr_task_name,STATISTICS {OFF|ON}
```

これらのすべてのコマンドで、*eccr_task_name*が必要です。この変数は、IDMS ログベース ECCR の開始済みタスクまたはバッチジョブの名前を表します。

同じコマンドで、*minutes*と SINCE など、複数のパラメータを指定しないでください。

パラメータの説明

以下のパラメータは、STATISTICS コマンドのオプションです。

minutes

ECCR が統計を収集し、メッセージ PWX-06181 を出力する間隔を定義します。このメッセージでは、その間にログからキャプチャされた挿入、削除、更新、およびコミットの数レポートされます。このメッセージでは、変更がキャプチャされたログの位置もレポートされます。60 分ごとなど、特定の頻度で統計を出力するには、この位置パラメータを使用します。この分数により、ECCR の実行期間に対する CAPT_STATS_INTVL パラメータ値が上書きされます。有効な値は 1~1440 です。デフォルトは指定されていません。

OFF

IDMS ログが閉じられているときに、メッセージ PWX-06153 を出力しません。ただし、ECCR の実行終了時にはメッセージ PWX-06153 は引き続き出力され、後続の STATISTICS *minutes* または STATISTICS SINCE コマンドでは出力されます。STATISTICS OFF コマンドは、ECCR コンフィギュレーションメンバの CAPT_STATS=N パラメータに似ています。このコマンドが発行されると、ECCR はメッセージ PWX-07804 を出力し、統計レポートがオフになっていることを示します。

ON

ECCR が IDMS ログの処理を終了して IDMS ログを閉じるたびに、メッセージ PWX-06153 を出力します。メッセージ PWX-06153 では、ログによってグループ化された登録済みソースごとに、処理された挿入、

削除、および更新の数がレポートされます。STATISTICS ON コマンドは、ECCR コンフィギュレーションメンバの CAPT_STATS=Y パラメータに似ています。このパラメータを使用すると、ECCR はメッセージ PWX-07803 を出力して、統計レポートがオンになっていることを示します。

SINCE

STATISTICS コマンドの最後の実行以降に、メッセージ PWX-06153 を出力します。メッセージ PWX-06153 では、登録済みソースごとに、この期間中に処理された挿入、削除、更新、およびコミットの数 がレポートされます。メッセージ PWX-06183 および PWX-06184 では、このブロックのメッセージの境界が特定されます。メッセージ PWX-06184 では、この期間のすべてのソースの合計数が示されます。このパラメータを指定してコマンドをスケジュール設定すると、日次や週次など、定期的に統計を出力できます。

SINCE TERSE

STATISTICS コマンドの最後の実行以降に ECCR によってキャプチャされた変更の登録済みソースに対してのみ、メッセージ PWX-06153 を出力します。メッセージ PWX-06183 では、挿入、更新、または削除がコミットされた登録済みソースの数のみが示されます。

出力例

ECCR パラメータ CAPT_STATS_INTVL=10 を指定すると、STATISTICS コマンドの結果として、以下の統計メッセージが出力されます。

```
PWX-07702 IDMS LB CDC, ECCR, Mon May 28 13:57:48.590 2012, Registration read started.
PWX-06118 Registration loaded: DBName: QACLGSIID RegName: stuoflat.1 Creator: stuoss01 Table: abc_STUODENT_FLAT
PWX-06118 Registration loaded: DBName: QACLGSIID RegName: stupflat.1 Creator: stupss01 Table: abc_STUPDENT_FLAT
PWX-06118 Registration loaded: DBName: QACLGSIID RegName: stupf100.1 Creator: stup100 Table: abc_STUPDENT_FLAT
PWX-07703 IDMS LB CDC, ECCR, Mon May 28 13:57:52.699 2012, Registration read completed.
PWX-07991 GLCI did not return any extended Info. Cold Start implied
PWX-07805 Statistics interval subtask started, collection interval 10 minute(s)
PWX-07701 IDMS LB CDC, ECCR, Mon May 28 13:58:12.270 2012, Initialisation completed.
PWX-07813 IDMS LB CDC, Reader Task First-----> captured data 12/03/01 10:53:38.116809.
PWX-07814 IDMS LB CDC, Reader Task First-----> records processed 0000000002.
Closed journal/log after processing.... at 14:07:14:5022 on mon 28/05/2012, blocks = 0000000509, records =
0000022061
IDMS.Q18SP0.JOURNAL.GDG.G0024V00
PWX-06153 stuoflat.1 I=000000000190 D=000000000000 U=000000000000
PWX-06153 stupflat.1 I=000000000204 D=000000000000 U=000000000000
PWX-06153 stupf100.1 I=000000000265 D=000000000000 U=000000000000
Opened journal/log for processing..... at 14:07:15:8995 on mon 28/05/2012
IDMS.Q18SP0.JOURNAL.GDG.G0025V00
Closed journal/log after processing.... at 14:07:27:6910 on mon 28/05/2012, blocks = 0000000507, records =
0000023389
IDMS.Q18SP0.JOURNAL.GDG.G0025V00
PWX-06153 stuoflat.1 I=000000000427 D=000000000000 U=000000000000
PWX-06153 stupflat.1 I=000000000421 D=000000000000 U=000000000000
PWX-06153 stupf100.1 I=000000000429 D=000000000000 U=000000000000
PWX-06181 Interval 12/05/28 14:14:17 I=000000000868 D=000000000000 U=000000000000 C=000000000000 Log=12/03/01
11:08:35.67
PWX-06181 Interval 12/05/28 14:24:17 I=000000000868 D=000000000000 U=000000000000 C=000000000000 Log=12/03/01
11:08:35.67
PWX-07730 IDMS LB CDC, ECCR, Tue May 29 13:00:25.612 2012, No active units of work found at shutdown.
PWX-07967 DTLCCIDL shutting down having read to .....
PWX-07812 Latest time processed 12/03/01 11:08:35.679115
Records processed 002939 (IDMS capture)
PWX-07807 Statistics subtask ended, cycle count = 20
PWX-07813 IDMS LB CDC, Reader Task Shutdown-----> captured data 12/03/01 11:08:35.679115.
PWX-07814 IDMS LB CDC, Reader Task Shutdown-----> records processed 0000300939.
PWX-06153 stuoflat.1 I=000000000617 D=000000000000 U=000000000000
PWX-06153 stupflat.1 I=000000000625 D=000000000000 U=000000000000
PWX-06153 stupf100.1 I=000000000694 D=000000000000 U=000000000000
PWX-06182 Totals 12/05/29 13:00:37 I=000000001936 D=000000000000 U=000000000000 C=000000002047 Log=12/03/01
11:08:35.67
PWX-07971 Collector closing down (IDMS Capture)
```

この例で、メッセージ PWX-06153 では、各 IDMS ログの登録ごとに、挿入、削除、および更新の数が示されます。メッセージ PWX-06181 では 10 分間隔で合計数が示され、メッセージ PWX-06182 では実行全体の合計数が示されます。

STATISTICS コマンドに *minutes* を追加した場合（例えば、F *eccr_task_name*, STATISTICS 2）、以下のメッセージが出力されます。

```
PWX-07809 Statistics interval. New interval command accepted
PWX-07810 Statistics interval subtask, collection interval updated to 2 minute(s)
PWX-06181 Interval 12/05/28 20:41:29 I=000000000000 D=000000000000 U=000000000000 C=000000000000 Log=12/03/01
11:08:35.67
PWX-06181 Interval 12/05/30 00:41:30 I=000000000000 D=000000000000 U=000000000000 C=000000000000 Log=12/03/01
11:08:35.67
```

使用上の注意

- STATISTICS *minutes* コマンドを指定して統計がレポートされる間隔を変更する前に、RUNLIB(ECCRIDLP)メンバで CAPT_STATS=Y を指定するか、STATISTICS ON コマンドを発行する必要があります。
- STATISTICS *minutes* コマンドで指定した間隔により、CAPT_STATS_INTVL パラメータで指定したすべての間隔が上書きされます。メッセージ PWX-07809 の出力で、STATISTICS コマンドによって設定された新しい間隔がレポートされます。
- 間隔の値に 0 を指定することはできません。コマンド STATISTICS 0 を入力すると、エラーメッセージ PWX-07808 が発行されます。RUNLIB(ECCRIDLP)メンバで CAPT_STATS_INTVL パラメータを 0 に設定すると、エラーメッセージ PWX-00967 が発行されます。
- RUNLIB(ECCRIDLP)メンバで CAPT_STATS_TERSE パラメータを N に設定し、STATISTICS SINCE TERSE を実行すると、TERSE オプションによって SINCE 期間の CAPT_STATS_TERSE 設定が上書きされます。

STATUS コマンド

メッセージ PWX-07976 を SYSPRINT 出力ファイルに出力します。このメッセージは、IDMS ログでの IMS ログベース ECCR の処理の現在のステータスを示します。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
F eccr_task_name, STATUS
```

eccr_task_name 変数は、IDMS ログベース ECCR の開始済みタスクまたはジョブの名前です。

出力例

コマンドは以下のメッセージを出力します。

```
PWX-07812 Latest time processed timestamp Records processed number (eccr_type)
PWX-07813 eccr_type, Reader Task point_in_processing captured data timestamp
PWX-07814 eccr_type, Reader Task point_in_processing records processed number_of_records
```

TRACEOFF コマンド

IDMS ログベース ECCR のトレースを無効にします。このコマンドは、Informatica グローバルカスタマサポートの指示の下でのみ使用してください。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
F eccr_task_name,TRACEOFF [trace_id]
```

eccr_task_name 変数は、IDMS ログベース ECCR の開始済みタスクまたはジョブの名前です。

オプションの *trace_id* パラメータは、特定のトレースの識別子です。特定のトレースを無効にするには、このパラメータを使用します。このパラメータを使用しなかった場合、コマンドはアクティブなトレースをすべて無効にします。

出力例

以下のいずれかのメッセージが DTLLOG ファイルに書き込まれます。

```
PWX-07800 Tracing turned off
```

```
PWX-07801 Trace trace_id has been turned off
```

関連項目：

- [「DISPLAY TRACE コマンド」 \(ページ 49\)](#)
- [「TRACEON コマンド」 \(ページ 54\)](#)

TRACEON コマンド

IDMS ログベース ECCR に対して、特定のフィルタ条件および特定のトレースレベルのトレースを有効にします。トレース情報は、IDMS ECCR イベントの履歴を示し、問題の診断に役立ちます。

このコマンドは、Informatica グローバルカスタマサポートの指示の下でのみ使用してください。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
F eccr_task_name,TRACEON trace_filter,level_number
```

説明:

- *eccr_task_name* は、IDMS ログベース ECCR の開始済みタスクまたはジョブの名前です。
- *trace_filter* および *level_number* は、Informatica グローバルカスタマサポートが提供する値です。

出力例

コマンドの実行に成功すると、以下のメッセージが DTLLOG ファイルに書き込まれます。

```
PWX-07998 Trace trace_id level trace_level turned on
```

有効なトレースフィルタ条件も有効なトレースレベルも指定せずにこのコマンドを発行すると、以下のメッセージが発行されます。

```
PWX-07282 TRACEON should have a trace filter and a level as arguments
```

トレーススロットを使用できない場合には、以下のメッセージが発行されます。

```
PWX-07999 No space for an additional trace
```

関連項目：

- [「DISPLAY TRACE コマンド」 \(ページ 49\)](#)
- [「TRACEOFF コマンド」 \(ページ 54\)](#)

第 8 章

IMS 同期 ECCR のコマンド

この章では、以下の項目について説明します。

- [IMS 同期 ECCR のコマンドの概要, 56 ページ](#)
- [IMS 外部サブシステムコマンド, 56 ページ](#)
- [IMS コンソールコマンド, 59 ページ](#)

IMS 同期 ECCR のコマンドの概要

IMS 同期 ECCR コマンドを使用して、EDMSDIR のデフォルトオプションモジュールの CCERR パラメータ値をオーバーライドするか、ECCR の変更データキャプチャアクティビティに関するレポートを生成します。

ECCR は、IMS 外部サブシステムとして機能します。IMS は、DB/DC または DBCTL 領域の開始時に外部サブシステムを起動します。

また、IMS 外部サブシステムへの接続状態を表示するための便利な標準 IMS コマンドも提供されます。

IMS 外部サブシステムコマンド

IMS 外部サブシステムのコマンドを使用して、以下の作業を実行します。

- デフォルトの EDMSDIR オプションモジュールでの CCERR パラメータを一時的にオーバーライドします。通常は、デフォルトの EDMSDIR オプションモジュールで CCERR パラメータは ABORT に設定されています。PowerExchange ロgger が使用できなくなり、問題を迅速に解決できない場合は、このデフォルト設定のオーバーライドが必要になることもあります。この場合は、xEDP-CONTINUE コマンドを発行して、IMS オンライントランザクションを再開します。これで、トランザクションは問題解決中に実行できます。
- IMS ECCR の変更データキャプチャアクティビティに関するレポートを生成します。EDMSG SYSOUT データセット、または IMS 領域のジョブ JESMSG LG ログに対して、レポートを出力できます。このレポートから、PowerExchange が変更をキャプチャしているデータベースを判別できます。EDMSG データセットには、ログ読み取り API が PowerExchange ロgger に接続してキャプチャされた変更データを読み取った後に、ログ読み取り API から送信されたメッセージが含まれます。

IMS コンソールから IMS 外部サブシステムにこれらのコマンドを発行するには、IMS/SSR コマンドを使用します。各コマンドでは、*x*変数を、ECCR の IMS 外部サブシステムを設定するときに指定したコマンド認識文字 (CRC) に置換します。CRC がわからない場合は、DISPLAY SUBSYS コマンドを実行できます。

注: IMS 外部サブシステムコマンドは、PowerExchange が使用するサブシステム定義のコマンド認識文字 (CRC) を提供するために、IMS PROCLIB ライブラリで適切な SSM メンバを編集している場合にのみ発行できます。

xEDP-ABORT コマンド

デフォルトの EDMSDIR オプションモジュールの CCERR 値を ABEND 値でオーバーライドします。

値 ABEND が有効になっているときに、PowerExchange ロggerが終了すると、オンライントランザクション BMP または MPP は、異常終了コード IBM U4094 で擬似的に異常終了します。*擬似的な異常終了*とは、IMS 制御プログラムが、異常状態の原因となったオンライントランザクションに異常終了状態を転送してから、他のメッセージ領域へのサービス提供を続行することです。

プロセスまたはコマンドによって IMS 制御領域が停止するまで、または現在の xEDP_ABORT コマンドより xEDP_CONTINUE コマンドが優先されるまで、値 ABEND は有効になったままです。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
/SSR xEDP-ABORT
```

x変数は、ECCR の IMS 外部サブシステムを設定するときに指定した CRC 値です。

出力例

次の出力例は、以下のコマンドで生成されています。

```
R 93,/SSR xEDP-ABORT.  
DFS058I SSR COMMAND COMPLETED   EDMA  
PWXEDM172889I Action if ECCR error encountered has been set to ABORT
```

このメッセージは、CCERR のオーバーライド値が正常に ABORT に設定されたことを示します。

xEDP-CONTINUE コマンド

デフォルトの EDMSDIR オプションモジュールの CCERR 値を CONTINUE 値でオーバーライドします。

CONTINUE が有効になっているときに、IMS 外部サブシステムまたは PowerExchange ロggerが使用できなくなると、IMS 同期 ECCR は変更データをキャプチャせず、オンライントランザクションは擬似的に異常終了しません。変更データが失われる可能性があります。また、データソースとターゲットが同期しなくなる可能性があります。再同期するには、ターゲットを再実体化する必要があります。

プロセスまたはコマンドによって IMS 制御領域が停止するまで、または現在の xEDP_CONTINUE コマンドより別の/SSR コマンドが優先されるまで、値 CONTINUE は有効になったままです。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
/SSR xEDP-CONTINUE
```

x変数は、ECCR の IMS 外部サブシステムを設定するときに指定した CRC 値です。

出力例

次の出力例は、以下のコマンドで生成されています。

```
R 94,/SSR xEDP-CONTINUE.  
DFS058I SSR COMMAND COMPLETED   EDMA  
PWXEDM172889I Action if ECCR error encountered has been set to CONTINUE
```

このメッセージは、CCERR のオーバーライド値が正常に CONTINUE に設定されたことを示します。

xEDP-STAT コマンド

IMS 同期 ECCR 変更キャプチャアクティビティのステータスレポートを EDMMSG SYSOUT データセットに出力します。このレポートには、IMS ECCR がキャプチャしたレコード挿入、置換、および削除の数が、IMS データベース領域およびセグメント別に表示されます。

注: このレポートを IMS 領域のジョブログに対して出力する場合は、代わりに xEDP-STATWTO コマンドを使用します。xEDP-STAT および xEDP-STATWTO コマンドを実行すると、同じタイプのキャプチャ数が生成されます。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
/SSR xEDP-STAT
```

x変数は、ECCR の IMS 外部サブシステムを設定するときに指定した CRC 値です。

出力例

以下に、コマンドによって生成された出力の例を示します。

```
PWXEDM172853I Change Capture counts for IMS DBD DBLOG50F
      Segment=DB#AASEG  ISRT=0      REPL=0      DLET=0
      Segment=DB#BASEG  ISRT=0      REPL=0      DLET=0
      Segment=DB#CASEG  ISRT=0      REPL=0      DLET=0
      Segment=DB#BBSEG  ISRT=0      REPL=0      DLET=0
```

この出力は、変更データキャプチャに対して、セグメントが 4 つあるデータベースが 1 つ登録されていることを示します。IMS 同期 ECCR では、このデータベースの挿入、置換、削除のいずれもまだキャプチャされていません。

xEDP-STATWTO コマンド

IMS 同期 ECCR 変更キャプチャアクティビティのステータスレポートを IMS 領域の JESMSG LG ログに出力します。このレポートには、ECCR がキャプチャしたレコード挿入、置換、および削除の数が、IMS データベース領域およびセグメント別に表示されます。

注: このレポートを EDMMSG SYSOUT データセットに対して出力する場合は、代わりに xEDP-STAT コマンドを使用します。xEDP-STATWTO および xEDP-STAT コマンドを実行すると、同じタイプのキャプチャ数が生成されます。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
/SSR xEDP-STATWTO
```

x変数は、ECCR の IMS 外部サブシステムを設定するときに指定した CRC 値です。

出力例

次の出力例は、開いているデータベースが CDC に登録されていないときにこのコマンドで生成されました。

```
R 95,/SSR xEDP-STATWTO.
DFS058I SSR COMMAND COMPLETED EDMA
PWXEDM172890W There are no open databases registered for capture
```

一部のデータベースが CDC に登録されている場合、このレポートには、xEDP-STAT コマンド出力と同じ種類のキャプチャ数、つまり、IMS ECCR がキャプチャしたレコード挿入、置換、および削除の数が IMS データベース領域およびセグメント別に示されます。

IMS コンソールコマンド

IMS 外部サブシステムへの接続状態を表示するには、次の IMS コマンドを使用します。このコマンドは、IMS コンソールから発行します。

DISPLAY SUBSYS コマンド

IMS 同期 ECCR の IMS 外部サブシステムへの接続状態を表示します。

ヒント: このコマンドを使用して、サブシステムに対して定義された CRC 値を取得することもできます。/SSR コマンドを使用して IMS 外部サブシステムコマンドを発行するには、CRC 値が必要です。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
/DISPLAY SUBSYS ssid
```

ssid 変数は、IMS 同期 ECCR の IMS 外部サブシステムのサブシステム識別子です。

出力例

次の出力例は、I24A のサブシステム ID を持つ IMS 外部サブシステムに対して、このコマンドで生成された出力です。

```
R 89,/DISPLAY SUBSYS I24A
IEE600I REPLY TO 89 IS:/DISPLAY SUBSYS I24A
DFS000I      SUBSYS  CRC REGID PROGRAM LTERM  STATUS EDMA
DFS000I      I24A    3              CONN  EDMA
```

この出力は、外部サブシステムへの接続がアクティブであること、および CRC 値が 3であることを示しています。

第 9 章

IMS ログベース ECCR のコマンド

この章では、以下の項目について説明します。

- [IMS ログベース ECCR のコマンドの概要, 60 ページ](#)
- [IMS ログベース ECCR の起動, 61 ページ](#)
- [CLOSE コマンド, 61 ページ](#)
- [DISPLAY TRACE コマンド, 61 ページ](#)
- [LIST MPART コマンド, 62 ページ](#)
- [READ コマンド, 63 ページ](#)
- [REFRESH コマンド, 63 ページ](#)
- [STATISTICS コマンド, 64 ページ](#)
- [STATUS コマンド, 67 ページ](#)
- [TRACEOFF コマンド, 67 ページ](#)
- [TRACEON コマンド, 68 ページ](#)

IMS ログベース ECCR のコマンドの概要

IDMS ログベース ECCR の停止、キャプチャされた変更の種類に関する統計メッセージの出力、またはトレースの制御を行うには、IMS ログベース ECCR のコマンドを使用します。

トレースコマンドは、Informatica グローバルカスタマサポートから指示があった場合にのみ使用します。

コマンドは、MVS オペレータコンソール、または SDSF などのインタフェースから発行します。このコマンドを発行するには、MVS MODIFY (F) コマンドを使用します。各コマンドには、ECCR の開始済みタスク名またはジョブ名を含める必要があります。

また、`pwxcmd displaystats` コマンドを使用して監視統計を生成することもできます。詳細については、[「pwxcmd displaystats コマンド」 \(ページ 187\)](#)を参照してください。

IMS ログベース ECCR の起動

IMS ログベース ECCR は、開始済みタスクまたはバッチジョブとして実行できます。キャプチャ登録を作成または変更するときは必ず、ECCR を再起動してこれらの登録を有効にする必要があります。

ECCR を初めて起動する前に、以下のタスクを実行します。

- PowerExchange リスナ、PowerExchange エージェント、および PowerExchange ロガー（z/OS 用）が実行していることを確認します。
- IMS ログベース ECCR JCL を設定する。

構文

IMS ECCR を開始タスクとして起動するには、MVS START（S）コマンドを使用します。

`S eccr_task_name`

IMS ECCR をバッチジョブとして実行するには、設定した JCL をサブミットします。

CLOSE コマンド

管理された方法で、IMS ログベース ECCR を停止します。ECCR を再起動すると、停止したときの位置からログの読み込みが再開されます。変更データが失われることはありません。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

`F eccr_task_name,CLOSE`

`eccr_task_name` 変数は、IMS ログベース ECCR の開始済みタスクまたはバッチジョブの名前を表します。

出力例

クローズ操作が完了すると、PowerExchange では、以下の情報メッセージが発行されます。

PWX-07291 ECCR is shutting down after reading the IMS log to *timestamp*

DISPLAY TRACE コマンド

IMS ログベース ECCR に対してアクティブなトレース件数、およびそのトレースレベルとフィルタ条件を表示します。このコマンドは、Informatica グローバルカスタマサポートの指示の下でのみ使用してください。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

`F eccr_task_name,{DISPLAY TRACE|DISP TRAC}`

`eccr_task_name` 変数は、IMS ログベース ECCR の開始済みタスクまたはバッチジョブの名前を表します。

出力例

2つのトレースがアクティブであり、そのトレースレベルが-1でフィルタ条件が指定されている場合に、以下の例のような出力が生成されました。

```
PWX-07994 Tracing is on
PWX-07996 Number of traces is 2
PWX-07997 Trace level=-1 filter=IMTCOLL,0,99
PWX-07997 Trace level=-1 filter=IMTCOLX,0,99
```

関連項目：

- [「TRACEOFF コマンド」 \(ページ 67\)](#)
- [「TRACEON コマンド」 \(ページ 68\)](#)

LIST MPART コマンド

IMS ログベース ECCR が、読み取られた各レコードの最初のパートと読み取られたパートの合計数に関する情報を使用して処理している、アクティブな IMS マルチパーツレコードを一覧表示します。

注: ECCR は、複数の x'9904' ログレコードにまたがるマルチパーツレコード全体の処理が終了するまでは、PowerExchange ロガー (z/OS 用) に変更データを送信しません。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
F eccr_task_name,LIST MPART
```

eccr_task_name 変数は、IMS ログベース ECCR の開始済みタスクまたはバッチジョブの名前を表します。

出力例

例 1：ECCR が 2 つのマルチパーツレコードの処理の途中である場合、コマンドは次のメッセージを返します。

```
PWX-07856 IMS MPART Records active=2
PWX-07857 1. DSN=ABCDEF1.C2435723.SLDS.D334.T1923172.VC6
PWX-07858 MPART (Rectoken,STCK)=(C9D4E2E440404040042D359E00000000,D54F76B95B944547)
PWX-07859 First part (STCK,LSN)=(D54F76B95B94450A,A6BC9039). Parts read=1
PWX-07857 2. DSN=ABCDEF1.C2435723.SLDS.D338.T1538545.VCF
PWX-07858 MPART (Rectoken,STCK)=(C9D4E2E440404040044F150300000000,D55448EFD1237047)
PWX-07859 First part (STCK,LSN)=(D55448EFD1237006,AB5E1CA7). Parts read=1
```

メッセージ PWX-07856 は、ECCR が処理しているマルチパーツレコードの数を示します。

メッセージ PWX-7857、PWX-7858、PWX-7859 は、ECCR が処理中のマルチパーツレコードごとに発行されます。これらは次の情報を提供します。

- PWX-07857 は、マルチパーツレコードのシーケンス番号に続いて、ECCR がレコードの最初のパートを読み取ったログデータセットを示します。
PWX-07858 は、マルチパーツレコードの最初のパートのリカバリトークンおよび STCK (ストアクロック) の値を表示します。
PWX-07859 は、マルチパーツレコードの最初のパートの STCK および LSN の値を報告します。「Parts read」値は、ECCR がこれまで読み取ったレコードのパートの数です。

例 2.ECCR が現在マルチパーツレコードを処理中ではない場合、このコマンドは次の PWX-0756 メッセージのみを返します。

```
PWX-07856 IMS MPART Records active=0
```

READ コマンド

変更を読み取る、別の IMS ログベース ECCR サイクルを開始します。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
F eccr_task_name,READ
```

eccr_task_name 変数は、IMS ログベース ECCR の開始済みタスクまたはジョブの名前です。

REFRESH コマンド

IMS セグメントのリストを、IMS ログベース ECCR が変更データのキャプチャに使用するアクティブなキャプチャ登録で更新します。

以下の状況でこのコマンドを発行し、ECCR をシャットダウンせずに登録ソースのリストを更新します。

- キャプチャ登録を追加した後。
- キャプチャ登録を削除した後。
- 登録状況を変更する PWXUCREG ユーティリティコマンドを発行した後、例えば SUSPEND_REGISTRATION や ACTIVATE_REGISTRATION コマンドです。詳細については、『PowerExchange ユーティリティガイド』を参照してください。

このコマンドを使用するには、ECCR JCL の DTLCACFG DD 文が参照する RUNLIB(CAPTIMS)メンバで REFRESH_ALLOWED=Y を指定する必要があります。

このコマンドを発行すると、ECCR がシャットダウン処理を開始しますが、終了しません。ECCR は登録済みソースのリストを再構築し、特殊なウォームスタートを開始します。コマンドが発行されると、ECCR は、開かれているすべての UOW を、最初に開かれた UOW から再処理します。ECCR は、開いているすべての UOW を現在のログ読み取り位置まで再処理した後、通常の処理を再開します。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
F eccr_task_name,REFRESH
```

eccr_task_name 変数は、IMS ログベース ECCR のジョブまたは開始済みタスクの名前です。

使用上の注意

- REFRESH 操作で、ECCR は、追加された登録のデータをキャプチャしたり、削除された登録のデータがキャプチャされないようにしたりすることができるよう、開いている UOW をすべて再処理します。
- 追加する登録ごとに、新しいソースに対して変更キャプチャが開始されるポイントを制御できます。REFRESH コマンドを発行する前に、ソースの変更アクティビティを停止し、登録を追加して、ソースとターゲットを同期します。その後、REFRESH コマンドを発行し、ソースの変更アクティビティを再開します。
- REFRESH コマンドを発行する前に、削除する登録ごとに、実行中の変更がすべてキャプチャされていることと、抽出処理が SLDS の現在の ECCR の位置まで完了していることを確認します。

STATISTICS コマンド

IMS ログベース ECCR によってキャプチャされた変更に関する統計メッセージを出力します。このメッセージは、DTLLOG および DTLOUT データセットに出力されます。

IMS ログベース ECCR の STATISTICS コマンドは、DBRC API が使用される ECCR DTLCCIMX プログラムでのみサポートされています。PowerExchange には、IMS 10 以降用の DTLCCIMX プログラムが用意されています。

このコマンドは、指定したコマンドパラメータに応じて、ECCR の開始以降の特定の間隔の終了時に、STATISTICS コマンドの最後の実行以降に、または ECCR が SLDS の処理を終了したときに、キャプチャ統計を出力できます。ECCR では、その実行が終了するたびにキャプチャ統計が出力されます。

重要: ECCR が SLDS ごとに統計を出力する場合は、RUNLIB(CAPTIMS)メンバで CAPT_STATS パラメータを Y に設定するか、ECCR STATISTICS ON コマンドを実行する必要があります。

構文

ECCR の実行開始以降にキャプチャされた変更の合計数をレポートする、メッセージ PWX-06182 を出力するには、以下のコマンド構文を使用します。

```
F eccr_name,STATISTICS
```

キャプチャされた変更の合計数を指定された間隔でレポートする、メッセージ PWX-06181 を出力する間隔を指定するには、以下のコマンド構文を使用します。

```
F eccr_task_name,STATISTICS minutes
```

STATISTICS コマンド最後の実行以降に、登録済みソースごとに PWX-06153 の統計メッセージを出力するには、以下のコマンド構文を使用します。

```
F eccr_task_name,STATISTICS SINCE [TERSE]
```

ECCR が SLDS の処理を終了するたびに PWX-06153 の統計メッセージが出力されるかどうかを制御するには、以下のコマンド構文を使用します。

```
F eccr_task_name,STATISTICS {OFF|ON}
```

これらのすべてのコマンドで、*eccr_task_name* が必要です。この変数は、IMS ログベース ECCR の開始済みタスクまたはバッチジョブの名前を表します。

同じコマンドで、*minutes* と SINCE など、複数のパラメータを指定しないでください。

パラメータの説明

以下のパラメータは、STATISTICS コマンドのオプションです。

minutes

ECCR が統計を収集し、メッセージ PWX-06181 を出力する間隔を定義します。このメッセージでは、その間に SLDS からキャプチャされた挿入、削除、更新、およびコミットの数レポートされます。このメッセージでは、変更がキャプチャされた SLDS の位置もレポートされます。60 分ごとなど、特定の頻度で統計を出力するには、この位置パラメータを使用します。この分数により、ECCR の実行期間に対する CAPT_STATS_INTVL パラメータ値が書き込まれます。有効な値は 1~1440 です。デフォルトは指定されていません。

OFF

SLDS が閉じられているときに、メッセージ PWX-06153 を出力しません。ただし、ECCR の実行終了時にはメッセージ PWX-06153 は引き続き出力され、後続の STATISTICS *minutes* または STATISTICS SINCE コマンドでは出力されます。STATISTICS OFF コマンドは、ECCR コンフィギュレーションメンバの CAPT_STATS=N パラメータに似ています。このコマンドが発行されると、ECCR はメッセージ PWX-07804 を出力し、統計レポートがオフになっていることを示します。

ON

ECCR が SLDS の処理を終了して SLDS を閉じるたびに、メッセージ PWX-06153 を出力します。メッセージ PWX-06153 では、SLDS によってグループ化された登録済みソースごとに、処理された挿入、削除、および更新の数がレポートされます。STATISTICS ON コマンドは、ECCR コンフィギュレーションメンバの CAPT_STATS=Y パラメータに似ています。このパラメータを使用すると、ECCR はメッセージ PWX-07803 を出力して、統計レポートがオンになっていることを示します。

SINCE

STATISTICS コマンドの最後の実行以降に、メッセージ PWX-06153 を出力します。メッセージ PWX-06153 では、登録済みソースごとに、この期間中に処理された挿入、削除、更新、およびコミットの数にレポートされます。メッセージ PWX-06183 および PWX-06184 では、このブロックのメッセージの境界が特定されます。メッセージ PWX-06184 では、この期間のすべてのソースの合計数が示されます。このパラメータを指定してコマンドをスケジュール設定すると、日次や週次など、定期的に統計を出力できます。

SINCE TERSE

STATISTICS コマンドの最後の実行以降に ECCR によってキャプチャされた変更の登録済みソースに対してのみ、メッセージ PWX-06153 を出力します。メッセージ PWX-06183 では、挿入、更新、または削除がコミットされた登録済みソースの数のみが示されます。

出力例

ECCR パラメータ CAPT_STATS_INTVL=1 を指定すると、STATISTICS コマンドの結果として、以下の統計メッセージが出力されます。

```
PWX-06967 ECCR starting at IMS log time 12/04/08 12:00:00.000000 (YY/MM/DD HH:MM:SS.NNNNNN). Record
count=0
PWX-07805 Statistics interval subtask started, collection interval 1
minute(s)
PWX-06118 Registration loaded: DBName: IMSZ RegName: root.1 Creator: IMSDBASE Table: ROOT
PWX-06118 Registration loaded: DBName: IMSZ RegName: xlev2.1 Creator: XMSDBASE Table:
LEV2
PWX-07703 IMS ECCR, ECCR, Fri Apr 13 14:24:40.956 2012, Registration read
completed.
PWX-06940 Batch logs: Initial query with StartTime=<2012099F1309587000000000C> loc=<SPEC>
SSID=<>.
PWX-07261 The IMS ECCR will use offline log IMS123.ABCDEF.IEFRDER.G0024V00
PWX-07262 The IMS ECCR will use offline log data set with start time C963AE40AA3E0000 2012.099
13:09:58.70
PWX-07280 and end time C963AE412F0E0000 2012.099
13:09:59.24.
PWX-07261 The IMS ECCR will use offline log IMS123.ABCDEF.IEFRDER.G0025V00
PWX-07262 The IMS ECCR will use offline log data set with start time C963AE572BF60000 2012.099
13:10:22.30
PWX-07280 and end time C963AE5845F18000 2012.099
13:10:23.45.
PWX-06941 Online logs: Initial query with StartTime=<000000000000000000000000000000> loc=<SPEC> SSID=<IMS1>.
PWX-07272 The IMS ECCR is processing log data set
IMS123.ABCDEF.IEFRDER.G0024V00.
PWX-06152 IMS SLDS File IMS123.ABCDEF.IEFRDER.G0024V00 closed with some records processed. Progress since last
display:
PWX-06153 root.1 IMSDBASE ROOT I=0000000000005 D=0000000000000
U=0000000000000
PWX-06153 xlev2.1 XMSDBASE LEV2 I=0000000000000 D=0000000000000
U=0000000000000
PWX-07272 The IMS ECCR is processing log data set
IMS123.ABCDEF.IEFRDER.G0025V00.
PWX-06152 IMS SLDS File IMS123.ABCDEF.IEFRDER.G0025V00 closed with some records processed. Progress since last display:
PWX-06153 root.1 IMSDBASE ROOT I=0000000000000 D=0000000000001
U=0000000000001
PWX-06153 xlev2.1 XMSDBASE LEV2 I=0000000000001 D=0000000000000
U=0000000000000
PWX-06181 Interval 12/04/13 14:25:35 I=0000000000006 D=0000000000001 U=0000000000001 C=0000000000002 Log=12/04/12
15:15:34.02
PWX-06181 Interval 12/04/13 14:26:35 I=0000000000000 D=0000000000000 U=0000000000000 C=0000000000000 Log=12/04/12
15:15:34.02
PWX-06181 Interval 12/04/13 14:27:35 I=0000000000000 D=0000000000000 U=0000000000000 C=0000000000000 Log=12/04/12
15:15:34.02
PWX-06179 IMS ECCR Run complete. Totals for this
run:
PWX-06153 root.1 IMSDBASE ROOT I=0000000000005 D=0000000000001
U=0000000000001
PWX-06153 xlev2.1 XMSDBASE LEV2 I=0000000000001 D=0000000000000 U=0000000000000
PWX-06182 Totals 12/04/13 14:36:09 I=0000000000006 D=0000000000001 U=0000000000001 C=0000000000008 Log=12/04/12
```

```

15:15:34.02
PWX-07291 ECCR is shutting down after reading the IMS log to 12/04/12
15:15:34.026000
PWX-07807 Statistics subtask ended, cycle count = 3

```

この例で、メッセージ PWX-06153 では、各 SLDS の登録ごとに、および ECCR の実行全体に対する登録ごとに、挿入、削除、および更新の数が表示されます。メッセージ PWX-06181 では 1 分間隔で合計数が示され、メッセージ PWX-06182 では ECCR の実行全体の合計数が示されます。

STATISTICS コマンドに *minutes* を追加した場合（例えば、F *eccr_task_name*,STATISTICS 1）、以下のメッセージが出力されます。

```

PWX-07809 Statistics interval. New interval command accepted
PWX-07810 Statistics interval subtask, collection interval updated to 1 minute(s)
...
PWX-06181 Interval 12/05/22 15:12:35      I=0000000000001 D=000000000000 U=000000000000 C=000000000002
Log=12/05/22 09:26:46.64
PWX-06181 Interval 12/05/22 15:13:35      I=0000000000000 D=000000000000 U=000000000000 C=000000000000
Log=12/05/22 09:26:46.

```

STATISTICS SINCE コマンドを使用して、STATISTICS コマンドの前回実行以降の統計を出力する場合は、以下のメッセージが出力されます。

```

PWX-06183 Sncelast 12/04/13
14:32:35

PWX-06153 root.1      IMSDBASE ROOT      I=0000000000000 D=000000000000
U=0000000000000
PWX-06153 xlev2.1     XMSDBASE LEV2      I=0000000000000 D=000000000000
U=0000000000000
PWX-06184 Sncelast 12/04/13 14:34:51      I=0000000000000 D=000000000000 U=000000000000 C=000000000000
Log=12/04/12 15:15:34.02

```

STATISTICS ON コマンドを使用して、SLDS ごとに、および ECCR の実行全体に対して統計を出力する場合は、以下のメッセージが出力されます。

```

PWX-07272 The IMS ECCR is processing log data set
IMS1210.SLDSP.IMSC.D12135.T1318291.V03.
PWX-06152 IMS SLDS File IMS1210.SLDSP.IMSC.D12121.T1318291.V03 closed with some records processed. Progress
since last display:
PWX-06153 d002cpl.1    DTLD002 *COMPLEX I=0000000000013 D=000000000000
U=0000000000000
PWX-06153 d002root.1   DTLD002 ROOT      I=0000000000040 D=000000000000
U=0000000000000
PWX-06153 d002seg1.1   DTLD002 SEG1      I=0000000000040 D=000000000000
U=0000000000000
PWX-06153 d002seg2.1   DTLD002 SEG2      I=0000000000013 D=000000000000
U=0000000000000
PWX-07272 The IMS ECCR is processing log data set
IMS1210.SLDSP.IMSC.D12356.T0723336.V03.
PWX-06152 IMS SLDS File IMS1210.SLDSP.IMSC.D12143.T0723336.V03 closed with some records processed. Progress
since last display:
PWX-06153 d002cpl.1    DTLD002 *COMPLEX I=0000000000007 D=0000000000020
U=0000000000000
PWX-06153 d002root.1   DTLD002 ROOT      I=0000000000043 D=0000000000077
U=0000000000000
PWX-06153 d002seg1.1   DTLD002 SEG1      I=0000000000135 D=0000000000157
U=0000000000000
PWX-06153 d002seg2.1   DTLD002 SEG2      I=0000000000007 D=0000000000020 U=0000000000000
PWX-06179 IMS ECCR Run complete. Totals for this
run:
PWX-06153 d002cpl.1    DTLD002 *COMPLEX I=0000000000080 D=0000000000080
U=0000000000000
PWX-06153 d002root.1   DTLD002 ROOT      I=0000000000332 D=0000000000308
U=0000000000000
PWX-06153 d002seg1.1   DTLD002 SEG1      I=0000000000700 D=0000000000628
U=0000000000000
PWX-06153 d002seg2.1   DTLD002 SEG2      I=0000000000080 D=0000000000080
U=0000000000000
PWX-06182 Totals      12/05/22 07:34:26      I=000000001490 D=000000001370 U=000000000000 C=000000000237

```

Log=12/05/22 07:24:05.20

PWX-07291 ECCR is shutting down after reading the IMS log to 12/05/22 07:24:05.207000

使用上の注意

- PowerExchange では、IMS 10 以降で使用可能な ECCR DTLCCIMX プログラムに対してのみ、STATISTICS コマンドがサポートされます。
- STATISTICS *minutes* コマンドを指定して統計がレポートされる間隔を変更する前に、DBMOVER コンフィギュレーションメンバで CAPT_STATS=Y を指定するか、STATISTICS ON コマンドを発行する必要があります。
- STATISTICS *minutes* コマンドで指定した間隔により、CAPT_STATS_INTVL パラメータで指定したすべての間隔が上書きされます。メッセージ PWX-07809 の出力で、STATISTICS コマンドによって設定された新しい間隔がレポートされます。
- 間隔の値に 0 を指定することはできません。コマンド STATISTICS 0 を入力すると、エラーメッセージ PWX-07808 が発行されます。RUNLIB(CAPTIMS)コンフィギュレーションメンバで CAPT_STATS_INTVL パラメータを 0 に設定すると、エラーメッセージ PWX-00967 が発行されます。
- RUNLIB(CAPTIMS)メンバで CAPT_STATS_TERSE パラメータを N に設定し、STATISTICS SINCE TERSE を実行すると、TERSE オプションによって SINCE 期間の CAPT_STATS_TERSE 設定が上書きされます。

STATUS コマンド

メッセージ PWX-07812 を SYSPRINT 出力ファイルに出力します。このメッセージは、SLDS での IMS ログベース ECCR の読み取り処理の現在のステータスを示します。

このコマンドは、DBRC API が使用される IMS ログベース ECCR DTLCCIMX プログラムでのみ使用できます。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
F eccr_task_name,STATUS
```

eccr_task_name 変数は、IMS ログベース ECCR の開始済みタスクまたはジョブの名前です。

出力例

コマンドは以下のメッセージを出力します。

PWX-07812 Latest time processed YY/MM/DD hh:mm:ss. Records processed *number* (IMS ECCR)

TRACEOFF コマンド

IMS ログベース ECCR のトレースを無効にします。このコマンドは、Informatica グローバルカスタマサポートの指示の下でのみ使用してください。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
F eccr_task_name,TRACEOFF [trace_id]
```

eccr_task_name 変数は、IMS ログベース ECCR の開始済みタスクまたはバッチジョブの名前です。

オプションの *trace_id* パラメータは、特定のトレースの識別子です。特定のトレースを無効にするには、このパラメータを使用します。このパラメータを使用しなかった場合、コマンドはアクティブなトレースをすべて無効にします。

使用上の注意

以下のいずれかのメッセージが DTLLOG ファイルに書き込まれます。

PWX-07800 Tracing turned off

PWX-07801 Trace *trace_id* has been turned off

関連項目：

- [「DISPLAY TRACE コマンド」 \(ページ 61\)](#)
- [「TRACEON コマンド」 \(ページ 68\)](#)

TRACEON コマンド

IMS ログベース ECCR に対して、特定のフィルタ条件および特定のトレースレベルのトレースを有効にします。トレース情報は、IMS ECCR イベントの履歴を示し、問題の診断に役立ちます。

このコマンドは、Informatica グローバルカスタマサポートの指示の下でのみ使用してください。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

F eccr_task_name,TRACEON trace_filter level_number

説明:

- *eccr_task_name* は、IMS ログベース ECCR の開始済みタスクまたはジョブの名前です。
- *trace_filter* および *level_number* は、Informatica グローバルカスタマサポートが提供する値です。

出力例

このコマンドの発行が成功した場合、以下のメッセージが DTLLOG ファイルに書き込まれます。

PWX-07998 Trace *trace_id* level *trace_level* turned on

有効なトレースフィルタ条件も有効なトレースレベルも指定せずにこのコマンドを発行すると、DTLLOG ファイルに以下のメッセージが書き込まれます。

PWX-07282 The TRACEON command is missing the trace filter and trace level arguments.

関連項目：

- [「DISPLAY TRACE コマンド」 \(ページ 61\)](#)
- [「TRACEOFF コマンド」 \(ページ 67\)](#)

第 10 章

PowerExchange エージェントの コマンド

この章では、以下の項目について説明します。

- [PowerExchange エージェントのコマンドの概要, 69 ページ](#)
- [PowerExchange エージェントの起動, 70 ページ](#)
- [DISPLAY コマンド, 70 ページ](#)
- [DRAIN コマンド, 71 ページ](#)
- [LOGCLOSE コマンド, 72 ページ](#)
- [LOGOPEN コマンド, 72 ページ](#)
- [LOGSPIN コマンド, 73 ページ](#)
- [REPCLOSE コマンド, 73 ページ](#)
- [REPOPEN コマンド, 74 ページ](#)
- [REPOSITORYDSN コマンド, 74 ページ](#)
- [REPSTATUS コマンド, 75 ページ](#)
- [RESUME コマンド, 75 ページ](#)
- [SHUTDOWN コマンド, 76 ページ](#)
- [START コマンド, 77 ページ](#)
- [STOP コマンド, 77 ページ](#)

PowerExchange エージェントのコマンドの概要

PowerExchange エージェントのコマンドを使用して、以下のタスクを実行します。

- PowerExchange エージェント処理に関する情報の表示。
- PowerExchange エージェントのメッセージログの管理。
- PowerExchange エージェントのリポジトリデータセットのオープンまたはクローズ、PowerExchange エージェントがリポジトリデータセットに使用する名前の変更、およびこのデータセットのステータス情報の表示。
- PowerExchange エージェントサブタスクの開始および終了。
- PowerExchange エージェントのアドレス空間のシャットダウン。

"REP"で始まるコマンドは、PowerExchange エージェントのリポジトリデータセットを管理します。PowerExchange エージェントでは、リポジトリデータセットを使用して、最新のキャプチャ登録情報が取得されます。AGENTREP データセットまたは CCT データセットを PowerExchange エージェントのリポジトリとして使用できます。Informatica では、不要な I/O アクティビティを避けるために、AGENTREP データセットの使用を推奨しています。

PowerExchange エージェントのコマンドを発行するには、MVS オペレータコンソール、または SDSF などのインタフェースを使用します。各コマンドの先頭には、RUNLIB ライブラリの AGENTCTL メンバの CmdPrefix パラメータに指定された MVS コマンドプレフィックスを付ける必要があります。オプションの CmdPrefix パラメータを定義していない場合は、AGENTCTL メンバの AGENTID パラメータ値であるデフォルトのコマンドプレフィックスを使用します。PowerExchange エージェントでは、コマンドプレフィックスを使用して、MVS に発行されるコマンドがインターセプトされます。構文では、コマンドプレフィックスは *cmd_prefix* 変数で表されています。

PowerExchange エージェントのアドレス空間が非アクティブな場合に PowerExchange エージェントのコマンドを発行すると、コマンドは MVS によって拒否されて、PowerExchange によって以下のメッセージが発行されます。

```
PWXEDM172054W module: agentid Command Exit. command command rejected - Agent is not active
```

正しくないコマンドプレフィックスを付けて PowerExchange エージェントのコマンドを発行した場合、または PowerExchange エージェントがシステムの最後の IPL 以降アクティブになっていない場合には、MVS によって以下のメッセージが発行されます。

```
IEE305I agent_command COMMAND INVALID
```

PowerExchange エージェントを起動するには、標準の MVS START コマンドを使用します。

PowerExchange エージェントのリポジトリと AGENTREP データセットの詳細については、『*PowerExchange CDC ガイド (z/OS 用)*』を参照します。

PowerExchange エージェントの起動

インストール後に PowerExchange エージェントを起動する場合や、または停止後にリスタートする場合は、MVS START コマンドの後に PowerExchange エージェントの開始タスクの名前を付けて使用します。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
START task_name
```

このコマンドによって、PowerExchange エージェントのスタートアッププロシージャが開始されます。

特定の DIS、LOG、または REP サブタスクを開始するには、PowerExchange START コマンドを使用します。

関連項目：

- [「START コマンド」 \(ページ 77\)](#)

DISPLAY コマンド

MVS オペレータコンソール上で PowerExchange エージェント処理に関する情報を表示します。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
cmd_prefix DISPLAY {GBLQDSNS|JOBS|LOCKS|MODULES}
```

cmd_prefix 変数は、RUNLIB ライブラリの AGENTCTL メンバ、または AGENTCTL メンバの AGENTID パラメータ値に指定されたコマンドプレフィクスです。

パラメータ説明

このコマンドには、以下のいずれかのパラメータを指定する必要があります。

GBLQDSNS

PowerExchange エージェントに割り当てられたすべてのグローバル循環キューの識別子が表示されます。

JOBS

サービス利用のため PowerExchange エージェントに登録されている MVS TCB がすべて表示されます。

LOCKS

PowerExchange エージェントのすべてのロックおよびそれらのロックの所有者が表示されます。

MODULES

PowerExchange エージェントによってロードされるすべてのモジュールの名前が表示されます。

使用上の注意

このコマンドが正常に実行されるためには、PowerExchange エージェントが実行されている必要があります。PowerExchange エージェントが、最後の IPL 以降に実行されたことはあるが、現在は実行されていない場合にコマンドを発行すると、PowerExchange によって以下のメッセージが発行されます。

```
PWXEDM172054W module: agentid Command Exit. command command rejected - Agent is not active
```

出力例

AGENTID の値として"DBM1"を持ち、現在実行されている PowerExchange エージェントに対して、以下のコマンドが入力されました。

```
DBM1 DISPLAY GBLQDSNS
```

このコマンドによって、以下のメッセージ出力が生成されました。

```
PWXEDM172078I EDMSDISO: DISPLAY command accepted by EDM Agent DBM1
PWXEDM172200I EDMSDISO: Global Queue DSNs display for EDM Agent DBM1
PWXEDM172205I EDMSDISO: PWXL.LOGGER.QUEUE.DBM1.DBML - CQMN=10A989028,Seq=28
PWXEDM172206I EDMSDISO: End of list
```

DRAIN コマンド

PowerExchange エージェントにアクセスするすべてのタスクが完了しており、システム上で実行されていないことを確認します。

SHUTDOWN COMPLETELY コマンドを発行する前に DRAIN コマンドを発行して、アドレス空間がシャットダウンする前にすべてのタスクが完了していることを確認する必要があります。

ヒント: DRAIN コマンドを発行した後、RESUME コマンドを使用してタスクを有効化し、PowerExchange エージェントへのアクセスを再開できます。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

cmd_prefix DRAIN

cmd_prefix 変数は、RUNLIB ライブラリの AGENTCTL メンバ、または AGENTCTL メンバの AGENTID パラメータ値に指定されたコマンドプレフィックスです。

関連項目：

- [「RESUME コマンド」 \(ページ 75\)](#)
- [「SHUTDOWN コマンド」 \(ページ 76\)](#)

LOGCLOSE コマンド

EDMSLOG という名前の PowerExchange エージェントのメッセージログデータセットを閉じて、割り当てを解除します。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

cmd_prefix LOGCLOSE

cmd_prefix 変数は、RUNLIB ライブラリの AGENTCTL メンバ、または AGENTCTL メンバの AGENTID パラメータ値に指定されたコマンドプレフィックスです。

関連項目：

- [「LOGSPIN コマンド」 \(ページ 73\)](#)

LOGOPEN コマンド

EDMSLOG という名前の PowerExchange エージェントの新しいメッセージログデータセットを割り当てて、開きます。EDMSLOG は、PowerExchange エージェントからのメッセージおよび PowerExchange エージェントと連携するすべてのコンポーネントからのメッセージを含む SYSOUT データセットです。メッセージログを開くと、そのメッセージログは PowerExchange エージェントのメッセージの受け入れに使用できます。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

cmd_prefix LOGOPEN

cmd_prefix 変数は、RUNLIB ライブラリの AGENTCTL メンバ、または AGENTCTL メンバの AGENTID パラメータ値に指定されたコマンドプレフィックスです。

使用上の注意

EDMSLOG ログデータセットが既に関いた状態で LOGOPEN コマンドを発行すると、コマンドは PowerExchange エージェントによって拒否されて、現在のログデータセットに以下のメッセージが発行されます。

```
PWXEDM172078W EDMSLOG0: LOGOPEN command rejected by EDM Agent agent_id  
PWXEDM172083W EDMSLOG0: The Agent Message log is already open
```

関連項目：

- [「LOGSPIN コマンド」 \(ページ 73\)](#)

LOGSPIN コマンド

現在の PowerExchange エージェントの EDMSLOG メッセージログを閉じて割り当てを解除し、新しい EDMSLOG メッセージログを割り当てて開きます。このアクションは、LOGCLOSE コマンドを発行した後に LOGOPEN コマンドを発行するアクションと同じです。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
cmd_prefix LOGSPIN
```

cmd_prefix 変数は、RUNLIB ライブラリの AGENTCTL メンバ、または AGENTCTL メンバの AGENTID パラメータ値に指定されたコマンドプレフィックスです。

関連項目：

- [「LOGCLOSE コマンド」 \(ページ 72\)](#)
- [「LOGOPEN コマンド」 \(ページ 72\)](#)

REPCLOSE コマンド

現在の PowerExchange エージェントのリポジトリデータセットを閉じ、割り当てを解除します。リポジトリデータセットをテスト環境で管理している場合や、リポジトリデータセットを移動したり再編成したりする必要がある場合に、この機能を実行する必要がある可能性があります。通常、現在のリポジトリデータセットは、RUNLIB ライブラリの AGENTCTL メンバの REPOSITORYDSN パラメータによって定義されているものです。ただし、REPOSITORYDSN コマンドを使用してリポジトリデータセットをオーバーライドした場合は、REPOSITORYDSN コマンドによって割り当てられたオーバーライドリポジトリデータセットが、REPCLOSE コマンドによって閉じられます。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
cmd_prefix REPCLOSE
```

cmd_prefix 変数は、RUNLIB ライブラリの AGENTCTL メンバ、または AGENTCTL メンバの AGENTID パラメータ値に指定されたコマンドプレフィックスです。

関連項目：

- [「REOPEN コマンド」 \(ページ 74\)](#)
- [「REPOSITORYDSN コマンド」 \(ページ 74\)](#)

REOPEN コマンド

REPCLOSE コマンドが発行された後に、PowerExchange エージェントの新しいリポジトリデータセットを割り当てて、開きます。通常、このコマンドは、RUNLIB ライブラリの AGENTCTL メンバの REPOSITORYDSN パラメータによって定義されたリポジトリデータセットを開きます。ただし、REPOSITORYDSN コマンドを使用してリポジトリデータセットをオーバーライドした場合は、最後の REPOSITORYDSN コマンドによって割り当てられたリポジトリデータセットが、REOPEN コマンドによって開かれます。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
cmd_prefix REOPEN
```

cmd_prefix 変数は、RUNLIB ライブラリの AGENTCTL メンバ、または AGENTCTL メンバの AGENTID パラメータ値に指定されたコマンドプレフィックスです。

使用上の注意

リポジトリデータセットが既に開いた状態でこのコマンドを発行すると、コマンドは PowerExchange エージェントによって無視されて、以下のメッセージが発行されます。

```
PWXEDM172078W EDMSREPO: REOPEN command rejected by EDM Agent agent_id  
PWXEDM172083W EDMSREPO: The Repository is already open
```

関連項目：

- [「REPCLOSE コマンド」 \(ページ 73\)](#)
- [「REPOSITORYDSN コマンド」 \(ページ 74\)](#)

REPOSITORYDSN コマンド

PowerExchange エージェントの現在のリポジトリデータセットを閉じて割り当てを解除し、指定した名前を持つ新しいデータセットを割り当てて開きます。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
cmd_prefix REPOSITORYDSN data_set_name
```

説明:

- *cmd_prefix* は、RUNLIB ライブラリの AGENTCTL メンバ、または AGENTCTL メンバの AGENTID パラメータ値に指定されたコマンドプレフィックスです。
- *data_set_name* は、新しいリポジトリデータセットに使用する名前です。

使用上の注意

REPOSITORYDSN コマンドで無効なデータセット名を指定した場合は、新しいリポジトリデータセットの割り当てが失敗します。以下のメッセージが EDMSLOG データセットに書き込まれます。

```
PWXEDM172076I EDMSREP0: Repository file CLOSED  
IKJ56228I DATA SET data_set_name NOT IN CATALOG OR CATALOG CAN NOT BE ACCESSED
```

この場合は、PowerExchange エージェントによって、以前のデータセット名でデータセットが割り当てられます。そのリポジトリデータセットを開くには、REPOPEN コマンドを発行する必要があります。

関連項目：

- [「REPCLOSE コマンド」 \(ページ 73\)](#)
- [「REPOPEN コマンド」 \(ページ 74\)](#)

REPSTATUS コマンド

データセット名、リフレッシュの最終試行時刻、変更データキャプチャ情報を最後に受信した時刻、およびキャッシュデータセットが使用されている場合はそのキャッシュデータセットを含む、PowerExchange エージェントの現在のリポジトリデータセットのステータス情報を表示します。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
cmd_prefix REPSTATUS
```

cmd_prefix 変数は、RUNLIB ライブラリの AGENTCTL メンバ、または AGENTCTL メンバの AGENTID パラメータ値に指定されたコマンドプレフィックスです。

例出力

RESTATUS コマンドが、以下のようにコマンドプレフィックス"AG01"と共に入力されました。

```
AG01 REPSTATUS
```

このコマンドによって、以下の出力が生成されました。

```
PWXEDM172078I EDMSREP0: REPSTATUS command accepted by EDM Agent AG01  
PWXEDM181216I DTERIOM : Repository status follows:  
PWXEDM181217I DTERIOM : PWX10052 last refresh attempt Thu Apr 3 18:32:56 2008  
PWXEDM181217I DTERIOM : PWX10053 current change identifier 20080403122139  
PWXEDM181217I DTERIOM : PWX10055 configuration type repository PWX.V.AGENTREP  
PWXEDM181217I DTERIOM : PWX10057 location node1  
PWXEDM181217I DTERIOM : PWX10058 cache (1) PWX.V.C1.CACHE  
PWXEDM181217I DTERIOM : PWX10058 cache (2) PWX.V.C2.CACHE  
PWXEDM181217I DTERIOM : PWX10062 memory usage: REGS 33K, VIRT 252K, SYS 264K, EXT 5964K, SYS 11964K  
PWXEDM181217I DTERIOM : PWX10063 memory usage: below the line 2%, above the line 0%  
PWXEDM181218I DTERIOM : End of repository status
```

RESUME コマンド

DRAIN コマンドが発行された後に、PowerExchange エージェントへのタスクアクセスを再開します。DRAIN コマンドおよび RESUME コマンドを使用すると、PowerExchange エージェントのアクティビティを一時的に停止してから再開できます。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
cmd_prefix RESUME
```

`cmd_prefix` 変数は、RUNLIB ライブラリの AGENTCTL メンバ、または AGENTCTL メンバの AGENTID パラメータ値に指定されたコマンドプレフィックスです。

関連項目：

- [「DRAIN コマンド」 \(ページ 71\)](#)

SHUTDOWN コマンド

PowerExchange エージェントのアドレス空間をシャットダウンします。このコマンドは、現在 PowerExchange エージェントに接続している実行中のタスクのみを許可し、その他のタスクの接続を禁止します。

オプションの COMPLETELY パラメータを追加すると、PowerExchange エージェントのアドレス空間をシャットダウンして、PowerExchange エージェントのモジュールおよびデータ領域をストレージから削除できます。SHUTDOWN COMPLETELY コマンドを発行する前に、DRAIN コマンドを発行します。DRAIN コマンドを発行すると、現在 PowerExchange エージェントにアクセスしているすべてのタスクが完了してからシャットダウン処理が開始されます。DRAIN コマンドを発行した後、DISPLAY JOBS コマンドを発行して、まだアクティブなプロセスがあるかどうかを判断します。

PowerExchange エージェントを停止するのに MVS STOP コマンドを使用しません。

ヒント: シャットダウン後に PowerExchange エージェントをリスタートするには、標準の MVS START コマンドを使用します。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
cmd_prefix SHUTDOWN [COMPLETELY]
```

`cmd_prefix` 変数は、RUNLIB ライブラリの AGENTCTL メンバ、または AGENTCTL メンバの AGENTID パラメータ値に指定されたコマンドプレフィックスです。

パラメータ説明

このコマンドでは、オプションで以下のパラメータを指定できます。

COMPLETELY

PowerExchange エージェントのアドレス空間をシャットダウンして、PowerExchange エージェントのモジュールおよびデータ領域をストレージから削除します。このパラメータによって、MVS システムから PowerExchange エージェントが完全に削除されます。

関連項目：

- [「DRAIN コマンド」 \(ページ 71\)](#)
- [「DISPLAY コマンド」 \(ページ 70\)](#)

START コマンド

PowerExchange エージェントの非アクティブな DIS、LOG、または REP サブタスクを開始します。

これらのサブタスクは、PowerExchange エージェントの初期化時に自動的に開始されます。STOP コマンドの発行、またはその他の理由によってこれらのサブタスクが停止した場合は、START コマンドを使用してサブタスクを再開します。

注: インストール後に PowerExchange エージェントを起動する場合や、または停止した後にリスタートする場合は、PowerExchange エージェントタスクの名前を指定して MVS START コマンドを使用します。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
cmd_prefix START {DIS|LOG|REP}
```

cmd_prefix 変数は、RUNLIB ライブラリの AGENTCTL メンバに指定されたコマンドプレフィクスです。

パラメータ説明

このコマンドには、以下のいずれかのパラメータを指定する必要があります。

DIS

DISPLAY コマンドを制御する、DIS サブタスクを開始します。

LOG

LOG サブタスクを開始します。これは、PowerExchange エージェントのデータ領域から EDMSLOG メッセージログデータセットにデータを書き込みます。

REP

REP サブタスクを開始します。これは、主に ECCR 用に PowerExchange エージェントのリポジトリ情報へのアクセスを提供します。

関連項目：

- [「PowerExchange エージェントの起動」 \(ページ 70\)](#)

STOP コマンド

PowerExchange エージェントのアクティブな DIS、LOG、または REP サブタスクを停止します。このコマンドは通常、問題解決時に、Informatica グローバルカスタマサポートの指示の下に使用します。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
cmd_prefix STOP {DIS|LOG|REP}
```

cmd_prefix 変数は、RUNLIB ライブラリの AGENTCTL メンバに指定されたコマンドプレフィクスです。

パラメータ説明

このコマンドには、以下のいずれかのパラメータを指定する必要があります。

DIS

DISPLAY コマンドを制御する、DIS サブタスクを停止します。

LOG

LOG サブタスクを停止します。これは、PowerExchange エージェントのデータ領域から EDMSLOG メッセージログデータセットにデータを書き込みます。

REP

REP サブタスクを停止して、ECCR からの PowerExchange リポジトリ情報へのアクセスを禁止します。

第 11 章

PowerExchange Condense のコマンド

この章では、以下の項目について説明します。

- [PowerExchange Condense のコマンドの概要, 79 ページ](#)
- [PowerExchange Condense の起動, 80 ページ](#)
- [PowerExchange Condense のコマンドの発行, 81 ページ](#)
- [PowerExchange Condense 処理の停止, 81 ページ](#)
- [CONDENSE コマンド, 82 ページ](#)
- [DISPLAY STATUS コマンド, 82 ページ](#)
- [FILESWITCH コマンド, 84 ページ](#)
- [SHUTCOND コマンド, 85 ページ](#)
- [SHUTDOWN コマンド, 86 ページ](#)

PowerExchange Condense のコマンドの概要

PowerExchange Condense のコマンドを使用して、i5/OS または z/OS システムでの PowerExchange Condense 処理を制御します。これらのコマンドを使用して、以下のタスクを実行します。

- Condense サブタスクのステータスの表示。
- 圧縮ジョブの手動での開始
- 圧縮ジョブの停止
- 圧縮ファイルの新しいセットへの切り替え

注: Linux、UNIX、および Windows では、PowerExchange ロgger（Linux、UNIX、Windows 用）が、PowerExchange Condense の部分要約機能を実行します。PowerExchange ロggerのコマンドは、PowerExchange Condense のコマンドと類似しています。

pwxcmd プログラムを使用して、Linux、UNIX、または Windows システムから、リモート i5/OS または z/OS システムで実行している PowerExchange Condense プロセスに、PowerExchange Condense のコマンドを発行できます。

関連項目：

- [「PowerExchange ロgger（Linux、UNIX、Windows 用）のコマンド」（ページ 122）](#)
- [「pwxcmd コマンド」（ページ 142）](#)

PowerExchange Condense の起動

PowerExchange Condense を起動する方法は、オペレーティングシステムによって異なります。

PowerExchange Condense を起動する前に、DBMOVER および CAPTPARM コンフィギュレーションメンバを構成します。CAPTPARM コンフィギュレーションファイルまたはメンバの COLL_END_LOG パラメータを使用して、実行モードを継続モードかバッチモードに設定します。PowerExchange Condense の構成の詳細については、『*PowerExchange CDC ガイド (i5/OS 版)*』または『*PowerExchange CDC ガイド (z/OS 版)*』を参照してください。

注: PowerExchange Condense の起動に pwxcmd プログラムを使用することはできません。

i5/OS での PowerExchange Condense の起動

SBMJOB コマンドを使用して DTLCACON プログラムを呼び出します。

オプションの CONFIG パラメータおよび LICENSE パラメータを使用すると、デフォルトの DBMOVER 構成ファイルまたは license.key ファイルの代わりに使用するオーバーライド構成ファイルまたはオーバーライドライセンスキーファイルを指定できます。オーバーライドファイルは、デフォルトのファイルとは異なるファイル名またはパスである必要があります。これらのオーバーライドファイルは、オプションの PWX_CONFIG および PWX_LICENSE 環境変数に指定したオーバーライド設定ファイルおよびオーバーライドライセンスキーファイルよりも優先されます。

PowerExchange リスナシステムで PowerExchange Condense の DTLCACON プログラムを起動するには、以下のコマンド構文を使用します。

```
SBMJOB CMD(CALL PGM(DTLCACON) PARM('[[CS=library/file(mycondense_config_member)]]' '[CONFIG=library/  
file(myconfig_member)]' '[LICENSE=library/file(mylicensekey_member)]'))  
JOB(job_name) JOBD(data lib/DTLLIST) JOBQ(*JOBQ) PRTDEV(*JOBQ) OUTQ(*JOBQ)  
CURLIB(data lib) INLLIBL(*JOBQ) SPLFACN(*JOBQ)
```

この構文には、以下の変数が含まれます。

- *job_name* は、開始する Condense ジョブの名前です。
- *data lib* は、インストール時に指定した PowerExchange データライブラリの名前です。

注意事項:

- CS パラメータで、*condlib*/CFGCOND(CAPTPARM)を指定できます。*condlib* は、PowerExchange Condense のファイルを含むライブラリの名前です。PowerExchange Condense で処理する各ジャーナルのジョブを実行するには、適切な *condlib* ライブラリ名を指定します。
- システムジョブテーブルが最大サイズを超えないようにするには、ジョブの記述で SPLFACN(*DETACH)を指定します。これはシステムのデフォルトではないため、SPLFACN(*JOBQ)パラメータを含めて、パラメータを正しく指定してください。

この構文では、以下のオプションパラメータを 1 つ以上指定できます。

CS

作成した要約設定メンバを、デフォルトの *condlib*/CFGCOND (CAPTPARM) 設定メンバの代わりに使用する場合は、そのメンバのライブラリ、ファイル名、およびメンバ名を指定します。

CONFIG

作成したオーバーライド dbmover 設定メンバを、デフォルトの *data lib*/CFG (DBMOVER) 設定メンバの代わりに使用する場合は、そのメンバのライブラリ、ファイル名、およびメンバ名を指定します。

LICENSE

作成したオーバーライドライセンスキーメンバをデフォルトのライセンスキーメンバの代わりに使用する場合は、そのメンバのライブラリ、ファイル名、およびメンバ名を指定します。

注: これらのパラメータでは、メンバがデフォルトの場所がない場合にのみフルパスが必要です。

PowerExchange Condense の起動 (z/OS)

z/OS システムでは、開始タスクまたはバッチジョブとして PowerExchange Condense を実行できます。PowerExchange では、SAMPLIB ライブラリの COND_{xxx} メンバおよび PCND_{xxx} メンバに、サンプルの JCL が用意されています。xxx は、データソースタイプを示します。COND_{xxx} メンバは、PowerExchange Condense をバッチジョブとして実行し、PCND_{xxx} メンバは PowerExchange Condense を開始タスクとして実行します。詳細については、『PowerExchange CDC ガイド (z/OS 版)』を参照してください。

PowerExchange Condense のコマンドの発行

PowerExchange Condense プロセスへのコマンドの発行は、オペレーティングシステムに応じて異なります。

z/OS システムでは、MVS MODIFY (F) コマンドを使用して、PowerExchange Condense のコマンドを発行します。コマンドには、圧縮開始タスク名またはジョブ名、およびその後にカンマ (,) を含める必要があります。コマンドの構文では、この名前は *job_name* 変数で示されています。コマンドは、MVS オペレータコンソール、SDSF などのインタフェース、またはバッチジョブから入力できます。

i5/OS システムでは、SNDPWXCMD コマンドを使用して、フォアグラウンドモードで PowerExchange Condense のコマンドを発行します。i5/OS のコマンドラインからコマンドを入力するか、またはスクリプトファイルにコマンドを記述します。

または、pwxcmd プログラムを使用して、PowerExchange Condense のコマンドを発行できます。Linux、UNIX、または Windows システムから、ローカルまたはリモートの i5/OS または z/OS システムで実行している PowerExchange Condense プロセスに pwxcmd コマンドを発行できます。

関連項目：

- [「pwxcmd コマンド」 \(ページ 142\)](#)

PowerExchange Condense 処理の停止

以下のいずれかの PowerExchange のコマンドを使用して、継続モードで実行している圧縮ジョブを停止します。

- SHUTDOWN
- SHUTCOND

これらのコマンドでは、データの整合性が維持されるため、効率的に圧縮処理を再開できます。どちらのコマンドでも同じシャットダウンが実行されますが、SHUTCOND コマンドではシャットダウンの前に最後の要約処理が実行されます。シャットダウンの前に、PowerExchange Condense によって、最新のリスタートトークンを含むチェックポイントが作成されます。これにより、停止した場所から要約処理を再開できます。

z/OS では、PowerExchange Condense は STOP (P) コマンドを無視します。このコマンドを発行すると、PowerExchange によって、コマンドが有効でないことを示すメッセージが発行されます。

z/OS で、Condense ジョブに対して CANCEL (C) コマンドを発行すると、ジョブが停止します。ジョブを再開した場合、最後のチェックポイントから再開します。そのチェックポイント以降に行われた要約処理はロールバックされ、PowerExchange は関連する CDCT レコードおよび圧縮ファイルを削除します。

Linux、UNIX、または Windows システムから、リモートの i5/OS または z/OS システムで実行している PowerExchange Condense プロセスに、pwxcmd shutcond および shutdown コマンドを発行できます。

関連項目：

- [「SHUTCOND コマンド」 \(ページ 85\)](#)
- [「SHUTDOWN コマンド」 \(ページ 86\)](#)
- [「pwxcmd shutcond コマンド」 \(ページ 170\)](#)
- [「pwxcmd shutdown コマンド」 \(ページ 172\)](#)

CONDENSE コマンド

PowerExchange Condense を継続モードで実行している場合に、要約処理再開の待機時間が経過する前に新しい要約サイクルを手動で開始します。PowerExchange Condense CAPTPARM コンフィギュレーションメンバの NO_DATA_WAIT パラメータで、待機時間を指定します。

Linux、UNIX、または Windows システムから、リモートの i5/OS または z/OS システムで実行している PowerExchange Condense プロセスに、pwxcmd condense コマンドを発行できます。

構文

構文は、システムに応じて異なります。

- i5/OS システムでは、以下の構文を使用して、i5/OS バッチジョブにコマンドを発行します。
`SNDPWXCMD CMDHDLRLIB(condlib) DTLCMD(CONDENSE)`
condlib 変数は、圧縮ファイルを含むライブラリの名前です。このライブラリは、CAPTPARM コンフィギュレーションメンバの COND_DIR パラメータで指定します。
- z/OS システムでは、以下の構文を使用します。
`F task_name,CONDENSE`
task_name 変数は、継続モードで実行している PowerExchange Condense 開始タスクの名前です。通常、PowerExchange Condense は開始タスクとして実行されます。

関連項目：

- [「pwxcmd condense コマンド」 \(ページ 164\)](#)

DISPLAY STATUS コマンド

コントローラタスク、コマンドハンドラサブタスク、PowerExchange Condense の開始済みタスクまたはジョブの圧縮サブタスクの現在のステータスを表示します。

または、Linux、UNIX、または Windows システムでは、コマンドライン、バッチファイル、またはスクリプトから、ローカルまたはリモートシステムで実行している PowerExchange Condense プロセスに、pwxcmd displaystatus コマンドを発行できます。

構文

構文は、プラットフォームに応じて異なります。

- i5/OS システムでは、以下の構文を使用します。
`SNDPWXCMD CMDHDLRLIB(condlib) DTLCMD(DISPLAY) DISPLAYOPT(STATUS)`

condlib 変数は、CAPTPARM コンフィギュレーションファイルの COND_DIR パラメータに指定した、圧縮ファイルを含むライブラリの名前です。

- z/OS システムでは、以下の構文を使用します。

```
F task_name,DISPLAY STATUS
```

task_name 変数は、情報を表示する対象の Condense 開始タスクまたはバッチジョブの名前です。通常、PowerExchange Condense は開始タスクとして実行されます。

出力例

次の出力例は、z/OS 上で動作する DISPLAY STATUS コマンドによって生成されたものです。

```
PWX-26011 Command handler received command "DISPLAY STATUS"
***** STATUS *****
COMMAND_HANDLER NOT waiting
CONDENSE WAITING
PWX-26021 Controller waits on events ALL_TASK_SHUTDOWN, CMDH_ENDED, CONDENSE_ENDED, CHKPT_COND_DONE,
CONDENSING_COMPLETE,
PWX-26022 Command Handler waits on events ALL_TASK_SHUTDOWN, GOT_A_COMMAND, CONDENSE_INIT_COMPLETE,
CAPTURE_STARTUP_COMPLETE,
PWX-26023 Writer waits on events ALL_TASK_SHUTDOWN, START_CONDENSING, CAPTURE_STARTUP_COMPLETE,
PWX-26024 Writer is sleeping, waiting for an event or timeout
*****
```

この出力に含まれる「CONDENSE WAITING」は、圧縮サブタスクが、次の圧縮サイクルを開始する前に、NO_DATA_WAIT パラメータに定義されている時間（分）だけ待機していることを意味します。

PWX-26021 では、コントローラタスクが応答するイベントタイプがレポートされます。コントローラタスクは、これらのイベントタイプに対して、次の応答を返します。

- ALL_TASK_SHUTDOWN。コントローラは、CONDENSE_ENDED および CMDH_ENDED イベントが完了するのを待機してから、シャットダウンします。
- CMDH_ENDED。コントローラはコマンドハンドラサブタスクの終了を検出します。
- CONDENSE_ENDED。コントローラは圧縮サブタスクの終了を検出します。
- CHKPT_COND_DONE。コントローラは、保持期間が期限切れになった古い CDCT レコードを削除します。
- CONDENSING_COMPLETE。コントローラはこのイベントタイプには応答しません。

PWX-26022 では、コマンドハンドラが応答するイベントタイプがレポートされます。コマンドハンドラタスクは、これらのイベントタイプに対して、次の応答を返します。

- ALL_TASK_SHUTDOWN。コマンドハンドラサブタスクが終了します。
- GOT_A_COMMAND。コマンドハンドラはコマンドを処理します。
- CONDENSE_INIT_COMPLETE。圧縮の初期化が完了すると、コマンドハンドラは、特定のコマンド、たとえば CONDENSE に処理可能のフラグを設定します。
- CAPTURE_STARTUP_COMPLETE。コマンドハンドラサブタスクが初期化を完了し、メイン処理を開始します。

PWX-26023 では、圧縮サブタスク（Writer と呼ばれる）が応答するイベントタイプがレポートされます。圧縮サブタスクは、これらのイベントタイプに対して、次の応答を返します。

- ALL_TASK_SHUTDOWN。圧縮サブタスクが終了します。
- START_CONDENSING。圧縮サブタスクが、次の圧縮サイクルの変更の検索を開始します。
- CAPTURE_STARTUP_COMPLETE。圧縮サブタスクが初期化を完了し、メイン処理を開始します。

FILESWITCH コマンド

現在の圧縮ファイルにデータが含まれる場合に、現在の圧縮ファイルを閉じて、PowerExchange Condense の圧縮ファイルの新しいセットに切り替えます。現在の圧縮ファイルにデータが含まれていない場合は、ファイル切り替えは行われません。

Linux、UNIX、または Windows システムから、リモートの i5/OS または z/OS システムで実行している PowerExchange Condense プロセスに、`pwxcmd fileswitch` コマンドを発行できます。

構文

構文は、システムに応じて異なります。

- i5/OS システムでは、以下の構文を使用します。
`SNDPWXCMD CMDHDLRLIB(condlib) DTLCMD(FILESWITCH)`
condlib 変数は、CAPTPARM コンフィギュレーションメンバの `COND_DIR` パラメータに指定した、圧縮ファイルを含むライブラリの名前です。
- z/OS システムでは、以下の構文を使用します。
`F task_name,FILESWITCH`
task_name 変数は、圧縮ファイルの新しいセットに切り替える PowerExchange Condense 開始タスクまたはバッチジョブの名前です。通常、PowerExchange Condense は開始タスクとして実行されます。

使用上の注意

このコマンドを使用すると、次のファイル切り替えが行われる前に、現在の圧縮ファイル内の変更データを抽出に使用できます。例えば、z/OS 上の圧縮ファイルから、1 時間ごとに変更データを抽出するとします。100 万のレコードが更新されるごとにファイル切り替えが行われるように、CAPTPARM コンフィギュレーションファイルに `FILE_SWITCH_CRIT` パラメータおよび `FILE_SWITCH_VAL` パラメータを設定します。次に、FILESWITCH コマンドをバッチジョブの一部として記述し、抽出処理が実行されるまで 1 時間ごとにファイル切り替えが自動的に行われるようにします。

注: 単一の Condense ジョブで、部分要約処理およびフル要約処理の両方を実行する場合、PowerExchange では、部分要約処理とフル要約処理に異なるセットの圧縮ファイルが使用されます。FILESWITCH コマンドを発行すると、両方のセットの圧縮ファイルでファイル切り替えが行われます。

出力例

FILESWITCH コマンドによって、z/OS で以下のような出力例が生成されました。

```
PWX-26011 Command handler received command "FILESWITCH"
PWX-06460 Command Handler: New File Switch requested.
PWX-06415 Condense: Condense completed. Total Records=34, Data=16, UOWs =12
PWX-06422 Condense: Received FILESWITCH request.
PWX-06419 Condense: Doing file switch. Records=34 Reason=FILESWITCH request Cdcts=2 CPU: TotMs=20558768
Diff=20558768
PWX-06418 Condense: Closed file ABCD.D1010QB.CND.CF160524.T1716003
PWX-06136 Checkpoint taken to file=ABCD.D1010QB.CHKPTV0 time=16/05/24 17:17:04
PWX-06420 Condense: Checkpoint done. Sequence=000027B4415F000000000000027B4415F00000000
PowerExchange Logger=D8C1C8D3404000001C6E83F400000000
PWX-06421 Condense: 16/05/24 17:17:04 Starting wait on commands for 268 seconds
```

関連項目：

- [「pwxcmd fileswitch コマンド」 \(ページ 168\)](#)

SHUTCOND コマンド

最後の要約サイクルが完了した後に、PowerExchange Condense を停止します。

PowerExchange では、最後の要約サイクルを開始し、その完了を待機してから、PowerExchange Condense をシャットダウンします。シャットダウン中、PowerExchange Condense は、開いているすべての圧縮ファイルのクローズ、CDCT ファイルへのデータの書き込み、および最新のリスタートトークンを含む最終チェックポイントの作成を行ってから、シャットダウンします。

あるいは、Linux、UNIX、または Windows システムから、リモートの i5/OS または z/OS システムで実行している PowerExchange Condense プロセスに、pwxcmd shutcond コマンドを発行できます。

構文

構文は、システムに応じて異なります。

- i5/OS システムでは、以下の構文を使用します。

```
SNDPWXCMD CMDHDLRLIB(condlib) DTLCMD(SHUTCOND)
```

condlib 変数は、圧縮ファイルを含むライブラリの名前です。このライブラリは、CAPTPARM 設定メンバの COND_DIR パラメータで指定します。

- z/OS システムでは、以下の構文を使用します。

```
F task_name,SHUTCOND
```

task_name 変数は、停止する PowerExchange Condense 開始タスクまたはバッチジョブの名前です。通常、PowerExchange Condense は開始タスクとして実行されます。

出力例

次の出力例は、z/OS 上で動作する SHUTCOND コマンドによって生成されたものです。

```
PWX-26011 Command handler received command "SHUTCOND"
PWX-06467 Command Handler: Setting Condense to shut down on running out of data.
PWX-06468 Command Handler: Condense request issued.
PWX-06417 Condense: Start to Condense because CONDENSE Command Received
PWX-06416 Condense: Shutting down because Single Condense run completed
PWX-06136 Checkpoint taken to file=ABCD.D1010QB.CHKPTV2 time=16/05/24 14:49:36
PWX-06420 Condense: Checkpoint done. Sequence=00000B696E0B000000000000000B696E0B00000000
PowerExchange Logger=D8C1C8D340400000B695CEFO0000000
PWX-06404 Condense: Deleting file ABCD.D1010QB.CND.CP160520.T1832002.
PWX-06404 Condense: Deleting file ABCD.D1010QB.CND.CP160520.T1831001.
PWX-06404 Condense: Deleting file ABCD.D1010QB.CND.CP160520.T1832002.
PWX-06414 Condense: Closing down CAPI
PWX-06401 Condense: Ending successfully.
PWX-06110 Unloaded module 2 (CONDENSE).
PWX-06453 Command Handler: shutting down.
PWX-06454 Command Handler: has stopped.
PWX-06110 Unloaded module 1 (COMMAND_HANDLER).
PWX-06060 Controller: subtask Command Handler ended.
PWX-06060 Controller: subtask Condense ended.
PWX-06107 Controller: All subtasks shut down.
PWX-06065 Controller: Condensing ended. Last checkpoint time 16/05/24 14:49:36.
PWX-06039 Controller: Ending.
```

関連項目：

- [「pwxcmd shutcond コマンド」 \(ページ 170\)](#)

SHUTDOWN コマンド

PowerExchange Condense を停止します。このコマンドによって、PowerExchange Condense にシャットダウンイベントが渡されます。PowerExchange Condense がコマンドを認識すると、Condense サブタスクによって、すべてのサブタスクに対するクローズ要求、開いているすべての圧縮ファイルのクローズ、CDCT データセットレコードへのデータの書き込み、および最新のリスタートトークンを含む最終チェックポイントの作成が行われます。すべての要約サブタスクがシャットダウンした後に、PowerExchange Condense がシャットダウンします。

注: PowerExchange は、要約読み取り処理が終了して、CAPTPARM メンバの NO_DATA_WAIT2 パラメータで指定した待機時間が経過するまで、SHUTDOWN コマンドを処理しません。

あるいは、Linux、UNIX、または Windows システムから、リモートの i5/OS または z/OS システムで実行している PowerExchange Condense プロセスに、pwxcmd shutcond コマンドを発行できます。

構文

構文は、システムに応じて異なります。

- i5/OS システムでは、以下の構文を使用します。

```
SNDPWXCMD CMDHDLRLIB(condlib) DTLCMD(SHUTDOWN)
```

condlib 変数は、CAPTPARM コンフィギュレーションメンバの COND_DIR パラメータに指定した、圧縮ファイルを含むライブラリの名前です。

- z/OS システムでは、以下の構文を使用します。

```
F task_name,SHUTDOWN
```

task_name 変数は、停止する PowerExchange Condense 開始タスクまたはバッチジョブの名前です。通常、PowerExchange Condense は開始タスクとして実行されます。

出力例

SHUTDOWN コマンドによって、以下の出力例が生成されます。

```
PWX-26011 Command handler received command "SHUTDOWN"
PWX-06463 Command Handler: Close Condense request is now queued.
PWX-06464 Command Handler: Shutdown will occur shortly.
PWX-06453 Command Handler: shutting down.
PWX-06454 Command Handler: has stopped.
PWX-06110 Unloaded module 1 (COMMAND_HANDLER).
PWX-06416 Condense: Shutting down because SHUTDOWN event received
PWX-06418 Condense: Closed file ABCDEF1.v101.I.CND.CP160520.T2039005
PWX-06136 Checkpoint taken to file=ABCDEF1.v101.I.CHKPTV2 time=16/05/20 20:45:41
PWX-06420 Condense: Checkpoint done. Sequence=0000003411E200000000000000003411E200000000
PowerExchange Logger=E2C2F2D340400000002FF5BB000000000
PWX-06414 Condense: Closing down CAPI
PWX-10780 CAPI: INFO: Extraction return counts: no data 2, commits 118, inserts 1708, updates 44, deletes 562.
PWX-10781 CAPI: INFO: Extraction subordinate read counts: no data 0, commits 406, inserts 1828, updates 59,
deletes 786, backouts 10.
PWX-10782 CAPI: INFO: Extraction resource maximums: memory cache 433 KB, spill files 0.
PWX-10746 CAPI: INFO: Last data returned: timestamp 2016/05/13 17:44:28, sequence
0000003411E200000000000000003411E200000000.
PWX-10743 CAPI: INFO: No noteworthy transactions.
PWX-10749 CAPI: INFO: + Current subordinate sequence number 0000007A5F5100000000.
PWX-06401 Condense: Ending successfully.
PWX-06110 Unloaded module 2 (CONDENSE).
PWX-06060 Controller: subtask Command Handler ended.
PWX-06060 Controller: subtask Condense ended.
```

PWX-06107 Controller: All subtasks shut down.
PWX-06065 Controller: Condensing ended. Last checkpoint time 16/05/20 20:45:41.
PWX-06039 Controller: Ending.

関連項目：

- [「pwxcmd shutdown コマンド」 \(ページ 172\)](#)

第 12 章

PowerExchange Listener のコマンド

この章では、以下の項目について説明します。

- [PowerExchange リスナのコマンドの概要, 88 ページ](#)
- [PowerExchange リスナの起動, 89 ページ](#)
- [Windows での PowerExchange Listener サービス, 92 ページ](#)
- [CLOSE および CLOSE FORCE コマンド, 93 ページ](#)
- [DISPLAY ACTIVE および LISTTASK コマンド, 95 ページ](#)
- [DISPLAYSTATS コマンド, 97 ページ](#)
- [DTLLSTSI コマンド, 104 ページ](#)
- [STOPTASK コマンド, 106 ページ](#)

PowerExchange リスナのコマンドの概要

PowerExchange リスナのコマンドを使用して、PowerExchange リスナを停止または管理します。

これらのコマンドを使用して、以下のタスクを実行できます。

- サブタスクが完了するまで待機してから、PowerExchange リスナのジョブまたはタスクを停止します。
- サブタスクをキャンセルしてから、PowerExchange リスナのジョブまたはタスクを停止する。
- TCP/IP アドレス、ポート番号、アプリケーション名、アクセスタイプ、ステータスを含む、アクティブな各 PowerExchange リスナタスクについての情報を表示します。
- リソース使用量、クライアントタスク、接続に関する統計を含む PowerExchange リスナの監視統計を表示します。
- Windows システムでの PowerExchange リスナサービスの管理。

DTLLSTSI 以外の PowerExchange リスナのすべてのコマンドは、すべてのオペレーティングシステムで使用できます。DTLLSTSI は Windows でのみ使用可能です。コマンドを発行する方法は、オペレーティングシステムによって異なります。

z/OS システムでは、z/OS MODIFY (F) コマンドを使用して、PowerExchange リスナのコマンドを発行します。PowerExchange リスナの開始タスク名またはバッチジョブ名、およびその後にカンマ (,) を含めます。コマンドは、MVS オペレータコンソール、または SDSF などのインタフェースから入力できます。SDSF から、以下のように、MODIFY または F の前にスラッシュ (/) を置きます。

```
/F job_name,CLOSE
```


i5/OS システムでは、SNDLSTCMD コマンドを使用して PowerExchange リスナのコマンドを発行します。これらのコマンドは、i5/OS インタフェースに入力するか、自動化されたスケジューラ、CL プログラム、または REXX プロシージャを使用して実行できます。

Linux、UNIX、Windows のいずれかのシステム上で、dtllst プログラムを実行して、コマンドプロンプトから PowerExchange リスナのジョブを開始します。Windows では、PowerExchange リスナを Windows サービスとして実行できます。

また、PowerExchange Navigator で PowerExchange リスナの LISTTASK および STOPTASK コマンドを入力できます。【データベース行のテスト】ダイアログボックスで、【DB の種類】リストから【TASK_CNTL】を選択します。オプションで、【アプリケーション】ボックスで、コマンドのアプリケーション名を入力します。

あるいは、pwxcmd プログラムを使用して、Linux、UNIX、または Windows システムから、いずれかのシステムで実行している PowerExchange リスナに PowerExchange リスナのコマンドを発行します。

関連項目：

- [「pwxcmd コマンド」 \(ページ 142\)](#)
- [「DTLLSTSI コマンド」 \(ページ 104\)](#)

PowerExchange リスナの起動

PowerExchange リスナの起動方法は、オペレーティングシステムに応じて異なります。

i5/OS、Linux、UNIX、および Windows システムでは、dtllst プログラムを起動するコマンドにオプションの CONFIG パラメータおよび LICENSE パラメータを含めて、元の DBMOVER 構成ファイルおよびライセンスキーファイルの代わりに使用する、代替の構成ファイルおよびライセンスキーファイルを指定できます。通常は、元のファイルとは異なる場所またはファイル名で代替ファイルを定義します。この操作を行うと、製品をアップグレードするか、または再インストールしたときに、カスタマイズしたファイルは上書きされません。代替の設定ファイルおよびライセンスキーファイルを環境変数 PWX_CONFIG および PWX_LICENSE にも指定した場合は、パラメータ CONFIG および LICENSE で識別されるファイルによって、これらの環境変数で識別されたファイルがオーバーライドされます。

注: PowerExchange リスナを開始するために pwxcmd プログラムを使用することはできません。

PowerExchange リスナの起動 (i5/OS)

i5/OS では、SBMJOB コマンドを使用して、DTLLST プログラムを呼び出します。

SBMJOB コマンドを実行する前に、以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- QMLTTHDACN システム値が 1 または 2 に設定されている。QMLTTHDACN システム値の詳細については、i5/OS に関する IBM インフォメーションセンターを参照してください。
- JOBD の記述に複数スレッドを許可する ALWMLTTHD(*YES) パラメータが含まれている。
- システムジョブテーブルが最大サイズを超えないようにするために、JOBD の記述に SPLFACN(*DETACH) パラメータが含まれている。

以下のコマンド構文を使用します。

```
SBMJOB CMD(CALL PGM(dtllib/DTLLST) PARM('node_name' '[CONFIG=library/file(myconfig_member)]' '[LICENSE=library/file(mylicense_key_member)]') JOB(job_name) JOBD(data1ib/DTLLST) PRTDEV(*JOBD) OUTQ(*JOBD) CURLIB(*CRTDFT) INLLIBL(*JOBD) SPLFACN(*JOBD))
```

この構文には、以下の変数が含まれます。

- dtllib は、インストール時に入力された PowerExchange ソフトウェアライブラリの名前。

- *node_name* は、*datalib*/CFG(DBMOVER)コンフィギュレーションメンバの LISTENER 文で指定される PowerExchange リスナのノード名。
- *job_name* は、PowerExchange リスナのジョブまたは開始タスクの名前です。
- *datalib* は、インストール時に入力された PowerExchange データライブラリのユーザー指定の名前。

SBMJOB コマンドは、コマンドラインから入力できます。

あるいは、自動化されたスケジューラ、CL プログラム、または REXX プロシージャを使用して SBJJOB コマンドを実行することもできます。例えば、SBMJOB コマンドを STARTLST という名前の REXX メンバに含めてから、次の文を使用して PowerExchange リスナを開始します。

```
STRREXPRC SRCMBR(STARTLST) SRCFILE(datalib/REXX)
```

注: PowerExchange リスナを開始するために *pwxcmd* プログラムを使用することはできません。

PowerExchange リスナの起動 (Linux および UNIX)

Linux または UNIX では、以下の方法で PowerExchange リスナを起動できます。

- *dtllst* プログラムをコマンドプロンプトから実行します。
- PowerExchange と共に出荷された *startlst* スクリプトを実行します。*startlst* スクリプトは、*detail.log* ファイルを削除して PowerExchange リスナを起動します。

dtllst プログラムを実行するには、使用する PowerExchange リスナの実行モードに応じて、以下のいずれかの構文構成を使用します。

- PowerExchange リスナをフォアグラウンドモードで実行するには、以下の構文を使用します。
`dtllst node_name [config=directory/myconfig_file] [license=directory/mylicense_key_file]`
- PowerExchange リスナをバックグラウンドモードで実行するには、最後にアンパサンド (&) を追加します。
`dtllst node_name [config=directory/myconfig_file] [license=directory/mylicense_key_file] &`
- セッションが切断されたりユーザーがログアウトしたりした場合でも、PowerExchange リスナを永続的に実行するには、プレフィックス *nohup* を追加します。
`nohup dtllst node_name [config=directory/myconfig_file] [license=directory/mylicense_key_file] &`

node_name 変数は、デフォルトまたはオーバーライドされた *dbmover.cfg* ファイルの LISTENER 文で指定された PowerExchange リスナノード名です。

このコマンドは、*startlst* スクリプトに含めるか、またはコマンドプロンプトから実行できます。

PowerExchange リスナの起動 (Windows)

Windows では、以下のいずれかの方法で PowerExchange リスナを起動できます。

- **【スタート】** メニューから、PowerExchange リスナサービスを起動および管理します。
- *dtllstsi* プログラムから、PowerExchange リスナサービスを起動および管理します。
- コマンドプロンプトから開始オプションを付けて *dtllst* プログラムを呼び出し、手動で PowerExchange リスナを起動します。製品ライセンスでこの操作モードが許可されている必要があります。

コマンドプロンプトウィンドウから手動で *dtllst* プログラムを起動するには、以下の構文を使用します。

```
dtllst node_name [config=directory\myconfig_file] [license=directory\mylicense_key_file]
```

node_name 変数は、デフォルトまたはオーバーライドされた *dbmover.cfg* ファイルの LISTENER 文で指定された PowerExchange リスナノード名です。

PowerExchange リスナの起動 (z/OS)

z/OS では、以下の方法で PowerExchange リスナを起動できます。

- 標準の MVS START (S) コマンドを発行して、PowerExchange リスナを開始タスクとして実行します。
- RUNLIB ライブラリの STARTLST メンバにある JCL をサブミットします。パッチジョブの一部として JCL を含めることができます。

MVS START (S) コマンドを発行するには、以下の構文を使用します。

```
S task_name
```

task_name 変数は、PowerExchange リスナ開始タスクまたはパッチジョブの名前です。通常、PowerExchange リスナは開始タスクとして実行されます。このコマンドによって、システムの PROCLIB ライブラリから、開始タスクが実行されます。

PowerExchange リスナをパッチジョブとして起動するには、RUNLIB の STARTLST メンバの中にある JCL をサブミットします。

一般的なパラメータ

i5/OS、Linux、UNIX、または Windows で dtllst を実行する場合、以下のオプションのパラメータを含めて代替の構成ファイルおよびライセンスキーファイルを指定することができます。

CONFIG

Linux、UNIX、または Windows では、作成した dbmover.cfg 構成ファイルを、デフォルトの *install_directory/dbmover.cfg* ファイルの代わりに使用する場合は、そのファイルのフルパスとファイル名を指定します。この代替設定ファイルは、PWX_CONFIG 環境変数で指定した代替設定ファイルより優先されます。

i5/OS では、デフォルトの *datalib/CFG(DBMOVER)* メンバの代わりに使用する代替設定メンバのライブラリ、ファイル名、およびメンバ名を指定します。

LICENSE

Linux、UNIX、または Windows で、独自に作成したライセンスキーファイルをデフォルトの license.key ファイルの代わりに使用する場合は、そのファイルのフルパスおよびファイル名を指定します。この代替ライセンスキーファイルは、PWX_LICENSE 環境変数で指定した代替ライセンスキーファイルより優先されます。

i5/OS では、代替ライセンスキーメンバのライブラリ、ファイル名、およびメンバ名を指定します。

注: パラメータ CONFIG および LICENSE では、フルパスは、ファイルがデフォルトの場所にない場合にのみ必要です。

使用上の注意

PowerExchange リスナが起動すると、PowerExchange リスナの通信の準備が整ったことを示す、以下のメッセージが表示されます。

```
PWX00607 - "Listener node" VRM "n.n.n Build Vnm" started.
```

i5/OS、Linux、UNIX、および Windows では、以下の追加メッセージが表示され、PowerExchange リスナで使用されている dbmover.cfg 構成ファイルおよび license.key ファイルが識別されます。

```
PWX-00595 Using "config" "override_config_file"
PWX-00595 Using "license" "override_license_key_file"
```

環境変数 PWX_CONFIG および PWX_LICENSE を設定するか、またはコマンドでパラメータ config および license を指定してデフォルトの構成ファイルおよびライセンスファイルをオーバーライドした場合は、以下のメッセージも表示され、オーバーライドアクションに関する警告が示されます。

```
PWX-00369 The default "config" filename has been overridden.
PWX-00369 The default "license" filename has been overridden.
```

注意: 同じマシン上および同じユーザーアカウントで PowerExchange と PowerCenter を実行する場合は、PowerExchange と PowerCenter に対してそれぞれ別の環境を作成する必要があります。適切な PowerExchange 環境を作成し PowerExchange リスナを起動するには、スクリプト (pwxsettask.sh または pwxsettask.bat) を実行してください。

- Linux または UNIX では、次の構文を使用します。

```
pwxsettask.sh dtllst node_name ["config=directory/config_file"] ["license=directory/license_key_file"]
```

Linux または UNIX では、引用符の使用は任意です。

- Windows では、次の構文を使用します。

```
pwxsettask dtllst node_name ["config=directory/config_file"] ["license=directory/license_key_file"]
```

Windows では引用符の使用は必須です。

詳細については、「[PowerExchange と PowerCenter との環境変数の非互換性](#)」 (ページ 13) を参照してください。

関連項目：

- 「[Windows での PowerExchange Listener サービス](#)」 (ページ 92)
- 「[DTLLSTSI コマンド](#)」 (ページ 104)

Windows での PowerExchange Listener サービス

Windows では、PowerExchange Listener を Windows サービスとして実行できます。

Windows の **【スタート】** メニューから、PowerExchange Listener サービスを起動、テスト、および停止できます。

また、コマンドプロンプトで dtllstsi コマンドを入力することにより、PowerExchange Listener サービスを開始できます。PowerExchange Listener をサービスとして実行しない場合は、dtllst コマンドを使用します。

デフォルトでは、dbmover コンフィギュレーションファイルで、以下の文が Windows 上の PowerExchange Listener を定義します。

```
LISTENER=(node1,TCPIP,2480,262144,262144,262144)
```

Windows での PowerExchange Listener サービスの起動

Windows の **【スタート】** メニューから PowerExchange Listener サービスを起動できます。

PowerExchange Listener サービスを起動する手順

- ▶ Windows の **【スタート】** メニューから、**【スタート】** > **【すべてのプログラム】** > **【Informatica】** > **【PowerExchange】** > **【v.r.m】** > **【Start PowerExchange Listener】** の順にクリックします。

v.r.m 変数は、PowerExchange のバージョン、リリース、および変更レベルを表します。

PowerExchange Listener サービスがアクティブになると、通知領域のタスクバーの右端にアイコンが表示されます。アイコンが表示されない場合は、以下のディレクトリに置かれた PowerExchange の detail.log ファイルを確認します。

```
C:\windows\system32
```

Windows での PowerExchange Listener サービスのテスト

Windows の【スタート】メニューから、PowerExchange Listener サービスへの接続をテストできます。

PowerExchange Listener サービスをテストする手順

- ▶ Windows の【スタート】メニューから、【スタート】 > 【すべてのプログラム】 > 【Informatica】 > 【PowerExchange】 > 【v.r.m】 > 【PING PowerExchange Listener】の順にクリックします。

v.r.m 変数は、PowerExchange のバージョン、リリース、および変更レベルを表します。

接続がアクティブな場合、以下の情報が表示されます。

This does a PowerExchange "ping" to the node "node1"

```
C:\Informatica\PowerExchange\>dtlrexe loc=node1 prog=ping
PWX-00750 DTLREXE Input LOC=node1, PROG=PING, PARMS=<null>, UID=<>.
PWX-00755 DTLREXE Command OK!
```

```
C:\Informatica\PowerExchange\>pause
Press any key to continue . . .
```

Windows での PowerExchange Listener サービスの停止

Windows の【スタート】メニューから PowerExchange Listener サービスを停止できます。

PowerExchange Listener サービスを停止する手順

- ▶ Windows の【スタート】メニューから、【スタート】 > 【すべてのプログラム】 > 【Informatica】 > 【PowerExchange】 > 【v.r.m】 > 【Stop PowerExchange Listener】の順にクリックします。

v.r.m 変数は、PowerExchange のバージョン、リリース、および変更レベルを表します。

CLOSE および CLOSE FORCE コマンド

以下のサブタスクが完了した後、PowerExchange リスナのジョブまたはタスクを停止します。

- バルクデータ移動サブタスク
- CDC サブタスク（Unit of Work (UOW) の次のコミットで停止）
- PowerExchange リスナのサブタスク

PowerExchange リスナでの実行時間の長いサブタスクの場合は、CLOSE FORCE オプションを使用して、すべてのユーザーサブタスクを強制的にキャンセルし、PowerExchange リスナを停止します。

PowerExchange リスナは実行中のタスクが完了するまで 30 秒待機し、シャットダウンする前に、実行し続けているすべてのタスクを停止します。

あるいは、Linux、UNIX、または Windows システムから、いずれかのシステムで実行している PowerExchange リスナに、`pwxcmd close` および `closeforce` コマンドを発行します。

i5/OS での構文

i5/OS では、以下のコマンド構文を使用します。

```
SNDLSTCMD datalib CLOSE [CLOSEOPT(FORCE)]
```

datalib 変数は、PowerExchange データライブラリに対して、インストール時に入力したユーザー指定の名前です。

あるいは、Linux、UNIX、または Windows システムから、i5/OS システムで実行している PowerExchange リスナに、`pwxcmd close` および `closeforce` コマンドを発行します。

Linux および UNIX での構文

PowerExchange リスナがフォアグラウンドモードで実行している場合、C キーを押してから Enter キーを押すと、制御シャットダウンが実行されます。Ctrl キーを押しながら C キーを押すと、強制シャットダウンが実行されます。ただし、Ctrl キーを押しながら C キーを押して PowerExchange リスナプロセスを強制終了する代わりに、コマンドプロンプトで以下のいずれかのコマンドを発行します。

- PowerExchange リスナがフォアグラウンドモードで実行しており、CLOSE 操作を実行する場合、以下のコマンドを発行します。

C

- PowerExchange リスナがフォアグラウンドモードで実行しており、CLOSE FORCE 操作を実行する場合、以下のコマンドを発行します。

C F

- PowerExchange リスナがバックグラウンドモードで実行している場合は、Linux または UNIX オペレーティングシステムの標準コマンドを使用します。PowerExchange ロガープロセス ID を見つけ、このプロセスに対して“kill”コマンドを発行します。この制御シャットダウンは CLOSE 操作に似ています。

- プロセス ID を一覧表示するには、コマンドプロンプトで以下のコマンドを入力します。

```
ps -ef | grep dtllst
```

- CLOSE コマンドを送信して PowerExchange リスナプロセスを停止するには、以下のコマンドを入力します。

```
kill process_ID
```

- CLOSE FORCE コマンドを送信して PowerExchange リスナプロセスを停止するには、以下のコマンドを入力します。

```
Kill process_ID
```

- PowerExchange リスナプロセスが CLOSE FORCE コマンドに応答しない場合、クリーンシャットダウンを実行し、以下のコマンドを入力してプロセスを強制終了します。

```
kill -9 process_ID
```

あるいは、Linux、UNIX、または Windows システムから、Linux または UNIX システムで実行している PowerExchange リスナに、`pwxcmd close` および `closeforce` コマンドを発行します。

Windows での構文

Windows では、PowerExchange リスナの **dtllst** プログラムを対話式に実行しているコマンドプロンプトウィンドウで、以下のコマンドを入力します。

- CLOSE 操作を実行するには、以下のいずれかのコマンドを入力します。

```
{CLOSE|C}
```

- CLOSE FORCE 操作を実行するには、以下のいずれかのコマンドを入力します。

```
{CLOSE FORCE|C F}
```

PowerExchange リスナプロセスが CLOSE FORCE コマンドに応答しない場合、Ctrl キーを押しながら C キーを押します。最初に Ctrl キーを押しながら C キーを押すと、CLOSE コマンドが PowerExchange リスナサービスに送信されます。2 回目に Ctrl キーを押しながら C キーを押すと、PowerExchange は CLOSE FORCE コマンドを PowerExchange リスナサービスに送信します。

あるいは、Linux、UNIX、または Windows システムから、Windows システムで実行している PowerExchange リスナに、`pwxcmd close` および `closeforce` コマンドを発行します。

z/OS での構文

z/OS では、以下のコマンド構文を使用します。

```
F task_name,CLOSE [FORCE]
```

task_name 変数は、PowerExchange リスナ開始タスクまたはバッチジョブの名前です。通常、PowerExchange リスナは開始タスクとして実行されます。

あるいは、Linux、UNIX、または Windows システムから、z/OS システムで実行している PowerExchange リスナに、`pwxcmd close` および `closeforce` コマンドを発行します。

使用上の注意

コマンドを使用する前に、以下の注意事項を確認してください。

- CLOSE コマンドでは、制御シャットダウンが実行され、以下のメッセージが生成されます。
PWX-00618 Standard Close in progress.
PWX-00619 All tasks closed.
PWX-00623 Listener shutdown complete.
- FORCE パラメータを指定すると、PowerExchange は以下の処理を完了します。
 1. PowerExchanger リスナのアクティブなサブタスクの有無をチェックします。
 2. アクティブなサブタスクが存在している場合は、30 秒が経過するまで、アクティブなサブタスクの数を毎秒ポーリングします。
 3. この期間中、PowerExchange は、TCP/IP ネットワーク入力を待機しているサブタスクを終了し、以下のメッセージを発行します。
PWX-00653 Operator close met while waiting for TCPIP input
 4. アクティブなサブタスクが残っていたらキャンセルします。
 5. PowerExchanger リスナを停止します。

注: i5/OS および z/OS システムでは、PowerCenter ワークフロータスクが次のレコードを読み取った後でシャットダウンします。ただし、30 秒の待機期間が経過した後、PowerExchange ユーティリティと行テストサブタスクがアクティブのままになります。PowerExchange ユーティリティや行テストサブタスクおよび関連する PowerExchange リスナタスクをキャンセルするには、適切なオペレーティングシステムのコマンドを使用します。
- z/OS では、CLOSE FORCE コマンドは z/OS の STOP コマンドに似ています。z/OS の CANCEL コマンドの使用は推奨しません。CANCEL コマンドは、最初にアクティブなサブタスクがシャットダウンするのを待機せずに、PowerExchange リスナを停止するためです。この場合、PowerExchange リスナポートは、TCP/IP がクリーンアップ処理を完了するまで使用可能になりません。クリーンアップが完了する前に PowerExchange リスナのジョブを開始した場合、ポートが使用中であることを示すエラーメッセージが表示されます。

関連項目：

- [「STOPTASK コマンド」 \(ページ 106\)](#)
- [「pwxcmd close コマンド」 \(ページ 153\)](#)
- [「pwxcmd closeforce コマンド」 \(ページ 155\)](#)

DISPLAY ACTIVE および LISTTASK コマンド

TCP/IP アドレス、ポート番号、アプリケーション名、アクセスタイプ、ステータスなど、PowerExchange リスナの下で実行される各アクティブタスクに関する情報を表示します。LISTTASK コマンドと DISPLAY ACTIVE コマンドで生成される結果は同じです。ただし、その可用性はオペレーティングシステムに応じて異なります。

- i5/OS では、DISPLAY ACTIVE コマンドを発行します。
- z/OS では、LISTTASK コマンドまたは DISPLAY ACTIVE コマンドを発行します。
- Linux、UNIX、および Windows では、DISPLAY ACTIVE コマンドを発行します。

あるいは、Linux、UNIX、または Windows システムから、ローカルまたはリモートシステムで実行している PowerExchanger リスナに、`pwxcmd listtask` コマンドを発行できます。または、Windows での

PowerExchange Navigator で、**【データベース行のテスト】** ダイアログボックスで LISTTASK コマンドを入力できます。

構文

構文は、オペレーティングシステムに応じて異なります。

以下の構文は、コマンドラインからコマンドを入力するためのものです。

- i5/OS では、以下のコマンド構文を使用します。

```
SNDLSTCMD LSTMSGQ(data lib/listener) LSTCMD(DISPLAY) DISPLAYOPT(ACTIVE)
```

data lib 変数は、PowerExchange のデータライブラリに対して、インストール時に入力されたユーザー指定の名前です。

listener 変数は、アクセスするリスナに使用されるメッセージキューの名前です。デフォルトでは、これは LISTENER です。追加のリスナを実行している場合、この値は、必要に応じて DBMOVER.CFG ファイルの LISTENER 文で指定した値と一致している必要があります。

- あるいは、Linux、UNIX、または Windows システムで、コマンドライン、バッチファイル、またはスクリプトから、i5/OS システムで実行している PowerExchanger リスナに、`pwxcmd listtask` コマンドを発行できます。

Linux、UNIX、および Windows では、PowerExchanger リスナがフォアグラウンドモードで実行している場合、以下のいずれかのコマンドを入力します。

```
DISPLAY ACTIVE
```

または

```
D
```

Windows では、PowerExchange Navigator からコマンドを発行する場合、**【データベース行のテスト】** ダイアログボックスで LISTTASK コマンドを入力します。**【DB の種類】** リストから **【TASK_CNTL】** を選択し、**【Fetch】** ボックスで **【タスクの一覧】** を選択します。**【SQL 文】** ボックスには `listtask` が表示されます。

あるいは、Linux、UNIX、または Windows システムで、コマンドライン、バッチファイル、またはスクリプトから、Linux、UNIX、または Windows システムで実行している PowerExchanger リスナに、`pwxcmd listtask` コマンドを発行できます。

- z/OS では、以下のコマンド構文を使用します。

```
F task_name,{DISPLAY ACTIVE|D A}
```

または

```
F task_name,LISTTASK
```

task_name 変数は、PowerExchange リスナ開始タスクまたはバッチジョブの名前です。通常、PowerExchange リスナは開始タスクとして実行されます。

あるいは、Linux、UNIX、または Windows システムで、コマンドライン、バッチファイル、またはスクリプトから、z/OS システムで実行している PowerExchanger リスナに、`pwxcmd listtask` コマンドを発行できます。

出力例

z/OS システムでは、このコマンドによって、以下のメッセージ出力が生成されます。

```
PWX-00712 JobName=1, Partner=255.255.255.255, Port=7634, PwrCntrSess=app1, AM=CAPXRT, Mode=, Process=, SessId=
PWX-00729 Userid=userid, Client=clientid, File=capture_registration_file_name, Table=table_name,
DB=database_name
PWX-00713 1 active tasks
PWX-00709 0 Dormant TCBS
```

PWX-00712 メッセージは、アクティブなタスクごとに発行されます。

関連項目：

- [「pwxcmd listtask コマンド」 \(ページ 160\)](#)

DISPLAYSTATS コマンド

Linux、zLinux、UNIX、Windows、または z/OS で実行する PowerExchange リスナの監視統計を表示します。また、リスナに関連するクライアントタスクおよびソースまたはターゲット接続の統計も表示します。

注: i5/OS で実行される PowerExchange リスナの監視統計をオンデマンドで表示するには、リモートの Linux、UNIX、または Windows のマシンから pwxcmd displaystats コマンドを発行する必要があります。コマンドライン、CL プログラム、または REXX プロシージャから SNDLSTCMD コマンドを使用して DISPLAYSTATS コマンドを発行することはできません。詳細については、[「pwxcmd displaystats コマンド」 \(ページ 156\)](#)を参照してください。

このコマンドは以下の種類の統計を出力できます。

- PowerExchange リスナのリソース使用量およびクライアント要求に関するサマリ統計。これらの統計には、クライアントタスク、接続、アクセス方式、送受信したメッセージの数、送受信したデータのバイト数が含まれます。
- タスク ID およびアクセス方式ごとの、クライアント要求に対し送受信したメッセージおよびデータ量。メッセージおよびデータ量は、統計が生成された時点での合計です。CAPX または CAPXRT アクセス方式を使用する CDC タスクの場合、処理された SQL の挿入、更新、および削除の数が含まれます。
- クライアント要求を処理するために PowerExchange リスナの下で実行中のアクティブタスクに関する情報。これらの統計には、タスクの開始時刻、CPU の処理時間、アクセス方式、読み取りまたは書き込みモード、および関連するプロセス名およびセッション ID (ある場合) が含まれます。このほか、PowerExchange リスナに対して要求を発行したクライアントのポート番号と IP アドレスも含まれます。

コマンドを実行する前に、DBMOVER 構成ファイルで以下の文を構成します。

- MONITOR パラメータを STATS 文に指定して PowerExchange がこれらの統計を収集できるようにします。*interval* サブパラメータを含めると、必要時だけでなく、一定の周期でも統計情報を発行できます。
- z/OS でモニタリング出力を正しく表示するためには、LOG_LINE_LIMIT 文を 132 に設定します。この設定を行わないと、行が不自然に重なり、読みづらい状態になります。

ヒント: UNIX では、PowerExchange はメモリマップトファイルおよび共有メモリを、監視用のプロセス間通信 (IPC) 方式として使用します。メモリマップトファイルは dbmover.cfg ファイルで LOGPATH 文によって指定されるディレクトリ、または LOGPATH 文が指定されていない場合は現在のディレクトリに割り当てられます。Linux および zLinux では、PowerExchange は共有メモリを使用しますが、メモリマップトファイルは使用しません。PowerExchange は、PowerExchange リスナのサブタスクの終了時および PowerExchange リスナが閉じられたときに、共有メモリを解放し、メモリマップトファイルをクリーンアップします。共有メモリが解放されたことを確認するには、IPC コマンド `ipcs -m` を使用します。共有メモリを解放する必要がある場合には、`ipcrm -m` コマンドを使用します。

Linux、zLinux、UNIX、および Windows での構文

Linux、zLinux、UNIX、および Windows では、以下のコマンド構文を使用します。

```
displaystats [{listener|accessmethods|clients}]
```

または

```
ds [{l|a|c}]
```

ds *accessmethods* および displaystats *a* のように、コマンドおよびそのパラメータを長い形式と短い形式の混在で使うことができます。

z/OS での構文

z/OS では、MVS MODIFY (F)コマンドを使用して、DISPLAYSTATS コマンドを発行します。以下のコマンド構文を使用します。

```
F task_name,DISPLAYSTATS [{LISTENER|ACCESSMETHODS|CLIENTS}]
```

または

```
F task_name,DS [{L|A|C}]
```

task_name 変数は、PowerExchange リスナ開始タスクまたはバッチジョブの名前です。通常、PowerExchange リスナは開始タスクとして実行されます。

DS CLIENTS および DISPLAYSTATS C のように、コマンドおよびそのパラメータを長い形式と短い形式の混在で使うことができます。

パラメータ説明

DISPLAYSTATS コマンドでは、以下のオプションパラメータを 1 つ指定して、レポートタイプを示すことができます。

LISTENER または L

PowerExchange リスナのリソース使用量および処理されたクライアント要求に関するサマリ統計をレポートします。これらの統計には、メモリ使用量、CPU 処理時間、クライアント要求に対して作成されたタスク、アクティブタスク、ハイウォーターマークタスクの合計数、タスクの最大許容数、試行された接続、受け付けられた接続の数、アクティブ接続の合計数、送受信されたメッセージの数、送受信されたデータのバイト数が含まれます。z/OS での PowerExchange リスナの場合、これらの統計にはリスナの下で実行した Netport ジョブの合計数も含まれます。

ACCESSMETHODS または A

統計が生成された時点の、PowerExchange リスナメッセージの統計およびクライアントタスクおよびアクセス方式ごとのデータ転送アクティビティをレポートします。これらの統計には、アクティブタスクとアクセス方式の組み合わせごとに、読み取られた行および書き込まれた行の数、読み取られたデータおよび書き込まれたデータのバイト数、ソースまたはターゲットのファイル名またはデータマップファイル名、および CPU 処理時間が含まれます。CAPX または CAPXRT アクセス方式を使用する CDC 要求の場合、レポートにはタスクが実行した SQL の挿入、更新、削除の数も含まれます。

CLIENTS または C

関連するクライアントおよびセッション ID など、PowerExchange リスナの下で実行中のアクティブタスクに関する情報をレポートします。クライアントは PowerCenter、PowerExchange Navigator または PowerExchange ユーティリティなどのアプリケーションです。各アクティブクライアントタスクに対し、統計は以下の情報の一部またはすべてを表示します。ステータス、タスクが使用しているアクセス方式、タスクの読み取りまたは書き込みモード、プロセス名およびセッション ID（ある場合）、CPU 処理時間、開始日時。これらの統計には、クライアントのポート番号と IP アドレスも含まれます。クライアントが PowerCenter の場合、統計には PowerCenter セッション ID および CDC のアプリケーション名が含まれます。

デフォルトは LISTENER で、パラメータが指定されない場合に使用されます。

出力例 - リスナレポート

z/OS では、以下のコマンドを入力して、z/OS での PowerExchange リスナタスクのリスナレポートを生成します。

```
F task_name,DS
```

PowerExchange は以下のレポート出力を z/OS システムに書き込みます。

```
PWX-00723 Command <displaystats Listener> succeeded
PWX-37101 Listener <PWLST > ASID=375 (x'177') UserID=AUSER
PWX-37102 Memory
```

```

PWX-37103 Region below 16-MB line: In Use      108 KB Limit Value      9192 KB Free      9084 KB
PWX-37104 Region above 16-MB line: In Use    53912 KB Limit Value    1675264 KB Free    1621352 KB
PWX-37117 CPU Time
PWX-37118 TCB Time = 0 SRB Time = 0 zIIP-NTime = zIIP_normalized_time
PWX-37119 Listener = 0 hrs, 0 mins, 1 secs, 275762 mcrs
PWX-37106 Cumulative Requests
PWX-37107 Total Tasks=      11 Active Tasks =      3 HWM Tasks =      3 Maxtasks =      50
PWX-37108 Connections=    11 Accepted =      11 Active =      0
PWX-37109 Msgs Sent =      0 Msgs Received=    22
PWX-37110 Data Sent =      0 Data Received=    7304
PWX-37111 NetportJobs=      0

```

Windows では、コマンドプロンプトウィンドウを開き、PowerExchange インストールディレクトリに移動して、Windows での PowerExchange リスナ用の以下のコマンドを入力します。

```
ds l
```

リスナをフォアグラウンドで実行している場合は、PowerExchange はコマンドプロンプトウィンドウに以下のレポート出力を表示します。

```

PWX-00723 Command <displaystats Listener> succeeded
PWX-37102 Memory
PWX-37105 Total Memory 50952 KB
PWX-37117 CPU Time
PWX-37119 Listener = 0 hrs, 0 mins, 0 secs, 234001 mcrs
PWX-37106 Cumulative Requests
PWX-37107 Total Tasks=      2 Active Tasks =      2 HWM Tasks =      2 Maxtasks =      5
PWX-37108 Connections=    2 Accepted =      2 Active =      2
PWX-37109 Msgs Sent =      0 Msgs Received=      4
PWX-37110 Data Sent =      0 Data Received=    1328

```

注: PowerExchange リスナをバックグラウンドプロセスとして実行している場合は、pwxcmd プログラムを使用してコマンドを発行する必要があります。

以下のフィールドが 1 つまたは両方のレポートに存在します。

Listener

z/OS での PowerExchange リスナの場合のみ。DBMOVER 構成ファイルの LISTENER 文に指定されたリスナのノード名。

ASID

z/OS での PowerExchange リスナの場合のみ、リスナのアドレス空間の識別子。

UserID

z/OS での PowerExchange リスナの場合のみ、PowerExchange リスナタスクが実行中のユーザー ID。

Memory > Region below 16-MB line

z/OS での PowerExchange リスナの場合のみ、リスナアドレス空間の 16-MB ラインの下、リスナおよびそのクライアントタスクによるメモリ使用量。以下のメモリ統計がレポートされます。

- **In Use.** PowerExchange リスナおよびそのクライアントタスクにより使用されている、アドレス空間の 16-MB ラインの下メモリの量。
- **Limit Value.** 16-MB ラインの下最大メモリストレージ。
- **Free.** 16-MB ラインの下空きメモリの量。

Memory > Region above 16-MB line

z/OS での PowerExchange リスナの場合のみ、リスナおよびそのクライアントタスクにより使用されている、アドレス空間の 16-MB ラインの上メモリの量。以下のメモリ統計がレポートされます。

- **In Use.** PowerExchange リスナおよびそのクライアントタスクにより使用されている、アドレス空間の 16-MB ラインの上メモリの量。
- **Limit Value.** 16-MB ラインの上最大メモリストレージ。
- **Free.** 16-MB ラインの上空きメモリの量。

Total Memory

Windows での PowerExchange リスナの場合のみ、Windows で PowerExchange リスナにより使用されているメモリの合計量。

CPU Time > TCB Time

z/OS での PowerExchange リスナの場合のみ、z/OS での PowerExchange リスナアドレス空間のタスク制御ブロック (TCB) の CPU 処理時間。

CPU Time > SRB Time

z/OS での PowerExchange リスナの場合のみ、z/OS での PowerExchange リスナアドレス空間のサービス要求ブロック (SRB) の CPU 処理時間。

CPU Time > zIIP-NTime

System z Integrated Information Processor (zIIP) を使用し、DBMOVER 構成ファイルの USESUP 文を Y に設定する場合の、PowerExchange リスナおよびそのクライアントタスクにより使用される zIIP 正規化時間。zIIP の正規化時間は、CP と zIIP プロセッサの間の速度の差を調整するための CPU 時間です。

CPU Time > Listener

PowerExchange リスナおよびそのクライアントタスクの CPU 処理時間。

Total Tasks

PowerExchange リスナの開始以降の、その下で実行したクライアントタスクの合計数。

Active Tasks

統計が生成された時点の、PowerExchange リスナの下で実行中のアクティブクライアントタスクの数。

HWM Tasks

任意の時点の、PowerExchange リスナの下で実行した同時クライアントタスクの最大数。ハイウォーターマークタスクとも呼ばれます。HWM tasks の数を Maxtasks 値と比較して、Maxtasks の上限を超えないようにします。Maxtasks の上限に達した場合、PowerExchange リスナが遅延し、スループットの低下や接続タイムアウトを引き起こす可能性があります。

Maxtasks

PowerExchange リスナの下で同時に実行できるタスクの最大数。この値は DBMOVER メンバの MAXTASKS 文に設定されます。

Connections

PowerExchange リスナの下で実行するクライアントタスクに対して試行されたソースまたはターゲットへの接続の合計数。

Accepted

受け入れられた接続の数。

注: 一部の接続が拒否されたか失敗した場合、またはアクセス方式が接続を共有する場合は、接続の数よりも多くのアクセス方式が可能です。

Active

統計が生成された時点の、アクティブ接続の数。

Msgs Sent

クライアントからの要求の処理中に PowerExchange リスナが送信したメッセージの合計数。

Msgs Received

クライアントからの要求の処理中に PowerExchange リスナが受信したメッセージの合計数。

Data Sent

クライアント要求への応答で PowerExchange リスナが送信したデータの合計バイト数。バルクデータ移動および CDC タスクの両方のデータを含みます。

Data Received

クライアント要求への応答で PowerExchange リスナが受信したデータの合計バイト数。バルクデータ移動および CDC タスクの両方のデータを含みます。

NetportJobs

z/OS での PowerExchange リスナの場合のみ。PowerExchange リスナの下で実行した Netport ジョブの合計数。

出力例 - アクセス方式レポート

z/OS では、以下のコマンドを入力して、z/OS での PowerExchange リスナのアクセス方式レポートを生成します。

F listener_task,DS A

PowerExchange は以下のレポート出力を Windows システムの画面またはメッセージログに書き込みます。

```
PWX-00723 Command <displaystats AccessMethods> succeeded
PWX-37201 Active Access Methods
PWX-37202 Task ID = 42412 AM = CAPXRT
PWX-37203 Rows read = 1029 Rows written = 0
PWX-37204 Bytes read = 116277 Bytes written = 0
PWX-37205 File = d2ivd0.d002root_ROOT
PWX-37206 Table = <Capture Extract Realtime>
PWX-37208 Inserts = 564 Updates = 0 Deletes = 465
PWX-37121 CPU time = 0 hrs, 0 mins, 0 secs, 299809 mcrs
PWX-37202 Task ID = 42414 AM = NRDB
PWX-37203 Rows read = 10 Rows written = 0
PWX-37204 Bytes read = 570 Bytes written = 0
PWX-37205 File = ABCD.VSAM.MASTER_REC
PWX-37206 Table = <Non-relational source>
PWX-37202 Task ID = 42414 AM = KSDS
PWX-37203 Rows read = 10 Rows written = 0
PWX-37204 Bytes read = 800 Bytes written = 0
PWX-37205 File = XYZ.TEST.KSDS
PWX-37206 Table = XYZ.TEST.KSDS
PWX-37121 CPU time = 0 hrs, 0 mins, 0 secs, 76151 mcrs
```

注: Linux、UNIX、Windows、または zLinux では、displaystats accessmethods または ds a コマンドにより、Linux、UNIX、Windows、または zLinux 上で実行する PowerExchange リスナ用と同じタイプのレポート出力が提供されます。

以下のフィールドがこのレポートに存在します。

Task ID

クライアントからの要求を処理するように PowerExchange リスナが作成したアクティブタスクの識別子。クライアントタスクは、データのアクセス、ソースメタデータの読み取り、またはその他の機能に使用できます。

AM

タスクが使用するアクセス方式またはソースタイプ。

クライアントタスクでは複数のアクセス方式を使用できます。例えば、ソースデータの読み取りと、非リレーショナルソースデータのリレーショナル形式へのマッピングに、異なるアクセス方式を使用できます。出力例では、タスク 42412 は、**【ファイル】** フィールドに指定したデータマップファイルと、NRDB アクセス方式を使用して、非リレーショナルデータをリレーショナル形式にマッピングしています。同じタスクが KSDS アクセス方式を使用して、**【ファイル】** フィールドに指定した KSDS データセットからデータを取得します。

Rows read

アクティブクライアントタスクが指定したアクセス方式を使用してソースから読み取った行数。タスクが、非リレーショナルソースからリレーショナル形式へのマッピングのようなその他の機能を実行している場合、この値は 0 です。

Rows written

アクティブクライアントタスクが指定したアクセス方式を使用してターゲットに書き込んだ行数。タスクが、非リレーショナルソースからリレーショナル形式へのマッピングのようなその他の機能を実行している場合、この値は 0 です。

Bytes read

アクティブクライアントタスクが指定したアクセス方式を使用してソースから読み取ったデータのバイト数。タスクが、非リレーショナルソースからリレーショナル形式へのマッピングのようなその他の機能を実行している場合、この値は 0 です。

Bytes written

アクティブクライアントタスクがターゲットに書き込んだデータのバイト数。タスクが、非リレーショナルソースからリレーショナル形式へのマッピングのようなその他の機能を実行している場合、この値は 0 です。

File

データの処理に使用するアクセス方式に応じて、ソースまたはターゲットファイルの名前、あるいはデータマップファイルの名前。

Table

該当する場合、ソースまたはターゲットテーブル名。

Inserts

クライアントタスクが CDC 要求のための CAPX または CAPXRT アクセス方式を使用してソースから処理した SQL の挿入の数。

Updates

クライアントタスクが CDC 要求のための CAPX または CAPXRT アクセス方式を使用してソースから処理した SQL の更新の数。

Deletes

クライアントタスクが CDC 要求のための CAPX または CAPXRT アクセス方式を使用してソースから処理した SQL の削除の数。

CPU time

アクティブクライアントタスクの CPU 処理時間。データマップの読み取りなどの PowerExchange 内部タスクに対する CPU 時間はレポートされません。

出力例 - クライアントレポート

このレポートを使用して、PowerExchange リスナが作成したタスクに対するクライアント要求について確認します。

z/OS では、以下のコマンドを入力して、z/OS での PowerExchange リスナタスクのクライアントレポートを生成します。

`F listener_task,DS C`

PowerExchange は以下のレポート出力を z/OS システムに書き込みます。

```
PWX-00723 Command <displaystats Clients> succeeded
PWX-37112 Active Tasks
PWX-37113 Task ID = 42407 Status = Active
PWX-37114 Port = 6580 Partner = ::ffff:127.0.0.1
PWX-37115 PwrCtrSess = N/A
```

```

PWX-37207      Application = N/A
PWX-37116      AM          = CPR   Mode   = Read  Process = SessionId =
PWX-37113      Task ID    = 42412 Status   = Active
PWX-37114      Port       = 6580   Partner = ::ffff:10.33.8.137
PWX-37115      PwrCtrSess = N/A
PWX-37207      Application = myappl
PWX-37116      AM          = CAPXRT Mode   = Read  Process = SessionId =
PWX-37121      CPU time   = 0 hrs, 0 mins, 0 secs, 299809 mcrcs
PWX-37122      Start time  = 2014-05-01 14:32:28

```

注: Linux、UNIX、Windows、または zLinux では、`displaystats clients` または `ds c` コマンドにより、Linux、UNIX、Windows、または zLinux 上で実行する PowerExchange リスナ用と同じタイプの出力が提供されません。

以下のフィールドがこのレポートに存在します。

Task ID

クライアントからの要求を処理するように PowerExchange リスナが作成したアクティブタスクの識別子。クライアントタスクは、データのアクセス、ソースメタデータの読み取り、またはその他の機能に使用できます。

Status

アクティブクライアントタスクのステータス。以下のいずれかの値になります。

- Active
- STOPTASK コマンドがアクティブタスクに対して発行された場合、STOPTASK acknowledged。
- STOPTASK コマンドがアクティブタスクに対して発行された場合、STOPTASK set。

Port

タスクが作成されたクライアントのポート番号。

Partner

クライアントの TCP/IP アドレス。:ffff で始まる値は IPv6 アドレスを示します。

注: PowerExchange リスナは IPv4 形式のアドレスを使用しているので、フル IPv6 アドレスはレポートされません。

PwrCtrSess

クライアントが PowerCenter の場合、バルクデータ移動または CDC ワークフロー用の PowerCenter のセッション ID で、形式は `integration_service/workflow_name/session_name` です。それ以外の場合は該当しないのでこのフィールドには N/A が表示されます。

Application

PowerCenter CDC セッションの場合、PWXPC アプリケーション接続における **【アプリケーション名】** 属性の値。それ以外の場合は該当しないのでこの値は N/A です。

AM

タスクが使用するアクセス方式またはソースタイプ。

Mode

タスクが使用するデータ要求モードで、以下のいずれかの値になります。

- 読み取り
- 書き込み

Process

PowerExchange リスナでクライアント要求への対応を開始するプロセス名（該当する場合）。

SessionId

オプションでクライアント要求に定義されるセッション ID。この値は主に DB2 へのアクセスに対するクライアント要求に関連しています。PowerCenter と PowerExchange Client for PowerCenter (PWXPC) を使用する場合、この値は DBMOVER 構成ファイルの SESSID 文または PWXPC DB2 Batch 接続の【**相関 ID**】オーバーライド属性に指定した相関 ID です。ODBC 接続の場合、定義されていれば、DTLSESSID SQL エスケープシーケンスの値になります。

CPU time

クライアントタスクの CPU 処理時間。この値は必要に応じて時間、分、秒、マイクロ秒で表されます。データマップの読み取りなどの PowerExchange 内部タスクに対するこの値はレポートされません。

Start time

YYYY-MM-DD HH:MM:SS 形式のクライアントタスクの開始日時。データマップの読み取りなどの PowerExchange 内部タスクに対するこの値はレポートされません。

DTLLSTSI コマンド

Windows サービスとして実行する PowerExchange Listener を制御します。dtllstsi プログラムを使用して、以下のタスクを実行します。

- PowerExchange Listener サービスの作成または削除。
- PowerExchange Listener サービスの停止または起動。
- PowerExchange Listener サービスへの問い合わせによるそのステータスの判別。
- dtllstsi 構文に関するヘルプ情報を表示します。

ヒント: また、Windows の【**スタート**】メニューから、PowerExchange Listener サービスを起動、テスト、および停止できます。

PowerExchange Listener を Windows サービスとして実行しない場合、手動で起動できます。

構文

Windows では、以下のコマンド構文を使用します。

```
dtllstsi function "service_name" ["path\dtllstnt.exe"] [parms] [-u "user_id/password"] [-q]
```

パラメータ説明

コマンドに以下のパラメータを含めることができます。

function

必須。実行する関数。次のオプションがあります。

- **add**。PowerExchange Listener の新規サービスを作成します。
- **delete**。PowerExchange Listener の既存サービスを削除します。
- **start**。PowerExchange Listener サービスを起動します。
- **stop**。PowerExchange Listener サービスを停止します。
- **query**。メッセージ PWX-00541 または PWX-00542 を表示して、指定された PowerExchange Listener サービスが実行しているか停止しているかを示します。
- **help**。dtllstsi 構文を表示して、各パラメータを簡単に説明します。

"service_name"

必須。PowerExchange Listener サービスに対するユーザー指定の名前。

"path\dtllstnt.exe"

オプション。**add** 関数に対してのみ。PowerExchange Listener のサービス実行可能ファイルへのフルパス。

parms

オプション。**add** 関数に対してのみ。dbmover.cfg ファイル内にある LISTENER 文からの PowerExchange Listener のノード名。dbmover.cfg で複数の LISTENER 文を定義した場合は、1 つの Windows サービスで PowerExchange Listener サービスを複数起動できます。

-u "user_id/password"

オプション。**add** 関数に対してのみ。PowerExchange Listener のサービスを実行するために必要なユーザー ID およびパスワード。

-q

オプション。コンソールメッセージおよびプロンプトの表示を抑制します。

例

- **サービスの追加。** ユーザー ID とパスワードを必要とし、メッセージ出力を抑制する PowerExchange_Listener1 という名前の新規サービスを追加するには、以下の文を入力します。

```
dtllstsi add "PowerExchange_Listener1" "C:\Informatica\PowerExchange\dtllstnt.exe" node1 -u "joe/mypassword" -q
```
- **サービスの削除。** Windows システムから PowerExchange_Listener1 という名前のサービスを削除するには、以下の文を入力します。

```
dtllstsi delete "PowerExchange_Listener1"
```
- **サービスの起動。** 以前に追加した PowerExchange_Listener1 サービスを起動するには、以下の文を入力します。

```
dtllstsi start "PowerExchange_Listener1"
```

注: また、[スタート] > [すべてのプログラム] > [Informatica PowerExchange] > [Start PowerExchange Listener] の順にクリックして、PowerExchange Listener サービスを起動することもできます。
- **サービスの停止。** 実行中の PowerExchange_Listener1 サービスを停止するには、以下の文を入力します。

```
dtllstsi stop "PowerExchange_Listener1"
```
- **サービスの問い合わせ。** PowerExchange_Listener1 サービスが実行中かどうかを判別するには、以下の文を入力します。

```
dtllstsi query "PowerExchange_Listener1"
```

PowerExchange_Listener1 サービスが実行中でない場合は、以下のメッセージが発行されます。
PWX00542 Service "PowerExchange_Listener" STOPPED.

関連項目：

- [「PowerExchange リスナの起動」 \(ページ 89\)](#)
- [「Windows での PowerExchange Listener サービスの起動」 \(ページ 92\)](#)

STOPTASK コマンド

指定したアプリケーション名に基づいて個々の PowerExchange リスナタスクを停止します。

ヒント: アクティブなタスクの名前を特定するには、DISPLAY ACTIVE コマンドまたは LISTTASK コマンドを発行します。コマンドの出力で、タスクに対する PWX-00712 メッセージを探します。メッセージ内にあるタスク名を記録します。この値は、STOPTASK コマンドで入力する必要があります。

変更データの抽出中は、STOPTASK コマンドを発行しても、終了 UOW が出現するか、またはコミットしきい値に達するまで、タスクの停止は保留されます。コミット処理およびコミットしきい値の制御の詳細については、『PowerExchange インタフェース (PowerCenter 用の)』を参照します。

あるいは、Linux、UNIX、または Windows システムから、サポートされているいずれかの種類のシステムで実行している PowerExchange リスナに、`pwxcmd stoptask` コマンドを発行できます。または、Windows 上の PowerExchange Navigator で、**[データベース行のテスト]** ダイアログボックスで STOPTASK コマンドを入力できます。

i5/OS での構文

i5/OS では、以下のコマンド構文を使用します。

```
SNDLSTCMD LSTMSGQ(datalib/listener) LSTCMD(STOPTASK) STOPTASK(application_name)
```

説明:

- *datalib* 変数は、PowerExchange のデータライブラリに対して、インストール時に入力されたユーザー指定の名前です。
- *listener* 変数は、アクセスするリスナに使用されるメッセージキューの名前です。デフォルトでは、これは LISTENER です。追加のリスナを実行している場合、この値は、必要に応じて DBMOVER.CFG ファイルの LISTENER 文で指定した値と一致している必要があります。
- *application_name* は、停止対象となるアクティブな抽出プロセスの名前です。この名前は、DISPLAY ACTIVE コマンドで出力される PWX-00712 メッセージに含まれます。

Linux、UNIX、および Windows での構文

Linux、UNIX、または Windows では、以下のコマンド構文を使用します。

```
STOPTASK application_name
```

または

```
$ application_name
```

application_name は、停止するアクティブな抽出プロセスの名前です。この名前は、DISPLAY ACTIVE コマンドで出力される PWX-00712 メッセージに含まれます。

Windows では、PowerExchange Navigator からコマンドを発行する場合、**[データベース行のテスト]** ダイアログボックスで STOPTASK コマンドを入力します。**[DB の種類]** リストから **[TASK_CNTL]** を選択し、**[Fetch]** ボックスで **[タスクの停止]** を選択します。**[SQL Statement]** ボックスには `stoptask taskid=`が表示されます。タスク ID を入力します。

z/OS での構文

z/OS では、以下のコマンド構文を使用します。

```
F task_name,STOPTASK {APPL=application_name|TASKID=task_id}
```

説明:

- *task_name* は、PowerExchange リスナ開始タスクまたはバッチジョブの名前です。通常、PowerExchange リスナは開始タスクとして実行されます。
- *application_name* は、停止対象となるアクティブな抽出プロセスの名前です。この名前は、LISTTASK コマンドで出力される PWX-00712 メッセージに含まれます。

- *task_id* は、停止する PowerExchange リスナのタスクの数値識別子です。この ID は、LISTTASK コマンドで出力される PWX-00712 メッセージに含まれます。

関連項目：

- [「pwxcmd stoptask コマンド」 \(ページ 162\)](#)
- [「Windows での PowerExchange Listener サービス」 \(ページ 92\)](#)

第 13 章

PowerExchange ロッガー（z/OS 用）コマンド

この章では、以下の項目について説明します。

- [PowerExchange ロッガー（z/OS 用）コマンドの概要, 108 ページ](#)
- [PowerExchange ロッガー（z/OS 用）の開始, 110 ページ](#)
- [DEFINE_LOG コマンド, 110 ページ](#)
- [DELETE_LOG コマンド, 113 ページ](#)
- [DISPLAY OBJECT=CONNECTION コマンド, 114 ページ](#)
- [DISPLAY OBJECT=LOG コマンド, 116 ページ](#)
- [PRINT コマンド, 117 ページ](#)
- [RESOLVE_INDOUBT コマンド, 118 ページ](#)
- [STOP コマンド, 119 ページ](#)
- [ログ作成後の結合のコマンド, 120 ページ](#)

PowerExchange ロッガー（z/OS 用）コマンドの概要

PowerExchange ロッガー（z/OS 用）のコマンドを使用して、PowerExchange ロッガーのログデータセット、Unit of Work（UOW）、および接続を管理します。これらのコマンドは、PowerExchange ロッガー（z/OS 用）を使用するすべての PowerExchange インストールに関連しています。

PowerExchange ロッガーのコマンドを使用して、以下のタスクを実行できます。

- PowerExchange ロッガーのログデータセット、Unit of Work（UOW）、リーダー接続、およびライター接続に関する情報を表示する。
- ログレコードに記録されているインダウト UOW を解決する。
- PowerExchange ロッガーを停止します。
- SYSOUT データセットに、PowerExchange ロッガーのアクティブログのコンテンツを出力する。
- PowerExchange ロッガーの新規ログデータセットを定義する。
- リスタートデータセットから PowerExchange ロッガーのログレコードを削除する。

sysplex 環境で複数の z/OS イメージから変更をキャプチャし、複数の PowerExchange ロgger を使用している場合は、別のログ作成後の結合コマンドを使用して、複数の変更を 1 つのストリームに結合する方法を制御できます。

関連項目：

- [「ログ作成後の結合のコマンド」](#) (ページ 120)

PowerExchange ロgger のコマンドの発行方法

PowerExchange ロgger の基本コマンドは、以下のいずれかの方法で発行します。

- MVS MODIFY (F) コマンドを使用して、MVS オペレータコンソール、または SDSF などのインタフェースからコマンドを対話式で発行します。MODIFY コマンドを発行するときには、PowerExchange ロgger が実行中である必要があります。
- PowerExchange ロgger の設定を変更したり、ログおよびリスタートデータセットを管理したりするには、バッチユーティリティジョブの一部としてこれらのコマンドを指定します。これらのジョブを実行するときには、PowerExchange ロgger が実行中でない必要があります。変更は、PowerExchange ロgger をリスタートすると有効になります。

以下の表に、PowerExchange ロgger の各コマンドを発行するとき使用可能な方法の概要を示します。

コマンド	MVS MODIFY コマンドとの併用	バッチジョブでの使用
DEFINE_LOG	-	X
DELETE_LOG[DELETE_LOG]	X	X
DISPLAY OBJECT	X	X
PRINT[PRINT]	X	X
RESOLVE_INDOUBT	X	-
STOP[STOP]	X	-

PowerExchange ロgger のコマンドの構文ルールとガイドライン

PowerExchange ロgger (z/OS 用) の基本コマンドには、以下の構文ルールとガイドラインが適用されます。

- PowerExchange ロgger のコマンドには、同じパラメータを 2 回以上使用できません。
- バッチジョブでは、SYSIN DD 文に PowerExchange ロgger の制御カードを指定します。複数のパラメータが指定されている場合は、各パラメータの後にカンマ (,) を追加します。ただし、以下に示すように、END の直前にある最後のパラメータの後には不要です。

```
DEFINE_LOG  
DSNAME=PWX.MYLOGS.SECLOG.DS03,  
COPY=SECLOG  
END
```

- ログデータセットの定義のようなタスクを実行するには、1 つのバッチ変更ジョブに PowerExchange ロgger のコマンドを複数指定できます。
- MVS MODIFY (F) コマンドを使用して PowerExchange ロgger のコマンドを発行する場合は、PowerExchange ロgger のプロシージャ名を指定し、その後にカンマ (,) を付ける必要があります。構

文では、この名前は *proc_name* 変数で示されています。SDSF を使用する場合は、以下のように、先頭にスラッシュ (/) を置きます。

/F *proc_name*, COMMAND

- 角括弧[]や中括弧{}の使用など、その他の構文表記が、PowerExchange ロggerのコマンドに適用されません。

関連項目：

- [「PowerExchange コマンドの構文規則」 \(ページ 12\)](#)

PowerExchange ロgger (z/OS 用) の開始

MVS START (S)コマンドを使用すると、PowerExchange ロgger (z/OS 用) を初期起動、または再起動できます。例えば、STOP コマンドに応答して停止する場合など、PowerExchange ロggerをリスタートする必要があります。

PowerExchange エージェントを起動した後、PowerExchange ロggerを起動してから、他のPowerExchange CDC コンポーネントのアドレス空間を起動します。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

{START|S} *proc_name*

proc_name 変数は、PowerExchange ロggerのプロシージャ名です。

DEFINE_LOG コマンド

PowerExchange ロgger (z/OS 用) ログ定義を追加して、データセットを再起動します。以下のタイプのログデータセットの定義を追加できます。

- 追加のアクティブログ定義
- 置換アクティブログ定義
- 置換アーカイブログ定義

注: PowerExchange のインストールにより、少なくとも3つのアクティブログデータセットが作成されます。追加のアクティブログデータセットを定義できます。アクティブログは最大 31 個です。

ログメンテナンスタスクを含むバッチジョブに、制御文 DEFINE_LOG を指定します。PowerExchange では、SAMPLIB ライブラリの#ADDLOGS メンバに、アクティブログデータセット定義を追加するためのサンプルのJCL が用意されています。

構文

PowerExchange ロggerのアクティブログを定義するには、制御文に以下の構文を使用します。

```
DEFINE_LOG
DSN=data_set_name,
COPY={PRILOG|SECLOG},
[STARTRBA=X'start_rba', ENDRBA=X'end_rba']
END
```

PowerExchange ロggerのアーカイブログを定義するには、制御文に以下の構文を使用します。

```
DEFINE_LOG
DSN=data_set_name,
[STARTRBA=X'start_rba',ENDRBA=X'end_rba',]
[TODSTATIME=X'start_time',TODENDTIME=X'end_time',]
{VOL1=archivelog1_volser|VOL2=archivelog2_volser}
END
```

以下の構文規則を使用します。

- STARTRBA を指定する場合は、ENDRBA も指定する必要があります。
- TODSTATIME を指定する場合は、TODENDTIME も指定する必要があります。
- アーカイブログには、VOLUME1 と VOLUME2 のいずれかを指定する必要があります。両方は指定しないでください。

パラメータ説明

DEFINE_LOG には以下のパラメータを指定できます。

COPY

プライマリアクティブログとセカンダリアクティブログのいずれにデータセットを定義するかを示します。次のいずれかのオプションを入力します。

- PRILOG。プライマリログデータセットを定義します。
- SECLOG。バックアップコピーの役割を果たすセカンダリログデータセットを定義します。

このパラメータはアクティブログに必要です。

{DSN|DSNAME|LOG_DSNAME}

完全修飾ログデータセット名を指定します。最大長は 44 文字です。

END

ログデータセットの制御文 DEFINE_LOG の終了を示します。

ENDRBA

DSNAME パラメータで命名された置換ログデータセットの終了の RBA を指定します。置換ログデータセットは、以前から存在しているログファイルを置換するデータセットです。16 進数形式でこの RBA 値を入力します。先頭を文字 "X" としてから、正確に 12 桁の 16 進数を一重引用符で囲んで追加します。たとえば、X'0000004552FF' のようにします。この RBA 値がわからない場合は、ログデータセットが当初作成されたときに生成されたメッセージを調べるか、または PowerExchange ロggerの DISPLAY OBJECT=LOG コマンドを実行して取得できます。

このパラメータは、置換アクティブログデータセットまたは置換アーカイブログデータセットに対してのみ必要です。このパラメータは、新しいアクティブログデータセットを定義する場合には使用しないでください。

STARTRBA パラメータも指定する必要があります。STARTRBA の値は ENDRBA の値より小さくする必要があります。

STARTRBA

DSNAME パラメータで命名された置換ログデータセットの開始の RBA を指定します。置換ログデータセットは、以前から存在しているログファイルを置換するデータセットです。16 進数形式でこの RBA 値を入力します。先頭を文字 "X" としてから、ちょうど 12 桁の 16 進数を一重引用符で囲んで追加します。例えば、X'000000422108' のようにします。この RBA 値がわからない場合は、ログデータセットが当初作成されたときに生成されたメッセージを調べるか、または PowerExchange ロggerの DISPLAY OBJECT=LOG コマンドを実行して取得できます。

このパラメータは、非ログ作成後の結合環境での置換アクティブログデータセットまたは置換アーカイブログデータセットに対してのみ必要です。このパラメータは、新しいアクティブログデータセットを定義する場合には使用しないでください。

ENDRBA パラメータも指定する必要があります。ENDRBA の値は STARTRBA の値より大きくする必要があります。

TODENDTIME

ログ作成後の結合環境では、DSNAME パラメータで命名された置換アーカイブログデータセットの終了のタイムスタンプを指定します。置換アーカイブログデータセットは、以前から存在しているログファイルを置換するデータセットです。16 進数形式でこのタイムスタンプ値を入力します。先頭を文字 "X" としてから、正確に 16 桁の 16 進数を一重引用符で囲んで追加します。たとえば、X'BDC05246A8723542' のようにします。このタイムスタンプ値がわからない場合は、ログデータセットが当初作成されたときに生成されたメッセージを調べるか、または PowerExchange ロgger の DISPLAY OBJECT=LOG コマンドを実行して取得できます。

このパラメータは、ログ作成後の結合環境での置換アーカイブログデータセットに対してのみ必要です。このパラメータは、新しいログデータセットを定義する場合、またはログ作成後の結合関数を使用しない場合には使用しないでください。

TODSTATIME パラメータも指定する必要があります。TODSTATIME の値は TODENDTIME の値より小さくする必要があります。

TODSTATIME

ログ作成後の結合環境では、DSNAME パラメータで命名された置換アーカイブログデータセットの開始のタイムスタンプを指定します。置換アーカイブログデータセットは、以前から存在しているアーカイブログファイルを置換するデータセットです。16 進数形式でこのタイムスタンプ値を入力します。先頭を文字 "X" としてから、正確に 16 桁の 16 進数を一重引用符で囲んで追加します。たとえば、X'BDC04135624371A8' のようにします。このタイムスタンプ値がわからない場合は、アーカイブログデータセットが当初作成されたときに生成されたメッセージを調べるか、または PowerExchange ロgger の DISPLAY OBJECT=LOG コマンドを実行して取得できます。

このパラメータは、ログ作成後の結合環境での置換アーカイブログデータセットに対してのみ必要です。このパラメータは、新しいログデータセットを定義する場合、またはログ作成後の結合関数を使用しない場合には使用しないでください。

TODENDTIME パラメータも指定する必要があります。TODENDTIME の値は TODSTATIME の値より大きくする必要があります。

{VOL1|VOLUME1|COPYVOL1}

アーカイブログに対してのみ、*volser* と呼ばれるボリュームシリアル番号を指定します。アーカイブログデータセットはここに格納されます。このパラメータは、プライマリアーカイブログデータセットに対してのみ必要です。

{VOL2|VOLUME2|COPYVOL2}

アーカイブログに対してのみ、*volser* と呼ばれるボリュームシリアル番号を指定します。アーカイブログデータセットはここに格納されます。このパラメータは、セカンダリアーカイブログデータセットに対してのみ必要です。

例

非ログ作成後の結合環境では、以下のコマンドおよび制御文によって、ARCHLOG1.PWXL.LG1.D2007331.T1536523 という名前のプライマリアーカイブログデータセットが定義されます。

```
DEFINE LOG
DSN=PWXUSR1.ARCHLOG1.PWXL.LG1.D2007331.T1536523,
VOL1=DSK38F,
```



```
STARTRBA=X'000000168000',ENDRBA=X'0000002CFFFF'  
END
```

出力結果は以下のようになります。

```
L O G   S T A R T  
PWXEDM172502I EDM Logger BATCH initialization in-progress product level V2.4.05 08/31/2006  
PWXEDM172638I Logger system timestamp for ERDS = 2008.107 15:11:09.49  
DEFINE_LOG DSN=PWXUSR1.ARCHLOG1.PWXL.LG1.D2007331.T1536523,  
           VOL1=DSK38F,  
           STARTRBA=X'000000168000',ENDRBA=X'0000002CFFFF'   END  
PWXEDM172572I Logger input commands accepted execution started  
PWXEDM172506I EDM Logger BATCH Shutdown in progress  
PWXEDM172508I EDM Logger ##### TASK EDMLIPCO COMPLETE RC=00  
PWXEDM172508I EDM Logger ##### TASK EDMLCKPO COMPLETE RC=00  
PWXEDM172508I EDM Logger ##### TASK EDMLRLMO COMPLETE RC=00  
PWXEDM172508I EDM Logger ##### TASK EDMLLLGO COMPLETE RC=00  
PWXEDM172509I EDM Logger BATCH shutdown complete  
L O G   E N D
```

DELETE_LOG コマンド

PowerExchange ロgger（z/OS 用）の特定のログデータセットに関するすべての情報を、緊急リスタートデータセット（ERDS）から削除します。このコマンドを定期的に行って、古くなったアーカイブログデータセットに関する情報を削除します。

このコマンドを発行するには、MVS MODIFY（F）コマンドを使用するか、またはログメンテナンスタスクを含むバッチジョブに DELETE_LOG を追加します。

構文

このコマンドを MVS MODIFY コマンドと共に発行するには、以下の構文を使用します。

```
F proc_name,DELETE_LOG DSN=data_set_name
```

proc_name 変数は、PowerExchange ロggerのプロシージャ名です。

このコマンドをバッチモードで発行するには、バッチジョブに以下の制御文を追加します。

```
DELETE_LOG  
DSN=data_set_name  
END
```

パラメータ説明

DELETE_LOG には以下のパラメータを指定できます。

{DSN|DSNAME|LOG_DSNAME}

ERDS から情報を削除するログデータセットの完全修飾データセット名を指定します。最大長は 44 文字です。

END

バッチジョブにおけるログデータセットの制御文 DELETE_LOG の終了を示します。バッチ制御文に対してのみ必要です。

使用上の注意

- MVS MODIFY コマンドを使用して、DELETE_LOG コマンドを対話モードで実行する場合、PowerExchange ロggerは動作を続行できます。

- DELETE_LOG コマンドをバッチジョブの一部として実行する場合は、バッチジョブを実行する前に PowerExchange ロgger を停止する必要があります。また、PowerExchange ロgger のログに変更のあったデータソースに対して実行中の ECCR を停止します。

例

以下のコマンドをバッチモードで発行して、PWXUSR1.ARCHLOG1.PWXL.LG1.D2007331.T1536523 というアーカイブログデータセットを削除します。

```
DELETE_LOG
DSNAME=PWXUSR1.ARCHLOG1.PWXL.LG1.D2007331.T1536523
END
```

出力結果は以下のようになります。

```
LOG START
PWXEDM172502I EDM Logger BATCH initialization in-progress product level V2.4.05 08/31/2006
PWXEDM172638I Logger system timestamp for ERDS = 2008.107 15:11:09.49
DELETE_LOG

      DSNAME=PWXUSR1.ARCHLOG1.PWXL.LG1.D2007331.T1536523  END
PWXEDM172572I Logger input commands accepted execution started
PWXEDM172506I EDM Logger BATCH Shutdown in progress
PWXEDM172508I EDM Logger ##### TASK EDMLIPCO COMPLETE RC=00
PWXEDM172508I EDM Logger ##### TASK EDMLCKPO COMPLETE RC=00
PWXEDM172508I EDM Logger ##### TASK EDMLRLMO COMPLETE RC=00
PWXEDM172508I EDM Logger ##### TASK EDMLLLGO COMPLETE RC=00
PWXEDM172509I EDM Logger BATCH shutdown complete
LOG END
```

DISPLAY OBJECT=CONNECTION コマンド

PowerExchange ロgger（z/OS 用）のリーダー接続、ライタ接続、またはすべての Unit of Work（UOW）接続に関する情報を表示します。

構文

このコマンドを MVS MODIFY コマンドと共に発行するには、以下の構文を使用します。

```
MODIFY proc_name,DISPLAY OBJECT=CONNECTION,[{TYPE=READER|WRITER|UOW}],[CONID={*|pattern}]
```

または、以下の短いコマンド構文を使用できます。

```
F proc_name,DIS OB={CON|CONN},{TYPE={READER|WRITER|UOW}},CONID=[{*|pattern}]
```

パラメータを区切るのはカンマのみです。*proc_name* 変数は、PowerExchange ロgger のプロシージャ名です。

このコマンドをバッチモードで発行するには、バッチジョブに以下の制御文を追加します。

```
DISPLAY
OBJECT=CONNECTION,
[TYPE={READER|WRITER|UOW}],
[CONID={*|pattern}]
END
```

ヒント: DISPLAY のみを入力した場合、PowerExchange では、DISPLAY コマンドをキーワード OBJECT=CONNECTION と共に入力したものとして扱われます。

パラメータ説明

DISPLAY OBJECT=CONNECTION コマンドで以下のパラメータを指定できます。

TYPE

情報を表示する接続のタイプを定義します。次のいずれかのオプションを入力します。

- READER。ログのリーダー接続に関する情報を表示します。
- WRITER。ログのライター接続に関する情報を表示します。
- UOW。16 進形式の UOW ID など、UOW 接続に関する情報を表示します。この UOW ID を RESOLVE_INDOUBT UOW コマンドへの入力として使用できます。

このパラメータはオプションです。このパラメータを指定しなかった場合、PowerExchange では、すべての接続タイプに関する情報が表示されます。

CONID パラメータも指定した場合は、CONID の接続 ID 条件に一致する接続のみが表示されます。

CONID

情報を表示する PowerExchange ロgger 接続の接続 ID を指定します。接続 ID は、以下のいずれかの方法で入力できます。

- PowerExchange ロgger の接続を 1 つ選択するには、特定の接続 ID を入力します。
- PowerExchange ロgger の接続 ID をすべて選択するには、アスタリスク (*) によるワイルドカードのみを入力します。
- 接続 ID のサブセットを選択するには、ワイルドカードのパターンを入力します。ワイルドカードのパターンは、接続 ID の最初の部分、続いてアスタリスク (*) によるワイルドカードで構成されます (例、PWX*)。

デフォルトは、アスタリスク (*) によるワイルドカードです。

例

次のコマンドは、PowerExchange ロgger PWXLOG5 への接続に関する情報を表示します。

```
F PWXLOG5,DIS OB=CON
```

出力結果は以下のようになります。

```
WED 211201 20194777 wtr0-00 04 REPLY
WED 211201 20194777 PWXEDM172578I Logged 0 change records over 0 UOWs. Next log write at RBA 00004273E238 TIME
DAB2B42AC559CA10
WED 211201 20194777 PWXEDM172679I UOW report: no UOWs
WED 211201 20194777 PWXEDM172679I Reader report: no readers
WED 211201 20194777 PWXEDM172679I Writer report:
WED 211201 20194777 Writer - T Status - Logger UOW - Current SEQ ----- Oldest UOW
WED 211201 20194777 DB1G 1 inactive 00003D7E1300 00D8B55FFCCC31000000 00D8B55FFCCC31000000000000001
WED 211201 20194777 DC1G 1 inactive 0000421653FC 00DA7C8580F3B23A1400 00DA7C8580F3B23A14000000000002WED 211201
20194777 wtr0-00 04 REPLY
WED 211201 20194777 PWXEDM172578I Logged 0 change records over 0 UOWs. Next log write at RBA 00004273E238 TIME
DAB2B42AC559CA10
WED 211201 20194777 PWXEDM172679I UOW report: no UOWs
WED 211201 20194777 PWXEDM172679I Reader report: no readers
WED 211201 20194777 PWXEDM172679I Writer report:
WED 211201 20194777 Writer - T Status - Logger UOW - Current SEQ ----- Oldest UOW
WED 211201 20194777 DB1G 1 inactive 00003D7E1300 00D8B55FFCCC31000000 00D8B55FFCCC31000000000000001
WED 211201 20194777 DC1G 1 inactive 0000421653FC 00DA7C8580F3B23A1400 00DA7C8580F3B23A14000000000002
```

関連項目：

- [「DISPLAY OBJECT=LOG コマンド」 \(ページ 116\)](#)

DISPLAY OBJECT=LOG コマンド

PowerExchange ロgger (z/OS) のアクティブログデータセット、アーカイブログデータセット、または両方のタイプのログデータセットに関する情報を表示します。

構文

このコマンドを MVS MODIFY コマンドと共に発行するには、以下の構文を使用します。

```
MODIFY proc_name, DISPLAY OBJECT=LOG, [TYPE={ALL|ACTIVE|ARCHIVE}], [DSN={*|pattern}]
```

あるいは、以下の構文を使用できます。

```
F proc_name, DIS OB=LOG, [TYPE={ALL|ACT|ARC}], [DSN={*|pattern}]
```

proc_name 変数は、PowerExchange ロgger のプロシージャ名です。

このコマンドをバッチモードで発行するには、バッチジョブに以下の制御文を追加します。

```
DISPLAY  
OBJECT=LOG,  
[TYPE={ALL|ACTIVE|ARCHIVE}],  
[DSN={*|pattern}]  
END
```

パラメータ説明

DISPLAY OBJECT=LOG には以下のパラメータを指定できます。

TYPE

情報を表示するログデータセットのタイプを定義します。次のいずれかのオプションを入力します。

- ALL。指定された DSN 名に一致するすべてのアクティブまたはアーカイブログに関する情報を表示します。
- ACTive。指定された DSN 名に一致するすべてのアクティブログに関する情報を表示します。
- ARChive。指定された DSN 名に一致するすべてのアーカイブログに関する情報を表示します。

ヒント: オプション名に使用されている大文字はオプション名の短縮形を示しており、この短縮形で入力できます。

デフォルトは ACTive です。

[DSN|DSNAME]={*|*pattern*}

情報を表示する PowerExchange ロgger のログデータセットのデータセット名を指定します。データセット名は、以下のいずれかの方法で入力できます。

- PowerExchange ロgger のログデータセットを 1 つ選択するには、完全修飾データセット名を入力します。
- PowerExchange ロgger のログデータセットをすべて選択するには、アスタリスク (*) によるワイルドカードのみを入力します。
- ログデータセットのサブセットを選択するには、ワイルドカードのパターンを入力します。ワイルドカードのパターンは、データセット名の最初の部分、続いてアスタリスク (*) によるワイルドカードで構成されます (例、PWXUSR1.PWXT.PWXL.SECA)。

デフォルトは、アスタリスク (*) によるワイルドカードです。

例

以下のコマンドは、PowerExchange ロgger PWXLLOG5 のアクティブログのすべてのデータセットに関する情報を表示します。

```
F PWXLLOG5,DIS OB=LOG,TYPE=ACT,DSN=*
```

出力結果は以下のようになります。

```
PWXEDM172679I Logger LOG ACTIVE report follows:
*Start RBA      End RBA      Log Dsname      Status
0000093A8000   00000C4DFFFF   PWXUSR1.PWXT.PWXL.PRILOG.DS01   REUS,IN-USE
00000C4E0000   00000F617FFF   PWXUSR1.PWXT.PWXL.PRILOG.DS02   REUS
000006270000   0000093A7FFF   PWXUSR1.PWXT.PWXL.PRILOG.DS03   REUS
0000093A8000   00000C4DFFFF   PWXUSR1.PWXT.PWXL.SECLOG.DS01   REUS,IN-USE
00000C4E0000   00000F617FFF   PWXUSR1.PWXT.PWXL.SECLOG.DS02   REUS
000006270000   0000093A7FFF   PWXUSR1.PWXT.PWXL.SECLOG.DS03   REUS
```

関連項目：

- [「DISPLAY OBJECT=CONNECTION コマンド」 \(ページ 114\)](#)

PRINT コマンド

SYSOUT データセットに対して、PowerExchange ロgger (z/OS 用) のアクティブログおよびアーカイブログのレコードを 16 進数形式で出力します。SYSOUT データセットは、このコマンドを実行するたびに動的に割り当てられます。設定するパターンに応じて、以下のレコードのセットを出力できます。

- 指定した開始 RBA から始まる 50 件のログレコード
- 指定した終了 RBA までのすべてのログレコード
- 指定した開始 RBA と終了 RBA の間のすべてのログレコード

通常、PRINT コマンドは、トラブルシューティングのために Informatica グローバルカスタマサポートから指示があったときにのみ使用します。このコマンドによって、大量の出力が生成される場合があります。

構文

このコマンドを MVS MODIFY コマンドと共に発行するには、以下の構文を使用します。

```
F proc_name,PRINT {STARBA=x' rba_number',ENDRBA=x' rba_number'}
```

proc_name 変数は、PowerExchange ロgger のプロシージャ名です。

このコマンドをバッチモードで発行するには、バッチジョブに以下の制御文を追加します。

```
PRINT
{STARBA=x' rba_number',ENDRBA=x' rba_number'}
END
```

STARBA、ENDRBA、または両方を指定する必要があります。両方のパラメータを指定する場合は、パラメータの間にカンマを入れてください。

パラメータ説明

出力するログレコードの範囲を示すには、以下のパラメータを少なくとも 1 つ入力する必要があります。両方のパラメータを指定した場合は、指定した開始 RBA と終了 RBA の間のログレコードが出力されます。

{ENDRBA|STOPRBA|STORBA}

出力するログレコードの範囲の終了を示す RBA を指定します。16 進数形式でこの RBA 値を入力します。先頭を文字 "X" としてから、正確に 12 桁の 16 進数を一重引用符で囲んで追加します。たとえば、

X'0000004552FF'のようにします。この RBA 値がわからない場合は、ログレコードが作成されたときに生成されたメッセージを調べるか、または PowerExchange ロggerの DISPLAY OBJECT=LOG コマンドを実行して取得できます。

STARBA 値も入力していない場合は、ENDRBA の位置までのログレコードがすべて出力されます。

STARBA と ENDRBA 両方の値を入力する場合、ENDRBA の値は STARBA の値より大きくする必要があります。

{STARBA|STARTRBA|LOGRBA}

出力するログレコードの範囲の開始を示す RBA を指定します。16 進数形式でこの RBA 値を入力します。先頭を文字 "X" としてから、ちょうど 12 桁の 16 進数を一重引用符で囲んで追加します。例えば、X'000000422108' のようにします。この RBA 値がわからない場合は、ログレコードが作成されたときに生成されたメッセージを調べるか、または PowerExchange ロggerの DISPLAY OBJECT=LOG コマンドを実行して取得できます。

ENDRBA 値も入力していない場合は、STARBA の位置から始まる 50 件のログレコードが出力されます。

STARBA と ENDRBA 両方の値を入力する場合、ENDRBA の値は STARBA の値より小さくする必要があります。

例

以下のコマンドは、指定した開始 RBA と終了 RBA の間にある PowerExchange ロggerのログレコードを出力します。

```
F PWXLOGR1,PRINT STARBA=x'000000422108',ENDRBA=x'0000004552FF'}
```

関連項目：

- [「DISPLAY OBJECT=LOG コマンド」 \(ページ 116\)](#)

RESOLVE_INDOUBT コマンド

PowerExchange ロgger (z/OS 用) に、ステータスが実行中の UOW の開始を強制的にコミットまたは破棄させます。

例えば、ECCR が異常終了し、実行中の UOW が残っていると想定します。通常の場合、ECCR のウォームスタートを実行したときに、実行中の UOW は解決されます。ただし、ECCR を再起動できないか、ウォームスタートを実行したときに、実行中ステータスの正常な解決が行われません。この場合、RESOLVE_INDOUBT コマンドを使用して実行中 UOW を解決します。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
MODIFY proc_name,RESOLVE_INDOUBT UOW=X'uow_id'[,ECCR=eccr_name],ACTION={ABORT|COMMIT}
```

または、以下の短いコマンド構文を使用できます。

```
F proc_name,RI U=X'uow_id'[,E=eccr_id],A={A|C}
```

```
F proc_name,RES_UOW U=X'uow_id'[,E=eccr_id],A={A|C}
```

proc_name 変数は、PowerExchange ロggerのプロシージャ名です。

パラメータ説明

以下のパラメータが必要です。

UOW=X' uow_id

コミットまたは破棄する実行中の UOW の UOW ID。ECCR によって割り当てられた UOW ID を 16 進形式で入力します。先頭の文字は「X」で、その後の 36 文字列を一重引用符で囲みます。この識別子を取得するには、DISPLAY OBJECT=CONNECTION,TYPE=UOW コマンドを発行し、出力で UOW=X' value'を探します。

ECCR=eccr_id

オプション。コミットまたは破棄する実行中の UOW をキャプチャした ECCR の名前を指定します。このパラメータを指定すると、PowerExchange ロgger は、解決しようとしている UOW を ECCR が所有しているかを確認します。誤った ECCR 名を指定すると、コマンドはエラーメッセージ PWXEDM172681E で終了します。

ACTION={COMMIT|ABORT}

指定した実行中の UOW をコミットするか破棄するかを示します。次のいずれかのオプションを入力します。

- COMMIT。UOW をコミットします。
- ABORT。UOW を破棄します。

例

DISPLAY OBJECT=CONNECTION,TYPE=UOW コマンドは以下のレポートを生成しました。このレポートは、PowerExchange ロgger PWXLOGR1 に実行中の UOW が存在していることを示します。

PWXEDM172679I Logger UOW Connection report follows:

Name	Logger_UOW	Type_and_Status
E7E800000000000012F324F9B0000000000000	SXPLO000006A8D6FE00000000	UOW In_Flight

この実行中の UOW をコミットするには、レポートの【名前】フィールドで UOW の 16 進数値を使用して次の RESOLVE_INDOUBT UOW コマンドを発行します。

F PWXLOGR1,RESOLVE_INDOUBT U=X'E7E800000000000012F324F9B000000000000',A=C

関連項目：

- [「DISPLAY OBJECT=CONNECTION コマンド」](#) (ページ 114)

STOP コマンド

アクティブな PowerExchange ロgger (z/OS 用) を停止します。MVS MODIFY (F) コマンドと共に発行する PowerExchange ロgger の STOP コマンドを使用するか、または標準の MVS STOP (P) コマンドを使用します。

STOP コマンドを発行する前に、ECCR、および PowerExchange ロgger へのログのリーダー接続がすべて終了していることを確認します。PowerExchange ロgger は、実行しているリーダー接続およびライタ接続がすべて完了するか、またはキャンセルされるまで停止できません。リーダー接続またはライタ接続がまだアクティブのときに STOP コマンドを発行すると、PowerExchange ロgger は接続の終了を待って停止します。

構文

PowerExchange の STOP コマンドを発行するには、以下の構文を使用します。

F proc_name,STOP

MVS STOP (P) コマンドを発行するには、以下の構文を使用します。

P proc_name

proc_name 変数は、PowerExchange ロggerのプロシージャ名です。

使用上の注意

コマンドを発行する前に、以下の注意事項を確認してください。

- PowerExchange ロggerで ECCR またはログのリーダー接続がまだアクティブのときに PowerExchange の STOP コマンドを発行すると、PowerExchange ロggerは接続の終了を待って停止します。また、PowerExchange では、ECCR またはログの未処理のリーダータスクごとに、以下のメッセージが発行されます。
PXEDM172596E Logger waiting for {reader|ECCR} Client (*job_name*) to end
- PowerExchange の STOP コマンドの完了後は、PowerExchange ロggerでは追加のコマンドを受け入れられません。
- PowerExchange の STOP コマンドの代わりに、MVS STOP (P) コマンドを使用できます。MVS STOP コマンドを実行する前に、PowerExchange ロggerに ECCR またはログの未処理のリーダータスクが付随していないことを確認してください。
- ECCR およびログの未処理のリーダータスクの一部を終了できない場合は、MVS CANCEL コマンドを使用して PowerExchange ロggerを終了できます。

ログ作成後の結合のコマンド

ログ作成後の結合環境では、PowerExchange は、ログ読み取り API を使用して、sysplex の各 MVS イメージに対し、各 PowerExchange ロggerのアクティブログおよびアーカイブログから変更を読み取ります。次に、PowerExchange は、変更データを時系列に 1 つのストリームに結合して、抽出処理ができるようにします。ログ作成後の結合のコマンドを使用すると、以下の方法で結合処理を管理できます。

- ログ読み取り処理の状態を表示する。
- ログ作成後の結合の開始されたジョブを停止する。
- トレース情報を生成する。

ログ作成後の結合のコマンドを発行するには、標準的な MVS MODIFY (F) コマンドを使用します。ログ作成後の結合の開始されたタスク名またはジョブ名を指定し、その後にカンマ (,) を付ける必要があります。コマンド構文では、この名前は *task_name* 変数で示されています。

DISPLAY および STATUS コマンド

ログ読み取り API を使用して、ログ作成後の結合の開始タスクに接続されているログ読み取りプロセスに関する情報を表示します。この情報には、変更が統合されている PowerExchange ロgger、および各ログデータセットでの現在の読み取り場所が含まれています。

注: DISPLAY コマンドと STATUS コマンドの機能は同等です。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
F task_name, {DISPLAY|DIS}
```

または

```
F task_name, {STATUS|STAT}
```

task_name 変数は、ログ作成後の結合の開始タスクまたはバッチジョブの名前です。

QUIT および STOP コマンド

ログ作成後の結合の開始されたタスクを停止します。ログ作成後の結合の開始されたタスクで、アクティブなログ読み取りプロセスが実行中の場合、これらのプロセスは異常終了します。

注: QUIT コマンドと STOP コマンドの機能は同等です。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
F task_name, {QUIT|STOP}
```

task_name 変数は、ログ作成後の結合の開始タスクまたはバッチジョブの名前です。

TRACEE、TRACEL、および TRACES コマンド

ログ作成後の結合の開始されたタスクに対してトレース情報の生成を制御します。トレース情報の主な用途はトラブルシューティングです。これらのコマンドは、Informatica グローバルカスタマサポートから指示があったときにのみ使用します。

以下のトレースコマンドが使用可能です。

- TRACEE。ログ作成後の結合タスクの開始されたタスクに対するトレースを無効にします。
- TRACEL。長文式のトレースをアクティブ化します。このトレースでは、すべてのトレース情報が生成されます。
- TRACES。短文式のトレースをアクティブ化します。このトレースでは、各トレースの最大 32 バイトの情報が生成されます。

構文

以下のコマンド構文を使用します。

```
F task_name, {TRACEE|TRACEL|TRACES}
```

task_name 変数は、ログ作成後の結合の開始タスクまたはバッチジョブの名前です。

第 14 章

PowerExchange ロッガー (Linux、UNIX、Windows 用) の コマンド

この章では、以下の項目について説明します。

- [PowerExchange ロッガー \(Linux、UNIX、Windows 用\) のコマンドの概要, 122 ページ](#)
- [PowerExchange ロッガー \(Linux、UNIX、Windows 用\) の起動, 123 ページ](#)
- [CONDENSE コマンド, 128 ページ](#)
- [DG コマンド, 129 ページ](#)
- [DISPLAY ALL コマンド, 130 ページ](#)
- [DISPLAY CPU コマンド, 132 ページ](#)
- [DISPLAY EVENTS コマンド, 132 ページ](#)
- [DISPLAY MEMORY コマンド, 133 ページ](#)
- [DISPLAY RECORDS コマンド, 134 ページ](#)
- [DISPLAY STATUS コマンド, 135 ページ](#)
- [DL コマンド, 135 ページ](#)
- [FILESWITCH コマンド, 137 ページ](#)
- [SHUTCOND コマンド, 138 ページ](#)
- [SHUTDOWN コマンド, 139 ページ](#)

PowerExchange ロッガー (Linux、UNIX、Windows 用) のコマンドの概要

PowerExchange ロッガー (Linux、UNIX、Windows 用) のコマンドを使用して、PowerExchange ロッガープロセスを制御または停止したり、PowerExchange ロッガー処理に関する情報を表示します。

これらのコマンドを使用して、以下のタスクを実行します。

- PowerExchange ロッガープロセスを停止する。

- PowerExchange ロggerのログファイルの暗号化を有効にするために、暗号化パスワードを使用して PowerExchange ロggerをコールドスタートする。
- PowerExchange ロggerの処理に関する次の統計を表示する:
 - PowerExchange ロggerのライタおよびコマンドハンドラサブタスクのステータス情報
 - PowerExchange ロggerが、開始以降、アクティブなロギングサイクル、現在のロggerログファイル、各 PowerExchange ロggerグループ定義に対して処理した変更レコードの数
 - PowerExchange ロggerグループ定義ごとの、ディスク上のログファイルにまだフラッシュされていない変更レコードの数
 - PowerExchange ロggerが使用した CPU 時間
 - メモリ使用量 (PowerExchange ロggerタスクごとおよび合計)
- 新しいログファイルのセットに手動で切り替える。
- 待機間隔中にライタサブタスクにソースデータの読み込みを手動で再開させる。

PowerExchange ロggerを起動するためのコマンドを除いて、Linux、UNIX、または Windows 上で実行されているアクティブな PowerExchange ロggerプロセスに対してコマンドを発行する必要があります。コマンドの説明は、各コマンドの目的、構文、および使用法について説明し、該当する場合は出力例を示します。この説明は、フォアグラウンドモードで実行されている PowerExchange ロggerプロセスへのコマンドの発行に焦点を合わせています。

または、pwxcmd プログラムを使用して、同一のシステムまたは別のシステムでバックグラウンドモードまたはフォアグラウンドモードで実行されている PowerExchange ロggerプロセスにコマンドを送信できます。バックグラウンドモードで PowerExchange ロggerプロセスを実行する場合、pwxcmd プログラムを使用してコマンドを発行する必要があります。pwxcmd コマンドは、コマンドライン、バッチファイル、またはスクリプトから発行できます。

関連項目：

- [「pwxcmd コマンド」 \(ページ 142\)](#)

PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) の起動

PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) を起動するには、pwxcl プログラムを実行します。このプログラムは、PowerExchange インストールディレクトリにあります。

pwxcl を起動する前に、『*PowerExchange CDC ガイド (Linux、UNIX、Windows 用)*』で説明している PowerExchange ロggerの設定手順を済ませておきます。

注: pwxcl の起動に pwxcmd プログラムを使用することはできません。

構文

pwxcl を実行する構文は、オペレーティングシステムに応じて異なります。

Linux または UNIX システムでは、以下のいずれかの構文を使用して、コマンドラインから PowerExchange ロggerを起動します。

- フォアグラウンドで PowerExchange ロggerを実行するには、以下の構文を使用します。

```
pwxcl [coldstart=Y|N] [specialstart=Y|N] [config=directory/myconfig_file] [cs=directory/mycondense_config_file] [license=directory/mylicense_key_file] [encryptepwd=encrypted_encryption_password]
```

- バックグラウンドモードで PowerExchange ロggerを実行するには、以下の構文に示すように、文の最後にアンパサンド (&) を追加します。

```

pwxcl [coldstart=Y|N] [specialstart=Y|N] [config=directory/myconfig_file] [cs=directory/
mycondense_config_file] [license=directory/mylicense_key_file] [encryptpwd=encrypted_encryption_password]
&

```

- セッションが切断されたりユーザーがログアウトした場合でも、継続的にバックグラウンドモードで PowerExchange ロggerを実行するには、以下の構文に示すように、プレフィックス nohup を追加します。

```

nohup pwxcl [coldstart=Y|N] [specialstart=Y|N] [config=directory/myconfig_file] [cs=directory/
mycondense_config_file] [license=directory/mylicense_key_file]
[encryptpwd=encrypted_encryption_password] &

```

Windows システムでは、コマンドラインから以下の構文を使用して、フォアグラウンドモードで PowerExchange ロggerを起動します。

```

pwxcl [coldstart=Y|N] [specialstart=Y|N] [config=directory\myconfig_file] [cs=directory
\mycondense_config_file] [license=directory\mylicense_key_file] [encryptpwd=encrypted_encryption_password]

```

Windows システム上でバックグラウンドタスクとして PowerExchange ロggerを起動する場合、複数のオプションがあります。pwxcl を実行する .bat ファイルを作成した後、最小化したウィンドウまたはスクリプトファイルから .bat ファイルを実行できます。最小化したウィンドウでのプログラムの実行の詳細については、Microsoft Windows のマニュアルを参照します。

パラメータ説明

pwxcl 文では、以下のオプションパラメータを 1 つ以上指定できます。

coldstart

PowerExchange ロggerをコールドスタートするかウォームスタートするかを示します。次のいずれかの値を入力します。

Y

PowerExchange ロggerをコールドスタートします。コールドスタートを実行するには、COLDSTART=Y と指定する必要があります。CDCT ファイルにログエントリがある場合、PowerExchange ロggerはこれらのエントリを削除します。

N

CDCT ファイルに示されているリスタートポイントから PowerExchange ロggerをウォームスタートします。リスタート情報が CDCT ファイルに存在しない場合は、PowerExchange ロggerがエラーメッセージを表示して停止します。デフォルトは N です。

coldstart=Y と specialstart=Y の両方を指定しないでください。指定すると、coldstart=Y が優先されます。

config

インストール先ディレクトリ内のデフォルトの dbmover コンフィギュレーションファイルをオーバーライドする DBMOVER コンフィギュレーションファイルのフルパスとファイル名を指定します。このオーバーライドファイルのパスまたはファイル名は、デフォルトファイルのパスまたはファイル名と異なっている必要があります。オーバーライドファイルは、PWX_CONFIG 環境変数でオプションで指定したオーバーライド設定ファイルよりも優先されます。

CS

PowerExchange ロgger設定ファイルのフルパスおよびファイル名を指定します。インストール先ディレクトリ内のデフォルトの pwxcl 構成ファイルをオーバーライドする PowerExchange ロggerの構成ファイルを、このパラメータで指定します。このオーバーライドファイルのパスまたはファイル名は、デフォルトファイルのパスまたはファイル名と異なっている必要があります。

encryptepwd

PowerExchange ロggerのログファイルの暗号化を有効にするための暗号化形式のパスワード。このパスワードにより、PowerExchange ロggerはロggerログファイルごとに一意の暗号化キーを生成できます。パスワードは CDCT ファイルに暗号化形式で格納されます。セキュリティのため、パスワードは CDCT バックアップファイルに格納されず、PWXUCDCT ユーティリティで生成できる CDCT レポートには表示されません。

このパラメータを指定する場合は、同じ pwxcl コマンドで coldstart=Y も指定する必要があります。

このパラメータを指定し、PowerExchange ロgger構成ファイル pwxcl.cfg で ENCRYPTPWD パラメータも指定した場合は、構成ファイルのパラメータが優先されます。このパラメータを指定し、PowerExchange ロgger構成ファイルで ENCRYPTPWD パラメータも指定するとエラーが発生します。

pwxcl.cfg ファイルの ENCRYPTOPT パラメータで、ログファイル暗号化に AES アルゴリズムを使用するように設定できます。デフォルトは AES128 です。

ヒント: セキュリティを最適に保つため、pwxcl.cfg 構成ファイルではなく、pwxcl コマンドに暗号化パスワードを指定して、PowerExchange ロggerのコールドスタートに対応することをお勧めします。このプラクティスを実行すると、次の理由により、暗号化パスワードへの不正アクセスのリスクを軽減できます: 1) 暗号化パスワードは pwxcl.cfg ファイル内に格納されない、2) コールドスタートの成功後に、パスワードをコマンドラインから削除できる。コールドスタートに対応するために、暗号化パスワードを pwxcl コマンドに指定し、後で CDCT ファイルをリストアする必要がある場合は、同じ暗号化パスワードを PWXUCDCT ユーティリティの RESTORE_CDCT コマンドに入力する必要があります。

PowerExchange ロggerログファイルを暗号化しないようにするには、コールドスタートのための pwxcl コマンドまたは pwxcl.cfg 構成ファイルに暗号化パスワードを入力しないでください。

ライセンス

インストールディレクトリ内のデフォルトの license.key ファイルをオーバーライドするライセンスキーファイルのフルパスおよびファイル名を指定します。オーバーライドファイルは、デフォルトのファイルとは異なるファイル名またはパスである必要があります。オーバーライドファイルは、PWX_LICENSE 環境変数でオプションで指定したオーバーライドライセンスキーファイルよりも優先されます。

specialstart

PowerExchange ロggerの特殊スタートを実行するかどうかを指定します。特殊スタートは、pwxcl.cfg ファイルで指定した変更ストリームのポイントから PowerExchange のキャプチャ処理を開始します。この開始点は、PowerExchange ロggerの実行で CDCT ファイルによるリスタート点より優先されます。特殊スタートによって CDCT ファイルの内容が削除されることはありません。

このパラメータを使用すると、キャプチャデータを失うことなくソースログの中の問題のある部分を飛ばして先に進みます。例えば、次のような状況で特殊スタートを使用します。

- PowerExchange ロggerに Oracle カタログのアップグレードをキャプチャされると困る場合があるとして。この場合、アップグレードする前に PowerExchange ロggerを停止します。アップグレードが完了した後、アップグレード後の SCN に基づいて、新しいシーケンスを生成し、PowerExchange ロggerのトークンをリスタートします。これらトークンの値を pwxcl.cfg の中の SEQUENCE_TOKEN パラメータおよび RESTART_TOKEN パラメータに入力してから、PowerExchange ロggerを特殊スタートします。
- 次に、CDC には関係のない UOW が相当数あり、そのことによって発生した古い、使用できないログを PowerExchange ロggerが再処理すると困る場合を考えます。この場合、PowerExchange ロggerを停止してください。RESTART_TOKEN の値を、最も古い利用可能なログの SCN を反映するように編集し、それから特殊スタートを実行します。相当数の UOW のうち、このリスタート点より前に始まっていたものが CDC に関係があれば、データ損失が起きる可能性があります。

有効な値は以下のとおりです。

Y

PowerExchange ロggerの特殊スタートを変更ストリームの特 (pwxcl.cfg コンフィグレーションファイルの中の SEQUENCE_TOKEN と RESTART_TOKEN のパラメータ値で定義される) から実行します。特殊スタートを実行するには、pwxcl.cfg ファイルの中で有効なトークンの値を指定する必要があります。このトークンの値は、CDCT ファイルによるトークンの値より優先されます。

pwxcl.cfg の中の SEQUENCE_TOKEN の値が CDCT ファイルによる現在のシーケントークンよりも確実に大きいと同じになるようにしてください。

また、パラメータを coldstart=Y とは指定しないでください。そう指定すると、coldstart=Y パラメータが優先されます。

N

特殊スタートを実行しません。coldstart パラメータで指定されたとおりに、コールドスタートまたはウォームスタートを実行します。

デフォルトは N です。

注: パラメータ CONFIG、CS、および LICENSE では、ファイルがデフォルトの場所がない場合にのみフルパスが必要です。

使用上の注意

スタートアップ中、PowerExchange ロggerは以下の処理を実行します。

1. pwxcl コンフィグレーションファイルを読み込み、一連の PWX-15799 メッセージにパラメータ設定を表示します。

注: PowerExchange ロggerは、pwxcl.cfg ファイルを検出できなかった場合、dtlca.cfg を探します。

2. メッセージ PWX-21605 に、選択した CAPI_CONNECTION 文の名前を表示します。
3. pwxcl.cfg ファイルの DBID パラメータで指定されたデータベースに一致し、**Condense** オプションに **Part** と指定したアクティブなキャプチャ登録を、CCT ファイルからロードします。適用されない登録はすべて無視されます。
4. グループ定義ファイルを使用する場合、PowerExchange ロggerはファイル内の文を表示します。グループ定義ファイルは、PowerExchange ロggerが別々のセットのログファイルを作成するテーブルおよびキャプチャ登録のグループを定義します。
5. コントローラタスクは、コマンドハンドラサブタスクを開始し、続いてライタサブタスクを開始します。PowerExchange ロggerは、一連のコマンドハンドラおよびライタ初期化メッセージを発行します。スタートアップ文で COLDSTART=Y と指定し、dbmover.cfg 構成ファイルで PROMPT=Y と指定した場合、PowerExchange ロggerから、Y と入力してコールドスタートを確認するように求められます。
ライタ初期化が完了すると、以下のメッセージが表示されます。
PWX-06111 Controller: All tasks initialization complete.
PWX-06455 Command Handler: received CAPTURE_STARTUP_COMPLETE event.
6. 期限の切れた CDCT レコードがあれば、Writer はそれを削除し、それに関連付けられていた PowerExchange のログファイルも削除します。
pwxcl.cfg ファイルで VERBOSE=Y と入力していた場合、PowerExchange ロggerは、削除された CDCT レコードやログファイル、リスタートトークンやシーケンストークン、そして CPU の使用率など、この処理に関する詳細なメッセージを発行します。
7. ライタはソースデータの処理を開始します。

初期化が完了した後、PowerExchange ロggerのコマンドを発行して、PowerExchange ロgger処理のステータスを判断したり、ファイル切り替えやライタのソースデータの読み込みを手動で開始したり、PowerExchange ロggerをシャットダウンすることができます。

出力例

コールドスタート処理中、PowerExchange は、以下のメッセージを、コマンドライン画面と PowerExchange メッセージログファイルに書き込みます。

```
C:\Informatica\PowerExchange9.0.0>pwxccl coldstart=y
PWX-33314 TIMEOUTS configuration parameter is deprecated
PWX-00607 PWXCCL VRM 9.0.0 Build V900_B10 started.
PWX-06036 Controller: Started 09/11/06 15:38:41.
PWX-33250 pwxccl started as a foreground process. pid="4500". coldstart="Y"

PWX-15799 ##PWXCCL <C:\Informatica\PowerExchange9.0.0\pwxccl.cfg> PARM INPUT FILE: START>>> .
PWX-15799 DBID=NORT000.
PWX-15799 DB_TYPE=MSS.
PWX-15799 EXT_CAPT_MASK=C:\Informatica\PowerExchange9.0.0\capture\condense0.
PWX-15799 CHKPT_NUM=3.
PWX-15799 CHKPT_BASENAME=C:\Informatica\PowerExchange9.0.0\capture\condense0.chkpt.
PWX-15799 COND_CDCT_RET_P=50.
PWX-15799 CONDENSENAME=msssvc.
PWX-15799 COLL_END_LOG=0.
PWX-15799 NO_DATA_WAIT=5.
PWX-15799 NO_DATA_WAIT2=60.
PWX-15799 FILE_SWITCH_VAL=20.
PWX-15799 FILE_SWITCH_CRIT=M.
PWX-15799 CAPT_IMAGE=BA.
PWX-15799 SIGNALLING=N.
PWX-15799 VERBOSE=Y.
PWX-15799 ##PWXCCL <C:\Informatica\PowerExchange9.0.0\pwxccl.cfg> PARM INPUT FILE: END(COMPLETE).

PWX-21605 Connection selected vpmssql found from covr< > tag< > type< MSS> int< FALSE> method< SRC_DFLT for
TYPE>.

PWX-25802 Process pwxccl pid 4500 locked file C:\Informatica
\PowerExchange9.0.0\CDCT_instance_NORT000_lockfile.lck
PWX-25802 Process pwxccl pid 4500 locked file C:\Informatica\PowerExchange9.0.0\capture
\condense0_loggerfiles_lockfile.lck

PWX-33261 Loaded "customer.1". Table "dbo.Customers". Tag "MSSNORT000customer1"
PWX-33261 Loaded "employee.1". Table "dbo.Employees". Tag "MSSNORT000employee1"
PWX-33262 Discarded "orderdet". Creator "dbo". Condense option "None"
PWX-33261 Loaded "orders.1". Table "dbo.Orders". Tag "MSSNORT000orders1"
PWX-33261 Loaded "products.2". Table "dbo.Products". Tag "MSSNORT000products1"
PWX-33262 Discarded "region". Creator "dbo". Condense option "None"
PWX-33263 4 registrations loaded

PWX-06112 Controller: Starting the capture subtasks.

PWX-06076 Starting Subtask program PWXCCLH.
PWX-06450 Command Handler: Starting.
PWX-32503 Command Handler initialization complete, listening on port 6988 .

PWX-26002 Command handler is waiting for the writer to initialize before accepting commands
PWX-06076 Starting Subtask program PWXCCLW.
PWX-06400 Condense: Starting. Instance=NORT000.
PWX-33232 No tokens specified. Cold start at the current data stream file position
PWX-33236 Type Y to confirm the cold start position or N to terminate the CCL logger
PWX-33238 Cold start accepted

PWX-09964 CAPI i/f: Current PowerExchange Logger log files position:
Sequence=07D9000B0006000F0022003B11B45C00000000100000035000000630004FFFFFFFF
Restart=07000000434158313730313031
PWX-09950 CAPI i/f: Connect OK. Sources = 4
PWX-25229 Started initialization of the CDCT Retention Array
PWX-25230 Retention array initialized. Files 1. CDCTs read 2. Allocated 300000. Memory 1500236
PWX-25211 Rolling back 2 CDCT records
PWX-06455 Command Handler: received CAPTURE_STARTUP_COMPLETE event.
PWX-06111 Controller: All tasks initialization complete.
PWX-26003 Command handler is accepting commands
PWX-25204 Deleted expired file "C:\Informatica\PowerExchange9.0.0\capture\condense0.CND.CP091106.T1532001"
```


PWX-25221 Deleted 2 expired CDCT records and 1 files
PWX-33279 CPU total 390625. This file total 390625. CAPI Reads 0. Writing file 0. Other 390625

PWX-33274 CPU Total 406250. CAPI Read 0. Writing 0. File switching 0. Other 406250
PWX-33271 Writer starts reading source data. First processing cycle since initialization
PWX-09957 CAPI i/f: Read times out after 60 seconds
PWX-09967 CAPI i/f: End of log for time 09/11/06 15:38:44 reached

注: ウォームスタートメッセージはコールドスタートメッセージに似ていますが、以下の点が異なります。

- スタートアップ処理を続行するのに、確認プロンプトに応答する必要がない。
- PWX-06413 メッセージは、リスタート処理で見つかった最も高いリスタートトークンおよびシーケンストークンを報告する。

注意

PowerExchange および PowerCenter を同じマシン上で同じユーザーアカウントを使用して実行する場合、PowerExchange と PowerCenter で別個の環境を作成する必要があります。適切な PowerExchange 環境を作成し PowerExchange ロggerを起動するには、スクリプト（Windows では pwxsettask.bat、Linux または UNIX では pwxsettask.sh）を実行してください。

Windows では、次の構文を使用してください。

```
pwxsettask pwxctl  
["coldstart={Y|N}"]  
["config=path/pwx_config_file"]  
["cs=path/pwxlogger_config_file"]  
["license=path/license_file"]
```

Windows では引用符の使用は必須です。

Linux および UNIX では、次の構文を使用してください。

```
pwxsettask.sh pwxctl  
["coldstart={Y|N}"]  
["config=path/pwx_config_file"]  
["cs=path/pwxlogger_config_file"]  
["license=path/license_file"]
```

Linux と UNIX では、引用符の使用は任意です。

詳細については、[「PowerExchange と PowerCenter との環境変数の非互換性」](#) (ページ 13)を参照してください。

CONDENSE コマンド

PowerExchange ロgger（Linux、UNIX、Windows 用）が継続モードで実行している場合、CONDENSE コマンドは、別のログサイクルを開始する待機時間が経過する前に、別のログサイクルを開始します。

待機時間は、pwxctl.cfg コンフィギュレーションファイルの NO_DATA_WAIT パラメータで指定されます。

このコマンドのメッセージ出力は、画面に表示され、PowerExchange メッセージログに書き込まれます。

構文

以下の構文を使用します。フォアグラウンドモードで実行している PowerExchange ロggerプロセスに対してコマンドラインからコマンドを発行する手順:

CONDENSE

注: あるいは、pwxcmd プログラムを使用して condense コマンドを発行します。バックグラウンドモードで PowerExchange ロggerを実行する場合は、pwxcmd を使用する必要があります。

以下の CONDENSE 出力例は、ライタサブタスクがソースデータを読み込んでいるか待機していることを示し、次のファイル切り替えの時点を示します。

PWX-06415 Condense: Condense completed. Total Records=4, Data=2, UOWs =2
PWX-33270 Writer is sleeping for 300 seconds. Start time 09/10/30 15:15:20

- [「DISPLAY STATUS コマンド」](#) (ページ 135)
- [「pwxcmd condense コマンド」](#) (ページ 174)

定義されている PowerExchange ロgger（Linux、UNIX、Windows 用）のグループ定義ごとに、監視統計を表示します。グループ定義は、登録されたソーステーブルのグループに対して一連の PowerExchange ロgger ログファイルを定義するものです。

- グループ名およびグループ内のキャプチャ登録数
- グループに対して PowerExchange ロgger が処理した挿入、更新、および削除レコードの合計数
- グループに対して PowerExchange ロgger が処理したコミットの数
- メモリからディスク上のログファイルに PowerExchange ロgger がまだフラッシュしていない変更レコードの数

グループが定義されていない場合は、すべての登録項目が1つのグループに属するものとみなされ、その監視統計が表示されます。

コマンドを実行する前に、監視統計の収集を有効にするように、PowerExchange ロggerが実行されているシステムで、PowerExchange ロggerの pwxcl.cfg 設定ファイル内の STATS= (MONITOR) パラメータを設定する必要があります。

以下の構文を使用します。フォアグラウンドモードで実行している PowerExchange ロガープロセスに対してコマンドラインからコマンドを発行する手順:

注: PowerExchange ロガーをバックグラウンドモードで実行する場合は、pwxcmd プログラムを使用して、displaystats -tp groups コマンドを発行する必要があります。

PowerExchange ロggerグループが定義されている場合は、各グループ定義ごとに、次の監視統計がレポートされます。

```
PWX-26011 Command handler received command "DG"
PWX-37138 Grp:/pwxprod/v1010/capture/dtld004 Regs=100 IUD=000001046400 C=000000000969 Unflushed=000000000000
PWX-37139 FirstRec=2016-05-11 21:26:49.000000 Open file:/pwxprod/v1010/capture/dtld004.CND.CP160525.T1917001
PWX-37140 BeginSeq=D4000019EA11240000000000000000019EA11A0000000000007591000004E9001000020000
BeginRstrt =000019EA11A631850012F800103
PWX-37141 LastSeq=A023FA80000000000000000000000001A023FA600000000000075F200014B27010400010000
PWX-37142 CommitSeq=D4000019EA11240000000000000000FFFFFFFFFFF000075F700011A440068FF0000
CommitRstrt=00001A025A5D631850012F800103
```

```

PWX-37138 Grp: /pwxprod/v1010/capture/dtld003 Regs=5 IUD=000000290000 C=000000000030 Unflushed=000000000000
PWX-37139 FirstRec=2016-05-25 19:19:58.000000 Open file=/pwxprod/v1010/capture/dtld003.CND.CP160525.T1920001
PWX-37140 BeginSeq =D400001A0243B800000000000000001A0243B200000001000075F3000018F7014000010000
BeginRstrt =00001A0243A1631850012F800103
PWX-37141 LastSeq =D400001A025AAD00000000000000001A025AAA00000042000075F700011A3A015400010000
PWX-37142 CommitSeq=D400001A025AAD0000000000000000FFFFFFFFFFFFFFFFF000075F700011A440068FFFFF0000
CommitRstrt=00001A025A5D631850012F800103

```

PowerExchange ロggerグループが定義されていない場合は、すべての登録項目が condenseO という名前のグループに属するものとみなされ、その監視統計がレポートされます。

```

PWX-26011 Command handler received command "DG"
PWX-37138 Grp: c:/pwx/capture/condense0 Regs=5 IUD=000000032292 C=000000001931 Unflushed=000000034223
PWX-37139 FirstRec=2016-05-22 13:59:10.603648 Open file=c:/pwx/capture/condense0.CND.CP150707.T1816001
PWX-37140 BeginSeq =000000009DE60000000000000000088D800000000 BeginRstrt =D4C9C7D340400000000037DA000000000
PWX-37141 LastSeq =00000158743800000000000000158728600000000
PWX-37142 CommitSeq=000001589B24000000000000001589B24000000000 CommitRstrt=D4C9C7D340400000000037DA000000000

```

これらのレポートには、以下のフィールドが含まれます。

- Grp. グループ定義の名前。
- Regs. グループ内のキャプチャ登録の数。
- IUD. グループに対して処理された挿入、更新、および削除の合計数。
- C. グループに対して処理されたコミットの数。
- Unflushed. グループの変更レコードのうち、ディスク上の PowerExchange ロggerログファイルにまだフラッシュされていない変更レコードの数。
- FirstRec. 開かれているロggerログファイル内の 1 番目のレコードのタイムスタンプ。
- Open file. 開かれているロggerログファイルのパス名とファイル名。
- BeginSeq. 開かれているロggerログファイル内の最も古いレコードのシーケンストークン。
- BeginRstrt. 開かれているロggerログファイル内の最も古いレコードのリスタートトークン。
- LastSeq. コミットレコードが後に続いていない、ロggerログファイル内の最後の変更レコードのシーケンストークン。この値は CommitSeq の値よりも大きい必要があります。
- CommitSeq. ロggerログファイル内の最後のコミットレコードのシーケンストークン。
- CommitRstrt. ロggerログファイル内の最後のコミットレコードのリスタートトークン。

レポートメッセージの詳細については、『PowerExchange メッセージリファレンスボリューム 2』を参照してください。

関連項目：

- [「pwxcmd displaystats コマンド」 \(ページ 179\)](#)
- [「DL コマンド」 \(ページ 135\)](#)

DISPLAY ALL コマンド

他の PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) の DISPLAY コマンドで生成できるすべてのメッセージを、コマンド別に並べて表示します。

出力は、以下のコマンドを別々に実行した場合と同じです。

- DISPLAY CPU
- DISPLAY EVENTS

- DISPLAY MEMORY
- DISPLAY RECORDS
- DISPLAY STATUS

このコマンドのメッセージ出力は、画面に表示され、PowerExchange メッセージログに書き込まれます。

構文

以下の構文を使用します。フォアグラウンドモードで実行している PowerExchange ロガープロセスに対してコマンドラインからコマンドを発行する手順

DISPLAY ALL

注: あるいは、pwxcmd プログラムを使用して displayall コマンドを発行します。バックグラウンドモードで PowerExchange ロガーを実行する場合は、pwxcmd を使用する必要があります。

出力例

以下の DISPLAY ALL 出力例は、PowerExchange ロガー処理、CPU 時間、およびメモリ使用量に関する情報を、コマンド別に並べて表示します。

```
PWX-26011 Command handler received command "DISPLAY ALL"

PWX-26010 Command "DISPLAY CPU" information
PWX-26051 CPU uSecs reading source data 78125
PWX-26052 CPU uSecs writing data to files 31250
PWX-26053 CPU uSecs during file switches 15625
PWX-26054 CPU uSecs for other processing 796875
PWX-26055 CPU uSecs TOTAL 921875

PWX-26010 Command "DISPLAY EVENTS" information
PWX-26021 Controller waits on events ALL_TASK_SHUTDOWN, CMDH_ENDED, CONDENSE_ENDED,
PWX-26022 Command Handler waits on events ALL_TASK_SHUTDOWN, GOT_A_COMMAND,
PWX-26023 Writer waits on events ALL_TASK_SHUTDOWN, START_CONDENSING,
PWX-26024 Writer is sleeping, waiting for an event or timeout

PWX-26010 Command "DISPLAY MEMORY" information
PWX-26031 Controller memory. Application 1136258. Total 1145597. Maximum 1360714

PWX-26032 Command Handler memory. Application 636244. Total 636871. Maximum 671371
PWX-26033 Writer memory. Application 2326803. Total 2343567. Maximum 2410614
PWX-26034 Total memory. Application 4099305. Total 4126035. Maximum 4442699

PWX-26010 Command "DISPLAY RECORDS" information
PWX-26068 Update records. File 2. Total 4
PWX-26069 Commit records. File 2. Total 4
PWX-26070 Total records. File 4. Total 8

PWX-26010 Command "DISPLAY STATUS" information
PWX-26086 Writer is sleeping. Time "2009-10-07 16:25:07"
PWX-26101 Current file was opened at time "2009-10-07 16:16:08". Records 6
PWX-26103 Time of next file switch "2009-10-07 16:38:07"
```

関連項目：

- [「pwxcmd displayall コマンド」 \(ページ 175\)](#)

DISPLAY CPU コマンド

現在のログサイクル中に PowerExchange ロggerの処理に費やした CPU 時間を、処理段階ごとにマイクロ秒で表示します。また、PowerExchange ロggerのすべての処理に費やした CPU 時間の合計も表示されます。

例えば、以下の処理段階での CPU 時間を報告できます。

- ソースデータの読み込み
- PowerExchange ロggerログファイルへのデータの書き込み
- ファイル切り替えの実行
- コマンドの初期化やコマンドハンドラ処理などの"その他の処理"の実行

このコマンドのメッセージ出力は、画面に表示され、PowerExchange メッセージログに書き込まれます。

構文

以下の構文を使用します。フォアグラウンドモードで実行している PowerExchange ロggerプロセスに対してコマンドラインからコマンドを発行する手順:

DISPLAY CPU

注: あるいは、pwxcmd プログラムを使用して displaycpu コマンドを発行します。バックグラウンドモードで PowerExchange ロggerを実行する場合は、pwxcmd を使用する必要があります。

出力例

以下の DISPLAY CPU 出力例は、ファイル切り替えなど、多くの処理段階で費やされた CPU 時間に関する情報を表示します。

```
PWX-26011 Command handler received command "DISPLAY CPU"
PWX-26010 Command "DISPLAY CPU" information
PWX-26051 CPU uSecs reading source data 78125
PWX-26052 CPU uSecs writing data to files 31250
PWX-26053 CPU uSecs during file switches 15625
PWX-26054 CPU uSecs for other processing 640625
PWX-26055 CPU uSecs TOTAL 765625
```

関連項目：

- [「pwxcmd displaycpu コマンド」 \(ページ 175\)](#)

DISPLAY EVENTS コマンド

PowerExchange ロggerのコントローラ、コマンドハンドラ、ライタタスクが待機しているイベントを表示します。ライタがデータを処理しているか、イベントまたはタイムアウトが行われるまで待機しているスリープ状態になっているかも示します。

このコマンドのメッセージ出力は、画面に表示され、PowerExchange メッセージログに書き込まれます。

構文

以下の構文を使用します。フォアグラウンドモードで実行している PowerExchange ロgger プロセスに対してコマンドラインからコマンドを発行する手順:

DISPLAY EVENTS

注: あるいは、pwxcmd プログラムを使用して displayevents コマンドを発行します。バックグラウンドモードで PowerExchange ロgger を実行する場合は、pwxcmd を使用する必要があります。

出力例

以下の DISPLAY EVENTS 出力例は、コントローラ、コマンドハンドラ、およびライタが待機しているイベントと、ライタの現在のステータスを表示します。

```
PWX-26011 Command handler received command "DISPLAY EVENTS"
PWX-26010 Command "DISPLAY EVENTS" information
PWX-26021 Controller waits on events ALL_TASK_SHUTDOWN, CMDH_ENDED, CONDENSE_ENDED,
PWX-26022 Command Handler waits on events ALL_TASK_SHUTDOWN, GOT_A_COMMAND,
PWX-26023 Writer waits on events ALL_TASK_SHUTDOWN, START_CONDENSING,
PWX-26025 Writer is processing, reading source data
```

関連項目:

- [「pwxcmd displayevents コマンド」 \(ページ 176\)](#)

DISPLAY MEMORY コマンド

PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) が PowerExchange ロgger のタスクおよびサブタスクごとに費やすメモリ使用量と、PowerExchange ロgger プロセス全体で費やす合計のメモリ使用量をバイト単位で表示します。

以下のカテゴリに費やされるメモリ使用量が報告されます。

- **アプリケーション。** PowerExchange ロgger アプリケーションがアプリケーション自体で使用するために必要なメモリ。
- **合計。** PowerExchange ロgger アプリケーションと、関連するヘッダーオーバーヘッドに使用される合計メモリ。PowerExchange ロgger の処理中に、動的にメモリが割り当てられ解放されるので、この値は絶えず変動します。
- **最大。** このコマンドが実行する時点までに“合計”カテゴリについて記録された最大メモリ量。

このコマンドのメッセージ出力は、画面に表示され、PowerExchange メッセージログに書き込まれます。

構文

以下の構文を使用します。フォアグラウンドモードで実行している PowerExchange ロgger プロセスに対してコマンドラインからコマンドを発行する手順:

DISPLAY MEMORY

注: あるいは、pwxcmd プログラムを使用して displaymemory コマンドを発行します。バックグラウンドモードで PowerExchange ロgger を実行する場合は、pwxcmd を使用する必要があります。

出力例

以下の DISPLAY MEMORY 出力例は、メモリの合計使用量と PowerExchange ロgger のタスク別のメモリ使用量を表示します。

```
PWX-26011 Command handler received command "DISPLAY MEMORY"
PWX-26010 Command "DISPLAY MEMORY" information
PWX-26031 Controller memory. Application 1531327. Total 1545145. Maximum 1794550
```

PWX-26032 Command Handler memory. Application 645278. Total 646552. Maximum 646552
PWX-26033 Writer memory. Application 3495909. Total 3514235. Maximum 3613892
PWX-26034 Total memory. Application 5672514. Total 5705932. Maximum 6054994

関連項目：

- [「pwxcmd displaymemory コマンド」 \(ページ 177\)](#)

DISPLAY RECORDS コマンド

PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) が現在の処理サイクル中に処理した変更レコードのカウンタを表示します。PowerExchange ロgger が現在のサイクル中に変更を受信しなかった場合、PowerExchange ロgger ログファイルの現在のセツについて変更レコードのカウンタを表示します。

レコードカウンタは、処理された変更レコードのタイプごと、および処理された合計レコードについて表示されます。変更レコードのタイプには、削除、挿入、更新、およびコミットがあります。

カウンタが現在のサイクルのものか現在のログファイルのものかに応じて、出力には、以下のタイプのカウンタのすべてまたは一部が表示されます。

- **サイクル。** PowerExchange ロgger の現在の処理サイクルに対する変更レコードのカウンタ。
pwxcl.cfg ファイルの NO_DATA_WAIT2 パラメータで指定されている待機間隔が経過し、変更データが受信されなかった場合、PowerExchange ロgger はこれらのカウンタをゼロにリセットします。
- **ファイル。** 現在の一連の PowerExchange ログファイルの変更レコード数。PowerExchange ロgger は、ファイル切り替えが行われたときに、これらのカウンタをゼロにリセットします。
- **合計。** PowerExchange ロgger が起動以降に受信した変更レコードの合計カウンタ。これらのカウンタはゼロにリセットされません。

このコマンドのメッセージ出力は、画面に表示され、PowerExchange メッセージログに書き込まれます。

構文

以下の構文を使用します。フォアグラウンドモードで実行している PowerExchange ロgger プロセスに対してコマンドラインからコマンドを発行する手順:

DISPLAY RECORDS

注: あるいは、pwxcmd プログラムを使用して displayrecords コマンドを発行します。バックグラウンドモードで PowerExchange ロgger を実行する場合は、pwxcmd を使用する必要があります。

出力例

以下の DISPLAY RECORDS 出力例は、PowerExchange ロgger が現在のログファイルで処理した、更新、コミット、および合計レコードのカウンタを表示します。

```
PWX-26011 Command handler received command "DISPLAY RECORDS"
PWX-26010 Command "DISPLAY RECORDS" information
PWX-26068 Update records. File 2. Total 2
PWX-26069 Commit records. File 2. Total 2
PWX-26070 Total records. File 4. Total 4
```

関連項目：

- [「pwxcmd displayrecords コマンド」 \(ページ 178\)](#)

DISPLAY STATUS コマンド

PowerExchange ロggerのライタサブタスクのステータスを表示します。

例えば、コマンドは、ライタが以下の処理を実行している時点をレポートできます。

- 初期化
- ソースデータの読み込みまたは待機
- PowerExchange ロggerログファイルへのソースデータの書き込み
- ファイル切り替え中の CDCT レコードの書き込み
- 期限切れの CDCT レコードの削除の完了
- シャットダウン

このコマンドのメッセージ出力は、画面に表示され、PowerExchange メッセージログに書き込まれます。

構文

以下の構文を使用します。フォアグラウンドモードで実行している PowerExchange ロggerプロセスに対してコマンドラインからコマンドを発行する手順:

DISPLAY STATUS

注: あるいは、pwxcmd プログラムを使用して displaystatus コマンドを発行します。バックグラウンドモードで PowerExchange ロggerを実行する場合は、pwxcmd を使用する必要があります。

出力例

以下の DISPLAY STATUS 出力例は、ライタサブタスクがソースデータを読み込んでいるか待機していることを示し、次のファイル切り替えの時点を示します。

```
PWX-26011 Command handler received command "DISPLAY STATUS"
PWX-26010 Command "DISPLAY STATUS" information
PWX-26087 Writer is reading or waiting for source data. Time "2009-11-06 14:05:01"
PWX-26101 Current file was opened at time "2009-11-06 13:52:57". Records 3
PWX-26103 Time of next file switch "2009-11-06 14:12:59"
```

DL コマンド

PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) プロセスとそのタスクに関する監視統計を表示します。

このコマンドは、次の統計情報を PowerExchange メッセージログファイルに書き込み、画面に表示します。

- PowerExchange ロggerのプロセス ID
- コマンド発行時における PowerExchange ロggerの Writer サブタスクのステータス
- PowerExchange ロggerが、開始以降使用した CPU 時間

- コントローラ、コマンドハンドラ、および Writer の各タスクによる PowerExchange ロggerのメモリ使用量。次のカテゴリで、タスクのメモリ使用量がレポートされます。
 - 現在。タスクが現在使用しているメモリの量。
 - 合計。タスクに関連するヘッダーオーバーヘッドによって使用されているメモリの量。この値は、PowerExchange ロgger処理中の、メモリの動的な割り当てや解放により変動します
 - 最大。監視統計が生成されるまでに、"合計"カテゴリに記録されたメモリの最大量。
- PowerExchange ロggerが処理した挿入、更新、削除、コミットの回数、および合計。さらに、開かれているロggerログファイルとアクティブなロギングサイクルにおける同じ情報が報告されます

コマンドを実行する前に、監視統計の収集を有効にするように、PowerExchange ロggerが実行されているシステムで、PowerExchange ロggerの pwxcl.cfg 設定ファイル内の STATS= (MONITOR) パラメータを設定する必要があります。この文では、これらの統計を要求に応じて出力することに加え、*interval* 位置パラメータを追加して、統計を特定の間隔で出力することもできます。

注: 時間の経過とともに画面が出力でいっぱいにならないように、画面に表示される定期的な監視統計の数は、PowerExchange メッセージログに出力される数よりも少なくなっています。

構文

以下の構文を使用します。フォアグラウンドモードで実行している PowerExchange ロggerプロセスに対してコマンドラインからコマンドを発行する手順:

DL

または、同等の DS コマンドを使用できます。

DS

注: PowerExchange ロggerをバックグラウンドモードで実行する場合は、pwxcmd プログラムを使用して、displaystats -tp logger コマンドを発行する必要があります。

出力例

次のコマンド出力例は、PowerExchange ロggerのプロセスとそのタスクの監視統計を示しています。

```
PWX-26011 Command handler received command "DS"
PWX-00723 Command <display l stats> succeeded
PWX-37130   PWXCCL pid = 7144           Writer status = Reading or waiting for source data
PWX-37134   CPU Time =      0:00:02.589616
PWX-37131   Memory (Current/Total/Maximum)
PWX-37132   Controller: (981/983/1849) KB   Command Handler: (0/0/34) KB   Writer: (5127/5147/5181) KB
PWX-37135   Status 7144                   Totals I=0000000024344 U=0000000000000 D=0000000024336 C=000000004004
Total=0000000052684
PWX-37136   CurrFileOpened : 2015-08-11 13:20:39 I=0000000024344 U=0000000000000 D=0000000024336 C=000000004004
Total=0000000052684
PWX-37137   Active Cycle  : 2015-08-11 13:21:01 I=0000000024344 U=0000000000000 D=0000000024336 C=000000004004
Total=0000000052684
```

このレポートには、次のフィールドが含まれます。

- PWXCCL pid。PowerExchange ロggerプロセスのプロセス ID。
- Writer status。コマンド発行時における PowerExchange ロggerの Writer サブタスクのステータス。
- CPU Time。PowerExchange ロggerが、開始以降使用した CPU 時間。
- Controller。PowerExchange ロggerのコントローラが使用したメモリの量 (キロバイト単位)。
- Command Handler。PowerExchange ロggerのコマンドハンドラが使用したメモリの量 (キロバイト単位)。
- Writer。PowerExchange ロggerの Writer サブタスクが使用したメモリの量 (キロバイト単位)。
- Status。PowerExchange ロggerプロセスのプロセス ID。

- レポートメッセージの詳細については、『*PowerExchange* メッセージリファレンスボリューム 2』を参照してください。

- [「pwxcmd displaystats コマンド」](#) (ページ 179)
- [「DG コマンド」](#) (ページ 129)

PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) の開いているログファイルにデータが含まれる場合は、このファイルを閉じてから、新しいログファイルセットに切り替えます。ログファイルにデータが含まれていない場合は、ファイル切り替えは行われません。

以下の構文を使用します。フォアグラウンドモードで実行している PowerExchange ロガープロセスに対してコマンドラインからコマンドを発行する手順:

変更データを抽出処理に使用できるようにするために、次のファイル切り替えが行われるまで、自動ファイル切り替えを実行できます。 バッチ抽出モードで抽出を実行する場合、`fileswitch` コマンドをスクリプトに含め、バッチ抽出前にこのスクリプトを実行します。 スクリプトまたはバッチファイルから `fileswitch` コマンドを発行するには、`pwxcmd` コマンドを使用する必要があります。

```

PXW-06422 Condense: Received FILESWITCH request.
PXW-33283 File switch because of a FILESWITCH command. Records 800. Elapsed seconds 13
PXW-36940 Closed file C:\Performance\all\pwx\resources\ccl\group1\grp2.CND.CP121205.T1455001.
PXW-36941 Records 360. Commits 40. File sequence 1212051455001. Sequence token
D400000057A5410000000000000000FFFFFFFFFFFFFFFFFFFFFFFF00000103000095B400C4FFFF0000.

```

関連項目：

- [「pwxcmd fileswitch コマンド」 \(ページ 181\)](#)

SHUTCOND コマンド

最終処理サイクルを開始し完了した後、管理された方法で、PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) を停止します。最終処理サイクルによって、PowerExchange ロgger は、コマンドを発行した時点までに行われたすべての変更をキャプチャできます。

処理サイクルの完了後、PowerExchange ロgger は以下のアクションを実行します。

- 開いているログファイルを閉じる。
- リスタートトークンやシーケンストークンなどの情報を CDCT ファイルに書き込みます。
- CAPI を閉じる。
- ライタおよびコマンドハンドラのサブタスクを停止する。
- pwxcl プログラムを終了する。
- CPU 使用率を報告する。
- STATS=(MONITOR)パラメータが PowerExchange ロgger 構成ファイル (pwxcl.cfg) で指定されている場合、サマリロgger の監視統計を報告する。オプションの *interval* サブパラメータは使用してもしなくても構いません。

このコマンドのメッセージ出力は、画面に表示され、PowerExchange メッセージログに書き込まれます。

構文

以下の構文を使用します。フォアグラウンドモードで実行している PowerExchange ロgger プロセスに対してコマンドラインからコマンドを発行する手順:

SHUTCOND

注: あるいは、pwxcmd プログラムを使用して shutcond コマンドを発行します。バックグラウンドモードで PowerExchange ロgger を実行する場合は、pwxcmd を使用する必要があります。

使用上の注意

処理サイクルが最近実行していない場合、このコマンドを使用して、PowerExchange ロgger を停止します。

出力例

以下の SHUTCOND 出力例は、PowerExchange ロgger のサブタスクおよび処理が停止した順序を示します。

```
PWX-26011 Command handler received command "SHUTCOND"
PWX-06467 Command Handler: Setting Condense to shut down on running out of data.
PWX-33289 Condense: Condense completed. Total Records=3036, Inserts=1404, Updates=0,Deletes=1404, UOWs=228
PWX-06416 Condense: Shutting down because Single Condense run completed
PWX-36940 Closed file c:\pwx\capture\condense0.CND.CP160819.T1036001.
PWX-36941 Records 2808. Commits 168. End sequence 00000833A3460000000000000833A34600000000.
PWX-33256 CCLWTR File switch complete. Current restart tokens: Sequence 00000833A3460000000000000833A34600000000 Restart
D4C9C7D34040000008166DE000000000.
PWX-33278 Total Records 3036. Inserts 1404. Updates 0. Deletes 1404. UOWs 228. Bytes 652056
PWX-33279 CPU total 670804. This file total 670804. CAPI Reads 156002. Writing file 62400. Other 452402

PWX-33274 CPU Total 670804. CAPI Read 156002. Writing 62400. File switching 0. Other 452402

PWX-06414 Condense: Closing down CAPI
PWX-10780 CAPI: INFO: Extraction return counts: no data 3, commits 229, inserts 1404, updates 0, deletes 1404.
PWX-10781 CAPI: INFO: Extraction subordinate read counts: no data 0, commits 232, inserts 1548, updates 0, deletes 1404,
backouts 0.
PWX-10782 CAPI: INFO: Extraction resource maximums: memory cache 32 KB, spill files 0.
PWX-10746 CAPI: INFO: Last data returned: timestamp 2015/06/15 10:34:19,
```

```

sequence 00000833A3460000000000000833A34600000000.
PWX-10743 CAPI: INFO: No noteworthy transactions.
PWX-10749 CAPI: INFO: + Current subordinate sequence number 00000833A61A00000000.
PWX-33304 Connection: 10.43.203.106:62818, Type: TASK_CNTL, Task ID: 0, Operation timeout: (-) secs, Heartbeat interval:
30 secs, Session: (-)
PWX-06453 Command Handler: shutting down.
PWX-33255 CCLWTR Restart tokens at run termination: Sequence 00000833A3460000000000000833A34600000000 Restart
D4C9C7D34040000008166DE000000000.
PWX-33221 CCLWTR closing after a SHUTDOWN request.
PWX-06110 Unloaded module 2 (CCL WRITER).
PWX-06454 Command Handler: has stopped.
PWX-06110 Unloaded module 1 (COMMAND_HANDLER).
PWX-06060 Controller: subtask Condense ended.
PWX-06060 Controller: subtask Command Handler ended.
PWX-06107 Controller: All subtasks shut down.
PWX-25803 Process pwxcl pid 9064 unlocked file c:\pwx\capture\condense0_loggerfiles_lockfile.lck
PWX-25803 Process pwxcl pid 9064 unlocked file c:\pwx\capture\CDCT_instance_IME0_lockfile.lck

PWX-33254 pwxcl ended. return code 0
PWX-33274 CPU Total 686404. CAPI Read 156002. Writing 62400. File switching 0. Other 468002
PWX-00723 Command <Shutdown stats> succeeded
PWX-37130 PWXCL pid = 9064 Writer status = Shutting down
PWX-37134 CPU Time = 0:00:00.686404
PWX-37131 Memory (Current/Total/Maximum)
PWX-37132 Controller: (476/477/1853) KB Command Handler: (476/477/1853) KB Writer: (0/0/0) KB
PWX-37105 Total Memory 16468 KB
PWX-37135 Status 9064 Totals I=000000001404 U=000000000000 D=000000001404 C=000000000228
Total=000000003036
PWX-37136 CurrFileOpened : 2016-08-19 10:37:47 I=000000000000 U=000000000000 D=000000000000 C=000000000000
Total=000000000000
PWX-37137 Active Cycle : 2016-08-19 10:37:47 I=000000001404 U=000000000000 D=000000001404 C=000000000228
Total=000000003036

```

この例では、pwxcl.cfg ファイルで VERBOSE=Y と STATS=(MONITOR)が指定されています。出力では、監視メッセージが太字で強調表示されています。

注: PowerExchange ロggerが SUSE Linux バージョン 11 マシン上で実行されている場合、PWX-37105 メッセージで、PowerExchange ロggerが使用したメモリの総量が誤って 0KB とレポートされます。この問題は、以降の SUSE Linux バージョンでロggerが実行される場合は発生しません。

関連項目：

- [「pwxcmd shutcond コマンド」 \(ページ 170\)](#)

SHUTDOWN コマンド

開いている PowerExchange ロggerのログファイルを閉じて最新のリスタート位置を CDCT ファイルに書き込んだ後に、管理された方法で PowerExchange ロgger（Linux、UNIX、Windows 用）を停止します。

シャットダウン処理中、PowerExchange ロggerは以下のアクションを実行します。

- 開いているログファイルを閉じる。
- 更新されたログとリスタート情報を CDCT ファイルに書き込みます。
- CAPI を閉じる。
- ライタおよびコマンドハンドラのサブタスクを停止する。
- pwxcl プログラムを終了する。
- CPU 使用率を報告する。
- STATS=(MONITOR)パラメータが PowerExchange ロgger構成ファイル (pwxcl.cfg) で指定されている場合、サマリロggerの監視統計を報告する。オプションの *interval* サブパラメータは使用してもしなくても構いません。

このコマンドのメッセージ出力は、画面に表示され、PowerExchange メッセージログに書き込まれます。

構文

コマンドプロンプトでシャットダウンコマンドを入力するのではなく、pwxcmd プログラムを使用してこのコマンドを発行することをお勧めします。pwxcmd を使用した場合、同一のシステムまたは別のシステム上でバックグラウンドモードまたはフォアグラウンドモードで実行している PowerExchange ロガープロセスに、コマンドを送信できます。

pwxcmd を使用するように PowerExchange を設定していない場合、以下のいずれかの方法で、PowerExchange ロガープロセスを停止できます。

- フォアグラウンドモードで PowerExchange ロガープロセスが実行している場合、コマンドプロンプトで以下のコマンドを入力します。

```
SHUTDOWN
```

- Linux または UNIX オペレーティングシステムで、PowerExchange ロガープロセスがバックグラウンドモードで実行している場合は、kill コマンドを使用して、PowerExchange ロガーを停止します。コマンドに正しいプロセス ID を入力していることを確認します。
- Windows では、タスクマネージャからすぐに、pwxcl.exe プロセスを終了できます。

使用上の注意

SHUTDOWN コマンドを使用して、継続モードで実行している PowerExchange ロガープロセスを停止します。

PowerExchange ロガーがバッチモードで実行している場合、このコマンドは通常不要です。

PowerExchange ロガープロセスは、pwxcl.cfg ファイルの NO_DATA_WAIT2 パラメータで指定した待機時間が経過した後にシャットダウンします。

出力例

以下の SHUTDOWN 出力例は、シャットダウン処理の進捗を表示します。

```
PWX-06416 Condense: Shutting down because SHUTDOWN event received

PWX-26011 Command handler received command "SHUTDOWN"
PWX-06463 Command Handler: Close Condense request is now queued.
PWX-06464 Command Handler: Shutdown will occur shortly.

PWX-06453 Command Handler: shutting down.
PWX-33278 Total Records 3036. Inserts 1404. Updates 0. Deletes 1404. UOWs 228. Bytes 652056
PWX-33279 CPU total 670804. This file total 670804. CAPI Reads 156002. Writing file 62400. Other 452402

PWX-33274 CPU Total 670804. CAPI Read 156002. Writing 62400. File switching 0. Other 452402

PWX-06414 Condense: Closing down CAPI
PWX-33221 CCLWTR closing after a SHUTDOWN request.
PWX-06110 Unloaded module 3 (CCL WRITER).
PWX-06060 Controller: subtask Condense ended.
PWX-06454 Command Handler: has stopped.
PWX-06110 Unloaded module 1 (COMMAND_HANDLER).
PWX-06060 Controller: subtask Command Handler ended.
PWX-06107 Controller: All subtasks shut down.
PWX-25803 Process pwxcl pid 3396 unlocked file C:\Informatika\PowerExchange9.0.0\capture\condense0_loggerfiles_lockfile.lck
PWX-25803 Process pwxcl pid 3396 unlocked file C:\Informatika\PowerExchange8.6.1\CDCT_instance_NORT000_lockfile.lck

PWX-33254 pwxcl ended. return code 0
pwxcl ended. rc=0
PWX-33274 CPU Total 686404. CAPI Read 156002. Writing 62400. File switching 0. Other 468002
PWX-00723 Command <Shutdown stats> succeeded
PWX-37130 PWXCCL pid = 9064 Writer status = Shutting down
PWX-37134 CPU Time = 0:00:00.686404
PWX-37131 Memory (Current/Total/Maximum)
PWX-37132 Controller: (476/477/1853) KB Command Handler: (476/477/1853) KB Writer: (0/0/0) KB
PWX-37105 Total Memory 16468 KB
PWX-37135 Status 9064 Totals I=000000001404 U=000000000000 D=000000001404 C=000000000228
Total=000000003036
PWX-37136 CurrFileOpened : 2016-08-19 10:37:47 I=000000000000 U=000000000000 D=000000000000 C=000000000000
Total=000000000000
```

PWX-37137 Active Cycle : 2016-08-19 10:37:47 I=000000001404 U=000000000000 D=000000001404 C=000000000228
Total=000000003036

この例では、pwxcl.cfg ファイルで VERBOSE=Y と STATS=(MONITOR)が指定されています。出力では、監視メッセージが太字で強調表示されています。

注: PowerExchange ロggerが SUSE Linux バージョン 11 マシン上で実行されている場合、PWX-37105 メッセージで、PowerExchange ロggerが使用したメモリの総量が誤って 0KB とレポートされます。この問題は、以降の SUSE Linux バージョンでロggerが実行される場合は発生しません。

関連項目：

- [「pwxcmd shutdown コマンド」 \(ページ 183\)](#)

第 15 章

pwxcmd コマンド

この章では、以下の項目について説明します。

- [pwxcmd コマンドの概要, 142 ページ](#)
- [pwxcmd コマンドの一般的な構文, 143 ページ](#)
- [pwxcmd コマンドのコマンド処理, 144 ページ](#)
- [pwxcmd コマンドを受信するための PowerExchange プロセスの設定, 145 ページ](#)
- [ユーザーに対する pwxcmd コマンドの発行の許可, 151 ページ](#)
- [コマンドラインからの pwxcmd コマンドの実行, 151 ページ](#)
- [pwxcmd コマンドのスクリプト作成, 152 ページ](#)
- [PowerExchange Listener 用の pwxcmd コマンド, 153 ページ](#)
- [PowerExchange Condense 用の pwxcmd コマンド, 164 ページ](#)
- [PowerExchange ロgger \(Linux、UNIX、Windows 用\) 用の pwxcmd コマンド, 174 ページ](#)
- [PowerExchange ログベース ECCR および Datacom ECCR の pwxcmd コマンド, 184 ページ](#)
- [その他の pwxcmd コマンド, 195 ページ](#)

pwxcmd コマンドの概要

PowerExchange アプリケーションサービスで管理されない PowerExchange プロセスにコマンドを発行するには、pwxcmd プログラムを使用する必要があります。PowerExchange アプリケーションサービスで管理される PowerExchange プロセスにコマンドを発行するには、代わりに infacmd pwx プログラムを使用します。infacmd pwx プログラムの詳細については、『*Informatica コマンドリファレンス*』を参照します。

Linux、UNIX、または Windows システムでは、コマンドライン、スクリプト、またはバッチジョブから、以下のいずれかのプロセスおよびシステムに pwxcmd コマンドを発行できます。

- すべてのシステム上の PowerExchange リスナ
- i5/OS または z/OS システム上の PowerExchange Condense
- Linux、UNIX、または Windows システム上の PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用)
- z/OS 上の PowerExchange Adabas、IDMS、および IMS ログベース ECCR と Datacom テーブルベース ECCR

pwxcmd を使用する場合、これらの PowerExchange プロセスに対して、コマンドラインから発行可能なコマンドと同じコマンドを発行できます。

pwxcmd コマンドを発行する前、pwxcmd コマンドを受信するように PowerExchange プロセスを設定する必要があります。実行する必要がある設定タスクは、pwxcmd コマンドのターゲットがどの PowerExchange プ

ロセスかによって異なります。詳細については、[「pwxcmd コマンドを受信するための PowerExchange プロセスの設定」](#) (ページ 145)を参照します。

pwxcmd コマンドを発行するときに、pwxcmd のそれぞれのコマンドに、コマンドのターゲットである PowerExchange プロセスに対してユーザー定義のサービス名を含める必要があります。さらに、セキュリティを有効にした場合、pwxcmd コマンドを発行するときに、ユーザー ID およびパスワードまたは暗号化パスワードを指定する必要があります。詳細については、[「pwxcmd コマンドの一般的な構文」](#) (ページ 143)を参照します。

pwxcmd コマンドからの出力は、コマンドラインに表示されたり、コマンドの発行元の Linux、UNIX、または Windows システムで出力を渡すパイプ先のファイルに表示されます。詳細については、[「コマンドラインからの pwxcmd コマンドの実行」](#) (ページ 151)および [「pwxcmd コマンドのスクリプト作成」](#) (ページ 152)を参照します。

関連項目：

- [「PowerExchange Condense のコマンド」](#) (ページ 79)
- [「PowerExchange Listener のコマンド」](#) (ページ 88)
- [「PowerExchange ロgger \(Linux、UNIX、Windows 用\) のコマンド」](#) (ページ 122)
- [「pwxcmd コマンドの一般的な構文」](#) (ページ 143)
- [「pwxcmd コマンドを受信するための PowerExchange プロセスの設定」](#) (ページ 145)
- [「PowerExchange Listener 用の pwxcmd コマンド」](#) (ページ 153)
- [「PowerExchange Condense 用の pwxcmd コマンド」](#) (ページ 164)
- [「PowerExchange ログベース ECCR および Datacom ECCR の pwxcmd コマンド」](#) (ページ 184)
- [「PowerExchange ロgger \(Linux、UNIX、Windows 用\) 用の pwxcmd コマンド」](#) (ページ 174)

pwxcmd コマンドの一般的な構文

pwxcmd コマンドを入力するときは、必ず有効な構文を使用してください。

pwxcmd コマンドの一般的な構文は次のとおりです。

```
pwxcmd command_name {-service|-sv} service_name
      [{-user|-uid|-u} user_ID
      [{-password|-pwd|-p} password] | {-epassword|-e} encrypted_password]
      [command_options]
```

この構文には、次に挙げる一般的なパラメータおよび変数を含みます。

command_name

必須。-service パラメータで指定されたサービスを実行している PowerExchange プロセスに pwxcmd が送信するコマンド。

{-service|-sv} *service_name*

必須。コマンドのターゲットになっている PowerExchange プロセスのサービス名。PowerExchange プロセスを設定する DBMOVER コンフィギュレーションファイル内の CMDNODE 文で指定されるサービス名を指定します。

注: ECCR の場合、サービス名は dbmover.cfg コンフィギュレーションファイル内の CMDNODE 文で指定される ECCR 名です。

`{-user|-uid|-u} user_ID`

オプション。コマンドのターゲットになっているシステム上のオペレーティングシステムユーザーの有効な ID。ターゲットの PowerExchange プロセスでセキュリティが有効になっている場合、有効なユーザー ID とパスワードまたは暗号化パスワードのいずれかを指定する必要があります。

サポートされている Linux、UNIX、または Windows システム上の PowerExchange リスナまたは PowerExchange ロgger で PowerExchange LDAP ユーザー認証を有効にしている場合、ユーザー名はエンタープライズユーザー名になります。詳細については、『*PowerExchange リファレンスマニュアル*』を参照してください。

`{-password|-pwd|-p} password`

オプション。-user パラメータで指定したユーザー ID のクリアテキストパスワード。一部のコマンドで、パスワードの代わりにパスフレーズが使用できます。

`{-epassword|-e} encrypted_password`

オプション。-user パラメータで指定したユーザー ID の暗号化パスワード。一部のコマンドで、暗号化されたパスフレーズが使用できます。

command_options

オプション。command_name で指定したコマンドに有効な追加オプション。

使用できるパラメータとオプションについての詳細は、各コマンドの説明をご覧ください。

pwxcmd コマンドのコマンド処理

pwxcmd コマンドハンドラは、PowerExchange リスナ、PowerExchange Condense、PowerExchange Adabas、IDMS、または IMS ログベース ECCR または Datacom テーブルベース ECCR、または PowerExchange ロgger（Linux、UNIX、Windows 用）プロセスに送信する pwxcmd コマンドを処理します。

pwxcmd コマンドを発行するときに、以下のコマンド処理が行われます。

1. pwxcmd コマンドハンドラは、コマンドでサービス名が指定されている CMDNODE 文からコマンドを送る送信先の IP アドレスおよびポート番号を特定します。CMDNODE 文は、pwxcmd コマンドの発行元の Linux、UNIX、または Windows システム上の DBMOVER コンフィギュレーションファイルにあります。
2. コマンドのターゲットである PowerExchange プロセスは、そのサービス名を以下のようにして取得します。
 - PowerExchange Listener プロセスは、pwxcmd コマンドからそのサービス名を取得します。
 - PowerExchange Condense プロセスは、CAPTPARM コンフィギュレーションファイルまたはメンバの CONDENSENAME 文からそのサービス名を取得します。
 - PowerExchange ロgger（Linux、UNIX、Windows 用）プロセスは、pwxccl.cfg ファイルの CONDENSENAME 文からそのサービス名を取得します。
 - PowerExchange Adabas、IDMS、または IMS ログベース ECCR または Datacom テーブルベース ECCR は、pwxcmd コマンドからそのサービス名を取得します。

PowerExchange プロセスは、関連する SVCNODE 文で指定したポートで、すべての pwxcmd コマンドをリスンします。

サービス名に対応する SVCNODE 文がない場合は、PowerExchange は警告メッセージ PWX-32534 を発行し、pwxcmd 入力を無効にします。

3. pwxcmd コマンドハンドラは、CMDNODE 文で指定されたサービスタイプを、PowerExchange プロセスのコマンド処理サービスに渡します。このサービスは、サービスタイプが正しくない場合には接続を拒否します。例えば、PowerExchange Listener サービスは、サービスタイプが CONDENSE の場合に接続を拒否します。
 4. pwxcmd プログラムは、コマンドが完了したことを示す戻りコードがコマンド処理サービスから発行されるまで、60 秒待機します。コマンドがこの時間内に完了しない場合、pwxcmd プログラムはタイムアウトメッセージを表示します。
- 戻りコードは、PowerExchange メッセージ番号であるか、コマンドの処理からの戻りコードになります。

pwxcmd コマンドを受信するための PowerExchange プロセスの設定

pwxcmd コマンドを PowerExchange プロセスに送信するには、pwxcmd コマンドを受信するように PowerExchange プロセスを設定します。

また、pwxcmd コマンドの発行元の Linux、UNIX、または Windows システムで、PowerExchange プロセスへの接続を設定します。

pwxcmd コマンドを受信するように PowerExchange プロセスを設定するには、以下の設定タスクを実行します。

- PowerExchange プロセスが実行しているシステムで
 1. pwxcmd コマンドを受信するように PowerExchange プロセスを設定します。
 - pwxcmd コマンドを受信するように PowerExchange リスナプロセスを設定するには、DBMOVER コンフィギュレーションファイルで LISTENER 文と SVCNODE 文を定義します。
 - PowerExchange Condense または PowerExchange ロガー（Linux、UNIX、Windows 用）プロセスを設定するには、CONDENSENAME 文と SVCNODE 文を定義します。PowerExchange Condense プロセスの場合、CAPTPARM コンフィギュレーションファイルまたはメンバで CONDENSENAME 文を定義します。PowerExchange ロガー（Linux、UNIX、Windows 用）プロセスの場合、pwxccl.cfg ファイルで CONDENSENAME 文を定義します。CONDENSENAME 文の詳細については、オペレーティングシステムの CDC ガイドを参照してください。LISTENER 文と SVCNODE 文の詳細については、『PowerExchange リファレンスマニュアル』を参照してください。
 - pwxcmd コマンドを受信するように PowerExchange ECCR を設定するには、DBMOVER コンフィギュレーションファイルで SVCNODE 文を定義します。この文は、pwxcmd コマンドの ECCR 名とポート番号を指定します。対象になる ECCR には、ADABAS、IDMS、および IMS ログベース ECCR と Datacom テーブルベース ECCR が含まれます。
 - z/OS で Adabas ECCR を設定するには、PowerExchange Adabas ECCR JCL の EXEC 文に次の PARM を追加します。

```
EXEC PGM=DTLCCADA,PARM=(ADA82)
```

通常の場合、ECCR JCL は、インストール中に作成される prefixAD1EC という PROCLIB メンバにあります。PARM=(ADA82)を含めなければ、pwxcmd コマンドを発行した場合、pwxcmd コマンドハンドラは起動しません。
 2. オプションで、pwxcmd コマンドのセキュリティを設定します。PowerExchange にアクセスしたりコマンドを発行する権限をユーザーが持っていることを確認するように、PowerExchange を設定できます。

セキュリティを設定するには、DBMOVER コンフィギュレーションファイルで SECURITY 文を定義し、その他の設定タスクを実行します。

pwxcmd コマンドのセキュリティの詳細については、『*PowerExchange リファレンスマニュアル*』を参照します。

3. i5/OS では、PowerExchange 9.0.1 にアップグレードしている場合、以下のタスクを実行して、PowerExchange Listener が実行できるようにし、PowerExchange プロセスに pwxcmd コマンドを発行する権限をユーザーに与えます。

PowerExchange Listener が実行できるようにするには、以下のアップグレードコマンドを発行します。

```
CHGJOB JOB(datalib/DTLLIST) ALWMLTTHD(*YES)
```

ここで、*datalib* は、インストール時に指定した PowerExchange データライブラリのユーザー定義名です。

また、実行がスレッドセーフでない可能性がある関数を有効にする値に、QMLTTHDACN システム値が設定されていることを確認します。QMLTTHDACN システム値が 3 に設定されている場合、または iSeries Navigator で **Do not perform the function** 値に設定されている場合、PowerExchange は起動しません。QMLTTHDACN システム値を、1 または 2、あるいは iSeries Navigator で **Perform the function that is not threadsafe** 値に設定します。

セキュリティオブジェクトを作成するには、以下のアップグレードコマンドを発行します。

```
CALL PGM(dtllib/CRTDTLENVA) PARM(' datalib')
```

ただし、*dtllib* は、インストール時に指定した PowerExchange ソフトウェアライブラリの名前であり、*datalib* は、インストール時に指定した PowerExchange データライブラリの名前です。特定の pwxcmd コマンドを発行する権限をユーザーに与えるには、コマンドのセキュリティオブジェクトへのユーザーアクセスを認めます。

4. pwxcmd コマンドを送る送信先の PowerExchange プロセスを起動します。
- pwxcmd コマンドの発行元の Linux、UNIX、または Windows システムで、pwxcmd コマンドの送信先である PowerExchange プロセスへの接続を設定します。
 - 接続を設定するには、dbmover.cfg ファイルで CMDNODE 文を定義します。CMDNODE 文の詳細については、『*PowerExchange リファレンスマニュアル*』を参照してください。
 - pwxcmd コマンドを受信するように PowerExchange ログベース ECCR を設定するには、CMDNODE 文で ECCR 名、ホスト名、および TCP/IP ポート番号を指定する必要があります。ECCR 名とポート番号は、指定されたホスト上の DBMOVER コンフィギュレーションファイルの対応する SVCNODE 文で指定された値に一致する必要があります。

例 1: pwxcmd コマンドを受信するための PowerExchange Listener の設定

この例では、pwxcmd コマンドを受信するように PowerExchange Listener を設定します。

PowerExchange Listener が実行しているシステムに対してリモートである Linux、UNIX、または Windows システムから、pwxcmd コマンドを発行します。

両方のシステムで、DBMOVER コンフィギュレーションファイルに pwxcmd コマンド構成文を含める必要があります。

pwxcmd コマンドを受信するように PowerExchange Listener を設定する手順

1. PowerExchange Listener が実行しているシステム上の DBMOVER コンフィギュレーションファイルに、SVCNODE 文を含めます。SVCNODE 文は、PowerExchange Listener のコマンド処理サービスが pwxcmd コマンドをリスンするポートを指定します。以下に例を示します。

```
LISTENER=(node1,TCP,2480)
SVCNODE=(node1,6001)
```

SVCNODE 文で

- 最初のパラメータ値である node1 はサービス名であり、LISTENER 文でのノード名に一致します。
- 2 番目のパラメータ値である 6001 は、サービスが pwxcmd コマンドをリスンする TCP/IP ポート番号です。ポート番号は、対応する CMDNODE 文のポート番号と一致する必要があります。CMDNODE 文は、pwxcmd コマンドの発行元の Linux、UNIX、または Windows システム上の DBMOVER コンフィギュレーションファイルにあります。

2. pwxcmd コマンドの発行元の Linux、UNIX、または Windows システム上にある dbmover.cfg コンフィギュレーションファイルに、CMDNODE 文を含めます。CMDNODE 文は、pwxcmd コマンドの送信先の PowerExchange Listener の接続情報を定義します。以下に例を示します。

```
CMDNODE=(listnode,LISTENER,remote_host,6001)
```

CMDNODE 文で

- 最初のパラメータ値である listnode はサービス名です。このサービス名は任意の名前にすることができます。pwxcmd コマンドを PowerExchange Listener に発行するときに、このサービス名を指定します。
- 2 番目のパラメータ値である LISTENER は、PowerExchange Listener のサービスタイプです。
- 3 番目のパラメータ値である remote_host は、接続する PowerExchange Listener のホスト名です。
- 4 番目のパラメータ値である 6001 は TCP/IP ポート番号です。このポート番号は、PowerExchange Listener が実行しているシステム上の DBMOVER コンフィギュレーションファイル内にある対応する SVCNODE 文のポート番号に一致する必要があります。

3. PowerExchange Listener に送信する pwxcmd コマンドで、以下のように **-service** オプションを指定します。

```
pwxcmd listtask -service listnode
```

pwxcmd コマンドでのサービス名は、対応する CMDNODE 文でのサービス名に一致する必要があります。CMDNODE 文は、pwxcmd コマンドの発行元の Linux、UNIX、または Windows システム上にある dbmover.cfg コンフィギュレーションファイルにあります。

例 2: pwxcmd コマンドを受信するための PowerExchange Condense プロセスの設定

この例では、pwxcmd コマンドを受信するように PowerExchange Condense プロセスを設定します。

PowerExchange Condense プロセスが実行しているシステムに対してリモートである Linux、UNIX、または Windows システムから、pwxcmd コマンドを発行します。

両方のシステムで、DBMOVER コンフィギュレーションファイルに pwxcmd コマンド構成文を含める必要があります。

さらに、PowerExchange Condense プロセスが実行している i5/OS または z/OS システム上の CAPTPARM コンフィギュレーションファイルまたはメンバに CONDENSENAME 文を含めます。CONDENSENAME 文は、PowerExchange Condense プロセスのサービス名を定義します。

pwxcmd コマンドを受信するように PowerExchange Condense プロセスを設定する手順

1. PowerExchange Condense プロセスが実行している i5/OS または z/OS システム上の CAPTPARM コンフィギュレーションファイルまたはメンバに CONDENSENAME 文を含めます。CONDENSENAME 文は、

pwxcmd コマンドを受信する PowerExchange Condense プロセスのサービス名を定義します。以下に例を示します。

```
CONDENSENAME=COND_NODE
```

2. PowerExchange Condense プロセスが実行しているシステム上の DBMOVER コンフィギュレーションファイルに、SVCNODE 文を含めます。SVCNODE 文は、PowerExchange Condense プロセスのコマンド処理サービスが pwxcmd コマンドをリスンする TCP/IP ポートを指定します。以下に例を示します。

```
SVCNODE=(COND_NODE,6003)
```

SVCNODE 文で

- 最初のパラメータ値である COND_NODE はサービス名です。このサービス名は、対応する CONDENSENAME 文でのサービス名に一致する必要があります。CONDENSENAME 文は、PowerExchange Condense プロセスが実行しているシステム上の CAPTPARM コンフィギュレーションファイルまたはメンバ内にあります。
- 2 番目のパラメータ値である 6003 は、サービスが pwxcmd コマンドをリスンする TCP/IP ポート番号です。このポート番号は、対応する CMDNODE 文のポート番号と一致する必要があります。CMDNODE 文は、pwxcmd コマンドの発行元のシステム上にある DBMOVER コンフィギュレーションファイルにあります。

3. pwxcmd コマンドの発行元の Linux、UNIX、または Windows システム上にある dbmover.cfg コンフィギュレーションファイルに、CMDNODE 文を含めます。CMDNODE 文は、pwxcmd コマンドの送信先の PowerExchange Condense プロセスの接続情報を指定します。以下に例を示します。

```
CMDNODE=(cndnode,CONDENSE,remote_host,6003)
```

CMDNODE 文で

- 最初のパラメータ値である cndnode はサービス名です。このサービス名は任意の名前にすることができます。pwxcmd コマンドを PowerExchange Condense プロセスに発行するときに、このサービス名を指定します。
- 2 番目のパラメータ値である CONDENSE は、PowerExchange Condense プロセスのサービスタイプです。
- 3 番目のパラメータ値である remote_host は、PowerExchange Condense プロセスが実行しているホストの名前です。
- 4 番目のパラメータ値である 6003 は TCP/IP ポート番号です。このポート番号は、対応する SVCNODE 文のポート番号と一致する必要があります。SVCNODE 文は、PowerExchange Condense プロセスが実行しているシステム上の DBMOVER コンフィギュレーションファイル内にあります。

4. PowerExchange Condense プロセスに送信する pwxcmd コマンドで、以下のように **-service** オプションを指定します。

```
pwxcmd condense -service cndnode
```

pwxcmd コマンドでのサービス名は、対応する CMDNODE 文でのサービス名に一致します。CMDNODE 文は、pwxcmd コマンドの発行元のシステム上にある dbmover.cfg コンフィギュレーションファイルにあります。

例 3:pwxcmd コマンドを受信するための PowerExchange ロガープロセスの設定

この例では、pwxcmd コマンドを受信するように PowerExchange ロガー（Linux、UNIX、Windows 用）プロセスを設定します。

PowerExchange ロガー（Linux、UNIX、Windows 用）プロセスが実行しているシステムに対してリモートである Linux、UNIX、または Windows システムから、pwxcmd コマンドを発行します。

両方のシステムで、DBMOVER コンフィギュレーションファイルに pwxcmd コマンド構成文を含める必要があります。

さらに、PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) プロセスが実行しているシステム上の pwxcl.cfg コンフィギュレーションファイルに、CONDENSENAME 文を含める必要があります。CONDENSENAME 文は、PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) プロセスのサービス名を定義します。

pwxcmd コマンドを受信するように PowerExchange ロgger プロセスを設定する手順

1. PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) プロセスが実行している Linux、UNIX、または Windows システム上の pwxcl.cfg コンフィギュレーションファイルに、CONDENSENAME 文を含めます。CONDENSENAME 文は、pwxcmd コマンドを受信する PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) プロセスのサービス名を定義します。以下に例を示します。

CONDENSENAME=COND_NODE

2. PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) プロセスが実行しているシステム上の DBMOVER コンフィギュレーションファイルに、SVCNODE 文を含めます。SVCNODE 文は、PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) プロセスのコマンド処理サービスが pwxcmd コマンドをリスンする TCP/IP ポートを指定します。以下に例を示します。

SVCNODE=(COND_NODE,6003)

SVCNODE 文で

- 最初のパラメータ値である COND_NODE はサービス名です。このサービス名は、対応する CONDENSENAME 文でのサービス名に一致する必要があります。CONDENSENAME 文は、PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) プロセスが実行しているシステム上の pwxcl.cfg コンフィギュレーションファイルにあります。
- 2 番目のパラメータ値である 6003 は、サービスが pwxcmd コマンドをリスンする TCP/IP ポート番号です。このポート番号は、対応する CMDNODE 文のポート番号と一致する必要があります。CMDNODE 文は、pwxcmd コマンドの発行元の Linux、UNIX、または Windows システム上の DBMOVER コンフィギュレーションファイルにあります。

3. pwxcmd コマンドの発行元の Linux、UNIX、または Windows システム上にある dbmover.cfg コンフィギュレーションファイルに、CMDNODE 文を含めます。CMDNODE 文は、pwxcmd コマンドの送信先の PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) プロセスの接続情報を指定します。以下に例を示します。

CMDNODE=(COND_NODE,CONDENSE,remote_host,6003)

CMDNODE 文で

- 最初のパラメータ値である cndnode はサービス名です。このサービス名は任意の名前にすることができます。pwxcmd コマンドを PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) プロセスに発行するときに、このサービス名を指定します。
- 2 番目のパラメータ値である CONDENSE は、PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) プロセスのサービスタイプです。
- 3 番目のパラメータ値である remote_host は、PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) プロセスが実行しているホストの名前です。
- 4 番目のパラメータ値である 6003 は TCP/IP ポート番号です。このポート番号は、対応する SVCNODE 文のポート番号と一致する必要があります。SVCNODE 文は、PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) プロセスが実行しているシステム上の DBMOVER コンフィギュレーションファイルにあります。

4. PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) プロセスに送信する pwxcmd コマンドで、以下のように **-service** オプションを指定します。

pwxcmd condense -service cndnode

pwxcmd コマンドでのサービス名は、対応する CMDNODE 文でのサービス名に一致する必要があります。CMDNODE 文は、pwxcmd コマンドの発行元の Linux、UNIX、または Windows システム上の DBMOVER コンフィギュレーションファイルにあります。

例 4: pwxcmd コマンドを受信するための PowerExchange ログベース ECCR または Datacom ECCR の設定

この例では、Linux、UNIX、または Windows システムから発行された pwxcmd コマンドを受信するように、z/OS 上の PowerExchange Adabas、IDMS、または IMS ログベース ECCR または Datacom テーブルベース ECCR を設定します。

1. PowerExchange ECCR が実行している z/OS システム上の DBMOVER コンフィギュレーションファイルに、SVCNODE 文を含めます。

SVCNODE 文は、PowerExchange ECCR のコマンド処理サービスが pwxcmd コマンドをリスンするポートを指定します。以下に例を示します。

```
SVCNODE=(ADAECCR1,56579)
```

SVCNODE 文で

- 最初のパラメータ値である ADAECCR1 は、設定する ECCR の名前です。この名前は、CMDNODE 文での ECCR 名に一致する必要があります。CMDNODE 文は、pwxcmd コマンドの発行元の Linux、UNIX、または Windows システム上の DBMOVER コンフィギュレーションファイルにあります。
- 2 番目のパラメータ値である 56579 は、サービスが pwxcmd コマンドをリスンする TCP/IP ポート番号です。ポート番号は、対応する CMDNODE 文のポート番号と一致する必要があります。

2. pwxcmd コマンドの発行元の Linux、UNIX、または Windows システム上にある dbmover.cfg コンフィギュレーションファイルに、CMDNODE 文を含めます。

CMDNODE 文は、pwxcmd コマンドの送信予定先の PowerExchange ECCR の接続情報を定義します。以下に例を示します。

```
CMDNODE=(ADAECCR1,ECCR,ZHOST2,56579)
```

CMDNODE 文で

- 最初のパラメータ値である ADAECCR1 は、設定する ECCR の名前です。この名前は、対応する SVCNODE 文での ECCR 名に一致する必要があります。
- 2 番目のパラメータ値である ECCR は、PowerExchange ECCR のサービスタイプです。
- 3 番目のパラメータ値である ZHOST2 は、接続する PowerExchange ECCR のホスト名です。
- 4 番目のパラメータ値である 56579 は TCP/IP ポート番号です。このポート番号は、PowerExchange ECCR が実行している z/OS システム上の DBMOVER コンフィギュレーションファイル内にある対応する SVCNODE 文のポート番号に一致する必要があります。

3. Linux、UNIX、または Windows システムから PowerExchange ECCR に pwxcmd コマンドを発行します。コマンドで、**-service** オプションの後に ECCR 名を指定します。以下に例を示します。

```
pwxcmd ECCR -service ADAECCR1
```

pwxcmd コマンドでのサービス名は、ローカル dbmover.cfg コンフィギュレーションファイル内にある対応する CMDNODE 文でのサービス名に一致する必要があります。

4. z/OS 上の Adabas ECCR の場合、EXEC 文で ECCR JCL に ADA82 PARM が含まれていることを確認します。

```
EXEC PGM=DTLCCADA,PARM=(ADA82)
```

このパラメータを使用すると、pwxcmd コマンドハンドラを起動できます。

ユーザーに対する pwxcmd コマンドの発行の許可

pwxcmd コマンドのセキュリティを有効にするには、次の基本オプションを使用できます。

- ユーザーが pwxcmd コマンドを発行するときに、PowerExchange にアクセスするためのオペレーティングシステムの有効なユーザー ID およびパスワードを入力するように、ユーザーに要求します。
- サポートされている Linux、UNIX、または Windows システムで PowerExchange LDAP ユーザー認証を設定して、ユーザーが pwxcmd コマンドを発行するときに、PowerExchange にアクセスするための有効なエンタープライズユーザー ID およびパスワードを入力するように、ユーザーに要求します。
- 特定の pwxcmd コマンドの発行を、特定のユーザーに許可する。

pwxcmd コマンドのセキュリティを有効にした場合、ユーザーは、すべてのコマンドでユーザー ID とパスワードまたは暗号化パスワードのいずれかを指定する必要があります。有効になっているセキュリティのタイプに基づいて、PowerExchange は、ユーザーが PowerExchange へのアクセスまたはコマンドの発行を許可されているか確認します。

pwxcmd コマンドのセキュリティを有効にしない場合、ユーザーは、pwxcmd コマンドでユーザー ID およびパスワードを指定する必要はありません。

pwxcmd コマンドのセキュリティの詳細については、『*PowerExchange リファレンスマニュアル*』を参照します。

コマンドラインからの pwxcmd コマンドの実行

Linux、UNIX、または Windows システムのコマンドラインから pwxcmd コマンドを実行できます。

コマンドラインから pwxcmd コマンドを実行する手順

1. PATH 環境変数に、pwxcmd を含んだディレクトリを指定します。デフォルトで、このディレクトリは、PowerExchange のインストールディレクトリです。
2. コマンドプロンプトから、pwxcmd コマンドをそのオプションおよび引数を含めて入力します。以下の構文を使用します。

```
pwxcmd command_name -service service_name  
        [-user user_ID {-password password|-epassword encrypted_password}]  
        [command_options]
```

注: ユーザー ID およびパスワードまたは暗号化パスワードオプションは、pwxcmd のセキュリティを有効にする場合にのみ必要です。

サポートされている Linux、UNIX、または Windows システム上の PowerExchange リスナまたは PowerExchange ロggerで PowerExchange LDAP ユーザー認証を有効にすると、ユーザー名はエンタープライズユーザー名になります。

例えば、Windows で以下のコマンドを入力できます。

```
C:\Informatika\PowerExchange>pwxcmd listtask -service node1
```

pwxcmd コマンドからの出力は、コマンドラインに表示されたり、コマンドの発行元の Linux、UNIX、または Windows システムで出力を渡すパイプ先のファイルに表示されます。例えば、Windows のコマンドラインで、出力は以下のように表示されます。

```
C:\Informatika\PowerExchange>pwxcmd listtask -service node1  
PWX-00711 Active tasks:  
PWX-00713 0 active tasks
```

関連項目：

- [「pwxcmd コマンドの一般的な構文」 \(ページ 143\)](#)
- [「ユーザーに対する pwxcmd コマンドの発行の許可」 \(ページ 151\)](#)

pwxcmd コマンドのスクリプト作成

バッチファイル、スクリプト、またはその他のプログラムを使用して、Linux、UNIX、または Windows システムから pwxcmd コマンドを発行できます。

PowerExchange Listener を停止させる pwxcmd close コマンドなど、一部の pwxcmd コマンドを定期的に発行できます。この場合、1 つ以上の pwxcmd コマンド（およびそのオプションと引数）を呼び出すシェルスクリプトまたはバッチファイルを作成できます。

以下の Windows バッチファイル pwxcmd_list.bat の例では、PowerExchange リスナがアクティブになっていることを確認してから、それを閉じます。

```
@echo off
REM -- NAME:          pwxcmd_list.bat
REM -- DESCRIPTION:  Sample pwxcmd script to display any PowerExchange Listener active tasks
pwxcmd listtask -sv TEST
if errorlevel ==32601 goto noconnect
if errorlevel ==0 goto close
:close
pwxcmd close -sv TEST
if %errorlevel% neq 0 goto noconnect
if errorlevel ==0 goto end
:noconnect
echo %errorlevel%
echo "Could not connect to pwxcmd command handler."
pause
goto end
:end
```

注: このスクリプトは、pwxcmd コマンドのセキュリティを使用しません。

このスクリプトが機能するには、pwxcmd コマンドを受信するように、PowerExchange Listener を設定する必要があります。例えば、PowerExchange Listener が実行している同じシステムから pwxcmd コマンドを発行するには、以下のように dbmover.cfg ファイルで PowerExchange Listener を設定できます。

```
LISTENER=(node1,TCPIP,2480)
SVCNODE=(node1,6001)
CMDNODE=(TEST,LISTENER,localhost,6001)
```

コマンドラインからスクリプトを実行します。例えば Windows で、以下のようにスクリプトを実行します。

```
C:\Informatika\PowerExchange>pwxcmd_list.bat
```

スクリプトでの pwxcmd コマンドからの出力は、コマンドラインに表示されたり、スクリプトの実行元の Linux、UNIX、または Windows システムで出力を渡すパイプ先のファイルに表示されます。例えば、Windows のコマンドラインで、出力は以下のように表示されます。

```
C:\Informatika\PowerExchange>pwxcmd_list.bat
PWX-00711 Active tasks:
PWX-00713 0 active tasks
PWX-00726 Close
```

関連項目：

- [「pwxcmd コマンドの一般的な構文」 \(ページ 143\)](#)
- [「pwxcmd コマンドを受信するための PowerExchange プロセスの設定」 \(ページ 145\)](#)

PowerExchange Listener 用の pwxcmd コマンド

pwxcmd プログラムを使用して、Linux、UNIX、または Windows システムから、いずれかのシステムで実行している PowerExchange Listener に、close、closeforce、listtask、および stoptask コマンドを発行できます。

注: pwxcmd プログラムを使用して PowerExchange Listener を起動することはできません。

pwxcmd close コマンド

PowerExchanger リスナの未処理のサブタスクがすべて完了するのを待ってから、PowerExchanger リスナのジョブまたはタスクを停止します。

注: PowerExchanger リスナに実行時間の長いサブタスクがある場合は、代わりに pwxcmd closeforce コマンドを発行して、すべてのユーザーサブタスクを強制的にキャンセルし、PowerExchanger リスナを停止します。

close コマンドは以下のメッセージを発行します。

```
PWX-00618 Standard Close in progress.  
PWX-00619 All tasks closed.  
PWX-00623 Listener shutdown complete.
```

以下の構文を使用します。

```
pwxcmd close {-service|-sv} service_name  
             [{-user|-uid|-u} user_ID]  
             [{-password|-pwd|-p} password|{-epassword|-e} encrypted_password}]
```

以下の表に、*pwxcmd close* のオプションおよび引数を示します。

オプション	引数	説明
-service -sv	service_name	必須。PowerExchange リスナのサービス名。
-user -uid -u	user_ID	セキュリティを有効にする場合に必須です。 コマンドのターゲットになっているシステム上のオペレーティングシステムユーザーの有効な ID。 サポートされている Linux または UNIX システム上の PowerExchange リスナで PowerExchange LDAP ユーザー認証を有効にしている場合、ユーザー名はエンタープライズユーザー名になります。詳細については、『PowerExchange リファレンスマニュアル』を参照してください。 ユーザー名を指定する場合、-password または -epassword の値も指定する必要がありますが、両方指定することはできません。

オプション	引数	説明
-password -pwd -p	<i>password</i>	<p>指定したユーザーのパスワード。</p> <p>PowerExchange リスナが i5/OS または z/OS 上で実行されている場合、パスワードの代わりに PowerExchange の有効なパスフレーズを入力できます。i5/OS のパスフレーズは、9～31 文字の範囲で指定できます。z/OS のパスフレーズは、9～128 文字の範囲で指定できます。パスフレーズには次の文字を含めることができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> - 英字（大文字と小文字） - 数字（0～9） - スペース - 次を示す特殊文字。 ' - ; # \ , . / ! % * () _ + { } : @ < > ? <p>注: 先頭に書かれている特殊文字はアポストロフィです。</p> <p>パスフレーズに一重引用符（'）、二重引用符（"）、または通貨記号を含めることはできません。</p> <p>パスフレーズにスペースが含まれている場合、必ずそれを二重引用符（"）で囲んでください（例: "This is a passphrase"）。パスフレーズに特殊文字が含まれる場合、パスフレーズを 3 重にした二重引用符（"""）で囲む必要があります（例: """This passphrase contains special characters ! % & * . """。パスフレーズにスペース以外の英数字のみが使用されている場合は、区切り文字を使わずにそのまま入力できます。</p> <p>注: z/OS で有効な RACF パスフレーズの最大長は 100 文字です。PowerExchange は、検証のために RACF にパスフレーズを渡すときに 100 文字を超えるパスフレーズを切り捨てます。</p> <p>パスフレーズを使用するには、DBMOVER メンバのセキュリティ設定を SECURITY=(1,N) 以上にして PowerExchange リスナを実行します。詳細については、『PowerExchange リファレンスマニュアル』の「SECURITY 文」を参照してください。</p>
-epassword -e	<i>encrypted_password</i>	<p>指定されたユーザーのための暗号化されたパスワード。</p> <p>PowerExchange リスナが z/OS 上で実行されている場合、暗号化されたパスワードの代わりに PowerExchange の暗号化されたパスフレーズを入力できます。無効な文字を含むパスフレーズは暗号化しないでください（二重引用符、一重引用符、通貨記号など）。</p>

pwxcmd closeforce コマンド

PowerExchanger リスナに実行時間の長いサブタスクがある場合は、closeforce コマンドを発行して、すべてのユーザーサブタスクを強制的にキャンセルし、PowerExchanger リスナを停止します。

closeforce コマンドを発行すると、PowerExchange は以下の処理を完了します。

1. PowerExchanger リスナのアクティブなサブタスクの有無をチェックします。
2. アクティブなサブタスクが存在する場合は、30 秒経過するまで、アクティブなサブタスクの数を毎秒ポーリングします。
3. この期間中、TCP/IP ネットワーク入力を待機しているサブタスクを終了し、以下のメッセージを発行します。

PWX-00653 Operator close met while waiting for TCP/IP input

4. 残っているアクティブなサブタスクをすべてキャンセルします。
5. PowerExchanger リスナを停止します。

以下の構文を使用します。

```
pwxcmd closeforce {-service|-sv} service_name  
                  [{-user|-uid|-u} user_ID]  
                  [{-password|-pwd|-p} password_or_passphrase|{-epassword|-e}  
encrypted_password_or_passphrase}]
```

以下の表に、pwxcmd closeforce のオプションおよび引数を示します。

オプション	引数	説明
-service -sv	service_name	必須。PowerExchange リスナのサービス名。
-user -uid -u	user_ID	セキュリティを有効にする場合に必須です。コマンドのターゲットになっているシステム上のオペレーティングシステムユーザーの有効な ID。 サポートされている Linux または UNIX システム上の PowerExchange リスナで PowerExchange LDAP ユーザー認証を有効にしている場合、ユーザー名はエンタープライズユーザー名になります。詳細については、『PowerExchange リファレンスマニュアル』を参照してください。 ユーザー名を指定する場合、-password または -epassword の値も指定する必要がありますが、両方指定することはできません。

オプション	引数	説明
-password -pwd -p	<i>password</i>	<p>指定したユーザーのパスワード。</p> <p>PowerExchange リスナが i5/OS または z/OS 上で実行されている場合、パスワードの代わりに PowerExchange の有効なパスフレーズを入力できます。i5/OS のパスフレーズは、9～31 文字の範囲で指定できます。z/OS のパスフレーズは、9～128 文字の範囲で指定できます。パスフレーズには次の文字を含めることができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> - 英字（大文字と小文字） - 数字（0～9） - スペース - 次に示す特殊文字。 ' - ; # \ , . / ! % & * () _ + { } : @ < > ? <p>注: 最初の文字はアポストロフィです。</p> <p>パスフレーズに一重引用符（'）、二重引用符（"）、または通貨記号を含めることはできません。</p> <p>パスフレーズにスペースが含まれている場合、必ずそれを二重引用符（"）で囲んでください（例: "This is a passphrase"）。パスフレーズに特殊文字が含まれる場合、パスフレーズを 3 重にした二重引用符（"""）で囲む必要があります（例: """This passphrase contains special characters ! % & * . """）。パスフレーズにスペース以外の英数字のみが使用されている場合は、区切り文字を使わずにそのまま入力できます。</p> <p>注: z/OS で有効な RACF パスフレーズの最大長は 100 文字です。PowerExchange は、検証のために RACF にパスフレーズを渡すときに 100 文字を超えるパスフレーズを切り捨てます。</p> <p>パスフレーズを使用するには、DBMOVER メンバのセキュリティ設定を SECURITY=(1,N)以上にして PowerExchange リスナを実行します。詳細については、『PowerExchange リファレンスマニュアル』の「SECURITY 文」を参照してください。</p>
-epassword -e	<i>encrypted_password</i>	<p>指定されたユーザーのための暗号化されたパスワード。</p> <p>PowerExchange リスナが i5/OS または z/OS 上で実行されている場合、暗号化されたパスワードの代わりに PowerExchange の暗号化されたパスフレーズを入力できます。無効な文字を含むパスフレーズは暗号化しないでください（二重引用符、一重引用符、通貨記号など）。</p>

pwxcmd displaystats コマンド

i5/OS、Linux、zLinux、UNIX、Windows、または z/OS 上で実行されている PowerExchange リスナの監視統計を表示します。また、リスナに関連するクライアントタスクおよびソースまたはターゲット接続の統計も表示します。

このコマンドは以下の種類の統計を出力できます。

- PowerExchange リスナのリソース使用量およびクライアント要求に関するサマリ統計。これらの統計には、クライアントタスク、接続、アクセス方式、送受信したメッセージの数、送受信したデータのバイト数が含まれます。
- タスク ID およびアクセス方式ごとの、クライアント要求に対し送受信したメッセージおよびデータ量。メッセージおよびデータ量は、統計が生成された時点での合計です。

- クライアント要求を処理するための、リスナで実行されているアクティブタスクについての情報。これらの統計には、タスクの開始時間、CPU の処理時間、アクセス方式、読み取りまたは書き込みのモード、関連付けられたプロセス、セッション ID などが含まれます。このほか、PowerExchange リスナに対して要求を発行したクライアントのポート番号と IP アドレスも含まれます。

注: コマンドが多数のタスクを処理する場合、結果の統計は切り詰められる可能性があります。結果セットが 4096 バイトより大きい場合、切り詰めが発生します。結果の最後にある省略記号 (...) は、切り詰めを示します。リスナが存在するマシンの detail.log ファイルで完全な結果を確認できます。

以下の構文を使用します。

```

pwxcmd displaystats
{-service|-sv} service_name
[{-user|-uid|-u} user_ID
[{-password|-pwd|-p} password]{-epassword|-e} encrypted_password}]
[{-type|-tp} [{listener|accessmethods|clients}]

```

以下の表に、pwxcmd displaystats のオプションおよび引数を示します。

オプション	引数	説明
-service -sv	service_name	必須。PowerExchange リスナのサービス名。
-user -uid -u	user_ID	<p>セキュリティを有効にする場合に必須です。コマンドのターゲットになっているシステム上のオペレーティングシステムユーザーの有効な ID。</p> <p>サポートされている Linux または UNIX システム上の PowerExchange リスナで PowerExchange LDAP ユーザー認証を有効にすると、ユーザー名はエンタープライズユーザー名になります。詳細については、『PowerExchange リファレンスマニュアル』を参照してください。</p> <p>ユーザー名を指定する場合、-password または -epassword の値も指定する必要がありますが、両方指定することはできません。</p>

オプション	引数	説明
-password -pwd -p	<i>password</i>	<p>指定したユーザーのパスワード。</p> <p>PowerExchange リスナが i5/OS または z/OS 上で実行されている場合、パスワードの代わりに PowerExchange の有効なパスフレーズを入力できます。i5/OS のパスフレーズは、9～31 文字の範囲で指定できます。z/OS のパスフレーズは、9～128 文字の範囲で指定できます。パスフレーズには次の文字を含めることができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> - 英字（大文字と小文字） - 数字（0～9） - スペース - 次に示す特殊文字。 ' - ; # \ , . / ! % & * () _ + { } : @ < > ? <p>注: 先頭に書かれている特殊文字はアポストロフィです。</p> <p>パスフレーズに一重引用符（'）、二重引用符（"）、または通貨記号を含めることはできません。</p> <p>パスフレーズにスペースが含まれている場合、必ずそれを二重引用符（"）で囲んでください（例: "This is a passphrase"）。パスフレーズに特殊文字が含まれる場合、パスフレーズを 3 重にした二重引用符（"""）で囲む必要があります（例: """This passphrase contains special characters ! % & * . """）。パスフレーズにスペース以外の英数字のみが使用されている場合は、区切り文字を使わずにそのまま入力できます。</p> <p>注: z/OS で有効な RACF パスフレーズの最大長は 100 文字です。PowerExchange は、検証のために RACF にパスフレーズを渡すときに 100 文字を超えるパスフレーズを切り捨てます。</p> <p>パスフレーズを使用するには、DBMOVER メンバのセキュリティ設定を SECURITY=(1,N)以上にして PowerExchange リスナを実行します。詳細については、『PowerExchange リファレンスマニュアル』の「SECURITY 文」を参照してください。</p>

オプション	引数	説明
-epassword -e	<i>encrypted_password</i>	指定されたユーザーのための暗号化されたパスワード。 PowerExchange リスナが z/OS 上で実行されている場合、暗号化されたパスワードの代わりに PowerExchange の暗号化されたパスフレーズを入力できます。無効な文字を含むパスフレーズは暗号化しないでください（二重引用符、一重引用符、通貨記号など）。
-type -tp	<i>report_type</i>	オプション。レポートする PowerExchange リスナ監視統計のタイプを示します。有効なレポートタイプは次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> - listener。PowerExchange リスナのリソース使用量および処理されたクライアント要求に関するサマリ統計をレポートします。これらの統計には、メモリ使用量、CPU 処理時間、クライアント要求に対して作成されたタスク、アクティブなタスク、ハイウォーターマークタスクの合計数、タスクの最大許容数、接続数、アクティブなアクセス方式の数およびアクセス方式の合計数、送受信されたメッセージの数、送受信されたデータのバイト数などが含まれます。z/OS 上の PowerExchange リスナの場合、これらの統計にはリスナで実行した Netport ジョブの合計数も含まれます。 - accessmethods。PowerExchange リスナのデータ転送アクティビティに関する統計を、クライアントタスクおよびアクセス方式別にレポートします。これらの統計には、PowerExchange リスナへのタスクのアクティブなアクセス方式の各接続について、読み取りおよび書き込みが行われた行数、読み取りおよび書き込みが行われたデータのバイト数、ソースまたはターゲットテーブル名またはデータセット名、および使用されたデータマップファイルが含まれます。 - clients。統計が生成された時点での、PowerExchange リスナで実行されているアクティブなタスク、およびそれらのタスクを開始したリモートクライアントについての情報をレポートします。クライアントは PowerCenter、PowerExchange Navigator または PowerExchange ユーティリティなどのアプリケーションです。統計には、クライアントタスク ID ごとに、タスクで使用されているアクセス方式、タスクの読み取りまたは書き込みモード、プロセス ID、セッション ID、CPU 処理時間、タスクの開始日時が示されます。統計には、リモートクライアントのポート番号と IP アドレス、およびクライアントが PowerCenter の場合には PowerCenter セッションの ID とアプリケーション名も含まれます。 デフォルトは listener です。

ヒント: i5/OS と UNIX では、PowerExchange は、監視用のプロセス間通信（IPC）方式としてメモリマップトファイルと共有メモリを使用します。UNIX では、メモリマップトファイルは dbmover.cfg ファイルの LOGPATH 文によって指定されるディレクトリ、または LOGPATH 文が指定されていない場合は現在のディレクトリに割り当てられます。i5/OS では、メモリマップトファイルは /home/user_id という統合ファイルシステム（Integrated File System: IFS）のディレクトリに格納されます。ここで、user_ID は PowerExchange リスナを実行しているユーザーの ID です。Linux および zLinux では、PowerExchange は共有メモリを使用しますが、メモリマップトファイルは使用しません。

PowerExchange は、PowerExchange リスナのサブタスクの終了時および PowerExchange リスナが閉じられたときに、共有メモリを解放し、メモリマップトファイルをクリーンアップします。Linux と UNIX では、-ipcs -m コマンドを使用して共有メモリが解放されたことをチェックし、ipcrm -m コマンドを使用して共有メモリを解放できます。

pwxcmd listtask コマンド

アクティブな各 PowerExchange リスナタスクに関して、TCP/IP アドレス、ポート番号、アプリケーション名、アクセスタイプ、状態などの情報を表示します。

以下の構文を使用します。

```
pwxcmd listtask {-service|-sv} service_name
                [{-user|-uid|-u} user_ID]
                [{-password|-pwd|-p} password|{-epassword|-e} encrypted_password}]
```

以下の表に、pwxcmd listtask のオプションおよび引数を示します。

オプション	引数	説明
-service -sv	service_name	必須。PowerExchange リスナのサービス名。
-user -uid -u	user_ID	セキュリティを有効にする場合に必須です。 コマンドのターゲットになっているシステム上のオペレーティングシステムユーザーの有効な ID。 サポートされている Linux または UNIX システム上の PowerExchange リスナで PowerExchange LDAP ユーザー認証を有効にしている場合、ユーザー名はエンタープライズユーザー名になります。詳細については、『PowerExchange リファレンスマニュアル』を参照してください。 ユーザー名を指定する場合、-password または -epassword の値も指定する必要がありますが、両方指定することはできません。

オプション	引数	説明
-password -pwd -p	<i>password</i>	<p>指定したユーザーのパスワード。</p> <p>PowerExchange Condense が i5/OS または z/OS 上で実行されている場合、パスワードの代わりに PowerExchange の有効なパスフレーズを入力できます。i5/OS のパスフレーズは、9～31 文字の範囲で指定できます。z/OS のパスフレーズは、9～128 文字の範囲で指定できます。パスフレーズには次の文字を含めることができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> - 英字（大文字と小文字） - 数字（0～9） - スペース - 次に示す特殊文字。 ' - ; # \ , . / ! % & * () _ + { } : @ < > ? <p>注: 先頭に書かれている特殊文字はアポストロフィです。</p> <p>パスフレーズに一重引用符（'）、二重引用符（"）、または通貨記号を含めることはできません。</p> <p>パスフレーズにスペースが含まれている場合、必ずそれを二重引用符（"）で囲んでください（例: "This is a passphrase"）。パスフレーズに特殊文字が含まれる場合、パスフレーズを 3 重にした二重引用符（"""）で囲む必要があります（例: """This passphrase contains special characters ! % & * . """。パスフレーズにスペース以外の英数字のみが使用されている場合は、区切り文字を使わずにそのまま入力できます。</p> <p>注: z/OS で有効な RACF パスフレーズの最大長は 100 文字です。PowerExchange は、検証のために RACF にパスフレーズを渡すときに 100 文字を超えるパスフレーズを切り捨てます。</p> <p>パスフレーズを使用するには、DBMOVER メンバのセキュリティ設定を SECURITY=(1,N) 以上にして PowerExchange リスナを実行します。詳細については、『PowerExchange リファレンスマニュアル』の「SECURITY 文」を参照してください。</p>
-epassword -e	<i>encrypted_password</i>	<p>指定されたユーザーのための暗号化されたパスワード。</p> <p>PowerExchange リスナが i5/OS または z/OS 上で実行されている場合、暗号化されたパスワードの代わりに PowerExchange の暗号化されたパスフレーズを入力できます。無効な文字を含むパスフレーズは暗号化しないでください（二重引用符、一重引用符、通貨記号など）。</p>

pwxcmd stoptask コマンド

指定したアプリケーション名またはタスク ID に基づいて個々の PowerExchanger リスナタスクを停止します。

ヒント: アクティブなタスクの名前を特定するには、listtask コマンドを発行します。 コマンドの出力で、そのタスクの PWX-00712 メッセージを探し、名前の値をメモしておきます。stoptask コマンドにこの値を入力します。

変更データの抽出中は、stoptask コマンドを発行しても、終了 UOW が出現するか、またはコミットしきい値に達するまで、タスクの停止は保留されます。

以下の構文を使用します。

```
pwxcmd stoptask {-service|-sv} service_name
                [{-user|-uid|-u} user_ID]
                [{{-password|-pwd|-p} password|{-epassword|-e} encrypted_password}]
                [{-applicationid|-a} appname]
                {-taskid|-t} taskid
```

以下の表に、pwxcmd stoptask のオプションおよび引数を示します。

オプション	引数	説明
-service -sv	service_name	必須。PowerExchange リスナのサービス名。
-user -uid -u	user_ID	セキュリティを有効にする場合に必須です。 コマンドのターゲットになっているシステム上のオペレーティングシステムユーザーの有効な ID。 サポートされている Linux または UNIX システム上の PowerExchange リスナで PowerExchange LDAP ユーザー認証を有効にしている場合、ユーザー名はエンタープライズユーザー名になります。詳細については、『PowerExchange リファレンスマニュアル』を参照してください。 ユーザー名を指定する場合、-password または -epassword の値も指定する必要がありますが、両方指定することはできません。

オプション	引数	説明
-password -pwd -p	<i>password</i>	<p>指定したユーザーのパスワード。</p> <p>PowerExchange リスナが i5/OS または z/OS 上で実行されている場合、パスワードの代わりに PowerExchange の有効なパスフレーズを入力できます。i5/OS のパスフレーズは、9～31 文字の範囲で指定できます。z/OS のパスフレーズは、9～128 文字の範囲で指定できます。パスフレーズには次の文字を含めることができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> - 英字（大文字と小文字） - 数字（0～9） - スペース - 次に示す特殊文字。 ' - ; # \ , . / ! % * () _ + { } : @ < > ? <p>注: 先頭に書かれている特殊文字はアポストロフィです。</p> <p>パスフレーズに一重引用符（'）、二重引用符（"）、または通貨記号を含めることはできません。</p> <p>パスフレーズにスペースが含まれている場合、必ずそれを二重引用符（"）で囲んでください（例: "This is a passphrase"）。パスフレーズに特殊文字が含まれる場合、パスフレーズを 3 重にした二重引用符（"""）で囲む必要があります（例: """This passphrase contains special characters ! % & * . """。パスフレーズにスペース以外の英数字のみが使用されている場合は、区切り文字を使わずにそのまま入力できます。</p> <p>注: z/OS で有効な RACF パスフレーズの最大長は 100 文字です。PowerExchange は、検証のために RACF にパスフレーズを渡すときに 100 文字を超えるパスフレーズを切り捨てます。</p> <p>パスフレーズを使用するには、DBMOVER メンバのセキュリティ設定を SECURITY=(1,N) 以上にして PowerExchange リスナを実行します。詳細については、『PowerExchange リファレンスマニュアル』の「SECURITY 文」を参照してください。</p>
-epassword -e	<i>encrypted_password</i>	<p>指定されたユーザーのための暗号化されたパスワード。</p> <p>PowerExchange リスナが i5/OS または z/OS 上で実行されている場合、暗号化されたパスワードの代わりに PowerExchange の暗号化されたパスフレーズを入力できます。無効な文字を含むパスフレーズは暗号化しないでください（二重引用符、一重引用符、通貨記号など）。</p>

オプション	引数	説明
-applicationid -a	<i>appname</i>	-taskid <i>taskid</i> を指定しない場合に必須です。 アプリケーション名。停止するアクティブな抽出プロセスの名前。listtask コマンド出力の PWX-00712 メッセージにこの名前が表示されます。
-taskid -t	<i>taskid</i>	-application <i>appname</i> を指定しない場合に必須です。 PowerExchange リスナのタスク ID。停止する PowerExchange リスナタスクの数値識別子。listtask コマンド出力の PWX-00712 メッセージにこの ID が表示されます。

PowerExchange Condense 用の pwxcmd コマンド

pwxcmd プログラムを使用して、i5/OS または z/OS システムで実行している PowerExchange Condense プロセスに、condense、displaystatus、fileswitch、shutcond、および shutdown コマンドを発行できます。
注: pwxcmd プログラムを使用して PowerExchange Condense プロセスを起動することはできません。

pwxcmd condense コマンド

PowerExchange Condense を継続モードで実行する場合に、要約処理再開の待機時間が経過する前に要約サイクルを開始します。PowerExchange Condense CAPTPARM コンフィギュレーションファイルまたはメンバの NO_DATA_WAIT パラメータで、待機時間を指定します。

以下の構文を使用します。

```
pwxcmd condense {-service|-sv} service_name
                [{-user|-uid|-u} user_ID]
                [{-password|-pwd|-p} password]{-epassword|-e} encrypted_password}]
```

以下の表に、pwxcmd condense のオプションおよび引数を示します。

オプション	引数	説明
-service -sv	<i>service_name</i>	必須。PowerExchange Condense プロセスのサービス名。
-user -uid -u	<i>user_ID</i>	セキュリティを有効にする場合に必須です。 コマンドのターゲットになっているシステム上のオペレーティングシステムユーザーの有効な ID。 ユーザー名を指定する場合、-password または -epassword の値も指定する必要がありますが、両方指定することはできません。

オプション	引数	説明
-password -pwd -p	<i>password</i>	<p>指定したユーザーのパスワード。</p> <p>PowerExchange Condense が i5/OS または z/OS 上で実行されている場合、パスワードの代わりに PowerExchange の有効なパスフレーズを入力できます。i5/OS のパスフレーズは、9～31 文字の範囲で指定できます。z/OS のパスフレーズは、9～128 文字の範囲で指定できます。パスフレーズには次の文字を含めることができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> - 英字（大文字と小文字） - 数字（0～9） - スペース - 次に示す特殊文字。 ' - ; # \ , . / ! % * () _ + { } : @ < > ? <p>注: 先頭に書かれている特殊文字はアポストロフィです。</p> <p>パスフレーズに一重引用符（'）、二重引用符（"）、または通貨記号を含めることはできません。</p> <p>パスフレーズにスペースが含まれている場合、必ずそれを二重引用符（"）で囲んでください（例: "This is a passphrase"）。パスフレーズに特殊文字が含まれる場合、パスフレーズを 3 重にした二重引用符（"""）で囲む必要があります（例: """This passphrase contains special characters ! % & * . """。パスフレーズにスペース以外の英数字のみが使用されている場合は、区切り文字を使わずにそのまま入力できます。</p> <p>注: z/OS で有効な RACF パスフレーズの最大長は 100 文字です。PowerExchange は、検証のために RACF にパスフレーズを渡すときに 100 文字を超えるパスフレーズを切り捨てます。</p> <p>パスフレーズを使用するには、DBMOVER メンバのセキュリティ設定を SECURITY=(1,N) 以上にして PowerExchange リスナを実行します。詳細については、『PowerExchange リファレンスマニュアル』の「SECURITY 文」を参照してください。</p>
-epassword -e	<i>encrypted_password</i>	<p>指定されたユーザーのための暗号化されたパスワード。</p> <p>PowerExchange Condense が i5/OS または z/OS 上で実行されている場合、暗号化されたパスワードの代わりに PowerExchange の暗号化されたパスフレーズを入力できます。無効な文字を含むパスフレーズは暗号化しないでください（二重引用符、一重引用符、通貨記号など）。</p>

pwxcmd displaystatus コマンド

PowerExchange Condense Controller のタスクおよび PowerExchange Condense のジョブまたは開始タスクの現在のステータスを表示します。

以下の構文を使用します。

```
pwxcmd displaystatus {-service|-sv} service_name
                    [{-user|-uid|-u} user_ID]
                    [{{-password|-pwd|-p} password|{-epassword|-e} encrypted_password}]
```

以下の表に、pwxcmd displaystatus のオプションおよび引数を示します。

オプション	引数	説明
-service -sv	service_name	必須。PowerExchange Condense プロセスのサービス名。
-user -uid -u	user_ID	セキュリティを有効にする場合に必須です。 ユーザー名。 ユーザー名を指定する場合、-password または -epassword の値も指定する必要がありますが、両方指定することはできません。

オプション	引数	説明
-password -pwd -p	<i>password</i>	<p>指定されたユーザーのパスワード。</p> <p>PowerExchange Condense が i5/OS または z/OS 上で実行されている場合、パスワードの代わりに PowerExchange の有効なパスフレーズを入力できます。i5/OS のパスフレーズに認められている長さは 9～31 文字です。z/OS のパスフレーズに認められている長さは 9～128 文字です。パスフレーズに使用してもよい文字は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> - 英字（大文字と小文字） - 数字（0～9） - スペース - 次に示す特殊文字。 ' - ; # \ , . / ! % & * () _ + { } : @ < > ? <p>注: 先頭に書かれている特殊文字はアポストロフィです。</p> <p>パスフレーズに単一引用符（'）、二重引用符（"）、通貨記号を含めることはできません。</p> <p>パスフレーズにスペースが含まれている場合、必ずそれを二重引用符（"）で囲んでください（例："This is a passphrase"）。パスフレーズに特殊文字が含まれている場合は、必ずそれを連続する 3 つの二重引用符（"""）で囲んでください（例："""This passphrase contains special characters ! % & * . """）。パスフレーズにスペース以外の英数字のみが使用されている場合、このような区切り文字を使わずにそのまま入力できます。</p> <p>注: z/OS では、RACF の有効なパスフレーズの長さは、最長 100 文字です。100 文字より長いパスフレーズは、PowerExchange が RACF に渡して検証する際に切り詰められます。</p> <p>パスフレーズを使用するには、DBMOVER メンバでセキュリティ設定を SECURITY=(1,N) かそれ以上に設定したうえで PowerExchange リスナが実行されていることを確認してください。詳細は、『PowerExchange リファレンスマニュアル』の「SECURITY ステートメント」を参照してください。</p>
-epassword -e	<i>encrypted_password</i>	<p>指定されたユーザーのための暗号化されたパスワード。</p> <p>PowerExchange Condense が i5/OS または z/OS 上で実行されている場合、暗号化されたパスワードの代わりに PowerExchange の暗号化されたパスフレーズを入力できます。無効な文字を含んでいるパスフレーズは暗号化しないでください（二重引用符、単一引用符、通貨記号など）。</p>

pwxcmd fileswitch コマンド

開いている圧縮ファイルにデータが含まれる場合に、その圧縮ファイルを閉じて、PowerExchange Condense の圧縮ファイルの新しいセットに切り替えます。現在の圧縮ファイルにデータが含まれていない場合は、ファイル切り替えは行われません。

このコマンドを使用して、次のファイル切り替えが行われる前に、現在の圧縮ファイル内の変更データを抽出に使用できるようにします。例えば、圧縮ファイルから 1 時間ごとに変更データを抽出するには、100 万のレコードが更新されるごとにファイル切り替えが行われるように、CAPTPARM コンフィギュレーションファイルに FILE_SWITCH_CRIT パラメータおよび FILE_SWITCH_VAL パラメータを設定します。次に、fileswitch コマンドをバッチジョブの一部として記述し、抽出処理が実行されるまで 1 時間ごとにファイル切り替えが自動的に行われるようにします。

注: 単一の PowerExchange Condense ジョブで、部分要約処理および完全要約処理の両方を実行する場合、PowerExchange では、部分要約処理と完全要約処理に異なるセットの圧縮ファイルが使用されます。fileswitch コマンドを発行すると、両方のセットの圧縮ファイルでファイル切り替えが行われます。

以下の構文を使用します。

```
pwxcmd fileswitch {-service|-sv} service_name
                  [{-user|-uid|-u} user_ID]
                  [{{-password|-pwd|-p} password|{-epassword|-e} encrypted_password}]
```

以下の表に、pwxcmd fileswitch のオプションおよび引数を示します。

オプション	引数	説明
-service -sv	service_name	必須。PowerExchange Condense プロセスのサービス名。
-user -uid -u	user_ID	セキュリティを有効にする場合に必須です。 ユーザー名。 ユーザー名を指定する場合、-password または -epassword の値も指定する必要がありますが、両方指定することはできません。

オプション	引数	説明
-password -pwd -p	<i>password</i>	<p>指定されたユーザーのパスワード。</p> <p>PowerExchange Condense が i5/OS または z/OS 上で実行されている場合、パスワードの代わりに PowerExchange の有効なパスフレーズを入力できます。i5/OS のパスフレーズに認められている長さは 9～31 文字です。z/OS のパスフレーズに認められている長さは 9～128 文字です。パスフレーズに使用してもよい文字は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> - 英字（大文字と小文字） - 数字（0～9） - スペース - 次に示す特殊文字。 ' - ; # \ , . / ! % & * () _ + { } : @ < > ? <p>注: 先頭に書かれている特殊文字はアポストロフィです。</p> <p>パスフレーズに単一引用符（'）、二重引用符（"）、通貨記号を含めることはできません。</p> <p>パスフレーズにスペースが含まれている場合、必ずそれを二重引用符（"）で囲んでください（例："This is a passphrase"）。パスフレーズに特殊文字が含まれている場合は、必ずそれを連続する 3 つの二重引用符（"""）で囲んでください（例："""This passphrase contains special characters ! % & * . """）。パスフレーズにスペース以外の英数字のみが使用されている場合、このような区切り文字を使わずにそのまま入力できます。</p> <p>注: z/OS では、RACF の有効なパスフレーズの長さは、最長 100 文字です。100 文字より長いパスフレーズは、PowerExchange が RACF に渡して検証する際に切り詰められます。</p> <p>パスフレーズを使用するには、DBMOVER メンバでセキュリティ設定を SECURITY=(1,N) かそれ以上に設定したうえで PowerExchange リスナが実行されていることを確認してください。詳細は、『PowerExchange リファレンスマニュアル』の「SECURITY ステートメント」を参照してください。</p>
-epassword -e	<i>encrypted_password</i>	<p>指定されたユーザーのための暗号化されたパスワード。</p> <p>PowerExchange Condense が i5/OS または z/OS 上で実行されている場合、暗号化されたパスワードの代わりに PowerExchange の暗号化されたパスフレーズを入力できます。無効な文字を含んでいるパスフレーズは暗号化しないでください（二重引用符、単一引用符、通貨記号など）。</p>

pwxcmd shutcond コマンド

最後の要約サイクルを実行した後に、PowerExchange Condense を停止します。

PowerExchange では、最後の要約サイクルを開始し、その完了を待機してから、PowerExchange Condense をシャットダウンします。 シャットダウン中、PowerExchange Condense は、開いているすべての圧縮ファイルのクローズ、CDCT ファイルへのデータの書き込み、および最新のリスタートトークンを含む最終チェックポイントの作成を行ってから、シャットダウンします。

以下の構文を使用します。

```
pwxcmd shutcond {-service|-sv} service_name
                [{-user|-uid|-u} user_ID]
                [{-password|-pwd|-p} password|{-epassword|-e} encrypted_password}]
```

以下の表に、pwxcmd shutcond のオプションおよび引数を示します。

オプション	引数	説明
-service -sv	service_name	必須。PowerExchange Condense プロセスのサービス名。
-user -uid -u	user_ID	セキュリティを有効にする場合に必須です。 ユーザー名。 ユーザー名を指定する場合、-password または -epassword の値も指定する必要がありますが、両方指定することはできません。

オプション	引数	説明
-password -pwd -p	<i>password</i>	<p>指定されたユーザーのパスワード。</p> <p>PowerExchange Condense が i5/OS または z/OS 上で実行されている場合、パスワードの代わりに PowerExchange の有効なパスフレーズを入力できます。i5/OS のパスフレーズに認められている長さは 9～31 文字です。z/OS のパスフレーズに認められている長さは 9～128 文字です。パスフレーズに使用してもよい文字は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> - 英字（大文字と小文字） - 数字（0～9） - スペース - 次に示す特殊文字。 ' - ; # \ , . / ! % & * () _ + { } : @ < > ? <p>注: 先頭に書かれている特殊文字はアポストロフィです。</p> <p>パスフレーズに単一引用符（'）、二重引用符（"）、通貨記号を含めることはできません。</p> <p>パスフレーズにスペースが含まれている場合、必ずそれを二重引用符（"）で囲んでください（例："This is a passphrase"）。パスフレーズに特殊文字が含まれている場合は、必ずそれを連続する 3 つの二重引用符（"""）で囲んでください（例："""This passphrase contains special characters ! % & * . """）。パスフレーズにスペース以外の英数字のみが使用されている場合、このような区切り文字を使わずにそのまま入力できます。</p> <p>注: z/OS では、RACF の有効なパスフレーズの長さは、最長 100 文字です。100 文字より長いパスフレーズは、PowerExchange が RACF に渡して検証する際に切り詰められます。</p> <p>パスフレーズを使用するには、DBMOVER メンバでセキュリティ設定を SECURITY=(1,N) かそれ以上に設定したうえで PowerExchange リスナが実行されていることを確認してください。詳細は、『PowerExchange リファレンスマニュアル』の「SECURITY ステートメント」を参照してください。</p>
-epassword -e	<i>encrypted_password</i>	<p>指定されたユーザーのための暗号化されたパスワード。</p> <p>PowerExchange Condense が i5/OS または z/OS 上で実行されている場合、暗号化されたパスワードの代わりに PowerExchange の暗号化されたパスフレーズを入力できます。無効な文字を含んでいるパスフレーズは暗号化しないでください（二重引用符、単一引用符、通貨記号など）。</p>

pwxcmd shutdown コマンド

PowerExchange Condense を停止します。

shutdown コマンドによって、PowerExchange Condense にシャットダウンイベントが渡されます。
PowerExchange Condense がコマンドを認識すると、Condense サブタスクは以下の処理を完了します。

- 1. すべてのサブタスクを閉じるように要求します。
- 2. 開いているすべての圧縮ファイルを閉じます。
- 3. データを CDCT データセットレコードに書き込みます。
- 4. 最新のリスタートトークンを含む最終チェックポイントを作成します。

すべての要約サブタスクがシャットダウンした後に、PowerExchange Condense がシャットダウンします。

注: PowerExchange は、要約読み取り処理が終了して、CAPTPARM メンバの NO_DATA_WAIT2 パラメータで指定した待機時間が経過するまで、shutdown コマンドを処理しません。

以下の構文を使用します。

```
pwxcmd shutdown {-service|-sv} service_name
                [{-user|-uid|-u} user_ID]
                [{{-password|-pwd|-p} password|{-epassword|-e} encrypted_password}]
```

以下の表に、pwxcmd shutdown のオプションおよび引数を示します。

オプション	引数	説明
-service -sv	service_name	必須。PowerExchange Condense プロセスのサービス名。
-user -uid -u	user_ID	セキュリティを有効にする場合に必須です。 ユーザー名。 ユーザー名を指定する場合、-password または -epassword の値も指定する必要がありますが、両方指定することはできません。

オプション	引数	説明
-password -pwd -p	<i>password</i>	<p>指定されたユーザーのパスワード。</p> <p>PowerExchange Condense が i5/OS または z/OS 上で実行されている場合、パスワードの代わりに PowerExchange の有効なパスフレーズを入力できます。i5/OS のパスフレーズに認められている長さは 9～31 文字です。z/OS のパスフレーズに認められている長さは 9～128 文字です。パスフレーズに使用してもよい文字は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> - 英字（大文字と小文字） - 数字（0～9） - スペース - 次に示す特殊文字。 ' - ; # \ , . / ! % & * () _ + { } : @ < > ? <p>注: 先頭に書かれている特殊文字はアポストロフィです。</p> <p>パスフレーズに単一引用符（'）、二重引用符（"）、通貨記号を含めることはできません。</p> <p>パスフレーズにスペースが含まれている場合、必ずそれを二重引用符（"）で囲んでください（例："This is a passphrase"）。パスフレーズに特殊文字が含まれている場合は、必ずそれを連続する 3 つの二重引用符（"""）で囲んでください（例："""This passphrase contains special characters ! % & * . """）。パスフレーズにスペース以外の英数字のみが使用されている場合、このような区切り文字を使わずにそのまま入力できます。</p> <p>注: z/OS では、RACF の有効なパスフレーズの長さは、最長 100 文字です。100 文字より長いパスフレーズは、PowerExchange が RACF に渡して検証する際に切り詰められます。</p> <p>パスフレーズを使用するには、DBMOVER メンバでセキュリティ設定を SECURITY=(1,N) かそれ以上に設定したうえで PowerExchange リスナが実行されていることを確認してください。詳細は、『PowerExchange リファレンスマニュアル』の「SECURITY ステートメント」を参照してください。</p>
-epassword -e	<i>encrypted_password</i>	<p>指定されたユーザーのための暗号化されたパスワード。</p> <p>PowerExchange Condense が i5/OS または z/OS 上で実行されている場合、暗号化されたパスワードの代わりに PowerExchange の暗号化されたパスフレーズを入力できます。無効な文字を含んでいるパスフレーズは暗号化しないでください（二重引用符、単一引用符、通貨記号など）。</p>

PowerExchange ロgger（Linux、UNIX、Windows 用）用の pwxcmd コマンド

pwxcmd プログラムを使用すれば、PowerExchange ロgger（Linux、UNIX、Windows 用）のプロセスに対して、condense、display、fileswitch、shutcond、および shutdown の各コマンドを発行することができます。

注: pwxcmd プログラムを使用して、PowerExchange ロgger（Linux、UNIX、Windows 用）プロセスを起動することはできません。

pwxcmd condense コマンド

PowerExchange ロgger（Linux、UNIX、Windows 用）が継続モードで実行している場合、condense コマンドは、別のログサイクルを開始する待機時間が経過する前に、別のログサイクルを開始します。

pwxccl.cfg 構成ファイルの NO_DATA_WAIT パラメータで待機時間を指定します。

以下の構文を使用します。

```
pwxcmd condense {-service|-sv} service_name
                [{-user|-uid|-u} user_ID]
                [{-password|-pwd|-p} password|{-epassword|-e} encrypted_password]
```

以下の表に、pwxcmd condense のオプションおよび引数を示します。

オプション	引数	説明
-service -sv	service_name	必須。PowerExchange ロgger（Linux、UNIX、Windows 用）プロセスのサービス名。
-user -uid -u	user_ID	セキュリティを有効にする場合に必須です。 コマンドのターゲットになっているシステム上のオペレーティングシステムユーザーの有効な ID。 サポートされている Linux または UNIX システム上の PowerExchange ロggerで PowerExchange LDAP ユーザー認証を有効にしている場合、ユーザー名はエンタープライズユーザー名になります。詳細については、『PowerExchange リファレンスマニュアル』を参照してください。
-password -pwd -p	password	プレーンテキストパスワード。 ユーザー ID を指定する場合、プレーンテキストパスワードまたは暗号化パスワードを指定する必要があります。
-epassword -e	encrypted_password	暗号化されたパスワード。 ユーザー ID を指定する場合、プレーンテキストパスワードまたは暗号化パスワードを指定する必要があります。

pwxcmd displayall コマンド

他の PowerExchange ロgger（Linux、UNIX、Windows 用）表示コマンドで生成できるすべてのメッセージを、コマンド別に並べて表示します。

出力は、以下の pwxcmd コマンドを別々に実行した場合と同じです。

- displaycpu
- displayevents
- displaymemory
- displayrecords
- displaystatus

以下の構文を使用します。

```
pwxcmd displayall {-service|-sv} service_name  
                  [{-user|-uid|-u} user_ID]  
                  [{{-password|-pwd|-p} password|{-epassword|-e} encrypted_password}]
```

以下の表に、pwxcmd displayall のオプションおよび引数を示します。

オプション	引数	説明
-service -sv	service_name	必須。PowerExchange ロgger（Linux、UNIX、Windows 用）プロセスのサービス名。
-user -uid -u	user_ID	セキュリティを有効にする場合に必須です。 コマンドのターゲットになっているシステム上のオペレーティングシステムユーザーの有効な ID。 サポートされている Linux または UNIX システム上の PowerExchange ロggerで PowerExchange LDAP ユーザー認証を有効にしている場合、ユーザー名はエンタープライズユーザー名になります。詳細については、『PowerExchange リファレンスマニュアル』を参照してください。
-password -pwd -p	password	プレーンテキストパスワード。 ユーザー ID を指定する場合、プレーンテキストパスワードまたは暗号化パスワードを指定する必要があります。
-epassword -e	encrypted_password	暗号化されたパスワード。 ユーザー ID を指定する場合、プレーンテキストパスワードまたは暗号化パスワードを指定する必要があります。

pwxcmd displaycpu コマンド

現在のログサイクル中に PowerExchange ロggerの処理に費やした CPU 時間を、処理段階ごとにマイクロ秒で表示します。また、PowerExchange ロggerのすべての処理に費やした CPU 時間の合計も表示されます。

例えば、PowerExchange は、以下の処理段階での CPU 時間を報告することがあります。

- ソースデータの読み込み
- PowerExchange ロggerログファイルへのデータの書き込み

- ファイル切り替えの実行
- コマンドの初期化やコマンドハンドラ処理などの"その他の処理"の実行

以下の構文を使用します。

```
pwxcmd displaycpu {-service|-sv} service_name
                  [{-user|-uid|-u} user_ID]
                  [{-password|-pwd|-p} password]{-epassword|-e} encrypted_password}
```

以下の表に、pwxcmd displaycpu のオプションおよび引数を示します。

オプション	引数	説明
-service -sv	service_name	必須。PowerExchange ロgger（Linux、UNIX、Windows 用）プロセスのサービス名。
-user -uid -u	user_ID	セキュリティを有効にする場合に必須です。 コマンドのターゲットになっているシステム上のオペレーティングシステムユーザーの有効な ID。 サポートされている Linux または UNIX システム上の PowerExchange ロggerで PowerExchange LDAP ユーザー認証を有効にしている場合、ユーザー名はエンタープライズユーザー名になります。詳細については、『PowerExchange リファレンスマニュアル』を参照してください。
-password -pwd -p	password	プレーンテキストパスワード。 ユーザー ID を指定する場合、プレーンテキストパスワードまたは暗号化パスワードを指定する必要があります。
-epassword -e	encrypted_password	暗号化されたパスワード。 ユーザー ID を指定する場合、プレーンテキストパスワードまたは暗号化パスワードを指定する必要があります。

pwxcmd displayevents コマンド

PowerExchange ロggerのコントローラ、コマンドハンドラ、ライタタスクが待機しているイベントを表示します。ライタがデータを処理しているか、イベントまたはタイムアウトが行われるまで待機しているスリープ状態になっているかも示します。

以下の構文を使用します。

```
pwxcmd displayevents {-service|-sv} service_name
                     [{-user|-uid|-u} user_ID]
                     [{-password|-pwd|-p} password]{-epassword|-e} encrypted_password}
```


以下の表に、pwxcmd displayevents のオプションおよび引数を示します。

オプション	引数	説明
-service -sv	<i>service_name</i>	必須。PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) プロセスのサービス名。
-user -uid -u	<i>user_ID</i>	セキュリティを有効にする場合に必須です。 コマンドのターゲットになっているシステム上のオペレーティングシステムユーザーの有効な ID。 サポートされている Linux または UNIX システム上の PowerExchange ロgger で PowerExchange LDAP ユーザー認証を有効にしている場合、ユーザー名はエンタープライズユーザー名になります。詳細については、『PowerExchange リファレンスマニュアル』を参照してください。
-password -pwd -p	<i>password</i>	プレーンテキストパスワード。 ユーザー ID を指定する場合、プレーンテキストパスワードまたは暗号化パスワードを指定する必要があります。
-epassword -e	<i>encrypted_password</i>	暗号化されたパスワード。 ユーザー ID を指定する場合、プレーンテキストパスワードまたは暗号化パスワードを指定する必要があります。

pwxcmd displaymemory コマンド

PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) が PowerExchange ロgger のタスクおよびサブタスクごとに費やすメモリ使用量と、PowerExchange ロgger プロセス全体で費やす合計のメモリ使用量をバイト単位で表示します。

PowerExchange は、以下のカテゴリに費やすメモリ使用量を報告します。

- **アプリケーション。** PowerExchange ロgger アプリケーションがアプリケーション自体で使用するために必要なメモリ。
- **合計。** PowerExchange ロgger アプリケーションと、関連するヘッダーオーバーヘッドに使用される合計メモリ。PowerExchange ロgger の処理中に、PowerExchange は動的にメモリを割り当て、解放するので、この値は絶えず変動します。
- **最大。** このコマンドが実行する時点までに“合計”カテゴリについて記録された最大メモリ量。

以下の構文を使用します。

```
pwxcmd displaymemory {-service|-sv} service_name
                        [{-user|-uid|-u} user_ID]
                        [{{-password|-pwd|-p} password|{-epassword|-e} encrypted_password}]
```

以下の表に、`pwxcmd displaymemory` のオプションおよび引数を示します。

オプション	引数	説明
-service -sv	<i>service_name</i>	必須。PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) プロセスのサービス名。
-user -uid -u	<i>user_ID</i>	セキュリティを有効にする場合に必須です。 コマンドのターゲットになっているシステム上のオペレーティングシステムユーザーの有効な ID。 サポートされている Linux または UNIX システム上の PowerExchange ロgger で PowerExchange LDAP ユーザー認証を有効にしている場合、ユーザー名はエンタープライズユーザー名になります。詳細については、『PowerExchange リファレンスマニュアル』を参照してください。
-password -pwd -p	<i>password</i>	プレーンテキストパスワード。 ユーザー ID を指定する場合、プレーンテキストパスワードまたは暗号化パスワードを指定する必要があります。
-epassword -e	<i>encrypted_password</i>	暗号化されたパスワード。 ユーザー ID を指定する場合、プレーンテキストパスワードまたは暗号化パスワードを指定する必要があります。

pwxcmd displayrecords コマンド

PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) が現在の処理サイクル中に処理した変更レコードのカウンタを表示します。PowerExchange ロgger が現在のサイクルで変更を受信しなかった場合、PowerExchange ロgger ログファイルの現在のセットについて変更レコードのカウンタを表示します。

レコードカウンタは、処理された変更レコードのタイプごと、および処理された合計レコードについて表示されます。変更レコードのタイプには、削除、挿入、更新、およびコミットがあります。

カウンタが現在のサイクルのものか現在のログファイルのものかに応じて、出力には、以下のタイプのカウンタのすべてまたは一部が表示されます。

- **サイクル。** PowerExchange ロgger の現在の処理サイクルに対する変更レコードのカウンタ。
`pwxccl.cfg` ファイルの `NO_DATA_WAIT2` パラメータで指定されている待機間隔が経過し、変更データが受信されなかった場合、PowerExchange ロgger はこれらのカウンタをゼロにリセットします。
- **ファイル。** 現在の一連の PowerExchange ログファイルの変更レコード数。PowerExchange ロgger は、ファイル切り替えが行われたときに、これらのカウンタをゼロにリセットします。
- **合計。** PowerExchange ロgger が起動以降に受信した変更レコードの合計カウンタ。これらのカウンタはゼロにリセットされません。

以下の構文を使用します。

```
pwxcmd displayrecords {-service|-sv} service_name
                        [{-user|-uid|-u} user_ID]
                        [{-password|-pwd|-p} password|{-epassword|-e} encrypted_password]
```

以下の表に、pwxcmd displayrecords のオプションおよび引数を示します。

オプション	引数	説明
-service -sv	<i>service_name</i>	必須。PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) プロセスのサービス名。
-user -uid -u	<i>user_ID</i>	セキュリティを有効にする場合に必須です。 コマンドのターゲットになっているシステム上のオペレーティングシステムユーザーの有効な ID。 サポートされている Linux または UNIX システム上の PowerExchange ロgger で PowerExchange LDAP ユーザー認証を有効にしている場合、ユーザー名はエンタープライズユーザー名になります。詳細については、『PowerExchange リファレンスマニュアル』を参照してください。
-password -pwd -p	<i>password</i>	プレーンテキストパスワード。 ユーザー ID を指定する場合、プレーンテキストパスワードまたは暗号化パスワードを指定する必要があります。
-epassword -e	<i>encrypted_password</i>	暗号化されたパスワード。 ユーザー ID を指定する場合、プレーンテキストパスワードまたは暗号化パスワードを指定する必要があります。

pwxcmd displaystats コマンド

PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) の監視統計を表示します。このコマンドでは、使用する -type (-tp) 引数に応じて、PowerExchange ロgger のプロセスおよびタスク、または PowerExchange ロgger グループ定義の統計をレポートできます。

コマンドを実行する前に、監視統計の収集を有効にするように、PowerExchange ロgger が実行されているシステムで、PowerExchange ロgger の pwxcl.cfg 設定ファイル内の STATS= (MONITOR) パラメータを設定する必要があります。

コマンドでデフォルト値の -tp logger を使用すると、次の統計が報告されます。

- PowerExchange ロgger のプロセス ID
- PowerExchange ロgger の Writer サブタスクのステータス
- PowerExchange ロgger が、開始以降使用した CPU 時間
- コントローラ、コマンドハンドラ、および Writer の各タスクによる PowerExchange ロgger のメモリ使用量とその合計。次のカテゴリで、タスクのメモリ使用量がレポートされます。
 - 現在。タスクが現在使用しているメモリの量。
 - 合計。タスクおよび関連するヘッダーオーバーヘッドによって使用されているメモリの量。この値は、PowerExchange ロgger 処理中の、メモリの動的な割り当てや解放により変動します
 - 最大。監視統計が生成されるまでに、"合計"カテゴリに記録されたメモリの最大量。
- 開いているロgger ログファイルとアクティブなロギングサイクルについての、PowerExchange ロgger が処理した挿入、更新、削除、およびコミットの数とその合計。

コマンドで `-tp groups` を指定すると、定義されている各 PowerExchange ロggerグループの次の統計が報告されます。

- グループ名およびグループ内のキャプチャ登録数
- グループに対して PowerExchange ロggerが処理した挿入、更新、および削除レコードの合計数
- グループに対して PowerExchange ロggerが処理したコミットの数
- メモリからディスク上のログファイルに PowerExchange ロggerがまだフラッシュしていない変更レコードの数
- 開かれているロggerログファイルの名前と、そのファイルがいつ開かれたかを示すタイムスタンプ

以下の構文を使用します。

```

pwxcmd displaystats {-service|-sv} service_name
                    [{-user|-uid|-u} user_ID
                    [{-password|-pwd|-p} password]{-epassword|-e} encrypted_password}]
                    [{-type|-tp} [{logger|groups}]

```

以下の表に、`pwxcmd displaystats` のオプションおよび引数を示します。

オプション	引数	説明
-service -sv	<i>service_name</i>	必須。PowerExchange ロgger（Linux、UNIX、Windows 用）プロセスのサービス名。
-user -uid -u	<i>user_ID</i>	セキュリティを有効にする場合に必須です。コマンドのターゲットになっているシステム上のオペレーティングシステムユーザーの有効な ID。 サポートされている Linux または UNIX システム上の PowerExchange ロggerで PowerExchange LDAP ユーザー認証を有効にしている場合、ユーザー名はエンタープライズユーザー名になります。詳細については、『 <i>PowerExchange リファレンスマニュアル</i> 』を参照してください。
-password -pwd -p	<i>password</i>	プレーンテキストパスワード。 ユーザー ID を指定する場合、プレーンテキストパスワードまたは暗号化パスワードを指定する必要があります。

オプション	引数	説明
-epassword -e	<i>encrypted_password</i>	暗号化されたパスワード。 ユーザー ID を指定する場合、プレーンテキストパスワードまたは暗号化パスワードを指定する必要があります。
-type -t	<i>report_type</i>	オプション。PowerExchange ロggerレポートのタイプを示します。次のオプションがあります。 - logger。PowerExchange ロggerのプロセスとタスクの監視統計をレポートします。統計には、PowerExchange ロggerのプロセス ID (PID)、Writer サブタスクステータス、使用された CPU 時間、タスクタイプ別のメモリ使用量、処理された挿入、更新、削除、およびコミットの数が含まれます。 - groups。各 PowerExchange ロggerグループ定義の統計を報告します。グループ定義は、登録されたソーステーブルのグループに対して一連の PowerExchange ロggerログファイルを定義するものです。統計には、グループ内の登録数、処理された DML 操作の合計数、処理されたコミット数、開いているロggerログファイルの名前、開いているログファイルのタイムスタンプ、およびログファイルにまだフラッシュされていない変更レコードの数が含まれます。定義されたグループ定義がない場合、すべてのソーステーブルおよび登録が 1 つの大きなグループに属しているように、これらの統計と他のいくつかの統計を報告します。 デフォルトは logger です。

関連項目：

- [「DG コマンド」 \(ページ 129\)](#)
- [「DL コマンド」 \(ページ 135\)](#)

pwxcmd fileswitch コマンド

開いている PowerExchange ロgger（Linux、UNIX、Windows 用）ログファイルを閉じてから、新しいログファイルセットに切り替えます。開いているログファイルにデータが含まれていない場合は、ファイル切り替えは行われません。

変更データを抽出処理に使用できるようにするために、次のファイル切り替えが行われるまで、自動ファイル切り替えを実行できます。バッチ抽出モードで抽出を実行する場合、pwxcmd fileswitch コマンドをスクリプトに含め、バッチ抽出前にこのスクリプトを実行します。

例えば、PowerExchange ロggerログファイルから 1 時間ごとに変更データを抽出するには、最初に、抽出の実行前にファイル切り替えが自動的に行われることのないように、pwxccl.cfg ファイルで FILE_SWITCH_CRIT パラメータと FILE_SWITCH_VAL パラメータを設定します。例えば、1,000,000 件のレコードが更新されるごとに、自動ファイル切り替えを実行するようにパラメータを設定できます。続いて、pwxcmd fileswitch コマンドを、スケジュールされた抽出プロセスの直前に実行するスクリプトに含めます。

注: 通常、継続抽出モードを使用する場合、手動でファイル切り替えを実行する必要はありません。

以下の構文を使用します。

```
pwxcmd fileswitch {-service|-sv} service_name
                  [{-user|-uid|-u} user_ID]
                  [{{-password|-pwd|-p} password|{-epassword|-e} encrypted_password}]
```

以下の表に、pwxcmd fileswitch のオプションおよび引数を示します。

オプション	引数	説明
-service -sv	<i>service_name</i>	必須。PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) プロセスのサービス名。
-user -uid -u	<i>user_ID</i>	セキュリティを有効にする場合に必須です。 コマンドのターゲットになっているシステム上のオペレーティングシステムユーザーの有効な ID。 サポートされている Linux または UNIX システム上の PowerExchange ロgger で PowerExchange LDAP ユーザー認証を有効にしている場合、ユーザー名はエンタープライズユーザー名になります。詳細については、『PowerExchange リファレンスマニュアル』を参照してください。
-password -pwd -p	<i>password</i>	プレーンテキストパスワード。 ユーザー ID を指定する場合、プレーンテキストパスワードまたは暗号化パスワードを指定する必要があります。
-epassword -e	<i>encrypted_password</i>	暗号化されたパスワード。 ユーザー ID を指定する場合、プレーンテキストパスワードまたは暗号化パスワードを指定する必要があります。

pwxcmd shutcond コマンド

最終処理サイクルの完了後に、管理された方法で、PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) を停止します。最終処理サイクルによって、PowerExchange ロgger は、コマンドを発行した時点までに行われたすべての変更をキャプチャできます。

ヒント: 処理サイクルが最近実行していない場合、このコマンドを使用して、PowerExchange ロgger を停止します。

処理サイクルの完了後、PowerExchange ロgger は以下のアクションを実行します。

- 開いているログファイルを閉じる。
- リスタートトークンやシーケンストークンなどのデータを CDCT ファイルに書き込みます。
- CAPI を閉じる。
- ライタおよびコマンドハンドラのサブタスクを停止する。
- pwxcl プログラムを終了する。
- CPU 使用率を報告する。

以下の構文を使用します。

```
pwxcmd shutcond {-service|-sv} service_name
                 [{-user|-uid|-u} user_ID]
                 [{-password|-pwd|-p} password|{-epassword|-e} encrypted_password]
```

以下の表に、pwxcmd shutcond のオプションおよび引数を示します。

オプション	引数	説明
-service -sv	<i>service_name</i>	必須。PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) プロセスのサービス名。
-user -uid -u	<i>user_ID</i>	セキュリティを有効にする場合に必須です。 コマンドのターゲットになっているシステム上のオペレーティングシステムユーザーの有効な ID。 サポートされている Linux または UNIX システム上の PowerExchange ロgger で PowerExchange LDAP ユーザー認証を有効にしている場合、ユーザー名はエンタープライズユーザー名になります。詳細については、『PowerExchange リファレンスマニュアル』を参照してください。
-password -pwd -p	<i>password</i>	プレーンテキストパスワード。 ユーザー ID を指定する場合、プレーンテキストパスワードまたは暗号化パスワードを指定する必要があります。
-epassword -e	<i>encrypted_password</i>	暗号化されたパスワード。 ユーザー ID を指定する場合、プレーンテキストパスワードまたは暗号化パスワードを指定する必要があります。

pwxcmd shutdown コマンド

開いている PowerExchange ロgger のログファイルを閉じて最新のリスタート位置を CDCT ファイルに書き込んだ後に、管理された方法で PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) を停止します。

シャットダウン処理中、PowerExchange ロgger は以下のアクションを完了します。

- 開いているログファイルを閉じる。
- 更新されたログとリスタート情報を CDCT ファイルに書き込みます。
- CAPI を閉じる。
- ライタおよびコマンドハンドラのサブタスクを停止する。
- pwxcl プログラムを終了する。
- CPU 使用率を報告する。

このコマンドを使用して、継続モードで実行している PowerExchange ロgger プロセスを停止します。コマンドプロンプトでシャットダウンコマンドを入力するのではなく、pwxcmd プログラムを使用してこのコマンドを発行することをお勧めします。pwxcmd を使用した場合、同一のシステムまたは別のシステム上でバックグラウンドモードまたはフォアグラウンドモードで実行している PowerExchange ロgger プロセスに、コマンドを送信できます。

バッチモードで PowerExchange ロgger を実行する場合は、通常、このコマンドは必要ありません。PowerExchange ロgger プロセスは、pwxcl.cfg ファイルの NO_DATA_WAIT2 パラメータで指定した待機時間が経過した後にシャットダウンします。

以下の構文を使用します。

```
pwxcmd shutdown {-service|-sv} service_name  
                [{-user|-uid|-u} user_ID]  
                [{{-password|-pwd|-p} password|{-epassword|-e} encrypted_password}]
```

以下の表に、pwxcmd shutdown のオプションおよび引数を示します。

オプション	引数	説明
-service -sv	service_name	必須。PowerExchange ロgger（Linux、UNIX、Windows 用）プロセスのサービス名。
-user -uid -u	user_ID	セキュリティを有効にする場合に必須です。 コマンドのターゲットになっているシステム上のオペレーティングシステムユーザーの有効な ID。 サポートされている Linux または UNIX システム上の PowerExchange ロggerで PowerExchange LDAP ユーザー認証を有効にしている場合、ユーザー名はエンタープライズユーザー名になります。詳細については、『PowerExchange リファレンスマニュアル』を参照してください。
-password -pwd -p	password	プレーンテキストパスワード。 ユーザー ID を指定する場合、プレーンテキストパスワードまたは暗号化されたパスワードも指定する必要があります。
-epassword -e	encrypted_password	暗号化されたパスワード。 ユーザー ID を指定する場合、プレーンテキストパスワードまたは暗号化されたパスワードも指定する必要があります。

PowerExchange ログベース ECCR および Datacom ECCR の pwxcmd コマンド

pwxcmd プログラムを使用すると、Adabas、IDMS、および IMS ログベース ECCR または Datacom テーブルベース ECCR の close、displaystats、displaytrace、traceon、および traceoff コマンドを発行できます。Linux、Unix、または Windows サーバーからコマンドを発行します。

注: pwxcmd プログラムを使用して ECCR を起動することはできません。

関連項目：

- [「PowerExchange Listener 用の pwxcmd コマンド」](#)（ページ 153）
- [「PowerExchange Condense 用の pwxcmd コマンド」](#)（ページ 164）
- [「PowerExchange ロgger（Linux、UNIX、Windows 用）用の pwxcmd コマンド」](#)（ページ 174）
- [「その他の pwxcmd コマンド」](#)（ページ 195）

pwxcmd close コマンド

z/OS 上の PowerExchange ECCR を停止します。z/OS 上の Adabas、IDMS、または IMS ログベース ECCR または Datacom テーブルベース ECCR にこのコマンドを発行できます。ECCR をリスタートすると、停止したときの位置からログレコードの読み込みが再開されます。そのため、変更内容が失われることはありません。

注: ECCR が待機状態の場合、待機間隔が経過するか、コンソールコマンドによって ECCR がアクティブ化されるとシャットダウンされます。

以下の構文を使用します。

```
pwxcmd close {-service|-sv} service_name
              [{-user|-uid|-u} user_ID]
              [{{-password|-pwd|-p} password|{-epassword|-e} encrypted_password}]
```

close コマンドは以下のメッセージを発行します。

```
PWX-07820 ECCR: Close Command accepted
```

以下の表に、*pwxcmd close* のオプションおよび引数を示します。

オプション	引数	説明
-service -sv	service_name	必須。この pwxcmd コマンドの対象となる z/OS 上の PowerExchange ECCR ジョブまたは開始済みタスクのサービス名。ECCR の場合、サービス名は dbmover.cfg コンフィギュレーションファイル内の CMDNODE 文で指定される ECCR 名です。
-user -uid -u	user_ID	セキュリティを有効にする場合に必須です。コマンドのターゲットになっているシステム上のオペレーティングシステムユーザーの有効な ID。 ユーザー名を指定する場合、-password または -epassword の値も指定する必要がありますが、両方指定することはできません。

オプション	引数	説明
-password -pwd -p	<i>password</i>	<p>指定したユーザーのパスワード。</p> <p>z/OS 上の PowerExchange ログベース ECCR または Datacom テーブルベース ECCR の場合は、パスワードの代わりに有効な PowerExchange パスフレーズを入力できます。z/OS のパスフレーズは、9～128 文字の範囲で指定できます。パスフレーズには次の文字を含めることができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> - 英字（大文字と小文字） - 数字（0～9） - スペース - 次を示す特殊文字。 ' - ; # \ , . / ! % & * () _ + { } : @ < > ? <p>注: 先頭に書かれている特殊文字はアポストロフィです。</p> <p>パスフレーズに一重引用符（'）、二重引用符（"）、または通貨記号を含めることはできません。</p> <p>パスフレーズにスペースが含まれている場合、必ずそれを二重引用符（"）で囲んでください（例: "This is a passphrase"）。パスフレーズに特殊文字が含まれる場合、パスフレーズを 3 重にした二重引用符（"""）で囲む必要があります（例: """This passphrase contains special characters ! % & * . """）。パスフレーズにスペース以外の英数字のみが使用されている場合は、区切り文字を使わずにそのまま入力できます。</p> <p>注: z/OS で有効な RACF パスフレーズの最大長は 100 文字です。PowerExchange は、検証のために RACF にパスフレーズを渡すときに 100 文字を超えるパスフレーズを切り捨てます。</p> <p>パスフレーズを使用するには、DBMOVER メンバのセキュリティ設定を SECURITY=(1,N) 以上にして PowerExchange ECCR を実行します。詳細については、『PowerExchange リファレンスマニュアル』の「SECURITY 文」を参照してください。</p>
-epassword -e	<i>encrypted_password</i>	<p>指定されたユーザーのための暗号化されたパスワード。</p> <p>z/OS 上の PowerExchange ログベース ECCR または Datacom テーブルベース ECCR の場合は、暗号化パスワードの代わりに暗号化された PowerExchange パスフレーズを入力できます。無効な文字を含むパスフレーズは暗号化しないでください（二重引用符、一重引用符、通貨記号など）。</p>

pwxcmd displaystats コマンド

z/OS での PowerExchange ECCR の監視統計を表示します。Adabas、IDMS、または IMS ログベース ECCR または Datacom テーブルベース ECCR にこのコマンドを発行できます。displaystats pwxcmd コマンドで表示される情報は、STATISTICS コマンドで表示される情報と同じです。

以下の構文を使用します。

```
pwxcmd displaystats {-service|-sv} service_name
                    [{-user|-uid|-u} user_ID
                    [{-password|-pwd|-p} password|{-epassword|-e} encrypted_password}]
                    [{-type|-tp terse}]
```

PWX-06153 メッセージは、ECCR でキャプチャされた挿入、削除、更新の数を報告します。このメッセージは、ECCR によるソースログからのデータ読み取り後および ECCR 実行終了時に発行されます。

以下の表に、pwxcmd displaystats のオプションおよび引数を示します。

オプション	引数	説明
-service -sv	service_name	必須。この pwxcmd コマンドの対象となる z/OS 上の PowerExchange ECCR ジョブまたは開始済みタスクのサービス名。ECCR の場合、サービス名は dbmover.cfg コンフィギュレーション ファイル内の CMDNODE 文で指定される ECCR 名です。
-user -uid -u	user_ID	セキュリティを有効にする場合に必須です。コマンドのターゲットになっているシステム上のオペレーティングシステムユーザーの有効な ID。 ユーザー名を指定する場合、-password または -epassword の値も指定する必要がありますが、両方指定することはできません。

オプション	引数	説明
-password -pwd -p	<i>password</i>	<p>指定したユーザーのパスワード。</p> <p>z/OS 上の PowerExchange ログベース ECCR または Datacom テーブルベース ECCR の場合は、パスワードの代わりに有効な PowerExchange パスフレーズを入力できます。z/OS のパスフレーズは、9～128 文字の範囲で指定できます。パスフレーズには次の文字を含めることができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> - 英字（大文字と小文字） - 数字（0～9） - スペース - 次に示す特殊文字。 ' - ; # \ , . / ! % & * () _ + { } : @ < > ? <p>注: 先頭に書かれている特殊文字はアポストロフィです。</p> <p>パスフレーズに一重引用符（'）、二重引用符（"）、または通貨記号を含めることはできません。</p> <p>パスフレーズにスペースが含まれている場合、必ずそれを二重引用符（"）で囲んでください（例: "This is a passphrase"）。パスフレーズに特殊文字が含まれる場合、パスフレーズを 3 重にした二重引用符（"""）で囲む必要があります（例: """This passphrase contains special characters ! % & * . """）。パスフレーズにスペース以外の英数字のみが使用されている場合は、区切り文字を使わずにそのまま入力できます。</p> <p>注: z/OS で有効な RACF パスフレーズの最大長は 100 文字です。PowerExchange は、検証のために RACF にパスフレーズを渡すときに 100 文字を超えるパスフレーズを切り捨てます。</p> <p>パスフレーズを使用するには、DBMOVER メンバのセキュリティ設定を SECURITY=(1,N)以上にして PowerExchange ECCR を実行します。詳細については、『PowerExchange リファレンスマニュアル』の「SECURITY 文」を参照してください。</p>
-epassword -e	<i>encrypted_password</i>	<p>指定されたユーザーのための暗号化されたパスワード。</p> <p>z/OS 上の PowerExchange ログベース ECCR または Datacom テーブルベース ECCR の場合は、暗号化パスワードの代わりに暗号化された PowerExchange パスフレーズを入力できます。無効な文字を含むパスフレーズは暗号化しないでください（二重引用符、一重引用符、通貨記号など）。</p>
-type -tp	<i>report_type</i>	<p>オプション。レポートする監視統計のタイプを示します。</p> <p>PowerExchange ログベース ECCR または Datacom テーブルベース ECCR の場合、使用可能なタイプは terse のみです。-type terse を指定すると、コマンドレスポンスは、displaystats コマンドの最後の実行時以降に ECCR が変更をキャプチャした登録済みソースの結果に制限します。指定しない場合は、コマンドの前回実行時以降に変更されたデータがキャプチャされたかどうかにかかわらず、登録済みのすべてのソースが含まれます。</p>

Adabas ECCR の pwxcmd displaystats からの出力例

次の出力例は、Adabas ECCR の pwxcmd displaystats コマンドからの出力です。

```
PWX-06180 ECCR (ADABAS ADECCR1) run complete. Totals for this run:
PWX-06153 ddm51.1          08242 0051 I=0000000000000 U=0000000000000 D=0000000000000
PWX-06153 employee.1      08242 0001 I=0000000000005 U=0000000000000 D=0000000000001
PWX-06153 f351.1          08242 0351 I=0000000000000 U=0000000000000 D=0000000000000
PWX-06153 migtest.1       08242 0102 I=0000000000000 U=0000000000000 D=0000000000000
PWX-06153 migtest2.1      08242 0103 I=0000000000000 U=0000000000000 D=0000000000000
PWX-06153 personne.1      08242 0003 I=0000000000000 U=0000000000000 D=0000000000000
```

```
PWX-06153 vehicles.1      08242 0002 I=000000000000 U=000000000000 D=000000000000
PWX-06182 Totals 17/09/12 10:08:44 I=000000000005 U=000000000000 D=000000000001 C=000000000003 Log=15/12/18
15:54:41.03
```

出力には、Adabas ソースに関する次の情報が含まれます。

- Adabas ソースデータベースのデータベース ID
- Adabas ファイル番号

Datacom ECCR の pwxcmd displaystats からの出力例

次の出力例は、Datacom ECCR の pwxcmd displaystats コマンドからの出力です。

```
PWX-06180 ECCR (DATACOM DCM0152) run complete. Totals for this run:
PWX-06153 pwx1877a.1      I=000000000000 U=000000000000 D=000000000000
PWX-06153 pwx1877b.1      I=000000000000 U=000000000000 D=000000000000
PWX-06153 sfl997.1        I=000000000000 U=000000000000 D=000000000000
PWX-06153 td7crrm.1       I=000000000000 U=000000000000 D=000000000000
PWX-06153 td7crrs.1       I=000000000000 U=000000000000 D=000000000000
PWX-06153 td7crsfl.1      I=000000000000 U=000000000000 D=000000000000
PWX-06153 td7crstu.1      I=000000000000 U=000000000000 D=000000000000
PWX-06182 Totals 17/09/12 12:43:39 I=000000000000 U=000000000000 D=000000000000 C=000000000000 Log=17/09/12
10:59:14.1
```

Datacom ECCR の出力に登録タグ名が表示されます。

IDMS ECCR の pwxcmd displaystats からの出力例

次の出力例は、IDMS ECCR の pwxcmd displaystats コマンドからの出力です。

```
PWX-06180 ECCR (IDMS IDCA323) run complete. Totals for this run:
PWX-06153 coursen.1        I=000000001061 U=000000025300 D=000000000000
PWX-06153 crsenmem.1       I=0000000025300 U=0000000055319 D=000000000000
PWX-06153 stundent.1       I=000000004000 U=000000015520 D=000000000000
PWX-06153 stunflat.1       I=0000000011185 U=0000000010004 D=0000000002000
PWX-06182 Totals 17/09/12 10:49:01 I=0000000041546 U=000000106143 D=000000002000 C=000000012149 Log=13/10/22
09:32:32.68
```

IDMS ECCR の場合、出力には登録タグ名が表示されます。

IMS ECCR の pwxcmd displaystats からの出力例

次の出力例は、IMS ログベース ECCR の pwxcmd displaystats コマンドからの出力です。

```
PWX-06179 IMS ECCR Run complete. Totals for this run:
PWX-06153 d002root.1      DTLD002 ROOT      I=000000000000 U=000000000000 D=000000000000
PWX-06153 d002seg1.1      DTLD002 SEG1      I=0000000000021 U=000000000000 D=0000000000021
PWX-06153 d002seg2.1      DTLD002 SEG2      I=000000000000 U=000000000000 D=000000000000
PWX-06153 d003cplt.1      DTLD003 SEG2      I=000000000000 U=000000000000 D=000000000000
PWX-06153 d003root.1      DTLD003 ROOT      I=000000000000 U=000000000000 D=000000000000
PWX-06153 d004root.1      DTLD004 ROOT      I=000000000000 U=000000000000 D=000000000000
PWX-06153 d004seg1.1      DTLD004 SEG1      I=000000000000 U=000000000000 D=000000000000
PWX-06153 d004seg2.1      DTLD004 SEG2      I=000000000000 U=000000000000 D=000000000000
PWX-06153 d2rt2sg2.1      DTLD002 SEG2      I=000000000000 U=000000000000 D=000000000000
PWX-06153 d4rt2sg2.1      DTLD004 SEG2      I=000000000000 U=000000000000 D=000000000000
PWX-06153 hospital.1      HOSPD00 HOSPITAL  I=000000000000 U=000000000000 D=000000000000
PWX-06153 hosp2.1         HOSPD002 HOSPITAL I=000000000000 U=000000000000 D=000000000000
PWX-06153 hosp2pat.1      HOSPD00 PATIENT    I=000000000000 U=000000000000 D=000000000000
PWX-06153 patient.1       HOSPD00 PATIENT    I=000000000000 U=000000000000 D=000000000000
PWX-06153 patient2.1      HOSPD002 PATIENT   I=000000000000 U=000000000000 D=000000000000
PWX-06153 sympt2.1        HOSPD002 SYMPTOM   I=000000000000 U=000000000000 D=000000000000
PWX-06182 Totals 17/09/04 08:40:22 I=000000000021 U=000000000000 D=000000000021 C=000000000042
Log=17/09/04 08:38:30.69
```

次の例は、*terse* オプションが設定されたコマンドの結果を示しています。

```
PWX-06179 IMS ECCR Run complete. Totals for this run:
PWX-06153 d002seg1.1          DTLD002 SEG1      I=0000000000021 U=0000000000000 D=0000000000021
PWX-06182 Totals    17/09/04 08:40:22          I=0000000000021 U=0000000000000 D=0000000000021 C=0000000000042
Log=17/09/04 08:38:30.69
```

IMS ECCR の出力には、次の情報が含まれています。

- 登録タグ名
- DBDNAME
- セグメント名

pwxcmd displaytrace コマンド

Adabas、IDMS、および IMS ログベース ECCR または Datacom テーブルベース ECCR のアクティブトレース機能のステータスを表示します。

以下の構文を使用します。

```
pwxcmd displaytrace {-service|-sv} service_name
                    [{-user|-uid|-u} user_ID
                    [{-password|-pwd|-p} password][{-epassword|-e} encrypted_password]
```

以下の表に、pwxcmd displaytrace のオプションおよび引数を示します。

オプション	引数	説明
-service -sv	<i>service_name</i>	必須。この pwxcmd コマンドの対象となる z/OS 上の PowerExchange ECCR ジョブまたは開始済みタスクのサービス名。ECCR の場合、サービス名は dbmover.cfg コンフィギュレーションファイル内の CMDNODE 文で指定される ECCR 名です。
-user -uid -u	<i>user_ID</i>	セキュリティを有効にする場合に必須です。コマンドのターゲットになっているシステム上のオペレーティングシステムユーザーの有効な ID。 ユーザー名を指定する場合、-password または -epassword の値も指定する必要がありますが、両方指定することはできません。

オプション	引数	説明
-password -pwd -p	<i>password</i>	<p>指定したユーザーのパスワード。</p> <p>z/OS 上の PowerExchange ログベース ECCR または Datacom テーブルベース ECCR の場合は、パスワードの代わりに有効な PowerExchange パスフレーズを入力できます。z/OS のパスフレーズは、9～128 文字の範囲で指定できます。パスフレーズには次の文字を含めることができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> - 英字（大文字と小文字） - 数字（0～9） - スペース - 次に示す特殊文字。 ' - ; # \ , . / ! % & * () _ + { } : @ < > ? <p>注: 先頭に書かれている特殊文字はアポストロフィです。</p> <p>パスフレーズに一重引用符（'）、二重引用符（"）、または通貨記号を含めることはできません。</p> <p>パスフレーズにスペースが含まれている場合、必ずそれを二重引用符（"）で囲んでください（例: "This is a passphrase"）。パスフレーズに特殊文字が含まれる場合、パスフレーズを 3 重にした二重引用符（"""）で囲む必要があります（例: """This passphrase contains special characters ! % & * . """）。パスフレーズにスペース以外の英数字のみが使用されている場合は、区切り文字を使わずにそのまま入力できます。</p> <p>注: z/OS で有効な RACF パスフレーズの最大長は 100 文字です。PowerExchange は、検証のために RACF にパスフレーズを渡すときに 100 文字を超えるパスフレーズを切り捨てます。</p> <p>パスフレーズを使用するには、DBMOVER メンバのセキュリティ設定を SECURITY=(1,N)以上にして PowerExchange ECCR を実行します。詳細については、『PowerExchange リファレンスマニュアル』の「SECURITY 文」を参照してください。</p>
-epassword -e	<i>encrypted_password</i>	<p>指定されたユーザーのための暗号化されたパスワード。</p> <p>z/OS 上の PowerExchange ログベース ECCR または Datacom テーブルベース ECCR の場合は、暗号化パスワードの代わりに暗号化された PowerExchange パスフレーズを入力できます。無効な文字を含むパスフレーズは暗号化しないでください（二重引用符、一重引用符、通貨記号など）。</p>

次の出力例は、pwxcmd displaytrace コマンドの結果を示しています。

```
DTLCCOMC:01508 F601_GetCommandString - Decoded Rx command 'DISPLAY TRACE. res=0'
DTLCCOMC:01606 Command DISPLAYTRACE Accepted
DTLCCOMN:00189 ECCR_Execute_Command: cmd=<DISPLAY TRACE>, from=<Beep>
DTLCCOMN:01923 CMD_Disp_Trace
PWX-07997 Trace level=0 filter=COMMAND_HANDLER
PWX-07997 Trace level=0 filter=DATA_MODEL
PWX-07997 Trace level=0 filter=ECCRCOMN
PWX-07997 Trace level=0 filter=IMXCOLL
PWX-07997 Trace level=0 filter=LGO
PWX-07997 Trace level=0 filter=ODBA
PWX-07997 Trace level=0 filter=SEC
PWX-07997 Trace level=0 filter=SRV
PWX-07997 Trace level=0 filter=SSA
```

pwxcmd traceoff コマンド

z/OS 上の PowerExchange ECCR のトレースアクティビティを無効にします。Adabas、IDMS、または IMS ログベース ECCR または Datacom テーブルベース ECCR にこのコマンドを発行できます。

以下の構文を使用します。

```
pwxcmd traceoff {-service|-sv} service_name
                [{-user|-uid|-u} user_ID]
                [{{-password|-pwd|-p} password|-epassword|-e} encrypted_password]
                [{-trace} trace_filter]
```

以下の表に、pwxcmd traceoff のオプションおよび引数を示します。

オプション	引数	説明
-service -sv	<i>service_name</i>	必須。この pwxcmd コマンドの対象となる z/OS 上の PowerExchange ECCR ジョブまたは開始済みタスクのサービス名。ECCR の場合、サービス名は dbmover.cfg コンフィギュレーションファイル内の CMDNODE 文で指定される ECCR 名です。
-user -uid -u	<i>user_ID</i>	セキュリティを有効にする場合に必須です。コマンドのターゲットになっているシステム上のオペレーティングシステムユーザーの有効な ID。 ユーザー名を指定する場合、-password または -epassword の値も指定する必要がありますが、両方指定することはできません。
-password -pwd -p	<i>password</i>	プレーンテキストパスワード。 ユーザー ID を指定する場合、プレーンテキストパスワードまたは暗号化パスワードを指定する必要があります。
-epassword -e	<i>encrypted_password</i>	暗号化されたパスワード。 ユーザー ID を指定する場合、プレーンテキストパスワードまたは暗号化パスワードを指定する必要があります。
-trace	<i>trace_filter</i>	トレースフィルタ。コマンド機能を単一のトレースアクティビティに制限するには、トレースフィルタを指定できます。この情報は、グローバルカスタマサポートから提供されます。トレースフィルタが指定されていない場合は、ECCR のすべてのトレースアクティビティは無効になります。

コマンドでトレースフィルタが指定されている場合は、このコマンドは次のメッセージを返します。

```
PWX-07801 Trace SSA has been turned off
```

トレースフィルタが指定されていない場合は、このコマンドは次のメッセージを返します。

```
PWX-07800 Tracing turned off
```


pwxcmd traceon コマンド

z/OS 上の PowerExchange ECCR のトレースアクティビティを有効にします。Adabas、IDMS、または IMS ログベース ECCR または Datacom テーブルベース ECCR にこのコマンドを発行できます。

このコマンドは、Informatica グローバルカスタマサポートの指示の下でのみ使用してください。

以下の構文を使用します。

```
pwxcmd traceon {-service|-sv} service_name
               [{-user|-uid|-u} user_ID]
               [{{-password|-pwd|-p} password|{-epassword|-e} encrypted_password}]
               [-trace trace_filter -lvl trace_level]
```

以下の表に、pwxcmd traceon のオプションおよび引数を示します。

オプション	引数	説明
-service -sv	service_name	必須。この pwxcmd コマンドの対象となる z/OS 上の PowerExchange ECCR ジョブまたは開始済みタスクのサービス名。ECCR の場合、サービス名は dbmover.cfg コンフィギュレーションファイル内の CMDNODE 文で指定される ECCR 名です。
-user -uid -u	user_ID	セキュリティを有効にする場合に必須です。コマンドのターゲットになっているシステム上のオペレーティングシステムユーザーの有効な ID。 ユーザー名を指定する場合、-password または -epassword の値も指定する必要がありますが、両方指定することはできません。

オプション	引数	説明
-password -pwd -p	<i>password</i>	<p>指定したユーザーのパスワード。</p> <p>z/OS 上の PowerExchange ログベース ECCR または Datacom テーブルベース ECCR の場合は、パスワードの代わりに有効な PowerExchange パスフレーズを入力できます。z/OS のパスフレーズは、9～128 文字の範囲で指定できます。パスフレーズには次の文字を含めることができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> - 英字（大文字と小文字） - 数字（0～9） - スペース - 次を示す特殊文字。 ' - ; # \ , . / ! % & * () _ + { } : @ < > ? <p>注: 先頭に書かれている特殊文字はアポストロフィです。</p> <p>パスフレーズに一重引用符（'）、二重引用符（"）、または通貨記号を含めることはできません。</p> <p>パスフレーズにスペースが含まれている場合、必ずそれを二重引用符（"）で囲んでください（例: "This is a passphrase"）。パスフレーズに特殊文字が含まれる場合、パスフレーズを 3 重にした二重引用符（"'"）で囲む必要があります（例: """"This passphrase contains special characters ! % & * . """"）。パスフレーズにスペース以外の英数字のみが使用されている場合は、区切り文字を使わずにそのまま入力できます。</p> <p>注: z/OS で有効な RACF パスフレーズの最大長は 100 文字です。PowerExchange は、検証のために RACF にパスフレーズを渡すときに 100 文字を超えるパスフレーズを切り捨てます。</p> <p>パスフレーズを使用するには、DBMOVER メンバのセキュリティ設定を SECURITY=(1,N) 以上にして PowerExchange ECCR を実行します。詳細については、『PowerExchange リファレンスマニュアル』の「SECURITY 文」を参照してください。</p>
-epassword -e	<i>encrypted_password</i>	<p>指定されたユーザーのための暗号化されたパスワード。</p> <p>z/OS 上の PowerExchange ログベース ECCR または Datacom テーブルベース ECCR の場合は、暗号化パスワードの代わりに暗号化された PowerExchange パスフレーズを入力できます。無効な文字を含むパスフレーズは暗号化しないでください（二重引用符、一重引用符、通貨記号など）。</p>

オプション	引数	説明
-trace	<i>trace_filter</i>	トレースフィルタ。この値は、グローバルカスタマサポートから提供されます。
-lvl	<i>trace_level</i>	トレースレベル。この値は、グローバルカスタマサポートから提供されます。

このコマンドは次のメッセージを返します。

```
PWX-37129 MONITOR statistics switched off for process PWXCMD
PWX-07998 Trace SSA level 8 turned on
```

その他の pwxcmd コマンド

pwxcmd プログラムを使用することによって、help コマンドおよびバージョンコマンドを発行できます。

pwxcmd help コマンド

コマンドの構文を表示します。コマンド名を省略した場合、pwxcmd はすべてのコマンドの構文を表示します。

以下の構文を使用します。

```
pwxcmd help [command]
```

以下の表に、pwxcmd help の引数を示します。

引数	説明
コマンド	pwxcmd コマンドの名前。コマンド名を省略した場合、pwxcmd はすべてのコマンドの構文を表示します。

pwxcmd バージョンコマンド

PowerExchange のバージョン、および Informatica の商標と著作権の情報を表示します。

以下の構文を使用します。

```
pwxcmd version
```

索引

A

Adabas ログベース ECCR のコマンド

CLOSE [15](#)
DISPLAY TRACE [16](#)
ECCR の起動 [15](#)
ECCR の停止 [15](#)
READ [16](#)
REFRESH [17](#)
STATISTICS [17](#)
STATUS [19](#)
TRACEOFF [19](#)
概要 [14](#)

C

CICS/VSAM ECCR のコマンド

DISPLAY [24](#)
EXITPGMS [24](#)
HELP [25](#)
INITIALIZE [26](#)
OPTIONS [27](#)
REFRESH [28](#)
RESTART [29](#)
TERM [29](#)
概要 [23](#)

cmd_prefix のコマンド、エージェント

DISPLAY [70](#)
DRAIN [71](#)
LOGCLOSE [72](#)
LOGOPEN [72](#)
LOGSPIN [73](#)
REPCLOSE [73](#)
REOPEN [74](#)
REPOSITORYDSN [74](#)
REPSTATUS [75](#)
RESUME [75](#)
SHUTDOWN [76](#)
START [77](#)
STOP [77](#)

cmd_prefix のコマンド、バッチ VSAM ECCR

DISPLAY [21](#)
START [22](#)
STOP [22](#)

CMDNODE 文

DBMOVER 構成ファイル [145](#)

CONDENSENAME 文

CAPTPARM コンフィギュレーションファイルまたはメンバ [145](#)
pwxcl.cfg ファイル [145](#)

CONDENSE コマンド

PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) [128](#)

Condense のコマンド

CONDENSE [82](#)
DISPLAY STATUS [82](#)
FILESWITCH [84](#)

Condense のコマンド (続く)

PowerExchange Condense の停止 [81](#)
PowerExchange Condense の起動 [80](#)
SHUTCOND [85](#)
SHUTDOWN [86](#)
概要 [79](#)
発行 [81](#)

D

Datcom ECCR

pwxcmd コマンドの送信 [150](#)

Datcom テーブルベース ECCR のコマンド

CLOSE [32](#)
DISPLAY TRACE [32](#)
ECCR の起動 [32](#)
ECCR の停止 [32](#)
READ [33](#)
REFRESH [33](#)
STATISTICS [34](#)
STATUS [36](#)
TRACEOFF [36](#)
TRACEON [37](#)
概要 [31](#)

DB2 for z/OS ECCR のコマンド

DISPLAY [40](#)
ECCR の起動 [39](#)
ECCR の停止 [39](#)
QUIESCE [43](#)
REFRESH [44](#)
TERM [45](#)
TR ACT [45](#)
TR INACT [46](#)
URID [46](#)
概要 [38](#)

DBMOVER 文

CMDNODE [145](#)
LISTENER [145](#)
SVCNODE [145](#)

DG コマンド [129](#)

DISPLAY ALL コマンド [130](#)

DISPLAY STATUS コマンド

PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) [135](#)

DISPLAY CPU コマンド [132](#)

DISPLAY EVENTS コマンド [132](#)

DISPLAY MEMORY コマンド [133](#)

DISPLAY RECORDS コマンド [134](#)

displaystatus (pwxcmd)

概要 [166](#)

DL コマンド [135](#)

E

ECCR のコマンド
Adabas ログベース ECCR のコマンド [14](#)
CICS/VSAM ECCR のコマンド [23](#)
Datacom テーブルベース ECCR のコマンド [31](#)
DB2 for z/OS ECCR のコマンド [38](#)
IDMS ログベース ECCR のコマンド [48](#)
IMS 同期 ECCR のコマンド [56](#)
IMS ログベース ECCR のコマンド [60](#)
バッチ VSAM ECCR のコマンド [21](#)
EDMC のコマンド
CICS/VSAM ECCR のコマンド内 [23](#)

F

FILESWITCH コマンド
PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) [137](#)

H

help (pwxcmd)
説明 [195](#)

I

IDMS ログベース ECCR のコマンド
CLOSE [49](#)
DISPLAY TRACE [49](#)
ECCR の起動 [49](#)
READ [50](#)
REFRESH [50](#)
STATISTICS [51](#)
STATUS [53](#)
TRACEOFF [54](#)
TRACEON [54](#)
概要 [48](#)
IMS 外部サブシステムのコマンド (/SSR)
xEDP-ABORT [57](#)
xEDP-CONTINUE [57](#)
xEDP-STAT [58](#)
xEDP-STATWTO [58](#)
同期 ECCR のコマンド [56](#)
IMS 同期 ECCR のコマンド
DISPLAY SUBSYS [59](#)
xEDP-ABORT [57](#)
xEDP-CONTINUE [57](#)
xEDP-STAT [58](#)
xEDP-STATWTO [58](#)
外部サブシステムのコマンド [56](#)
概要 [56](#)
IMS ログベース ECCR のコマンド
CLOSE [61](#)
DISPLAY TRACE [61](#)
ECCR の起動 [61](#)
LIST IMPART [62](#)
READ [63](#)
REFRESH [63](#)
STATISTICS [64](#)
STATUS [67](#)
TRACEOFF [67](#)
TRACEON [68](#)
概要 [60](#)

L

Listener のコマンド
CLOSE [93](#)
CLOSE および CLOSE FORCE [93](#)
DISPLAY ACTIVE [95](#)
DISPLAYSTATS [97](#)
DTLLSTSI と共に発行 [104](#)
DTLLST プログラム [89](#)
LISTTASK [95](#)
PowerExchange リスナの起動 [89](#)
STOPTASK [106](#)
概要 [88](#)
LISTENER 文
DBMOVER 構成ファイル [145](#)
listtask (pwxcmd)
説明 [160](#), [170](#)

M

MODIFY コマンド (MVS)
Adabas ログベース ECCR のコマンド [14](#)
Datacom テーブルベース ECCR のコマンド [31](#)
DB2 for z/OS ECCR のコマンド [38](#)
IDMS ログベース ECCR のコマンド [48](#)
IMS ログベース ECCR のコマンド [60](#)
PowerExchange Condense のコマンド [81](#)

P

PowerExchange Condense プロセス
pwxcmd コマンドの送信 [142](#), [147](#)
PowerExchange Listener
Windows のサービス [92](#)
リモートのテスト [93](#)
PowerExchange リスナ
pwxcmd コマンドの送信 [146](#)
PowerExchange Listener サービス
起動 [92](#)
停止 [93](#)
PowerExchange Condense のコマンド
CONDENSE [82](#)
DISPLAY STATUS [82](#)
FILESWITCH [84](#)
PowerExchange Condense の停止 [81](#)
PowerExchange Condense の起動 [80](#)
SHUTCOND [85](#)
SHUTDOWN [86](#)
概要 [79](#)
発行 [81](#)
PowerExchange リスナのコマンド
CLOSE [93](#)
DISPLAY ACTIVE [95](#)
DISPLAYSTATS [97](#)
DTLLSTSI [104](#)
LISTTASK [95](#)
STOPTASK [106](#)
概要 [88](#)
停止コマンド [93](#)
PowerExchange エージェントのコマンド
DISPLAY [70](#)
LOGCLOSE [72](#)
LOGOPEN [72](#)
LOGSPIN [73](#)
PowerExchange エージェントの起動 [70](#)
REPCLOSE [73](#)

PowerExchange エージェントのコマンド (続く)

REOPEN [74](#)
REPOSITORYDSN [74](#)
REPSTATUS [75](#)
RESUME [75](#)
SHUTDOWN [76](#)
START [77](#)
概要 [69](#)

PowerExchange エージェントコマンド

DRAIN [71](#)
STOP [77](#)

PowerExchange プロセス

PowerExchange リスナ [142](#)
PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) [142](#)
PowerExchange 圧縮 [142](#)
pwxcmd コマンドを受信する設定 [145](#)

PowerExchange リスナプロセス

pwxcmd コマンドの送信 [142](#)

PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) プロセス

pwxcmd コマンドの送信 [142](#), [148](#)

PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) コマンド

DL [135](#)
概要 [122](#)

PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) のコマンド

CONDENSE [128](#)
DG [129](#)
DISPLAY ALL [130](#)
DISPLAY CPU [132](#)
DISPLAY EVENTS [132](#)
DISPLAY MEMORY [133](#)
DISPLAY RECORDS [134](#)
DISPLAY STATUS [135](#)
FILESWITCH [137](#)
PWXCCL [123](#)
SHUTCOND [138](#)
SHUTDOWN [139](#)
ロggerの起動 [123](#)

PowerExchange ロgger (z/OS 用) コマンド

DEFINE_LOG [110](#)
DELETE_LOG [113](#)
DISPLAY OBJECT=CONNECTION [114](#)
DISPLAY OBJECT=LOG [116](#)
PowerExchange ロggerの起動 [110](#)
PRINT [117](#)
RESOLVE_INDOUBT [118](#)
STOP[STOP] [119](#)
概要 [108](#)
ルールおよびガイドライン [109](#)

pwxcmd コマンド

displayall [175](#)

pwxcmd コマンド

displaycpu [175](#)
displayevents [176](#)
displaymemory [177](#)
displayrecords [178](#)
displaystatus [166](#)
PowerExchange Condense の condense [164](#)
PowerExchange Condense の fileswitch [168](#)
PowerExchange Condense の shutdown [172](#)
PowerExchanger リスナ、停止 [153](#), [155](#)
PowerExchanger リスナタスク、停止 [162](#)
PowerExchange リスナの DISPLAYSTATS コマンド [156](#)
PowerExchange ログベース ECCR、トレースを無効にする [192](#)
PowerExchange ログベース ECCR、トレースを有効にする [193](#)
PowerExchange ログベース ECCR、停止 [185](#)
PowerExchange ログベース ECCR の displaystats コマンド [187](#)
PowerExchange ログベース ECCR の displaytrace コマンド [190](#)
PowerExchange ロggerの condense [174](#)

pwxcmd コマンド (続く)

PowerExchange ロggerの displaystatus [179](#)
PowerExchange ロggerの fileswitch [181](#)
PowerExchange ロggerの shutcond [182](#)
PowerExchange ロggerの shutdown [183](#)
traceoff [192](#)
tracelon [193](#)
コマンドラインモード [151](#)
スクリプトファイル [152](#)
バージョン、表示 [195](#)
例 [146-148](#), [150](#)
概要 [142](#)
構文 [143](#)
設定 [145](#)
閉じる [185](#)
戻りコード [144](#)

pwxcmd コマンドの送信

PowerExchange Listener へ [146](#)

ログベース ECCR または Datacom ECCR [150](#)

pwxcmd プログラム

pwxcmd コマンドを発行する [142](#)

S

shutcond (pwxcmd)

説明 [170](#)

SNDPWXCMD

DISPLAY STATUS [82](#)

SNDPWXCMD コマンド (i5/OS)

PowerExchange Condense のコマンド [81](#)

/SSR のコマンド

同期 ECCR 用の IMS 外部サブシステムのコマンド
aaa] [56](#)

SVCNODE 文

DBMOVER 構成ファイル [145](#)

V

VSAM バッチ ECCR のコマンド

DISPLAY [21](#)

START [22](#)

STOP [22](#)

概要 [21](#)

え

エージェントのコマンド

DISPLAY [70](#)

DRAIN [71](#)

LOGCLOSE [72](#)

LOGOPEN [72](#)

LOGSPIN [73](#)

PowerExchange エージェントの起動 [70](#)

REPCLOSE [73](#)

REOPEN [74](#)

REPOSITORYDSN [74](#)

REPSTATUS [75](#)

RESUME [75](#)

SHUTDOWN [76](#)

START [77](#)

STOP [77](#)

概要 [69](#)

こ

コマンドプレフィックス、AGENTCTL
PowerExchange エージェントのコマンド内 [69](#)
バッチ VSAM ECCR のコマンド内 [21](#)
コマンドラインモード
pwxcmd コマンド [151](#)

す

スクリプトファイル
pwxcmd コマンド [152](#)

せ

セキュリティ
pwxcmd コマンド、Linux、UNIX、および Windows [151](#)

そ

送信
PowerExchange Condense プロセスへの pwxcmd コマンド [147](#)
PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) プロセス
への pwxcmd コマンド [148](#)

て

テスト
リモート PowerExchange Listener [93](#)
ローカル PowerExchange Listener サービス [93](#)

は

バージョン (pwxcmd)
説明 [195](#)
バッチ VSAM ECCR のコマンド
DISPLAY [21](#)
START [22](#)
STOP [22](#)
概要 [21](#)

ろ

ログ作成後の統合のコマンド
DISPLAY [120](#)
QUIT [121](#)
STATUS [120](#)
STOP [121](#)
TRACEE、TRACEL、TRACES [121](#)
ログベース ECCR
displaystats コマンド [187](#)
displaytrace コマンド [190](#)
pwxcmd close コマンド [185](#)
pwxcmd traceoff コマンド [192](#)
pwxcmd traceon コマンド [193](#)
pwxcmd コマンドの送信 [150](#)
pwxcmd コマンドを受信する設定 [145](#)
Logger (Linux、UNIX、Windows 用) のコマンド
CONDENSE [128](#)
DISPLAY ALL [130](#)
DISPLAY CPU [132](#)
DISPLAY EVENTS [132](#)
DISPLAY MEMORY [133](#)
DISPLAY RECORDS [134](#)
DISPLAY STATUS [135](#)
FILESWITCH [137](#)
PWXCL [123](#)
Logger の起動 [123](#)
Logger (Linux、UNIX、Windows 用) コマンド
DG [129](#)
DL [135](#)
SHUTCOND [138](#)
SHUTDOWN [139](#)
概要 [122](#)
Logger (z/OS 用) コマンド
DEFINE_LOG [110](#)
DELETE_LOG [113](#)
DISPLAY OBJECT=CONNECTION [114](#)
DISPLAY OBJECT=LOG [116](#)
PowerExchange Logger の起動 [110](#)
PRINT [117](#)
RESOLVE_INDOUBT [118](#)
STOP[STOP] [119](#)
概要 [108](#)
ルールおよびガイドライン [109](#)